

大宰府条坊跡 41

—第153・195・201・215・243・262・279次調査—

平成23(2011)年

太宰府市教育委員会

大宰府条坊跡 41

—第153・195・201・215・243・262・279次調査—

平成23(2011)年

太宰府市教育委員会

序

本書は、太宰府市朱雀六丁目・通古賀五丁目で行われた埋蔵文化財発掘調査報告書です。

今回の調査地は、菅原道真が住んでいたと伝わる榎社と筑前国衙があったと推測される通古賀地区で、大宰府政庁を中心に広がっていた大宰府条坊の右郭に位置しています。

今回の調査では「天下之一都会」(『続日本紀』)と称された大宰府を物語るような奈良時代から平安時代にかけての遺構や遺物をはじめ、日田街道沿いに形成された通古賀集落に関する近世・近代の遺構や遺物など幅広い太宰府の歴史を知る上で貴重な所見を得ることが出来ました。

本書が学術研究はもとより文化財への理解と認識を深める一助となり、広く活用され、ひいては文化財愛護の精神が高揚することを心より願っております。

最後になりましたが、本調査に対しご理解ご協力いただきました、関係各位ならびに諸機関の方々に心からお礼申し上げます。

平成 23 年 3 月
太宰府市教育委員会
教育長 關 敏治

例言

1. 本書は太宰府市朱雀六丁目・通古賀五丁目で行われた大宰府条坊跡の発掘調査報告書である。
2. 遺構の実測には、国土調査法第11座標系を利用した。したがって本書に示される方位は特に注記のない限りG.N.（座標北）を示し、本文中に記される遺構の角度もこれを基準としたものである。
3. 調査対象地の表土除去および埋め戻しは（有）松田造園土木に委託した。
4. 遺構の実測及び写真撮影は担当者のほか中西武尚（現大分市歴史資料館）が行った。
5. 遺構の空中写真撮影は（有）空中写真企画（代表権陸夫）が行った。
6. 出土した鉄製品・木製品の保存処理は勝タクト、末永亜由子が行った。
7. 遺物の実測は担当者のほか、福井円、久家春美、木戸雅美が行った。
8. 表入力・写真整理は瀬戸口みな子、市川晴美が行った。
9. 遺物の整理接合・復元作業は馬場由美、住山景子、末永亜由子が行った。
10. 遺物の写真撮影は、（有）文化財写真工房（代表岡紀久夫）が行った。
11. 図の浄書は、担当者のほか、福井円、久家春美、木戸雅美、吉富千春が行った。
12. 本書に用いた分類は以下のとおり。
須忠器・・・『宮ノ本遺跡II—竪跡篇—』（太宰府市の文化財第10集）1992
陶磁器・・・『大宰府条坊跡XV—陶磁器分類—』（太宰府市の文化財第49集）2000
土器・・・『大宰府条坊跡II』（太宰府市の文化財第7集）1983
瓦・・・『大宰府史跡出土軒瓦・叩打痕文字瓦型式一覧』2000 九州歴史資料館
『宝満山遺跡群4』（太宰府市の文化財第79集）2005
13. 各現場の執筆は目次に記載されている通り、中島、宮崎、山村、井上が行い、一部当時の調査担当者である狭川真一（現元興寺文化財研究所）、松浦智が執筆している。編集は宮崎が担当した。

目次

I、遺跡の位置と歴史	1
II、調査体制	2
III、調査および整理方法	8
IV、調査報告	
1、第153次調査	8
(1) 調査に至る経緯	8
(2) 基本層位	8
(3) 検出遺構	8
(4) 出土遺物	11
(5) 小結	19

2、第195次調査	(宮崎亮一)	24
(1) 調査に至る経緯		24
(2) 基本層位		24
(3) 検出遺構		24
(4) 出土遺物		30
(5) 小結		46
3、第201次調査	(宮崎亮一)	56
(1) 調査に至る経緯		56
(2) 基本層位		56
(3) 検出遺構		56
(4) 出土遺物		57
(5) 小結		62
4、第215次調査	(山村信榮)	64
(1) 調査に至る経緯		64
(2) 基本層位		64
(3) 検出遺構		70
(4) 出土遺物		73
(5) 小結		92
5、第243次調査	(宮崎亮一)	101
(1) 調査に至る経緯		101
(2) 基本層位		101
(3) 検出遺構		102
(4) 出土遺物		106
(5) 小結		124
6、第262次調査	(井上信正)	130
(1) 調査に至る経緯		130
(2) 基本層位		130
(3) 検出遺構		130
(4) 出土遺物		135
(5) 小結		146
7、第279次調査	(宮崎亮一)	154
(1) 調査に至る経緯		154
(2) 基本層位		154
(3) 検出遺構		154
(4) 出土遺物		156
(5) 小結		162
V、調査まとめ	(宮崎亮一)	166

I、遺跡の位置と歴史

太宰府市は、北に四王寺山、北東に宝満山、南に背振山地東端の天拝山に囲まれ、さながら盆地的な様相を示している。これらの山々が途切れている北西に福岡平野が、南東に筑後平野が広がっている。二つの平野に挟まれたこの狭い平野に古代には大宰府政庁が置かれ、政庁の博多側には水城跡の土塁が築造されたほか、大野城・基肆城・阿志岐城などの古代山城が周囲に山々に築造されるなど、いわゆる羅城を形成していたと考えられる。

大宰府政庁の前には、いわゆる大宰府条坊と呼ばれる都市が整備された。その規模は南北22条、東西12坊におよび、南辺部は筑紫野市まで広がっている。五条2丁目で行った第217・224調査では、平安時代中期と12世紀埋没の南北道路側溝が検出され、約90mの区割りでみる条坊案では左郭12坊推定ライン上にあたる。『宇佐大鏡』久安4(1148)年条の記述から、12坊路を「京極大路」とするという見解が大宰府条坊復原案を最初に提示した鏡山猛氏以来支持されてきたが、その「京極大路」の遺構である可能性が十分考えられる。また、T字路に取り付く平安時代後期の道路も明らかになり、平安時代後期の時点で、平安時代中期以降急速に栄えていった安楽寺天満宮周辺の街区と大宰府条坊が接していたことを示すものと考えられている。筑紫野市塔原東1丁目(第258次調査)では、8世紀後半埋没の平行する東西溝が検出され、井上信正条坊案の22条と合致し、条坊内の南限である可能性が指摘されている。都府楼南2丁目の第222次調査は広大な面積が調査され、条坊内では近年一区画90m四方の設計プランが導き出されているが、条坊外に続く条里の存在も指摘されており、この調査地が条坊の外側であった可能性も考えられ、平安時代後期に条里の土地での住宅開発があったとみられ、条坊と条里の関係を知る貴重な所見を得ることが出来ている。般若寺丘陵西方の平地では大型の掘立柱建物が2棟並んで検出され、出土品も佐波里製品や奈良三彩をはじめ条坊内では得意な遺構や遺物が見つかるなど大宰府関連の官衙施設と推測されている。

今回の調査地のひとつである榎社は条坊の中心付近に位置し、大宰府に左遷された菅原道真の館跡と伝えられている。榎社は治安3(1023)年に大宰大式惟憲が道真の霊を弔うために浄妙院を建立したのが始まりと伝えられ、榎の大木があったから榎寺とも呼称されるようになったといわれている。普段は静かな境内であるが、秋の神幸祭では神輿が大宰府天満宮から榎社まで運ばれ、賑わいをみせる。

また、榎社の東方200mほどにある通古賀の集落は日田街道に形成された農村集落で、近年までは田畑に囲まれていたが、現在は旧集落がわからないほど周辺は宅地化し、街道沿いが僅かに昔の面影を残している。その集落の中心に鎮座する王城神社は、古代には大城山(四王寺山)にあって、『筑前国続風土記拾遺』によると大野城廃絶後に現在地に遷座したとされている。

II、調査体制

(平成6 / 1994年度)・・・第153次調査

総括	教育長	長野治己		
庶務	教育部長	白木三男		
	文化課長	花田勝彦		
	文化財保護係長	高田克二		
	文化振興係長	大田重信		
	主任主事	岡部大治	川谷 豊	
調査	主 事	今村江利子		
	技術主査	山本信夫		
	主任技師	狭川真一 (調査担当)	城戸康利	山村信榮
		中島恒次郎 (調査担当)		
		重松麻里子		
	技 師	井上信正		
	技師 (囑託)	田中克子 (～6年7月31日)		
		下川可容子		

(平成9 / 1997年度)・・・第195次調査

総括	教育長	長野治己		
庶務	教育部長	小田勝弥		
	文化財課長	津田秀司		
	文化財保護係長	和田敏信		
	文化財調査係長	山本信夫		
	主任主事	藤井泰人		
調査	主 事	今村江利子		
	技術主査	狭川真一 (9年10月1日～)		
	主任技師	狭川真一 (～9年9月30日) (調査担当)		
		城戸康利	山村信榮	中島恒次郎
				井上信正
	技 師	高橋 学		
	技師 (囑託)	宮崎亮一 (調査担当)		
		下川可容子	森田レイ子	

(平成10 / 1998年度)・・・第201次調査

総括	教育長	長野治己		
庶務	教育部長	小田勝弥		
	文化財課長	津田秀司		
	文化財保護係長	和田敏信		
	文化財調査係長	山本信夫		
	主任主事	藤井泰人		

主 事	今村江利子			
囑 託	鈴木弘江			
調査	技術主査	狭川真一 (調査担当)		
	主任技師	城戸康利	山村信榮	中島恒次郎
				井上信正
	技 師	高橋 学	宮崎亮一	
	技師 (囑託)	下川可容子	森田レイ子	

(平成12 / 2000年度)・・・第215次調査

総括	教育長	長野治己 (～12月24日)		
		關 敏治 (12月25日～)		
庶務	教育部長	白石純一		
	文化財課長	木村和美 (4月1日～)		
	文化財保護係長	和田敏信		
	文化財調査係長	山本信夫 (～10月23日)		
		神原 稔 (11月1日～)		
	事務主査	藤井泰人		
	主任主事	野寄美希		
調査	囑 託	鈴木弘江		
	技術主査	城戸康利		
	主任技師	山村信榮 (調査担当)		
		中島恒次郎	井上信正	高橋 学
				宮崎亮一
	技師 (囑託)	下川可容子	森田レイ子	佐藤道文

(平成16 / 2004年度)・・・第243次調査

総括	教育長	關 敏治		
庶務	教育部長	松永栄人 (4月1日～)		
	文化財課長	木村和美		
	保護活用係長	久保山元信		
	調査係長	永尾彰朗		
	事務主査	藤井泰人 (～6月30日)		
		齋藤実貴男 (7月1日～)		
	主任主事	大石敬介		
調査	主任主査	城戸康利		
	技術主査	山村信榮	中島恒次郎	
	主任技師	井上信正	高橋 学	宮崎亮一
	技師 (囑託)	下川可容子	森田レイ子	柳 智子
		松浦 智 (調査担当)		渡邊 仁
				長 直信

(平成 18 / 2006 年度)・・・第 262 次調査

総括 教育長 關 敏治
 庶務 教育部長 松永栄人
 文化財課長 齋藤廣之
 保護活用係長 久保山元信
 調査係長 永尾彰朗
 主任主査 齋藤実貴男
 事務主査 吉原慎一 (7月1日～)
 主任主査 大石敬介 (~6月30日)
 主任主査 城戸康利 山村信榮 中島恒次郎
 技術主査 井上信正 (調査担当)
 主任技師 高橋 学 宮崎亮一
 技師 (嘱託) 柳 智子 下高太輔

(平成 21 / 2009 年度)・・・第 279 次調査

総括 教育長 關 敏治
 庶務 教育部長 山田純裕
 文化財課長 齋藤廣之
 保護活用係長 菊武良一
 調査係長 永尾彰朗 (~6月30日) 井上 均 (7月1日～)
 主任主査 吉原慎一 齋藤実貴男
 主任主査 城戸康利 (都市整備課併任)
 主任主査 山村信榮 中島恒次郎 井上信正
 技術主査 宮崎亮一 (調査担当)
 主任技師 高橋 学
 技師 遠藤 茜
 技師 (嘱託) 柳 智子

(平成 22 / 2010 年度)・・・報告書発行

総括 教育長 關 敏治
 庶務 教育部長 山田純裕
 文化財課長 井上 均
 保護活用係長 菊武良一
 調査係長 池本義彦
 主任主査 吉原慎一 橋川史典
 主任主査 城戸康利 (都市整備課併任)
 主任主査 山村信榮 中島恒次郎 井上信正
 技術主査 高橋 学 宮崎亮一
 技師 遠藤 茜
 技師 (嘱託) 白石溪彦

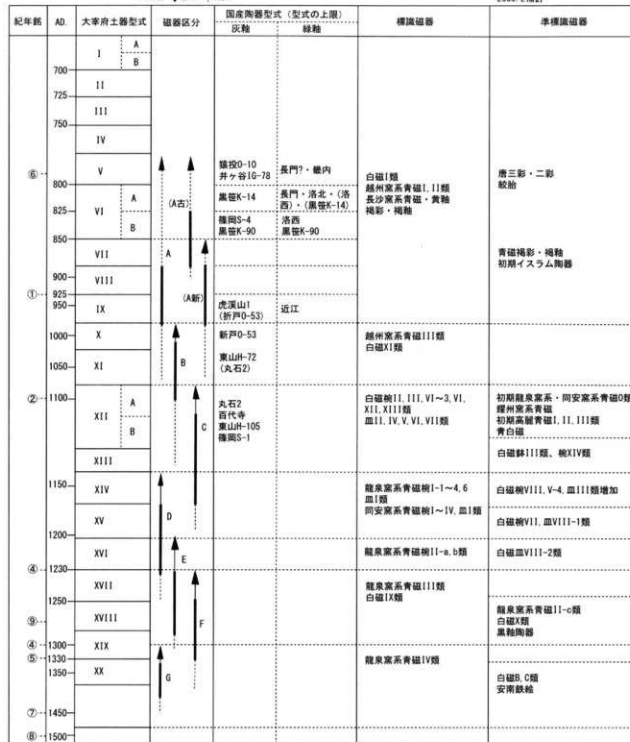
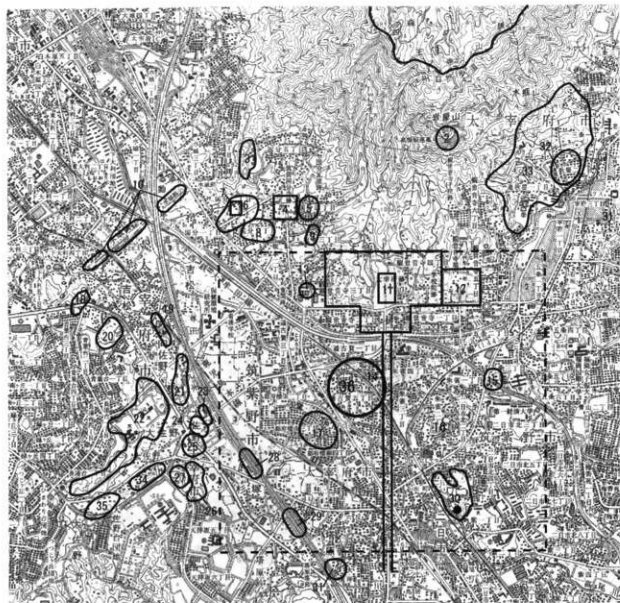


Fig. 1 大宰府貿易陶磁編年

紀年表資料 ①A D. 927 延長5年, 大宰府74次S0205A溝
 ②A D. 1091 寛治5年, 平安京左京条1坊SE8井戸
 ③A D. 1224 貞治3年, 大宰府33次S03045溝
 ④A D. 1304 嘉元2年, 大宰府109, 111次S03200溝
 ⑤A D. 1330 元徳2年, 大宰府45次S1200池
 ⑥A D. 794 延暦3年, 長岡京102次S010201溝
 ⑦A D. 1469 ~ 1465 永祿? 寛文5年, 福知山市相田CII・SS6池
 ⑧A D. 1501 文亀元年, 大宰府70次S01805溝
 ⑨A D. 1265 文永2年, 博多62次713土層

文献

①九州歴史資料館 「大宰府史跡昭和56年度発掘調査概報」1982
 ②田辺昭三・吉川胤廉 「平安京跡発掘調査報告佐京西条一坊」1975 平安京調査会
 ③九州歴史資料館 「大宰府史跡昭和45年度発掘調査概報」1975
 ④九州歴史資料館 「大宰府史跡昭和63年度発掘調査概報」1989
 ⑤九州歴史資料館 「大宰府史跡昭和52年度発掘調査概報」1978
 ⑥京都市埋蔵文化財センター 「長岡京市埋蔵文化財調査報告書第1集」1988
 ⑦福岡府教育委員会 「井根田遺跡」 「福岡市埋蔵文化財調査報告書第19」1988
 ⑧九州歴史資料館 「大宰府史跡昭和56年度発掘調査概報」1982
 ⑨福岡府教育委員会 「博多48」 「福岡市埋蔵文化財調査報告書第397」1995



- | | | | |
|------------|-----------------|-----------|---------------------|
| 1. 大野城跡 | 10. 水城跡 | 19. 原口遺跡 | 28. 製塩遺跡 |
| 2. 岩屋城跡 | 11. 大宰府政庁跡 | 20. 播磨遺跡 | 29. 唐人塚遺跡 |
| 3. 障ノ尾遺跡 | 12. 観世音寺 | 21. 前田遺跡 | 30. 墓・墓畑遺跡 (●は墓火葬墓) |
| 4. 筑前国分寺跡 | 13. 遠賀田印出土地 | 22. 宮ノ本遺跡 | 31. 大宰府天満宮(安楽寺跡) |
| 5. 辻遺跡 | 14. 大宰府桑坊跡(破線内) | 23. 龍川遺跡 | 32. 浦城跡 |
| 6. 国分松本遺跡 | 15. 君徳遺跡 | 24. フケ遺跡 | 33. 原遺跡 |
| 7. 筑前国分尼寺跡 | 16. 般若寺跡 | 25. 尾崎遺跡 | 34. 京ノ尾遺跡 |
| 8. 国分千足町遺跡 | 17. 市ノ上遺跡 | 26. 船道遺跡 | 35. カヤノ遺跡 |
| 9. 御笠田印出土地 | 18. 神ノ前築跡 | 27. 殿城戸遺跡 | 36. 報告現場一帯 |

Fig.2 太宰府市とその周辺の遺跡 (1/30000)

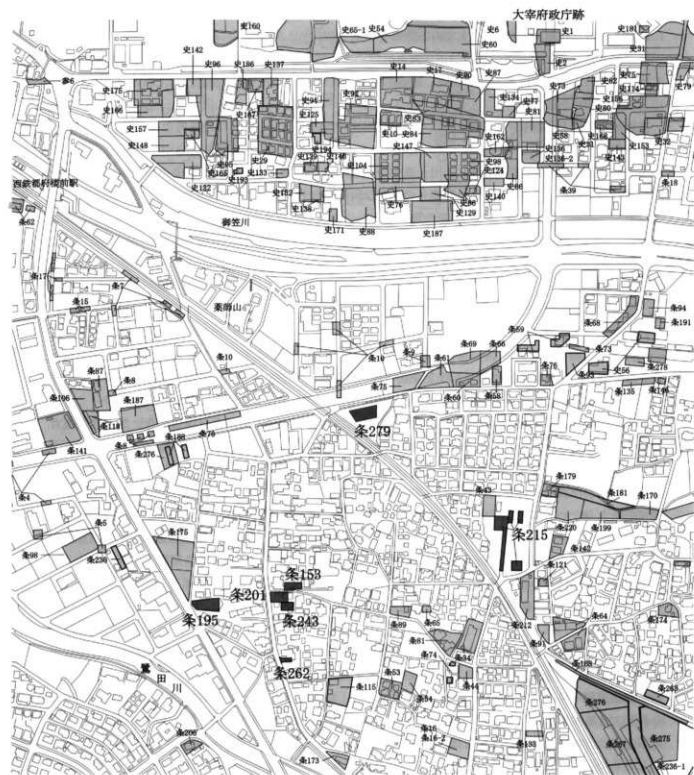


Fig.3 調査地と周辺調査地点 (1/5000)

III、調査および整理方法

調査および整理方法については、『佐野地区遺跡群 1』（太宰府市の文化財第 14 集 1989）、『太宰府市における埋蔵文化財調査指針』（太宰府市教育委員会 2001 年 9 月改訂）に基づいている。

発掘調査は工事によって遺構が破壊される範囲のみを対象としている。第 201 次・215 次調査については、調査による破壊は最小限に留め、遺構はそのまま地下に保存されている。表土剥ぎはバックホーによって行っている。

整理報告に際し、国内からの搬入品については形状が確認できるものは極力報告することに努めたが、整理報告作業の効率化と報告書のスリム化のため、規格性が強い輸入陶磁器については『大宰府条坊跡 XV—陶磁器分類—』を基に分類し、出土遺物一覧表に分類と破片数を掲載したのみで、実測作業は基本的に行っていない。しかし、未分類のものや稀な陶磁器などについては実測し報告している。よって、遺構時期の検証については、出土遺物一覧表も同時に確認して頂きたい。

なお、調査の図面や写真、そして出土遺物は太宰府市文化ふれあい館に保管されている。

IV、調査報告

1、第 153 次調査

(1) 調査に至る経緯

調査地は、通古賀 5 丁目 1204 番地に所在し、専用住宅建て替えに伴い、埋蔵文化財の記録保存のための発掘調査を実施した。鏡山猛氏推定条坊跡右郭 11 条 3・4 坊に位置し、菅原道真居宅とされる現履社から南西にある王城神社に接している。

調査に至る経過は、平成 4(1992)年 6 月 15 日に当該地番について地権者（稗田勇氏）から建設業者を介して埋蔵文化財取り扱いの有無に関して問合せがなされたことに始まる。文化財保護法 57 条（当時）による周知の遺跡・大宰府条坊跡内に所在していることから、埋蔵文化財の取り扱いが生じること、ならびに実務内容について説明した。その後協議を重ね、平成 5(1993)年 4 月 6 日に確認調査を実施し、現地表下 0.3m ~ 0.4m の箇所埋蔵文化財が確認されたため、記録保存のための調査が必要である点を再度説明した。平成 5 年度内に、建築内容と埋蔵文化財の取り扱いに関する協議を重ね、下記内容で埋蔵文化財の記録保存のための調査を実施することで合意した。

開発対象面積は 495 m²、調査面積は 300 m²を測り、調査期間は平成 6(1994)年 6 月 3 日から同年 7 月 4 日である。調査は、狭川真一ならびに中島恒次郎が実施した。

(2) 基本層位

借家としての土地利用がなされていたが、現地表下 0.3m ~ 0.4m の厚さで茶色土が堆積しており、その直下に黄灰色砂を遺構形成面として埋蔵文化財が確認できた。

(3) 検出遺構

検出できた主な遺構は、遺構面が浅いということからか、深い遺構である土坑・井戸を検出した。したがって、遺構形成時期は、まだ標高が高かったものと推定され、後世の削平によって多くの遺構が欠失したものと考えられる。

溝

153SD006

調査区東部にて確認した遺構で、南北に長く長軸長 4.8m、短軸長 0.5m ~ 1.0m の幅を有している。深さは 0.26m を測る。上位に 153SD002 が重なっているが、同一遺構と判断される。淡茶褐色砂質土が

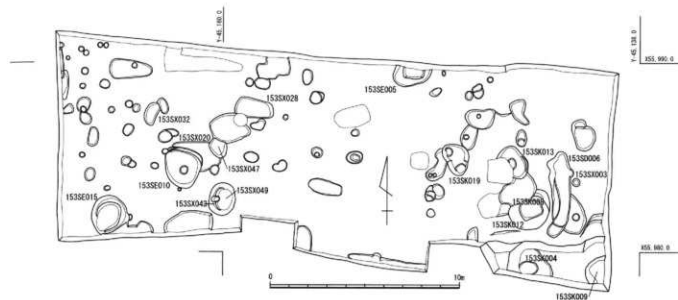


Fig.4 第 153 次調査遺構全体図 (1/200)

均質に堆積していた。

井戸

153SE005

調査区中央の北端部に検出した遺構。遺構規模は、長軸長 1.95m、残存短軸長 1.00m、深さ 1.33m を測る。遺構形状は不整形円形を呈している。遺構内には、黒色土が上位に堆積し、枠内と判断される部分は、一辺 1.12m を測る正方形を呈しているものと判断されるが、遺構北半が調査区外に展開しているため明らかにできない。枠内は深さ 0.24m で残っていた。この部分には、上位層と同様に黒色土が堆積している。外側の裏込め部分には、茶色土が充填されている。

153SE010

調査区西部で検出した遺構で、当初は土坑として記録を進めていたが、遺構最下部で円形の枠痕跡を確認したため、井戸と判断した。遺構規模は、長軸長 2.00m、短軸長 1.95m、深さ 1.06m を測る。遺構形状は当初は円形を呈していたものと判断されるが、各所が崩壊しており、円形形状を保っていない。遺構内には、黒茶色土が上位に堆積し、枠内と判断される部分は、直径 0.44m を測る円形で、深さ 0.29m が残っていた。この部分には、黒灰色土が堆積している。外側の裏込め部分には、灰色砂が充填されている。

153SE015

調査区南西端に確認した遺構で、一部掘乱によって壊されているが、検出面からやや下がった位置で再確認した遺構形状から、方形の形状を有する井戸であることが分かった。遺構規模は、長軸長 2.02m、短軸長 1.88m、深さ 1.17m を測る。遺構上位には茶黒色土が盆状に堆積し、井戸廢絶後に土坑として機能していたものと考えられる。上位堆積土下に方形の井戸形状を示す遺構痕跡が観察でき、隅丸方形の井戸枠は、約 0.5m ほどの大きさを示し、内部に黒茶色土が堆積していた。裏込め土は黒色砂質土で充填されている。井戸枠材は腐植のため観察できなかった。

土坑

153SK004

調査区南東端に検出した遺構で、土坑と判断したが 153SD022 と一連の遺構である可能性がある。検出長軸長は 5.2m、短軸長 1.8m、深さ 0.71m を測る。溝状ではあるが、部分的に深くなっている。上位

が暗茶色粘質土、下位に明茶色土が堆積している。遺構の切り合い関係では、153SK009→153SK004と観察できた。

153SK008

調査区南東部に検出できた土坑で、攪乱として扱った153SK007に遺構北西部を破壊されており、長軸長1.3m、残存短軸長0.9m、深さ1.01mを測る。下位には153SK012がある。

153SK009

調査区南東端に検出した遺構で、切り合いから153SK004とは別遺構と判断した。調査区端部にて検出したこともあり、遺構全形は明らかにし難い。残存長軸長は2.45m、短軸長は1.1m、深さは0.57mを測り、灰茶色土が堆積していた。

153SK012

調査区東部に検出した遺構で、不定形の土坑である。遺構規模は、長軸長2.3mを測り、遺構北西部を攪乱によって失っており、残存短軸長は1.84mを測る。深さは、1.05mを測る。遺構の切り合いがあり、153SK012→153SK008→153SK007(攪乱)で、当該遺構は最も古い遺構になる。出土した遺物からも7世紀末に位置づけられる遺物が出土していることから、この点に矛盾はなかった。堆積土は、黄茶色土である。

153SK013

調査区東部に検出した遺構で、遺構の1/4ほどを後世の攪乱によって失っている。遺構規模は長軸長2.0m、短軸長1.65m、深さ1.41mを測る。遺構の平面形状は、やや崩れた隅丸方形を呈している。遺構上位に茶黒色土が、下位に黒色土が堆積している。遺構内の堆積土からは平安中期に属する遺物が多く出土したが、遺構形成時期は最新の遺物で考えると江戸期であると考えられ、古代の遺構を破壊して当該遺構が形成されたものと考えられる。

153SK019

調査区東半部に検出した遺構で、遺構西半を失っている。長軸長1.50m、短軸長1.48mであるが、隅丸三角形を呈している。深さは、1.4mを測る。遺構内には黄茶色土が堆積しており、散在的に遺物が出土している。153SK012と同質の堆積土であった。

153SK028

調査区中央部からやや西寄りの箇所を検出した遺構で、153SK041と同一遺構。長軸長2.0m、短軸長1.25m、深さ0.34mを測る。黒灰色土が堆積している。

その他の遺構

153SK003

調査区東部、153SD002-006に近接して検出した小穴である。直径0.45m、深さ0.36mを測る略円形で、茶黒色土が堆積していた。

153SK020

調査区西半のやや南寄りに検出した遺構で、153SK047→153SK020→153SE010の切り合い関係を観察した。遺構残存状況が極めて悪く、近接して検出した井戸153SE010が使用される際の窪みであった可能性がある。残存長軸長2.4m、深さ0.05mを測る。黄茶色土が堆積していた。

153SK032

調査区西部にて検出した不整形の窪みで、茶色土を堆積していたが、上位の攪乱層の取り残しと判断される。

153SK043

調査区西半のやや南寄りに検出した遺構で、下位に153SK046ならびに153SK049が確認できている。長軸長1.6m、短軸長1.2m、深さ0.38mを測る。黒茶色土が堆積していた。

153SK047

調査区西半のやや南寄りに検出した遺構で、153SK047→153SK020→153SE010の切り合い関係を観察できた。多くの遺構に切られているため、遺構全形を掴むことはできないが、残存長軸長1.8mを測り、深さは0.27mであった。

153SK049

調査区西半のやや南寄りに検出した遺構で、153SK049→153SK046→153SK043の切り合いが観察できた。長軸長4.3m、短軸長3.4m、深さ0.38mを測り、黒茶色土が堆積していた。

(4) 出土遺物

溝

153SD006 出土遺物 (Fig.6)

縄文土器

深鉢(1) 口縁部のみの破片資料で、全形を明らかにし難い。器面が内外面ともに摩耗しているため、成形・調整痕跡は観察できなかった。口縁端部に「ひれ」状の突起を有している。残存高7.2cmを測る。

井戸

153SE005 茶色土出土遺物 (Fig.5)

土師器

小皿a(1) 復原口径9.1cm、器高1.0cm、復原底径5.6cmを測り、やや底径が小さく、体部に丸みを有する形状をもつ。内外面ともに回転ナデによって成形され、底部外面の処理は器面摩耗のため不明であった。

丸底坏a(2) 復原口径17.2cm、器高4.0cm、底部切り離し処理が観察できる範囲は、7.0cmの径を測る。内外面ともに回転ナデによって成形され、底部外面処理は、回転ヘラ切りであった。口縁部内面にはミガキb痕跡が観察できる。

丸底坏(3) 底部が残存しないため、碗である可能性も残す。残存高3.2cm、内面にミガキbならびにミガキcが、外面下位には底部押し出しのための指頭圧痕が観察できる。

碗c(4) 高台のみの破片で、碗であるのか皿であるのかは判断し難い。高台端部を外上方へ跳ね上げること考えると、平安後期以降に出現する碗cの可能性が高い。残存高1.6cm、高台径6.7cmを測る。

甕b(5) 口径を導き出すことができないが、やや扁形に近いものと考えられる。体部下位に叩きが施され、内面には当て具痕跡と考えられる円形の窪みが、外面には格子叩き痕跡が観察できる。口縁部

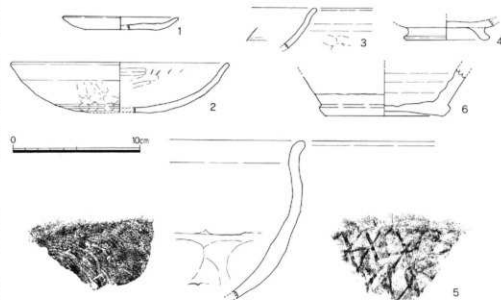


Fig.5 153SE005 出土遺物実測図 (1/3)

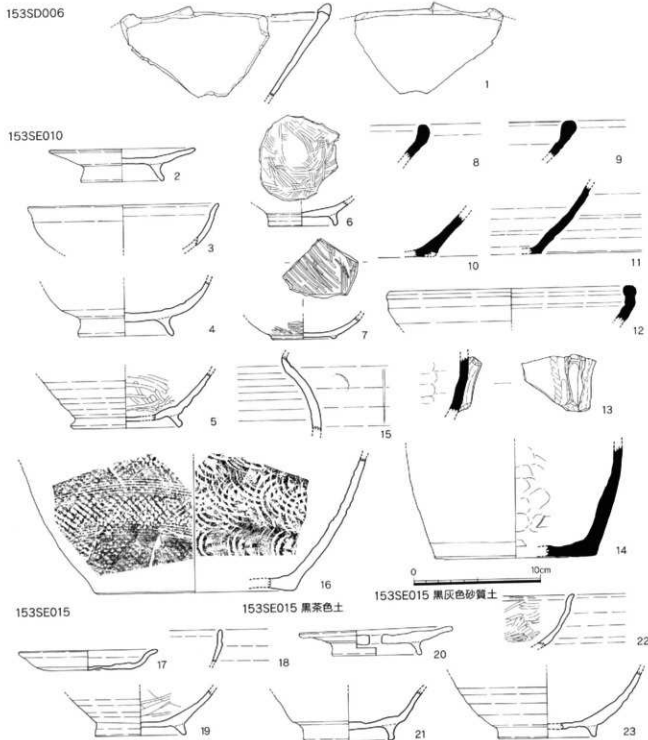


Fig.6 第153次調査溝および井戸出土遺物実測図(1/3)

外面は淡褐色で体部外面の中位から下位については同様に着色している。使用に伴う二次焼成痕跡と考えられる。残存高12.5cmを測る。

越州窯系青磁

壺(6) 素地に淡白灰色を呈する0.5mm~1mm大の砂粒を僅かに混入し、釉調は内面淡褐色、外面は暗茶褐色から淡灰褐色を呈している。底部は円盤状の形状をとり、底部外面は回転ナデによって仕

上げられている。これらのことから、越州窯系青磁Ⅱ類系の窯で焼成されたものと考えられる。残高3.7cm、復原底径10.2cmを測る。

153SE010 出土遺物 (Fig.6)

土師器

皿c(2) 口径11.6cm、器高2.6cm、高台径6.6cmを測り、内外面ともに回転ナデによって成形されているが、見込み部分には不定方向のナデの痕跡が観察できる。皿部の底部外面の処理は、ナデ痕跡によって消されているため不明。

碗(3) 口縁部だけの破片資料。復原口径15.0cm、残存高3.4cmを測る。体部内面にはミガキb痕跡が、外面には体押し出しの際の指頭圧痕跡が観察できる。

皿c2(4) 高台から体部下位までの破片資料で、体部に丸みを有することから平安中期に通用な碗と判断される。内面にはミガキb痕跡が、体部外面には成形のための回転ナデ痕跡が観察できる。底部外面は不定方向のナデによって碗部の底部処理痕跡が消されているため不明。

黒色土器A類

碗c1(5) 高台から体部下位までのもので、内面が黒色化されミガキcによって丁寧に仕上げられている。残存高4.2cm、復原高台径8.8cmを測る。胎土に白雲母破片を多く含む。

黒色土器B類

碗c(6,7) 両者とも内外面を黒色に処理するもので、6は直立するやや高い高台形状を有し、見込み部分を4分割によるミガキcによって仕上げている。底部外面に碗部切り離し処理痕跡が観察でき、回転糸切り痕跡をとどめる。7は断面台形の高台形状を呈し、体部内外面に細いミガキc痕跡をとどめる。体部形状は6は直線的に外方へ開く形状が想定できるが、7は丸みを有した形状が想定できる。それぞれの特徴から、6は西部瀬戸内系、7は桶屋産の黒色土器と考えられる。6は残存高1.9cm、復原高台径5.5cm、7は残存高1.7cm、復原高台径5.2cmを測る。

須恵器

鉢(8~12) 8・9は口縁部の破片で、内面に丸く肥厚する特徴を有している。両者とも残存高2.7cmを測る。10・11は体部の破片資料で、底部から直線的に外方へ開く特徴を有する。11の体部内面下位には、調整痕跡を消すように使用痕跡が観察できる。12は、先述した8・9とは異なり、口縁部が一度直立し、端部に至って丸く肥厚する形状を有する。やや瓦質の焼きである。これまで述べた全ての製品で、胎土は精選され、黒色微粒子を少量含む特徴を有している。これらのことから丹波篠産で焼かれた製品と考えられる。

壺(13,14,16) 13は、双耳壺の一部と考えられる。粘土塊を指頭圧で器体に接合したもので、内外面に貼付のための指圧痕が観察できる。残存高4.5cmを測る。14は、底部の破片資料で、上位の状況は不明である。体部外面は回転ナデならびに斜め方向のナデによって丁寧に仕上げられており、底部と体部の境界部分に削り痕跡をとどめる。体部内面には指頭圧痕ないしは当て具痕跡が観察できる。底部外面には不定方向のナデ痕跡が観察でき、底部切り離し痕跡は明らかにし難かった。焼成・還元ともに良好。16は、底部の破片資料で、やや僅み気味の底部から外方へ内湾しつつ立ちあがる体部形状を有する。断面が赤褐色を呈し、外面には格子叩きの後カキ目痕跡が残り、内面には同心円当て具痕跡が観察できる。当初これらの特徴から朝鮮系無釉陶器(高麗陶器)と判断していたが、器厚や内外面の成形・調整技法から須恵器と考えた。残存高10.4cm、復原底径15.8cmを測る。

越州窯系青磁

水注(15) 体部上位の破片資料であるが、外面に縦方向のヘラ押圧による分割施文が観察でき、把

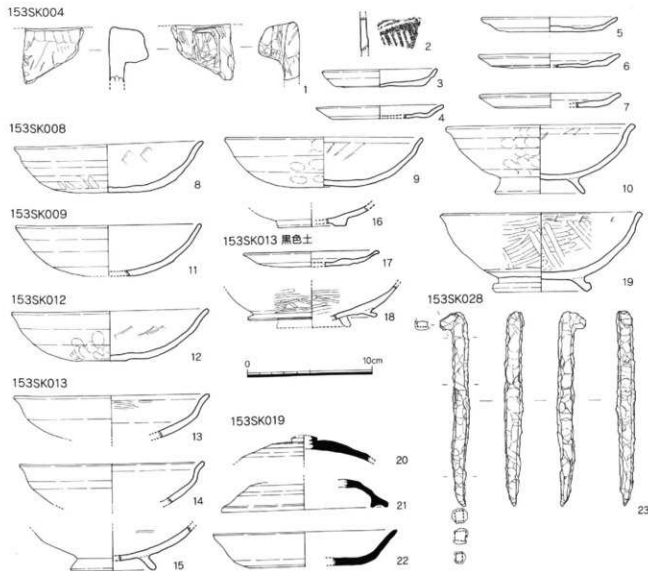


Fig.7 第153次調査土坑出土遺物実測図(1/3)

手が貼付されていたと考えられる痕跡があることから水注と考えられる。素地特徴は茶灰色で精選されており、外面に暗黄緑色の半透明釉がかけられている。越州窯系青磁Ⅰ類系の製品。残存高5.9cmを測る。

153SE015 出土遺物 (Fig.6)

土師器

小皿 a1 (17) 復原口径11.0cm、器高1.5cm、復原底径8.4cmを測り、底部外面の処理は回転ヘラ切りである。口縁部がやや外反気味な部分があるが、成形時の「ゆらぎ」によるものと考えられ、意図的な成形とは考えられない。

黒色土器 A 類

碗 (18) 口縁部だけの破片資料で、口縁部付近でやや直立気味になる。残存する部分から碗2と想定される。内外面ともに回転ナデ痕跡が観察され、内面のミガキc痕跡を見ることができない。残存高2.6cmを測る。

碗 c1 (19) やや外方に開く高台形状を有し、直線的に外方に開く体部形状を呈する。内面にはやや粗いミガキcが観察でき、底部外面の処理は回転ヘラ切りであると考えられる。胎土に白雲母細片を多く含んでいる。残存高3.5cm、高台径7.2cmを測る。

153SE015 黒茶色土出土遺物 (Fig.6, Pla.21)

土師器

皿 c (20) 口径12.1cm、器高2.1cm、高台径7.1cmを測り、皿部中央に1ヶ所穿孔が施され、皿部の底部切り離しは、回転ヘラ切りによって処理されている。胎土中に白雲母細片を多く含むという特徴を持つ。

碗 c1 (21) 残存高3.8cm、高台径7.2cmを測り、直立気味に立ち上がる高台形状を有し、体部は直線的に外方に開く。坏部の底部外面の処理は、回転ヘラ切りで内外面ともに回転ナデによって成形・調整が行われている。

153SE015 黒灰色砂質土出土遺物 (Fig.6)

土師器

碗 c2 (23) 直立気味の高台から丸みを持つ体部形状を有し、碗部底部外面は回転ヘラ切りによって仕上げられている。内外面ともに回転ナデによって仕上げられている。残存高5.1cm、復原高台径7.8cmを測る。

黒色土器 A 類

碗 (22) 口縁部だけの破片資料で、歪ながら丸みを有している。内面はミガキcが、外面は回転ナデ痕跡をとどめる。胎土中に白雲母細片を多く混入している。残存高4.0cmを測る。

土坑

153SK004 出土遺物 (Fig.7)

石製品

用途不明品 (1) 石鍋A群の把手部分の破片資料である。側面部分を削りによって切り離されており、再加工製品として切断されたものと考えられる。石材色調は銀白色～暗銀灰色を呈し、内外面に削り痕跡を多くとどめている。石材は滑石。残存高4.9cmを測る。

153SK008 出土遺物 (Fig.7)

縄文土器

器種不明 (2) 小破片のため器種特定には至らない。外面に押型文が観察でき、胎土中に滑石を多く混入している。残存高2.5cmを測る。

土師器

小皿 a1 (3~7) 復原口径9.2cm~11.2cm、器高1.0cm~1.35cm、復原底径7.3cm~9.25cmを測り、3以外は扁平な形態をとる。底部外面の切り離し処理は、いずれも回転ヘラ切りで、板状圧痕をとどめている。6のみが、見込みの不定方向のナデによってやや凸形の底形状を有する。型的には、3から7へと新しくなるものと考えられる。(山本, 1990)

丸底坏 a (8, 9) 口径14.9cm・15.7cm、器高3.6cm・4.1cmを測り、底部切り離しが観察できる直径は10.8cm・12.1cmを測る。通常の丸底坏に比較して器高が深いのが特徴である。底部切り離し処理は、いずれも回転ヘラ切りである。体部内面にはミガキbが、体部外面には指頭圧痕を多く観察できる。

丸底坏 c (10) 先述した丸底坏に高台を貼付した形状をとり、椀形に直線的に開く高台形状を有している。口径14.95cm、器高5.4cm、高台径7.1cmを測り、坏底部に残存する切り離し痕跡は、回転ヘラ切りである。口縁部内面に器面調整の際のミガキbが、体部外面には指頭圧痕を多くとどめている。

153SK009 出土遺物 (Fig.7)

土師器

丸底坏 a (11) 復原口径14.6cm、残存高4.0cmを測り、器面摩耗が著しいため成形・調整痕跡は観

察できなかった。

153SK012 出土遺物 (Fig. 7)

土師器

丸底坏 a (12) 口径 15.4cm、器高 3.9cm を測り、体部内面にはミガキ b、体部外面には指頭圧痕が観察できる。指頭圧痕が顕著なため、坏底部切り離し痕跡が観察し難かった。

153SK013 出土遺物 (Fig. 7)

土師器

丸底坏 (13、14) いずれも口縁部の破片資料で、高台の有無を明らかにし難かった。復原口径 14.6cm ~ 15.4cm、残存高 3.2cm ~ 3.3cm を測る。13 は口縁部内面にミガキ b 痕跡をとどめている。

坏 c2 (15) 楕円に外方に開く高台形状を有し、丸味を帯びた体部へと移行する。体部内面に僅かにミガキ c 痕跡が観察できる。残存高 3.2cm、復原高台径 6.8cm を測る。

白磁

碗 (16) 幅広の曇み付けを有し、削り出しによる高台である。内面および体部外面には淡灰白色の釉薬が掛けられ、釉調は半透明で光沢がある。素地は精選され淡灰白色を呈している。これらのことからやや小型の白磁碗 I-2 類と考えられる。

153SK013 黒色土出土遺物 (Fig. 7)

土師器

小皿 a1 (17) 復原口径 10.9cm、器高 1.2cm、復原底径 5.3cm を測り、やや凸形の底部形状を有している。底部外面切り離しは、回転ヘラ切りである。

黒色土器 B 類

托 (18) 高台輪に「罎」を貼付するもので、托形碗と考えられる。内外面ともに黒色処理されており、丁寧なミガキ c によって仕上げられている。残存高 2.1cm を測る。

坏 c2 (19) 高台端部を上方に跳ね上げるもので、碗部内外面に丁寧なミガキ c 痕跡をとどめる。それに先立つミガキ b 痕跡が口縁端部内面に観察できる。復原口径 15.9cm、器高 6.2cm、高台径 7.8cm を測る。

153SK019 出土遺物 (Fig. 7)

須恵器

蓋 c (20) 天井部みの破片で、やや丸みを有する蓋と考えられる。つまみ部分が欠損している。天井部外面の中心寄りの部分は、回転ヘラ削り痕跡が観察できる。残存高 2.05cm を測る。

蓋 1 (21) 口縁部にかえりを有するもので、復原口径 13.4cm、残存高 2.2cm を測る。天井部外面には回転ヘラ削り痕跡をとどめ、焼成・還元ともに良好。

坏 a (22) 復原口径 14.8cm、器高 2.7cm、復原底径 9.8cm を測り、平底の底部から直線的に外方へ体部が開く。底部外面は、回転ヘラ削りによって仕上げられている。

153SK028 出土遺物 (Fig. 7)

金属製品

鉄釘 (23) 残存長 15.3cm、長軸長 0.9cm、短軸長 0.8cm の略長方形の断面形状を有する。打点部分を折り曲げるもので、木質などの付着は観察できなかった。

その他の遺構

153SX003 出土遺物 (Fig. 8)

瓦類

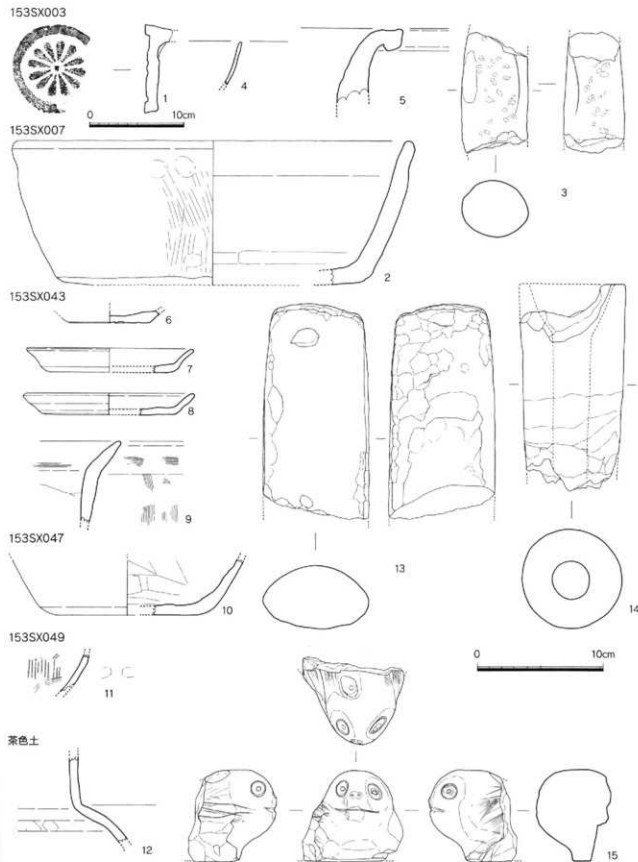


Fig. 8 第153次調査その他の遺構および土層出土遺物実測図 (1/3, 1のみ1/4)

軒丸瓦(1) 直径9.35cmの軒丸瓦で、中心に珠文を1つ、そのまわりに単弁を12葉めぐらす単純な文様のものである。瓦当裏面には丸瓦と接合のための指頭瓦痕をとどめている。色調は、暗黒灰色で瓦質に焼き上げられている。

153SX007 出土遺物 (Fig. 8)

土師器

鉢(2) 復原口径31.8cm、器高11.5cm、復原底径23.9cmを測り、砂粒を多く含む粗製の印象をうけるものである。体部外面には縦方向のハゲ調整がなされ、底部と体部の境界付近の内面には横方向の強いナデ痕跡が観察できる。底部外面には板状瓦痕をとどめている。

石製品

石斧(3) 刃部を欠損しており石斧と言えるかどうか心許無いが、器表面を細かく敲打した痕跡をとどめている。石材は暗灰色の玄武岩。残存長9.7cm、直径4.5cm～5.2cmを測る断面楕円形を有する。

153SX032 出土遺物 (Fig. 8)

陶器

甗(4) 器厚が極めて薄く、内外面に黒褐色がかった暗茶褐色の光沢ある釉が掛けられている。素地特徴は、精選されており淡白灰色で0.5mm以下の砂粒を僅かに混入している。残存高3.5cmを測る。産地は不明。

大甗(5) 口縁端部を「N」字状に仕上げる。素地は淡灰白色の0.5mm大の砂粒を多く含む、暗茶褐色の自然釉が掛っている。残存高は6.0cmを測る。諸特徴から常滑系の焼き物と考えられる。

153SX043 出土遺物 (Fig. 8)

土師器

坏a(6) 底部のみの破片資料で、小皿の可能性もあるが、相伴した資料の型式から、坏と判断した。底部外面は回転ヘラ切りによって処理され、残存高1.1cm、底径6.6cmを測る。

皿a(7, 8) 復原口径13.2cm・13.6cm、器高1.9cm・1.7cm、復原底径11.0cm・10.6cmを測り、底部外面の処理は7が不明であるが、8は回転ヘラ切り後に粗いナデによって仕上げられている。

甗a(9) 「く」字形に屈曲する頸部形状を有するもので、体部外面は縦方向のハゲ調整、口縁部内外面は横方向のハゲ調整が施されている。内面は頸部からやや下位より横方向のヘラ削り痕跡が観察できる。外面には煤が付着している。残存高6.5cmを測る。

153SX047 出土遺物 (Fig. 8)

土師器

壺×甗(10) 底部平底であることから蓋の可能性を考えた。外面は体部ならびに底部ともに丁寧なナデによって仕上げられ、内面は手持ちによる粗いヘラ削りが観察できる。胎土には白雲母細片が多く含まれている。残存高4.4cm、復原底径13.8cmを測る。

153SX049 出土遺物 (Fig. 8)

土師器

坏(11) 体部の破片で、丸味を有する体部形状を有しているという想定ができる程度で、全形を明らかにし難い。内面には縦方向(放射状)の暗文が観察でき、体部外面には指頭瓦痕が観察できることから畿内産土師器の可能性が高い。胎土は、精選され微細な白雲母片が多く含まれている。残存高2.9cmを測る。

土層

茶色土出土遺物 (Fig. 8)

青磁

水注(12) 体部上位から頭部にかけての破片資料。素地に1mm以下の茶色ならびに白色の砂粒を少量含む、やや緑色味を帯びた黄茶色の釉薬が外面に掛けられている。光沢はあるものの細かい貫入が観察できる。これらの特徴から越州窯系青磁Ⅱ系の製品と考えられる。

須恵質土器

用途不明(15) 亀様の形をつくったもので、鉢ないしは盤に貼付されるものと考えられる。全てヘラ描きによって描かれており、目の部分のみ竹管的な突起によって描きだされていると判断された。残存高7.3cmを測る。

石製品

石斧(13) 刃部を欠損するもので、器面に敲打痕跡をとどめる。残存長17.0cm、断面8.4cm～5.0cmの楕円形を呈する。石材は、淡灰色(風化面)～黒色の玄武岩である。

土製品

桶羽口(14) 残存長16.4cm、直径8.4cm、孔直径3.0cmを測り、炉挿入部分と送風口側を欠損する。挿入部分には黒色に変色した鉄が付着するなど、鉄溶解炉に使用されていたことが想定できる。

(5) 小結

a. 遺構の帰属時期と筑前国衝

調査の結果、小穴の多くが後世の削平によって欠失していると判断され、深い井戸などが僅かながら検出できた。帰属時期ごとの遺構概略は以下に記す。

1) 飛鳥期(7世紀末)

153SK012・153SK019

2) 平安前期(9世紀)

153SK034・153SK043・153SK046

3) 平安中期(10世紀)

153SE010・153SE015

153SK008・153SK013

153SK020・153SK042

4) 平安後期(11世紀後半～12世紀)

153SE005

153SK009

その多くが、不整形の地形の窪みに堆積したもので、土坑などの人為性がうかがえるものは飛鳥期に土坑が2基、平安中期に井戸2基、土坑2基、平安後期に井戸1基、土坑1基が確認されている。平安期における井戸の多数検出を考えると、他の条坊域の遺構分布状況からみて、条路・坊路などの街路付近に造られていることから、当該地で街路遺構は検出できていないが、近辺に街路が検出される可能性がある。筆者復原の政庁Ⅱ期施工条坊では、調査区の南に隣接する現東西道路が条路に該当しており、大宰府条坊跡第212次調査検出の条路延長線上であることを考えると、条坊内における他の地域同様に条路に接した空間であったと考えられる(太宰府市教委ほか、2001、中島、2008)。このように考えると、現王城神社が条路上に位置することになり、神社の空間的な位置が問題になってくる。

王城神社は、通古賀におけるお宮であると同時に、旧水城村に所在する十社を束ねるお宮として知られ、秋の大摩直布式祭が執り行われる神社である。学説史上は、長沼賢海氏によって「通古賀」の地名から筑前国衝に比定されている地で、その空間的な位置については慎重な議論が必要となる(長沼、

1966・1968)。筑前国衙の長官である筑前国司自体は、神亀末年から天平初年にかけて赴任した筑前守山上億良が初見であることはよく知られている。大宰府の職掌上で事務繁多であったことから、筑前国司を新設したものと解され、国務の分離が図られたと考えられている(倉住, 1988)。また、天平十二(740)年の大宰大式藤原弘嗣の乱後に大宰府が廃府され、その官物が筑前国司に付されたことが記録に見える。この付された具体的な場所はどこかということが議論対象に上げられることもある(日野, 1983)。大宰府官衙群と他所に比定する論であるが、他所の比定地が長沼賢海氏による王城神社を中心とした地である。長沼氏の比定範囲が図示されているが王城神社自体は、復原範囲の南東隅に位置しており、王城神社自体が官衙群の中心とは理解されていないように解される。一方筆者復原案である政庁Ⅱ期施工条坊案では、条路上に位置しているが4つの区画を統合させると、ほぼ中央に位置することになる。空間的な配置からは問題ないように思えるが、まず何より筑前国衙の位置がどこかという議論を棚上げにして進めることはできない。本報告でこの点について詳述するには、知識と素材不足であることから立ち入ることはできないため、今後の課題とせざるを得ない。しかし報告してきたように、王城神社に最も近接した調査区でありながら、検出できた遺構ならびに出土遺物を見る限り、奈良期に該当するものが少ないことは指摘しておく必要がある。その多くは後世の削平によって失われているとしても、遺物の出土は少なからずあってもよさそうなものである。当該調査区は、平安期を中心として生活痕跡が顕著であったことを指摘せざるを得ない。

なお、この点については、検出できた遺構の帰属時期からみると、奈良期が少ないものの飛鳥期から平安後期までであることは既に記してきた。一方、包含層出土遺物と古くは縄文後期の土器や、新しくは室町期に属する龍泉窯系青磁碗Ⅳ類が出土しており、当該期の遺構が当該地ないしは周辺に展開している可能性がある。こちら人も為的な土地利用のあり方を考える上で、注視していきたい。

引用文献

- 長沼賢海(1966)『筑前国衙の研究』『九州文化史研究所紀要』第11号 九州文化史研究所
 長沼賢海(1968)『第十五章 筑前国衙の始終』『邪馬台と大宰府』太宰府天満宮文化研究所
 日野尚志(1983)『西海道国府考』『大宰府古文化論叢』上巻 九州歴史資料館 吉川弘文館
 倉住靖彦(1988)『筑前国司をめぐる若干の検討』『九州歴史資料館 研究論集』13 九州歴史資料館
 山本信夫(1990)『統計上の土器 - 歴史時代土器の編年研究によせて -』『乙益重隆先生古稀記念論文集』
 太宰府市教育委員会・玉川文化財研究所(2001)『大宰府条坊跡 XVIII』太宰府市の文化財 第57集
 中島恒次郎(2008)『居住空間史としての大宰府条坊跡』『九州大学考古学研究室 60周年記念論集』九州大学
 文学部研究科考古学研究室

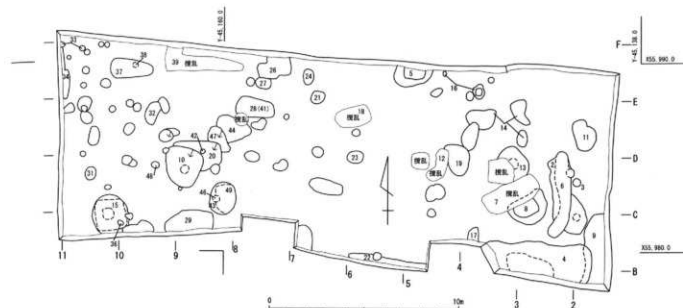


Fig.9 第153次調査遺構略図(1/200)

表1 第153次調査 遺構一覧表

S-番号	遺構番号	欠番	種類	埋土	切り合い等	時期	地区	
2	153SD002	溝か?				現代	C2	
3	153SX003	小穴				近代	C2	
4	153SX004	土坑	明茶色土→暗茶色粘質土			近代以降	B2	
5	153SE005	戸	赤土→黒色土→茶褐色土			平安後期	E5	
6	153SD006	溝か?	淡茶褐色粘質土		S-6→S-2	近代以降	C2	
7		覆瓦				現代	C3	
8	153SX008	土坑	黒茶色土		S-12→S-8→S-7	平安中期	B2	
9	153SX009	土坑	灰茶色土		S-9→S-4	平安後期	B1	
10	153SE010	戸	灰砂土→黒灰色土→黒茶色土		S-20→S-10	平安中期	C9	
11	153SX011	小穴	灰化物			近代以降	D2	
12	153SX012	土坑	緑茶色土		S-12→S-8→S-7	縄文	C2	
13	153SX013	土坑	黒色土→茶褐色土		S-13→S-7 (覆瓦)	平安中期	C3	
14	153SX014	埋み	茶褐色土			古代	D3	
15	153SE015	戸	黒灰色砂質土→黒茶色土→茶褐色土		S-15→S-8	平安中期	E10	
16	153SX016	小穴	茶褐色土			古代	E4	
17	153SX017	小穴	茶褐色土			古代	B3	
18	153SX018	土坑	灰青褐色土			現代	C4	
19	153SX019	埋み	黄褐色土			現代	C4	
20	153SX020	窪み	黄褐色土		S-47→S-20→S-42→S-10	平安中期	C8	
21	153SX021	土坑	茶褐色土			現代	D6	
22	153SD022	溝か?	茶褐色土			S-4と一連の遺構である可能性あり。	古代	A5
23	153SX023	小穴	茶褐色土				現代	C6
24	153SX024	小穴	茶褐色土				現代	E7
26	153SX026	土坑	淡茶色土				現代	E7
27	153SX027	土坑	灰緑土				古代	D7
28	153SX028	小穴	黒灰色土				近代以降	D7
29	153SX029	窪み	赤土				現代	B8
31	153SX031	小穴	焼土・灰緑土				近代以降	C10
32	153SX032	窪み	赤土				現代	D9
33	153SX033	小穴	茶褐色土				古代	E11
34	153SX034	窪み	茶褐色土				平安前期	D11
36		覆瓦(小穴)					現代	B10
37	153SX037	窪み	黄褐色土ブロック土製土				現代	E10
38	153SX038	小穴	茶褐色土		S-38→S-37		現代	E10
39		覆瓦(建物基礎)					現代	E9
41	153SX028	土坑	黄褐色土		S-28と一連		現代	D8
42	153SX042	小穴	黒灰色土		S-47→S-20→S-42→S-10		平安中期	C8
43	153SX043	窪み	黒茶色土				平安前期	B8
44		覆瓦	黄褐色土ブロック土製黒茶色土				現代	D8
46	153SX046	小穴	黒灰色土		S-46→S-43		平安前期	B8
47	153SX047	窪み	黄褐色土ブロック土製土		S-47→S-20→S-42→S-10		古代	C8
48	153SX048	小穴	赤土				現代	C9
49	153SX049	窪み	黒茶色土		S-49→S-46→S-43		古代	B8

2. 第195次調査

(1) 調査に至る経緯

調査地は太宰府市通古賀5丁目1210で、鏡山猛条坊案の右第11条4坊に位置する。

平成7(1995)年6月9日に陶山猛氏所有の土地において、RCの共同住宅の計画があり、8月28日に試掘調査を行い、遺構が確認された。平成9(1997)年7月より、調査開始時期等について協議を重ね、南北に茂っている樹木は抜かないということで、平成9(1997)年7月30日から9月29日にかけて、開発者の費用負担のもと発掘調査を実施した。調査対象面積334㎡、調査面積176㎡を測る。

調査は宮崎亮一・狭川真一が担当した。ちなみに、調査後建築計画はなくなったようで、この報告書作成時点でも建物は建ってなく、駐車場として利用されている。

(2) 基本層位

対象地は周囲を真竹などの葦に囲まれ、西側県道112号線(旧国道3号)より0.3m程高い土地で、遺構面は深さ0.8mほどで確認されるが、県道を基準にすると深さ0.5m付近に遺構面が確認される。表土の層位は、地表面から順に真砂土が約0.1m、その下に黒灰色土が約0.2m、その下に灰茶色土が0.3~0.4m、そして、遺構面を覆うように淡黒灰色土がみられ、その下から主に遺構が検出される。地山は大きく分けて西側が黒灰色砂質土層で東側は黒灰色土が混じる暗黄色土である。調査区東端付近では整地(S-97・98)のような堆積層が厚さ0.25mほど見られるが、全面に広がるのではなく、局部的な窪地の整地の可能性も考えられる。遺構の埋土は黒灰色土、暗黄色土混じりの黒灰色土、灰茶色土の主に3種類で、調査区西側はなだらかに下がっていき、遺構は稀薄になっていく。ピットは検出されるものの柱穴のような遺構は少なく、灰色の砂質地盤に砂をあまり含まない灰色土の埋土を持つピットが散在する。

(3) 検出遺構

掘立柱建物

195SB040 (Fig.12, Pla.3)

南北棟で2間×3間以上で、振れはN-2°14'-E程度。掘り方はほぼ方形で長さ0.75~1.2m、深さ0.65~0.9mで、埋土は全体的に地山の土がやや汚れたような土色で、プラン検出は若干わかりづらい状況であった。柱そのものは残っていないものの、柱痕跡は土層で明瞭に確認することができ、その径は約0.18mを測る。土層を見る限り、柱の抜き取り等は行われていない。柱間は南北2.0~2.3m、東西1.8mを測る。SB040aではSD020の溝とSB050aが切り合って検出され、その結果、SB050aが一番古く、順にSB040、SD020と造られたことがわかった。

堀列

195SA050 (Fig.12, Pla.3)

東西に並ぶ2個の方形の掘り方が確認できたが、それらに続く掘り方は確認できていない。SA050aがSB040eとSD020に切られているが、その大きさは東西0.4m以上、南北0.75m、深さ約0.45m、SA050bは東西0.7m、南北0.6m、深さ約0.5mで、埋土は整然とした土層がみられ、東側に偏って径

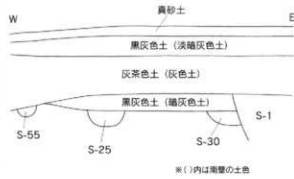


Fig.10 第195次調査土層模式図

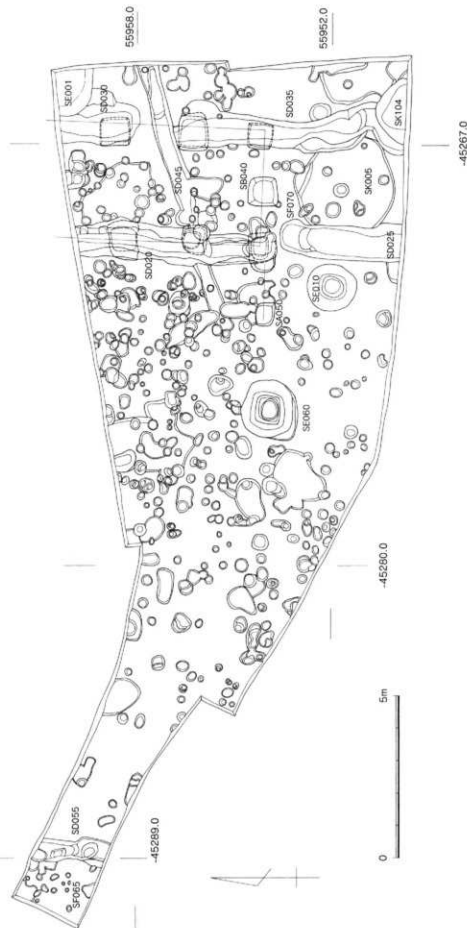


Fig.11 第195次調査遺構全体図 (1/120)

195SB040

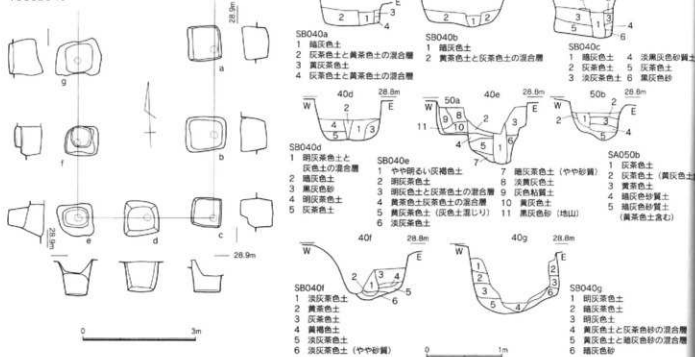


Fig. 12 195SB040・SA050 遺構実測図 (1/50, 1/100)

0.17mの痕跡も確認できた。柱間は約1.9mと推測される。

このように2個のみの検出のため標列というにも説得力に欠けるが、しっかりとした掘り方のため単なる土坑ではないことは間違いない。北側に同規模のピットが見られるが、深さが全く異なり浅いため、肯定しづらい。また、非常に分かりづらい埋土であったこともあり、他にあった掘り方を検出しきれなかった可能性は全くないとは言いが難く、掘立柱建物の一部の可能性も僅かながらあり得るだろう。SA050aがSB040eに切られているため、調査区内では古い時期の遺構である。

溝

195SD020 (Fig. 13)

振れはN-2° 18' 38"-Eの南北溝で、さらに北へ続く。長さ6.2m以上、幅0.9~1.1m、深さ0.4~0.8mのV字形に近い逆台形を呈している。全体的に南側が浅く、北側が深い。北側については検出段階で溝の西側のみに黒灰色土が確認されていた。土層観察から黒灰色土は斜めに流れ込み、その黒灰色土部分一帯が深くなり、特に多くの土器が検出された。別の遺構とは考えられず、溝の埋没途中で廃棄された土器群と考えられる。また、埋土中からこの調査地では珍しい花崗岩塊石が検出された。

195SD025 (Fig. 13)

振れはN-1° 12' 22"-Eの南北溝で、さらに南へ続いている。長さ3.75m以上、幅1.0~1.2m、深さ約0.25mで変化のない一定の大きさを測る。195SD020の延長上に位置するが、若干方向がずれていて、接続せずにその直前で完結している。また、195SD020と異なり浅い逆台形状をなしている。溝の底面は黒灰色砂層である。

195SD030 (Fig. 13)

長さ2.45m以上、幅1.35m、深さ0.4mを測る南北溝。北側は調査区外に続き、南側は一端途切れているが、その南1.2m程でSD030が確認できるため一連の溝と考えられる。

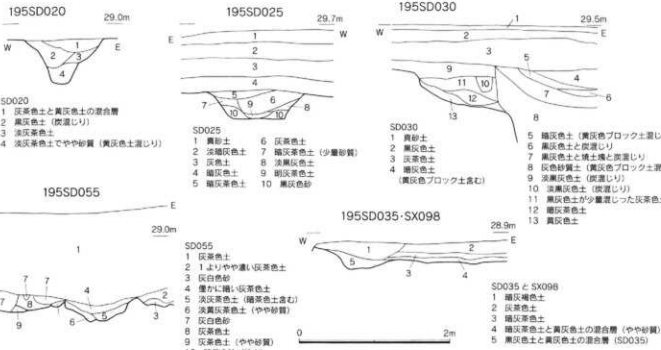


Fig. 13 第195次調査溝土層実測図 (1/50)

195SD035 (Fig. 13)

振れはN-0° 31' 37"-Wで、やや蛇行する南北溝。195SD030の延長上にあり、一連の溝と考えられる。南北両端とも他の遺構に切られている。長さ6.15m以上、幅0.84~1.2m、深さ0.25mを測る。その整地の下に195SB040の掘立柱建物の掘り方が確認されている。

195SD045

振れはE-16° 12' -Nに続く溝で、幅0.6m、深さ0.3mを測る。切り合い関係から今回の調査の中で最も古い遺構と考えられる。埋土は灰色で砂粒の細かい粘土質に近い土質である。

195SD055 (Fig. 13)

検出面積が狭いため、不明瞭な点も多いが、振れはN-0° 19' 6"-Wの南北溝。長さ2.3m以上、幅0.75~0.95m、深さ約0.1mを測る。

調査区西側に位置しているが、なだらかに傾斜して検出された。二段掘りのような状態で検出されたが、埋土は上下とも茶灰色土で、時期が違ふ様子は窺えない。埋土の土質は若干柔らかく、他の遺構に比べ、比較的新しい時期の埋没である可能性が考えられる。溝を境に西と東では地盤が異なり、西側は白灰色砂質土で地山のような堅さである。この土層を取り除くと黒灰色砂質系の堅い地山になり、それにピット状に凹凸が見られたが、これは白灰色砂質土の面から切り込んでいる。また、白灰色砂質土は若干の遺物を含んでいた。面積が狭いため路面と確定できるものは確認できなかった。

道路

195SF065

右郭5坊路の推定ラインに位置する。195SD055を道路側溝と考えた場合、195SD055の東側で溝が確認されていないことから、道路西側側溝は現在の市道の下になると推定される。付近の地山は黒灰色砂質土で、測量杭が刺さらないほどの非常に固い地盤である。道路と推測される部分は灰白色砂や灰茶色土で路盤の地業かどうかは明確でない。今回は道路として報告しているが、不明瞭な点も多く、今後の検討課題である。

195SF070

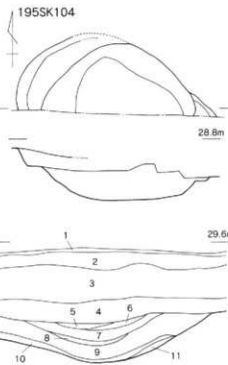
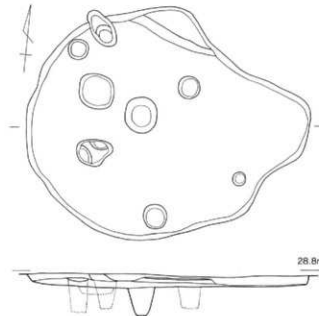
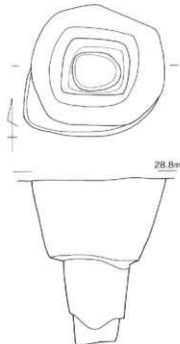
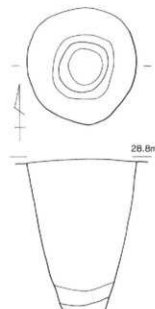
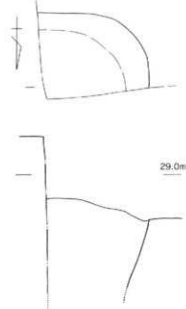


Fig. 14 第195次調査井戸・土坑遺構実測図 (1/50)

SD020・025とSD030・035に挟まれたところで、SD020・025を西側溝、SD030・035を東側溝と考えられる道路。溝の心々間には3.2～3.7m、道路部分は2.2～2.8mである。この溝の間の路面部分に特に埋没は見られなかった。SD045を道路側溝が切る形で、道路が造られているが、埋没遺物に大きな違いは見られなかった。また道路中央にSK005が掘り込まれていることなどから、側溝を伴った道路の存続期間は平安時代前期の短い期間と推測され、仮に側溝埋没後も道路としての機能が残っていたとしても平安時代後期には使用されていなかったと考えられる。

井戸

195SE001 (Fig. 14)

調査区北西端際に位置する。形状は隅丸方形をしているものとみられ、直径は約2.3mになるものと推測され、深さは1.3m以上を測る。表土除去の時点から赤茶色の焼土塊が検出され、現遺構面は焼土塊が確認され始めて約0.2m下がったレベルである。土層観察によって、掘り方が他の遺構を覆っている淡灰色土に切り込んで掘削されている様子が確認された。平面的には中心ほど焼土塊と炭の堆積が目立つ。焼土塊と炭混じりの層の下には黄灰色ブロック混じりの灰色砂質土が厚く堆積しているが、明確に分層することはできない。調査区際のため下部まで掘り下げることができなかったため、井戸枠痕跡など井戸と特定できる痕跡は確認していないが、状況的には井戸の可能性が高い。また、埋没状況から黄灰色土ブロックを含む灰色砂質土を一気に埋めたような様子が窺え、井戸を埋めた後の僅かに焼土塊や炭を捨てたものと考えられる。

195SE010 (Fig. 14)

南北1.54m、東西1.45m、深さ2.05mでほぼ円形をした井戸である。暗灰色土の埋土を約0.4m掘り下げた中央付近に黄茶色土の埋土が確認された。黄茶色土のプランは南側が比較的直線で、東西がぼんやりした状態で確認でき、北側の埋土は明らかに乱れていた。さらに掘り下げていったが、井戸枠痕跡を明確に確認することはできなかった。おそらく井戸枠部分は崩壊していたものと考えられる。掘り下げ途中の深さ約1m付近で鉄製品と焼け石が、遺構面から1.32m(標高27.45m)の井戸中央付近では土師器の完形品や越州窯系青磁等がまとまって出土した。また、その周辺には埋没途中に草木等が炭状になったようなものが溜まっていた。これらは、埋没過程の廃棄もしくは井戸廃棄時の祭祀を示していると思われる。そして、深さ1.4m付近(標高27.17～27.42m間)では、井戸の東端で0.2m前後の石が3個重なって検出され、井戸構築時のウラゴメと推測される。

195SE060 (Fig. 14, Pla. 4)

掘り方は円形状を呈し、南北1.76m、東西1.77m、深さ2.2mを測る。井戸枠プランは明確に確認できなかったが、やや南西に偏って黒灰色土がぼんやりと検出されたため、井戸枠が南西側にあった可能性が考えられる。掘り方は深さ1.1m付近で平坦面を設け、その下の掘り方は東西0.9m、南北0.7mの方形プランになっている。底面近くの深さ約1.85m付近では南北0.46m、東西0.65mの楕円形のプランが確認された。木材等は遺存していなかったが、曲物痕跡と考えられる。底面はやや凸凹で、かなりしまったような地盤である。周囲の壁は半分以下が砂質でもろい地質である。

土坑

195SK005 (Fig. 14)

楕円形の浅い土坑で、東西3.72m、南北3.1m、深さ0.2mを測る。埋土は黒灰色土の単一層で、多くの土師器片は全体的に散らばって出土する。黒灰色土を除去後、黒灰色土が混じる暗黄色土の底面には、ピットと195SD025・035の溝の一部が検出された。

195SK104 (Fig. 14)

調査区南端に位置しているため、全体を把握することはできないが、大きさは南北1m以上、東西約2.65m、深さ0.65mを測る。195SD035の溝を切っている。黄灰色土が楕円状に検出され、その下から焼土のような埋土が厚さ0.05m程確認された。埋没状況から自然堆積と考えられる。

(4) 出土遺物

掘立柱建物

195SB040a 出土遺物 (Fig. 15)

須恵器

甕 (1~3) 甕の小片で、内面に当て具痕、外面に叩き痕を残す。2・3は叩きの後カキ目を施している。焼成・還元良好で、色調は暗灰色や灰色を呈する。

195SB040b 出土遺物 (Fig. 15)

須恵器

蓋 3 (4) 口縁端部の小片で内面のみ回転ナデが確認できる。焼成は良好で、白色砂粒を含み、内外面とも淡灰色を呈する。

坏 (5) 内外面回転ナデ。焼成は良好で色調は黒灰色を呈する。壺の破片の可能性もある。

土師器

皿 c × 坏 c (6, 7) 6は復元高台径12.6cm。胎土はやや粗い。調整は摩滅し不明。色調は淡橙褐色を呈する。7は内外面とも摩滅して調整不明。色調は橙褐色を呈する。

石製品

平玉石 (8, 9) 8は縦1.85cm、横1.8cm、厚さ0.8cmで、淡灰色を呈する。9は縦1.8cm、横1.15cm、厚さ0.5cmで、色調は灰色を呈する。

195SB040c 出土遺物 (Fig. 15)

土師器

蓋 (10) 蓋のつまみ部分で、胎土は微細な砂粒を含む。焼成は不良で調整は摩滅し不明。色調は淡橙褐色を呈する。

金属製品

鉄鉾 (11) 鉾のような製品と推測され、先端は欠損する。現存長4.3cm、頭部幅2.6cm、端部幅0.05~0.06cm。

195SB040d 出土遺物 (Fig. 15)

須恵器

蓋 1 (12) 内面は青灰色、外面は暗灰色と明瞭に分かれ、重ね焼きの痕跡を示す。内外面とも回転ナデ。蓋 (13) 蓋の肩部付近の破片とみられ、焼成は良好で、色調は灰色を呈する。内外面とも回転ナデ。

195SB040e 出土遺物 (Fig. 15, Pla. 21)

須恵器

蓋 1 (14) やや丸みがあり、外面に色調の違いがあり、重ね焼き痕跡とみられる。内外面とも回転ナデで一部ナデ調整がみられる。口縁端部と返りは水平である。

195SB040f 出土遺物 (Fig. 15, Pla. 21)

蓋 1 (15) 復元口径14.9cm。口縁端部と返りは水平である。外面中位まで回転ヘラ削りでそれ以外は内外面とも回転ナデ。胎土は白色砂や黒色粒を含む。焼成は良好で淡灰色を呈する。

195SB040g 出土遺物 (Fig. 15)

石製品

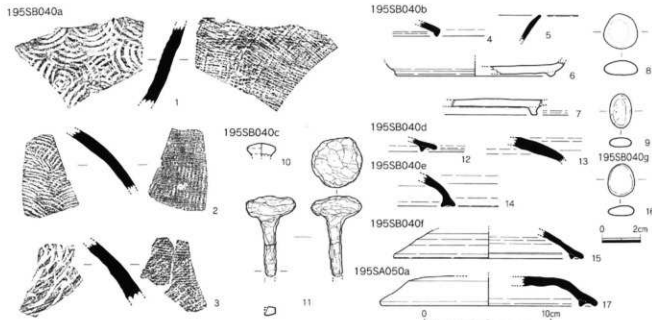


Fig. 15 195SB040・SA050 出土遺物実測図 (1/3, 8・9・11・16は1/2)

平玉石 (16) 縦1.75cm、横1.4cm、厚さ0.5cmで、黄褐色を呈する。

楕円

195SB050a 出土遺物 (Fig. 15)

須恵器

蓋 1 (17) 復元口径16.8cm。口縁端部と返りは水平である。外面中位まで回転ヘラ削りでそれ以外は内外面とも回転ナデ。胎土は白色砂や黒色粒を若干多く含む。焼成は良好で灰色や灰黒色を呈する。

溝

195SD020 暗灰色土出土遺物 (Fig. 16, Pla. 21)

土師器

坏 a (1~4) 1は口径10.6cm、器高4.8cm、底径6.1cm。底部切り離しはヘラ切りで内面底部は不定方向のナデ、それ以外は回転ナデ。焼成は良好で、色調は暗褐色を呈する。2は口径12.4cm、器高3.25cm、底径8.2cm。外面底部はヘラ切りで、板状圧痕が残る。内面底部は不定方向のナデ、その他は回転ナデ。色調は淡橙白色を呈する。3は復元口径12.3cm、器高2.9cm、復元底径7.8cm。外面底部はヘラ切りで、板状圧痕が残る。内面底部は不定方向のナデ、その他は回転ナデ。色調は淡灰色を呈する。4の底部切り離しは回転ヘラ切りである。

柄 c (5~7) 5は復元口径14.0cm、器高5.3cm、高台径7.5cm。体部下半は屈曲し、その部分に高台を貼付する。全体的に摩滅し、色調は淡橙白色を呈する。6は全体的に焼成時の歪みがあり、高台径は約8.9cm。焼成はやや不良で、色調は淡橙白色を呈する。7は復元口径16.4cm、器高6.3cm、復元高台径8.8cm。殆ど摩滅しているが、ミガキのようなものが確認できる。

柄 (8) 復元口径16.2cm。全体的に摩滅が著しいが、内面に僅かにミガキがみられる。色調は淡橙褐色や灰褐色を呈する。

甕 (9) 口径24.4cm。外面にはぼんやりとタテハケが残り、内面にはヘラ削りが施されている。口縁部はヨコナデである。胎土はやや大きな砂粒を含み、色調は暗灰褐色や暗橙褐色を呈する。

黒色土器

柄 c (10, 11) 10は復元口径12.0cm、器高5.3cm、高台径7.0cm。内面に僅かにミガキが確認できる。

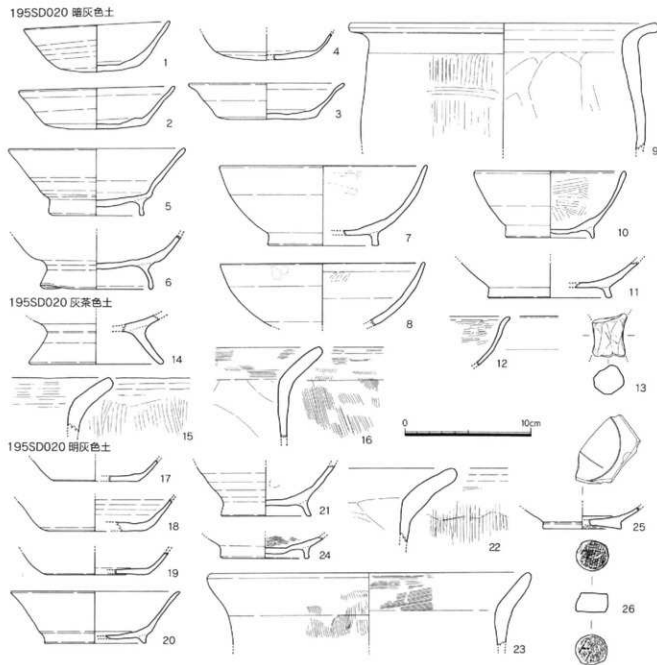


Fig. 16 195SD020 出土物実測図 (1/3)

A類。11は復元高台径9.8cm。内面に僅かにミガキcが確認できる。A類。

椀 (12) 口縁端部が若干外反する。内面にはミガキc、外面は回転ナデだが、ミガキのような痕跡もみられる。A類。

土製品

用途不明土製品 (13) 胎土は微細な砂粒を含むが混入物は少ない。外面は指押さえされ、両端を欠損する。色調は橙褐色で、一部暗灰色を呈する。

195SD020 灰茶色土出土遺物 (Fig. 16)

土師器

椀c (14) 高い高台を貼付する。復元高台径10.6cm。胎土は砂粒を少量含み、暗灰色や淡灰褐色を呈する。

甕 (15、16) 15は口縁部内面が粗いヨコハケ、外面はナデ、体部外面は粗いたテハケである。胎土

は砂粒を多く含み、淡褐色を呈する。16は口縁部内外面がヨコハケ、体部外面は細かいタテハケを施す。体部内面は斜め方向のヘラケズリ。胎土は砂粒を多く含み、灰褐色や橙褐色を呈する。

195SD020 明灰色土出土遺物 (Fig. 16, Pla. 21)

土師器

椀a (17~19) 17は復元底径6.8cm。色調は灰色や淡灰褐色を呈する。全面摩滅するが、外面底部に板状圧痕残る。18は復元底径8.1cm。色調は淡褐色を呈する。19は復元底径8.4cm。底部切り離しは回転ヘラ切り。色調は黒灰色や灰褐色を呈する。

椀c (20、21) 20は復元口径13.4cm。器高4.1cm。復元高台径6.8cm。色調は淡橙灰色を呈する。内外面回転ナデ。体部と底部の境は明瞭で、三角形のような低い高台を貼付する。

甕 (22、23) 胎土は0.05~0.3cmの砂粒を多く含む。口縁部は若干肥厚する。22は外面が粗いたテハケ、内面ヘラケズリを施す。口縁端部はヨコナデである。23は口縁部内面がヨコハケ、外面は口縁の一部から体部にかけてタテハケ。体部内面はヘラケズリだが摩滅している。

黒色土器

椀c (24) 高台径7.1cm。内面にはミガキcを施す。外面底部には板状圧痕が残る。A類。

緑釉陶器

椀 (25) 高台はケズリ出しの蛇ノ目高台で、復元高台径6.2cm。胎土は精製された灰色を呈する。焼成は良好で須恵質で、内外面とも淡緑灰色釉を薄く施す。内面には浅い沈線が巡る。京都産。

瓦類

瓦玉 (26) 大きさは2.4×2.5cm、厚さ1.5cm。表面に格子叩きや布目痕が残る。

195SD025 出土遺物 (Fig. 17, Pla. 21)

土師器

椀a (1~3) 体部と底部の境はやや丸みを帯びている。3点とも摩滅が著しい。1は復元口径12.0cm、器高3.0cm、復元底径6.9cm。底部切り離しは回転ヘラ切りで、板状圧痕が残る。焼成は不良で、色調は淡黄褐色を呈する。2は復元底径7.4cm。底部切り離しは回転ヘラ切り後ナデ調整。色調は淡茶褐色を呈する。3の色調は淡褐色や黒灰色を呈する。

椀c (4) 復元高台径7.9cm。焼成は不良で摩滅が目立つ。色調は白褐色を呈する。

石製品

平玉石 (5) 大きさは1.75×1.45cm、厚さ0.6cm。色調は暗灰色を呈する。

195SD030 出土遺物 (Fig. 17)

須恵器

椀a (6) 復元底径10.0cm。底部はヘラ切り後ナデ調整で板状圧痕が残る。内面底部は不定方向のナデ。その他は回転ナデ。焼成は良好で、色調は灰色を呈する。

椀c (7) 底部に低い高台を貼付する。復元高台径9.8cm。内外面とも回転ナデ。焼成は良好で色調は灰色を呈する。

土師器

椀a (8、9) 8は復元底径7.6cm。底部切り離しはヘラ切り。色調は淡灰褐色や茶灰色を呈する。9は丸い底部で、復元底径7.6cm。色調は淡白褐色を呈する。

椀c (10、11) 三角形の高台を貼付するが、焼成不良で内外面とも摩滅が著しい。色調は淡白褐色を呈する。

甕 (12、13) 2点とも胎土は砂粒を多く含み、焼成はやや不良である。12は体部内面が横方向のヘ

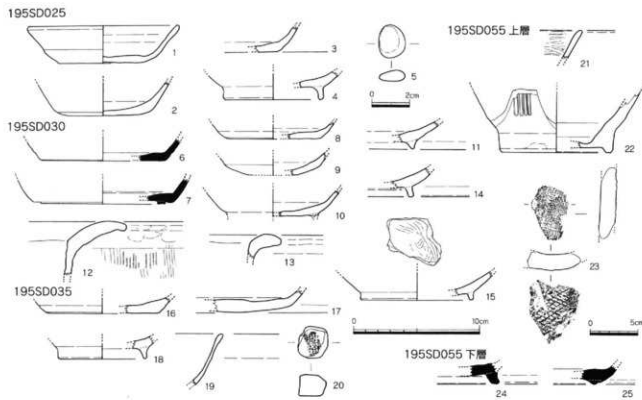


Fig. 17 195SD025・030・035・055 出土遺物実測図 (1/3, 5 は 1/2, 23 は 1/4)

ラケズリ、外面はタテハケ。口縁部はヨコナデ。色調は淡白橙褐色を呈する。13は体部内面のみ横方向のヘラケズリが確認できる。色調は茶褐色を呈する。

黒色土器

碗 c (14, 15) 2点とも方形の高台を貼付する。内外面とも摩滅するが、内面にミガキ c が施されている。A類。14は焼成が不良で、色調は淡茶褐色を呈する。15は復元高台径 8.9cm。外面下半がヘラケズリ調整される。外面の色調は淡橙褐色を呈する。

195SD035 出土遺物 (Fig. 17)

土師器

坏 a (16, 17) 16は復元底径 9.0cm。焼成やや不良で摩滅している。色調は淡橙褐色を呈する。17は胎土が白色砂粒を多く含み、角閃石も混じる。破片であるため皿の可能性もある。色調は淡白橙色を呈する。

碗 c (18) 復元高台径 7.0cm。焼成不良で摩滅している。色調は淡橙褐色を呈する。

碗 × 坏 (19) 焼成不良で摩滅している。色調は淡茶灰色を呈する。

瓦類

瓦玉 (20) 大きさは 2.55×2.3cm、厚さ 1.7cm。全体的に摩滅する。

195SD055 上層出土遺物 (Fig. 17)

黒色土器

碗 (21) 内面はミガキ c、外面は回転ナデで、色調は淡茶褐色を呈する。A類。

白磁

蓋 (22) 復元高台径 8.6cm。胎土は白色で 0.1cm 以下の茶色粒を含む。内面は回転ナデで露胎。外面は青みがかかった透明釉を厚く施軸し貫入が入る。外面底部や高台は削り出しで露胎である。

瓦類

平瓦 (23) 外面は細かい斜格子叩き。焼成良好で灰白色を呈する。

195SD055 下層出土遺物 (Fig. 17)

須恵器

坏 c (24, 25) 2点とも回転ナデ調整で、内面底部は一方のナデを施す。24は外開きの安定感のある高台を貼付する。焼成は良好で、色調は灰色を呈する。25は潰れたような低い高台を貼付する。色調は内面灰色、外面淡灰茶褐色を呈する。

井戸

195SE001 出土遺物 (Fig. 18)

黒色土器

碗 (1) 復元口径 16.2cm。胎土は砂粒を少量含み、淡灰褐色を呈する。内面は細かいミガキ c、外面は丁寧なナデ調整。A類。

土製品

土壁 (2) 土壁の一部とみられ、胎土には大小の砂粒を多く含み、スサ痕も確認できる。表面が残る部分はやや粗いナデ調整される。色調は暗橙褐色を呈する。

195SE001 茶灰色土出土遺物 (Fig. 18)

土師器

小皿 a (3) 復元口径 10.1cm、器高 1.2cm、復元底径 7.8cm。色調は淡橙白色を呈する。

丸底坏 a (4～6) 復元口径 15.4～16.0cm。内面はミガキ b を施す。外面はヘラ切り後ナデ調整。色調は淡灰褐色を呈する。5は器高 3.5cm、外面中位に僅かに指頭圧痕が残る。6は外面中位に僅かな屈曲と指頭圧痕が残る。

土製品

土壁 (7～10) 土壁の一部とみられる土塊で、およそ橙褐色を呈する。7・9・10は竹のような骨組痕が残る。8は一部粗いナデ調整の面が残る。胎土には土師器片を含む。

195SE001 暗灰色土出土遺物 (Fig. 18)

土師器

小皿 a (11) 復元口径 9.4cm、器高 1.1cm、復元底径 6.4cm。内面は回転ナデのあと不定方向のナデ。底部切り離しは回転ヘラ切りか。板状圧痕残る。色調は淡灰褐色を呈する。

丸底坏 a (12・13) 2点とも復元口径 15.2cm。全体的に摩滅が著しい。色調は暗灰褐色を呈する。12は外面底部に僅かにヘラ切り痕が確認できる。

195SE001 灰色土出土遺物 (Fig. 18)

土師器

小皿 a (14～16) 底部切り離しは回転ヘラ切り。焼成は不良で、淡橙白色や淡灰褐色を呈する。器高は 1.1～1.15cm。14は復元口径 9.8cm、器高 1.1cm、復元底径 6.8cm。

碗 (17) 復元口径 15.4cm。焼成は不良で摩滅しているが、内面は滑らかなミガキ状のナデ、外面には指押さえのような痕跡が残る。

195SE001 淡灰色砂出土遺物 (Fig. 18)

土師器

小皿 a (18～22) 復元口径 8.4～10.0cm、器高 1.1～2.0cm、復元底径 5.9～7.4cm。底部切り離しは回転ヘラ切りで、板状圧痕が残る。一部摩滅しているものもあるが、その他は回転ナデで、内面底部は不定方向のナデを施す。色調は淡褐灰色や淡橙白色を呈する。

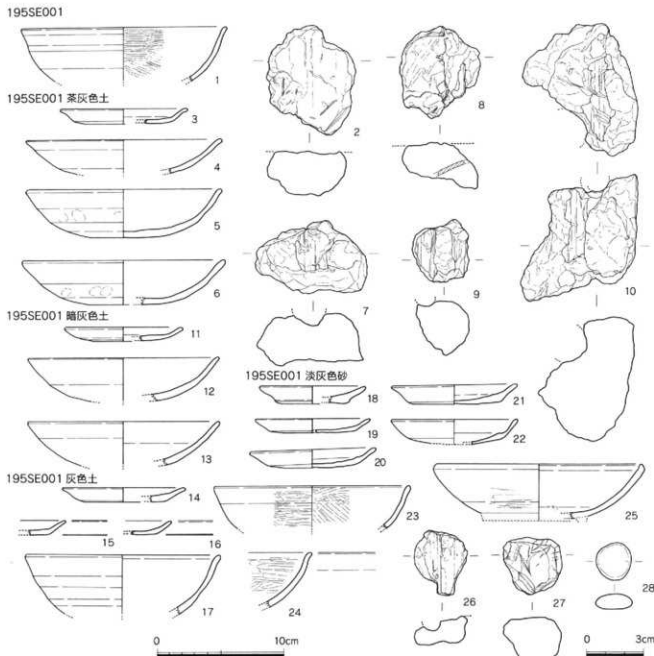


Fig. 18 1955E001 出土遺物実測図 (1/3, 28 が 1/2)

黒色土器

碗 (23, 24) B類。摩滅しているが、内外面ともミガキcが残る。23は復元口径16.6cm。

瓦器

碗c (25) 復元口径16.6cm。口縁端部内面が僅かに沈線状になっており、桶葉型の瓦器の模倣とみられる。外面は上半部が回転ヘラケズリ、下半には僅かにミガキcが残る。焼成は良好で灰色や黒灰色を呈する。

土製品

土壁 (26) 幅1.2cmの骨組み痕が残る、その横に何かから剥落したような平坦面がみられる。胎土は砂粒を多く含み、色調は暗橙褐色や灰褐色を呈する。

石製品

滑石加工品 (27) 大きさは3.0×3.1cm、厚さ2.2cm。

平玉石 (28) 大きさは1.9×2.0cm、厚さ0.8cm。色調は暗緑黒色を呈する。

1955E010 暗灰色土出土遺物 (Fig. 19)

土師器

坏a (1, 2) 1は復元口径11.0cm、器高1.8cm、復元底径7.0cm。底部切り離しは回転ヘラ切り。2の底部切り離しは回転ヘラ切り。内面底部は回転ナデの後ナデ、その他は回転ナデ。

小皿c (3) 口径11.6cm、器高2.1cm、高台径8.0cm。色調は淡灰橙色を呈する。外面底部は回転ヘラ切り後ナデ。内面は回転ナデの後ナデか、その他は回転ナデ調整。

碗 (4, 5) 4は口縁部を僅かに外反させるが、中位から丸く曲げまっすぐ立ち上げる。5は口縁端部をやや丸く曲げる。内面は摩滅するが、外面は回転ナデで、下半に指頭圧痕が残る。焼成は不良で淡橙白色を呈する。

黒色土器

碗 (6~9) 6・7は口縁部を僅かに外反される。外面は摩滅するが内面にミガキcが残る。A類。8は復元口径15.2cm、器高5.7cm、高台径7.2cm。口縁部は直口縁。全体的に摩滅が目立つが、内外面とも僅かにミガキcが確認できる。B類。9は復元口径15.0cm、B類。

緑釉陶器

碗×皿 (10) 胎土は淡灰色で、高台がケズリ出しである。内外面とも淡緑白色釉を薄く施す。内面は特に釉の剥落が目立つ。京都産とみられる。

石製品

石鐮 (11) 復元口径14.0cm。口縁部外面に約1cmの台形状の把手を削りだしている。内外面とも整形時のケズリ痕が明瞭に残る。滑石製。

1955E010 黒茶色土出土遺物 (Fig. 19, Pla. 21)

土師器

小皿a (12~16) 復元口径9.8~11.0cm、器高1.5~1.8cm、復元底径6.8~8.0cm。底部切り離しは回転ヘラ切りである。

皿a (17) 復元口径12.5cm、器高1.7cm、復元底径9.6cm。内面底部は不定方向のナデか。外面底部は回転ヘラ切りで、板状圧痕のような痕跡が見られる。色調は淡明橙色を呈する。

坏a (18) 復元口径131.0cm、器高2.3cm、復元底径10.0cm。体部がやや丸みがあり、口縁端部を僅かに外反させている。内面底部に不定方向のナデ、外面底部は回転ヘラ切りで、板状圧痕あり。色調は淡灰褐色を呈する。

碗c (19) 復元口径14.2cm、器高5.3cm、復元高台径7.8cm。胎土は少量の砂粒を含み、淡灰褐色を呈する。

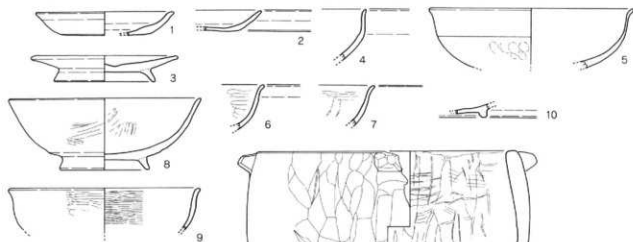
碗 (20) 復元口径15.2cm。口縁端部を外反させる。外面は摩滅するが、内面は回転ナデで、下半はミガキのようなナデがみられる。色調は淡茶灰色を呈する。

甕 (21) 復元口径35.0cm。胎土は0.05~0.4cm程の砂粒を多く含み、色調は淡灰褐色や淡橙白色を呈する。外面は摩滅するが、口縁部は回転ナデ、体部内面はナデのような痕跡を残す。

黒色土器

碗c (22) 復元高台径8.2cm。焼成がやや不良で全体的に摩滅し内面に僅かにミガキcが残る。A類。碗 (23~27) 全て口縁端部を僅かに外反させる。23は復元口径14.2cmで、内面と外面上半部が黒色化しやや粗いミガキcを施す。A類。24・25はA類。26は復元口径15.6cmで内外面とも細かいミガキcを施す。B類。27は復元口径15.8cm。内面は明瞭なミガキc、外面は下半がヘラケズリ後やや粗い

195SE010 赭灰色土



195SE010 黒茶色土

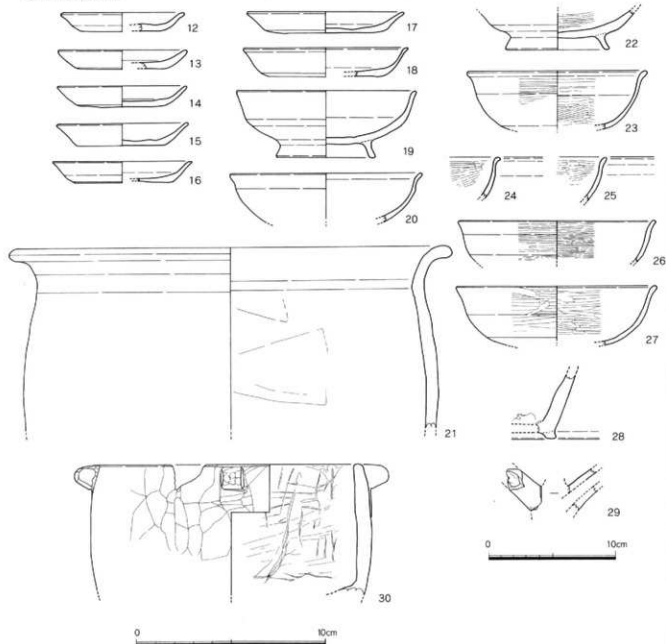


Fig. 19 195SE010 出土遺物実測図① (1/3、11・30は1/2)

195SE010 灰茶色砂

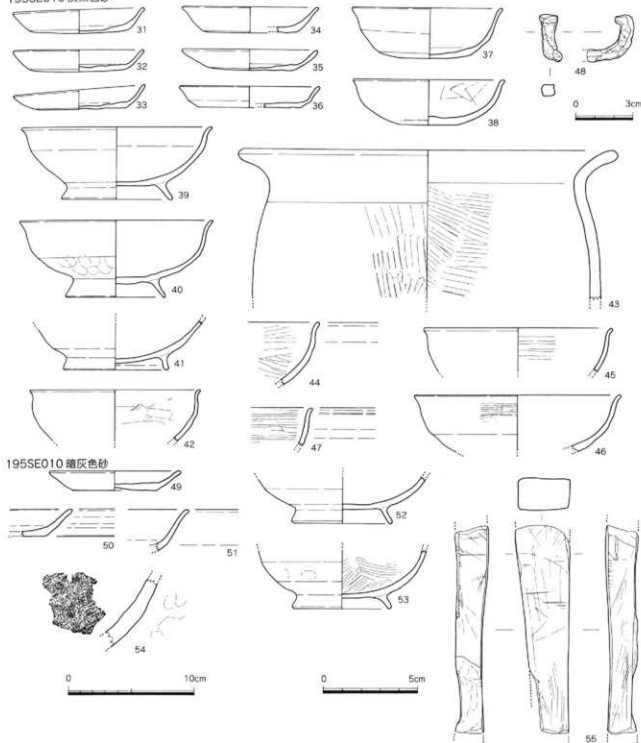


Fig. 20 195SE010 出土遺物実測図② (1/3、48・55は1/2)

ミガキcを施す。B類。

灰軸陶器

壺 (28) 底部端に高台を貼付する。胎土は精製され、淡橙灰色を呈する。体部下半はヘラケズリ、それ以外は回転ナデでその後薄く施軸する。内面底部には付着物がある。

白磁

水注 (29) 水注の注ぎ部分である。胎土は淡褐灰色で黒灰色粒を多く含む。内外面には淡いオリブ色がかかった灰白色軸を施している。

石製品

石鏃 (30) 復元口径14.0cm, 口縁端部に1cm程の方形の把手を削り出している。内法の深さは6.7cm程。外面は細かく削りが、内面のケズリはやや粗い。滑石製。

195SE010 灰茶色砂出土遺物 (Fig. 20, Pla. 21)

土師器

小皿 a (31 ~ 36) 口径10.2 ~ 11.1cm, 器高1.7 ~ 2.1cm, 底径6.6 ~ 8.2cm, 底部切り離しは回転ヘラ切りで、板状圧痕が残る。色調は明白灰色や黄白色を呈する。

坏 a (37) 復元口径12.0cm, 器高4.0cm, 底径7.3cm, 外面底部は回転ヘラ切り、内面底部はナデ、その他は回転ナデ調整される。色調は黄灰白色を呈する。

丸椀 (38) 復元口径12.0cm, 器高3.6cm, 内面はミガキ b が施され、コテ当て痕も残されている。外面底部には板状圧痕が残る。色調は黄白色を呈する。

椀 c (39 ~ 41) 39・40は口縁部を緩やかに外反させる。色調は黄白色を呈する。39は復元口径15.0cm, 器高5.8cm, 高台径8.8cm, 40は口径15.3cm, 器高6.1cm, 高台径7.9cm, 体部外面下半に指頭圧痕が、外面底部には板状圧痕が残る。41は高台径8.4cm。

椀 (42) 復元口径13.5cm, 内面はミガキ b, 外面は回転ナデ調整。色調は淡黄褐色を呈する。

甕 (43) 復元口径30.0cm, 胎土は白色砂粒を多く含み、黄褐色や黒褐色を呈する。調整は口縁部がヨコナデ、体部外面はタテハケ、体部内面はヨコハケである。

黒色土器

椀 (44 ~ 47) 44の内面はミガキ c が確認できるが、外面は摩滅し調整は不明瞭である。A類, 45は復元口径15.0cm, 内面はミガキ c が確認できるが、外面は摩滅し調整は不明瞭である。B類, 46は復元口径16.3cm, 内外面ともミガキ c で、外面は僅かにミガキの単位がわかるが、内面は不明瞭である。器面全体に焼成時の破裂痕がある。B類, 47の内面はミガキ c で、外面はミガキ c で綺麗に磨いているが、調整の単位は不明瞭である。B類。

金属製品

鉄釘 (48) 釘部分の大きさは0.6×0.7cmで、頭部を曲げている。端部を欠損する。

195SE010 暗灰色砂出土遺物 (Fig. 20)

土師器

小皿 a (49) 復元口径10.4cm, 器高1.6cm, 復元底径6.8cm, 底部は回転ヘラ切りで、板状圧痕が残る。内面底部は回転ナデのあと不定方向のナデ調整。

坏 a (50, 51) 50は器高2.15cm, 底部切り離しは回転ヘラ切りで板状圧痕が残る。51はやや丸みを帯びた底部で、色調は淡橙白色を呈する。

椀 c (52) 復元高台径7.9cm, 全体的に摩滅するが内面は回転ナデの後丁寧なナデが行われている。色調は淡橙白色を呈する。

黒色土器

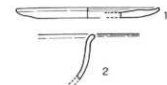
椀 c (53) 復元高台径7.8cm, 内面はミガキ c, 外面は摩滅するが僅かに指頭圧痕がみられる。A類, 外面は淡橙白色を呈する。

製塩土器

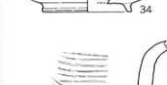
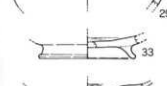
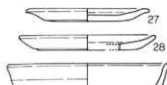
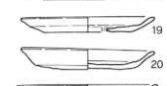
焼塩壺 (54) 内面は細かい布目痕、外面は粗いナデで指頭圧痕が残る。色調は橙褐色を呈する。壺 II-a類。

石製品

195SE060 灰茶色土



195SE060 暗灰色土



195SE060 黒灰色土

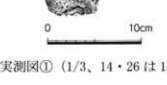
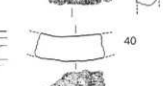
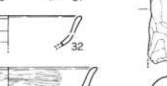
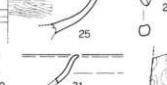
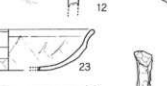
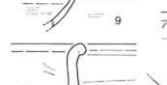
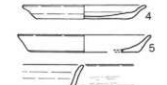


Fig. 21 195SE060 出土遺物実測図① (1/3, 14・26は1/2, 40・41は1/4)

砥石 (55) 両端を欠損し、現存長 10.95cm、幅は 1.7×2.8cm の方柱形で 3 面が使用されている。

195SE060 灰茶色土出土遺物 (Fig. 21)

土師器

小皿 a2 (1) 復元口径 11.3cm、器高 0.8cm、復元底径 7.7cm、口縁端部内面に僅かに窪みが巡る。外面底部は回転ヘラ切りで、内面底部は一方のナデ。その他は回転ナデ調整。

椀 (2) 口縁端部を外反させる。内外面とも回転ナデで、内面の一部にミガキがみられる。

器台 (3) 中心の孔径は 1.1cm、直径は約 3cm を測る。手捏ねで成形される。胎土は砂粒が混じり、色調は淡乳茶褐色を呈する。

195SE060 黒灰色土出土遺物 (Fig. 21)

土師器

小皿 a (4~7) 復元口径 9.8~11.0cm、器高 1.1~1.45cm、復元底径 7.7~8.8cm、底部切り難しは回転ヘラ切りで板状圧痕が残る。

小皿 a2 (8) 口縁端部内面に僅かに窪みが巡る。復元口径 10.8cm、器高 0.65cm、復元底径 8.2cm、外面底部は回転ヘラ切り後にナデ調整。胎土は混入物が少なく、淡褐色を呈する。

椀 (9) 摩擦しているが内外面にミガキのような痕跡を残す。

丸底坏 (10、11) 2 点とも口縁端部を外反する。内面はミガキ b でコテ当てて痕が残る。11 は外面下半に指頭圧痕が残る。

甕×鉢 (12) 口縁端部を丸く曲げる。胎土は白色砂粒を少量含み、灰褐色や淡灰褐色を呈する。全体的に摩擦するが、内面にハケ目が僅かに確認できる。

越州窯系青磁

坏 (13) 復元底径 4.8cm、高台は蛇の目高台で、畳付に目跡が残る。内面底部には沈線が巡る。軸調は淡緑灰色で細かい貫入が入る。胎土は淡灰色で精製される。I-b 類。

金属製品

金具 (14) 両端部を欠損する。径 0.6cm の棒状金属を輪状に曲げ、それに別の金属を通した状態で錆び付いている。

土製品

紡錘車 (15) 大きさは 3.9×4.05cm、厚さ 0.6cm、中央に 0.45cm の円孔を穿つ。胎土は白色砂粒を少量含む。焼成はやや不良で、淡灰黄褐色を呈する。

195SE060 暗灰色土出土遺物 (Fig. 21, Pla. 22)

土師器

小皿 a (16~21) 復元口径 9.8~11.2cm、器高 1.0~1.6cm、復元底径 7.0~8.2cm、底部切り難しは回転ヘラ切りで板状圧痕が残る。内面底部は不定方向のナデ。

小皿 a2 (22) 口径 10.8cm、器高 1.15cm、復元底径 8.0cm、口縁端部は折り曲げ、内側に段を付けている。底部は回転ヘラ切り後ナデで板状圧痕が残る。胎土は砂粒が少なく、淡黄褐色を呈する。

丸底坏 a (23、24) 23 は復元口径 13.6cm、器高 3.25cm、内面はミガキ b でコテ当てて痕も残る。外面下半は指頭痕が残る。色調は淡灰褐色などを呈する。24 は復元口径 13.8cm、器高 3.2cm、内面はミガキ b でコテ当てて痕も残る。外面下半は指頭痕が残り、板状圧痕も残る。色調は淡灰褐色を呈する。

黒色土器

椀 c (25) 復元口径 15.6cm、外面下半は回転ヘラケズリで、その後内外面ともミガキ c を施す。外面は黒化せず、淡灰褐色を呈する。A 類。

金属製品

鉄釘 (26) 大きさは 0.55×0.6cm、縦 7.0cm で、頭部を曲げている。

195SE060 灰茶色砂出土遺物 (Fig. 21, Pla. 22)

土師器

小皿 a (27、28) 27 は復元口径 9.7cm、器高 1.1cm、復元底径 6.7cm、底部は回転ヘラ切りで板状圧痕が残る。口縁端部がやや平坦を成している。色調は淡乳茶褐色を呈する。28 は口径 10.8cm、器高 1.2cm、復元底径 7.8cm、底部は回転ヘラ切り。色調は灰茶色を呈する。

椀 (29~32) 29 は復元口径 12.8cm、内外面とも回転ナデ調整。30 は内面がミガキ b、外面は回転ナデで、下半に指頭圧痕がみられる。色調は淡黄色を呈する。31 は内外面とも回転ナデ調整。32 は内外面とも回転ナデ調整。30 以外は橙褐色を呈する。

黒色土器

椀 c (33、34) 2 点とも B 類で、内面はミガキ c で、高台周辺は回転ナデ調整される。33 は外開きの高台で復元高台径 7.6cm、33 は復元高台径 7.1cm。

椀 (35) 復元口径 14.0cm、内外面ともミガキ c で、外面下半は回転ヘラケズリである。B 類。

甕 (36、37) 36 は口縁を大きく外反させる。胎土は 0.4cm 以下の砂粒を含み、淡黄茶褐色や淡灰白色を呈する。内面はヨコハケ、外面は粗いタテハケを施し、外面口縁近くには炭化物が付着する。37 は胎土が 0.5cm 以下の砂粒を含みや粗く、茶灰色や黒茶色を呈する。内外面に僅かにハケ目が確認できる。口縁部はヨコナデで、口縁部外面には指頭圧痕が残る。

土製品

棒状土製品 (38) 直径 3.3cm 前後で、胎土は 0.2cm 以下の砂粒を含み、淡乳茶褐色や茶褐色を呈する。表面は手捏ね成形される。

石製品

砥石 (39) 両端を欠損する。4 面使用している。砂岩製。

瓦類

平瓦 (40) やや大きな斜格子叩き、表面はやや粗い布目である。焼成良好で、色調は淡灰色を呈する。端部はヘラケズリを行う。

丸瓦 (41) 斜格子の間に「四王」の文字がみられる。切断面は半分ヘラ切りした後、折っている。胎土は 0.3cm 以下の砂粒を含み、色調は淡灰茶褐色を呈する。

195SK005 黒灰色土出土遺物 (Fig. 22)

土師器

小皿 a (1~5) 復元口径 9.3~10.2cm、器高 1.2~1.6cm、復元底径 6.6~8.0cm、一部摩擦も目立つが、底部切り難しは回転ヘラ切りで、板状圧痕が残るものもある。内面底部は不定方向のナデ。

椀 c (6、7) 6 は復元高台径 7.6cm、色調は黄白色を呈する。7 は復元高台径 7.8cm、内面はミガキが施されている。色調は淡橙白色を呈する。

丸底坏 a (8) 復元口径 15.8cm、器高 3.6cm、内面は回転ナデの後ミガキ b、外面下半は回転ヘラ切りの後押し出して、僅かに指頭圧痕が残る。

黒色土器

椀 c (9) 高台はやや歪んでいるが、高台径約 6.8cm、内面ミガキ c、その他は回転ナデとナデ。B 類。小皿 (10) 口縁部をやや内湾させる。内面ミガキ c、外面摩擦し一部回転ナデ。B 類。

瓦類

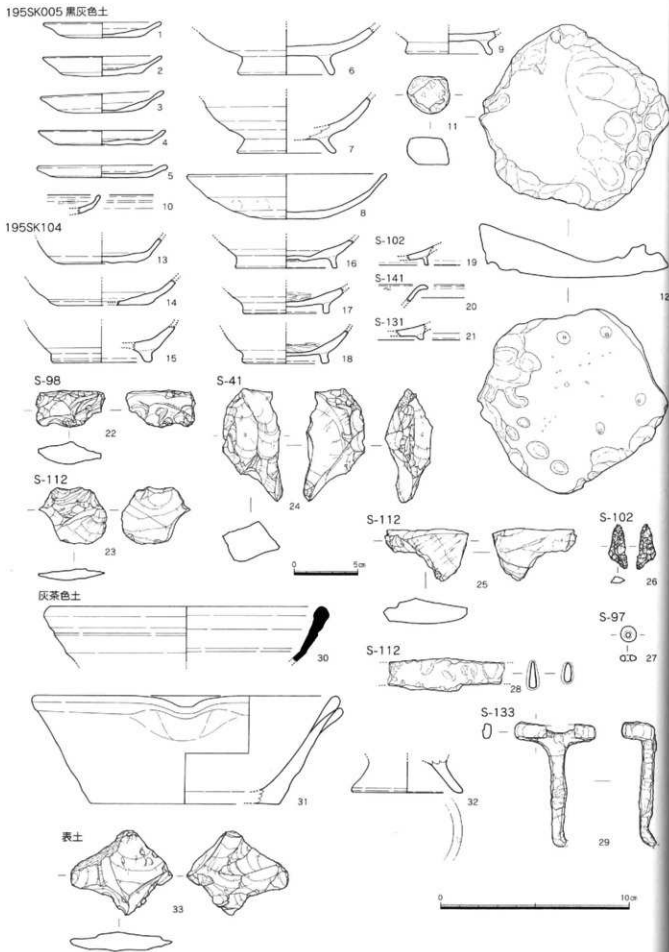


Fig. 22 195SK005・104、その他の出土遺物実測図 (石製品・鉄製品・ガラス製品は1/2、土器・12は1/3)

瓦玉 (11) 大きさは3.7×3.0cm、厚さ2.2cm。

石製品

砥石 (12) クレーター状の窪みがあり、その背面には1cm未満の人工的に錐のようなもので彫り込んだ穴も多くみられる。それ以外の面は研磨されており、砥石として報告するが、いわゆる盃状穴石の一種かもしれない。大きさは14.6×15.1cm、厚さ1.2~3.0cm。

195SK104 出土遺物 (Fig. 22)

土師器

坏 a (13, 14) 13はやや丸みのある底部で、復元底径6.8cm。切り離しはヘラ切りで、板状圧痕が残る。色調は淡乳茶褐色や淡乳灰白色を呈する。14は底部切り離しがヘラ切りでその他は回転ナデ。焼成は不良で色調は暗茶灰褐色を呈する。

碗 c (15, 16) 15は安定感のある高台を貼付し、復元高台径7.7cm。内外面とも回転ナデ調整。16は復元高台径7.7cm。内外面とも回転ナデ調整。内外面とも底部が大きく凹む。

黒色土器

碗 c (17, 18) 復元高台径は6.6cmと6.85cmで、内面にミガキc、底部は回転ヘラ切り、体外面は回転ナデ調整される。色調は内面が黒褐色や黒茶褐色で、外面が淡黄色等を呈する。

その他の遺構出土遺物 (Fig. 22)

緑釉陶器

碗 (19, 20) 19は胎土が乳白色で、焼成は良好で土師質である。釉は淡い緑黄色釉を薄く施すが内面は剥落が目立つ。高台登付は露胎で浅い沈線を探る。S-102より出土。20は口縁部を外反させる。胎土は乳白色の土師質で、内外面に淡緑灰色釉を施釉し、一部に濃い緑色釉を施す、いわゆる緑釉緑彩である。S-141より出土。

皿 (21) 胎土は土師質で、薄橙色を呈する。内外面に淡緑色釉を薄く施す。高台登付は露胎で、浅い沈線を探る。S-131より出土。

石製品

剥片 (22~25) 22は縦1.9cm、横3.7cm、厚さ1.2cm、チャート製。S-98より出土。23は縦3.0cm、横3.5cm、厚さ0.6cm、安山岩製。S-112より出土。24は縦6.0cm、横3.0cm、厚さ1.8cm、安山岩製。S-41より出土。25は縦2.75cm、横4.5cm、厚さ1.2cm、安山岩製。S-112より出土。

石鎌 (26) 長さ2.35cmで、一部欠損する。黒曜石製。S-102より出土。

ガラス製品

小玉 (27) 直径0.45cm、厚さ0.18cm、中央に0.1cm程の円孔を穿つ。色調は淡青色で気泡を含む。S-97より出土。

金属製品

刀子 (28) 両端を欠損する。錆で覆われているが、現存長6.1cm、厚さ0.7cm、S-112より出土。留め具 (29) 大きさ0.5~0.75cm程の鉄棒を輪状に作っている。輪状部分を薄い木材などに取付けていたものと推測される。端部は若干屈曲したところで欠損している。S-133より出土。

灰茶色土出土遺物 (Fig. 22)

須恵器

鉢 (30) 復元口径22.4cm。口縁端部を肥厚させ、内外面とも回転ナデ調整である。胎土は微細な黒色粒を含み淡い明灰色を呈する。籬窯。

土師質土器

鉢 (31) 片口の鉢で、復元口径 24.3cm、器高 8.55cm、復元底径 15.0cm。胎土は砂粒を多く含み、明茶灰色を呈する。焼成不良で摩滅するが外面はヨコナゲ調整される。

越州窯系青磁

壺 (32) 高台部分で、復元高台径 8.8cm。胎土は褐色粒を含み淡黄灰色を呈する。壺付以外は光沢の弱い淡黄褐色釉を施す。壺付には目跡が残る。

表土出土遺物 (Fig. 22)

石製品

副片 (33) 縦 4.45cm、横 5.4cm、厚さ 1.0cm、安山岩製。

(5) 小結

調査地は井上信正条坊案の右第 13 条 5 坊に位置する。195SD055 はその推定案の 5 坊路付近であるが、遺物が極めて少なく、埋土もやや軟らかい状況で古い時期と特定するには根拠が厳しく、今後周囲の調査を待たなければならない。もし、道路側溝とすれば、現在の市道の下に対になる溝が検出される可能性が考えられる。つまり、当時から現代まで道路が田圃の畦畔や水路など何らかの形で残った結果と考えられる。

また、南北に並んでいる 195SD025 と SD020、195SD030 と SD035 はそれぞれ一連の溝になり、これら 2 条の溝に挟まれた幅約 2.2 ~ 2.8m の部分は道路とみられる。井上信正条坊案からすると条坊一両区画を分割する道路である可能性が考えられる。

また、通古賀の王城神社を中心とした地域は筑前国衙の推定地のひとつに挙げられている。その一面に位置する調査地は、小字「扇屋敷」の西端にあたり、昔は土塁の名残といわれる高まりと藪（官敷）があったといわれ、現在でも北側 80m 付近にはその藪の名残であるクロガネモチの太木が残っていて、調査地も一部竹藪になっていた。道路より若干敷地が高いものの、地面から約 0.6m は耕作土のような土層であり、その直下には古代の遺構面が広がっている。約 80m 北側で行った試掘調査でも深さ約 1m の位置に遺構面が見られた。つまり、以前から言われている藪が残っていた高まりは、国衙に係る人工的な構築物ではないことが分かった。

今回の調査で検出された 195SB040 の掘立柱建物の掘り方の埋土から、7 世紀後半 ~ 8 世紀前半の遺物が出土している。9 世紀中 ~ 後半埋填設の溝に切り切れているため、政庁 II 期の初期段階に存在した建物と推測される。掘り方が方形で一辺 1m 前後で、特別大きいものではないが官衙施設のひとつである可能性も十分考えられる。これらのことから従来いわれている藪や高まりが国衙の名残であることは肯定しがたいものであるが、国衙などの官衙施設の存在については、今後の調査次第では発見される可能性は十分考えられる。

表 3 第 195 次調査 条坊関連遺構座標値

遺構番号	位置	遺構中点座標値		南門からの距離		方位
		X	Y	X 方向 (m)	Y 方向 (m)	
195SD020	検出北端中心	55959.75	-45269.99	-753.388	-441.743	N-2° 18' 38" -E
	検出南端中心	55954.05	-45270.22	-759.090	-441.916	
195SD025	検出北端中心	55952.80	-45269.97	-760.337	-441.654	N-1° 12' 22" -E
	検出南端中心	55949.95	-45270.03	-763.188	-441.685	
195SD030	検出南端中心	55958.60	-45266.32	-754.501	-438.062	
195SD035	検出北端中心	55956.75	-45266.76	-756.351	-438.044	N-0° 31' 37" -W
	検出南端中心	55952.40	-45266.72	-760.359	-438.404	
195SD055	検出北端中心	55960.80	-45288.87	-752.527	-460.633	N-0° 19' 6" -W
	検出南端中心	55959.00	-45288.86	-754.327	-460.605	

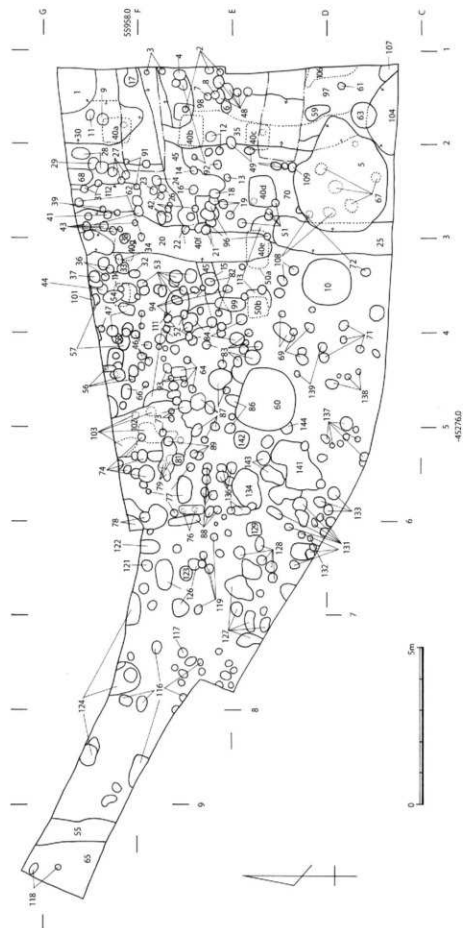


Fig. 23 第 195 次調査遺構略測図 (1/120)

表4-1 第195次調査 遺構一覧表①

S-番号	遺構番号	種別	埋土ほか	時期	地区	
1	195SE001	井戸	焼土塊あり	S-40→30→1	XII期	F1
2		ビッド群	黒灰色土			E1
3		ビッド群				E1
4		ビッド				E1
5	195SK005	土坑	S-25→S-5		XII期	E2
6		ビッド				E1
7		ビッド				E1
8		ビッド				E1
9		ビッド		奈良時代?		F1
10	195SE010	井戸		X～XI期		D3
11		ビッド		11世紀後半～12世紀前半		F1
12		ビッド群				E2
13		ビッド				E2
14		ビッド				E2
15		掘り方				E3
16		ビッド		10世紀代		E2
17		土坑				F1
18		ビッド		8世紀		E2
19		ビッド群		平安時代		E2
20	195SD020	溝	S-50・40→S-20	S-45→20		3ライン
21		ビッド		9世紀後半前後		E2
22		ビッド		平安時代		E2
23		ビッド		平安時代		E2
24		ビッド		平安時代		E2
25	195SD025	溝	S-25→S-5			9世紀後半前後
26		ビッド		平安時代		E2
27		ビッド群		平安時代		F2
28		ビッド群				F2
29		ビッド		10世紀～		F2
30	195SD030	溝	S-40→S-30→S-1			VII期前後
31		ビッド群				F1
32		ビッド				F2
33		ビッド				F3
34		ビッド		10c～12c		F3
35	195SD035	溝	S-45→40→35→104・5			9世紀後半前後
36		ビッド群		9世紀中～後半		F3
37		ビッド		平安中期		F3
38		ビッド		11世紀後半～12世紀前半		F2
39		ビッド				F2
40	195SB040	掘立建物	S-50→S-40→S-20			8世紀前半
41		ビッド		平安後期～		D～F1～3
42		ビッド				F2
43		ビッド				E2
44		ビッド		9世紀～		F2
45	195SD045	溝	S-45→20・35			X～XI期
46		ビッド群		平安前期		E1～3
47		ビッド群				E4
48		ビッド群				F3
49		ビッド群				D1
50	195SA050	欄列	S-50→S-40→S-20			D2
51		ビッド群		7世紀末頃?		D3
52		ビッド群				D2
53		ビッド群		奈良時代?		E3
54		ビッド				E3
55	195SD055	溝	道路側溝? S-55の西側			平安時代?
56		ビッド群				F9
57		ビッド群				F4
58		ビッド				F4
59		土坑				D1
60	195SE060	井戸				X～XI期
61		ビッド				D4
62		ビッド群				C1
63		土坑				F2
64		ビッド群				C1
						E4

表4-2 第195次調査 遺構一覧表②

S-番号	遺構番号	種別	埋土ほか	時期	地区	
65	195SF065	道路?		SD055の西側		平安時代
66		ビッド群				E9
67		ビッド群				F4
68		ビッド群	S-5の床面	暗灰色土		C2
69		ビッド				F2
70		ビッド群				D4
71	195SF070	道路	S-20・25とS-30・35の間			平安時代前期
72		ビッド群				2ライン
73		ビッド群				C4
74		ビッド群				D2
75		ビッド群				E4
76		ビッド群				F5
77		ビッド群				E5
78		ビッド群				E5
79		ビッド群				E5
80		ビッド				E5
81		ビッド群				D3
82		ビッド群				E4
83		ビッド群				奈良時代?
84		ビッド群				E4
85		ビッド群				E3
86		ビッド群				E4
87		ビッド群				奈良時代?
88		ビッド群				E4
89		ビッド群				E5
90		ビッド群				F2
91		ビッド群				E2
92		ビッド群				E4
93		ビッド群				平安時代
94		ビッド群				E3
95		ビッド群				E2
96		ビッド群				E1
97	195SX097	掘まり(塹地?)	S-98と同一層?	トレンチ状で南側		平安後期
98	195SX098	掘まり(塹地?)	S-97と同一層?	トレンチ状で南側		平安前期
99		土坑				E3
100		ビッド				VII期
101		ビッド				F3
102		窪み				F5
103		ビッド群				E5
104	195SK104	土坑	S-35→104			平安前期
105		土坑	S-97→106			C1
106		土坑				D1
107		土坑				C1
108		ビッド群				D3
109		ビッド群				D2
110		土坑とビッド群				奈良時代
111		土坑				E3
112		土坑				平安時代
113		土坑群				F2
114		ビッド群				D3
115		ビッド群				F3
116		ビッド群				E7
117		ビッド				奈良時代
118		ビッド群				E7
119		ビッド群				F7
120		ビッド				E6
121		土坑				9～10世紀
122		土坑				E6
123		ビッド				9～10世紀
124		ビッド群				E6
125		土坑群				E7
126		土坑群				奈良時代～
127		土坑群				D6
128		ビッド群				E6
129		土坑				D6
130		ビッド群				D6
131		ビッド群				D5
132		ビッド				D6
133		ビッド群				D5
134		土坑				D5
135		ビッド群				E5
136		ビッド群				D6
137		ビッド群				C4
138		ビッド群				C4
139		ビッド群				C4
140		土坑				D4
141		土坑				D5
142		土坑				D5
143		土坑群				D5
144		ビッド				D4

3、第201次調査

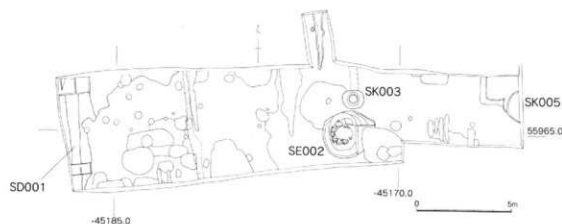


Fig. 24 第201次調査遺構全体図 (1/200)

(1) 調査に至る経緯

調査地は太宰府市通古賀5丁目1221-1、1221-4で、王城神社から日田街道に取り付く道の南側に位置する。

平成9(1997)年11月26日、対象地を分筆して専用住宅を建設するに先立ち、文化財の取り扱いについて照会があった。そして、平成9(1997)年12月4日に試掘調査を実施し、遺構を確認したため、今後調査が困難である分筆される境界部分について調査することとなった。調査は主に分筆部分だけ掘削し、他は検出しプランを確認し記録しただけのため、遺構内容について不明な点が多い。発掘調査は平成10(1998)年5月13日から5月20日にかけて実施した。調査は狭川真一が担当した。開発対象面積は336.41㎡で、調査面積は120㎡である。

(2) 基本層位

最上面は解体時の汚れが混ざった表土で、その下には真砂土が厚く覆う。その下に黒灰色土、その下に茶灰色土では部分的に黄色粘土が見られ、茶灰色土も細かく3~4層に分かれるものの一層に面を形成していない。これらは近代以降の整地で、これを除去すると遺構面となる。

(3) 検出遺構

溝

201SD001

調査区西端で検出された南北溝であるが、一部確認のため掘り下げた以外は平面確認で終わっている。西側は調査区外で未確認であるが、幅1.6m以上で、深さ0.3mで南側は浅い。方位はやや西に振っている。2回以上の掘り直しがあるとみられ、上面の埋土が北側にも広がっているため、東西の溝が接続する可能性も考えられる。

井戸

201SE002

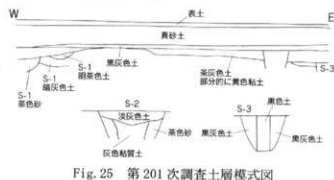


Fig. 25 第201次調査土層構成図

東西2.75m、南北2.5mの掘り方で、中央には深さ1mほどから、内法径0.75mの石組みの井戸枠が残っている。深さは0.2m程掘り下げたが、それ以下は完掘していない。

土坑

201SK003

東西1.12m、南北0.95m、深さ0.9mの円形土坑で、途中深さ0.6m付近で段が付き、そこから径0.5mの土坑をさらに掘り込んでいる。

201SK005

調査区の東端で検出された土坑である。大きさは東西0.68m以上、南北1.7m以上、深さ0.4m以上の円形土坑で、破壊対象外のため完掘していない。形状から井戸の可能性も考えられる。

(4) 出土遺物

201SD001 暗灰色土出土遺物 (Fig. 26)

土師器

小皿 a (1~3) 1は復元口径10.4cm、器高1.85cm、復元底径7.6cm、内面底部は不定方向のナデ、その他は回転ナデ。外面底部は付着物が多く調整不明。色調は鈍い橙色を呈する。2は口縁端部を外反させる。復元口径11.4cm、器高1.9cm、復元底径9.6cm、外面は回転ナデ後にナデを施す。色調は黄灰色や灰色を呈する。3は小片で、色調は淡い白橙色を呈する。

小皿 a × 坪 a (4、5) 4は復元底径7.0cm、底部外面に板状圧痕が残る、内面底部はナデ調整を施す。5は器高1.75cm程で、底部外面には板状圧痕が残る。色調は淡い白橙色を呈する。

椀 c (6) 復元高台径9.7cm、全体的に磨滅する。胎土は砂粒や雲母を含み、白茶灰色を呈する。

201SE002 上層出土遺物 (Fig. 26)

瓦質土器

火鉢 (7) 口縁端部に向かって若干肥厚させている。胎土は茶灰色や茶黒色で白色砂粒を多く含む。内面は細かいヨコハケで煤が付着する。外面は低く丸い突帯とその両端に沈線状の強いヨコナデを2本施すが、口縁端部に近い突帯は欠落する。その突帯間に花形文のスタンプを施している。

国産陶器

皿 (8) 高い高台と削り出している。復元高台径6.7cm。胎土は茶灰色で砂粒を含み若干粗い。軸は胎色の透明釉で、細い貫入が入る。内面は全面施釉で見込み部分は輪状に釉が掛っていない、外面体部下半は露胎である。

201SE002 炭灰色土出土遺物 (Fig. 26)

瓦質土器

火鉢 (9) 口縁端部に向かって若干肥厚させている。胎土は白茶灰色で白色砂粒や茶色粒を含む。内面は細かいヨコハケ、外面は低く丸い突帯とその両端に沈線状の強いヨコナデを2本施し、その間に花形文のスタンプを施している。

肥前系磁器

皿 (10) 復元口径13.6cm、器高3.2cm、復元高台径8.6cm。若干青味がかった透明釉を施し、内外面とも呉須で文様を描く。内面に目跡のような軸刺けが見られる。高台髹付は釉が軸が取り除かれている。国産磁器

皿 (11) 復元口径14.1cm、器高3.5cm、高台径4.7cm。釉はやや青味のある白色釉で、内面底部は輪状に釉を掻き取っている。外面は高台部が露胎で、高台内面には細かい砂粒が付着する。

国産陶器

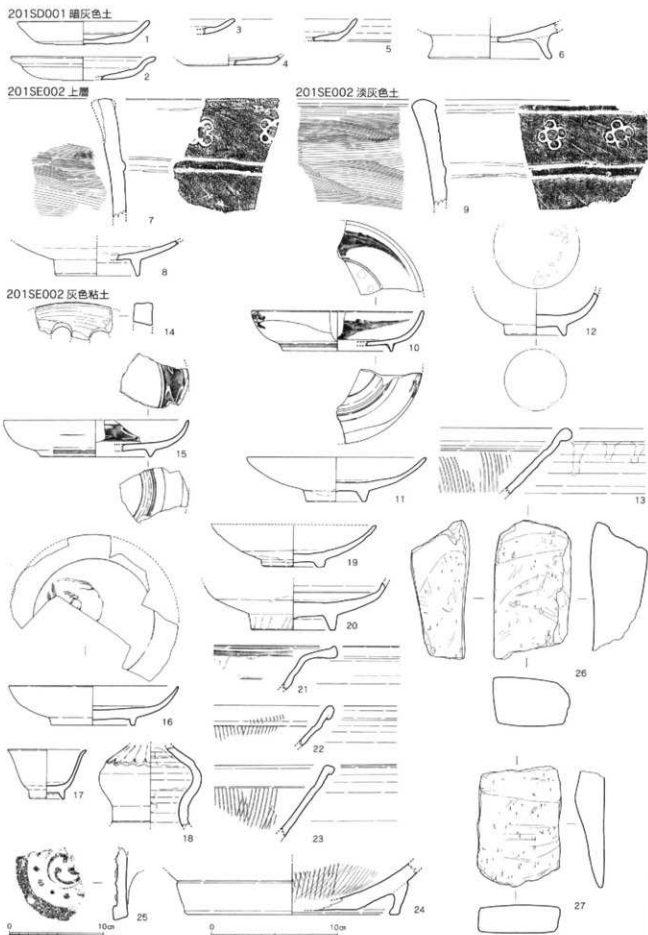


Fig. 26 201SD001・SE002 出土遺物実測図 (1/3、26・27 は 1/2、25 は 1/4)

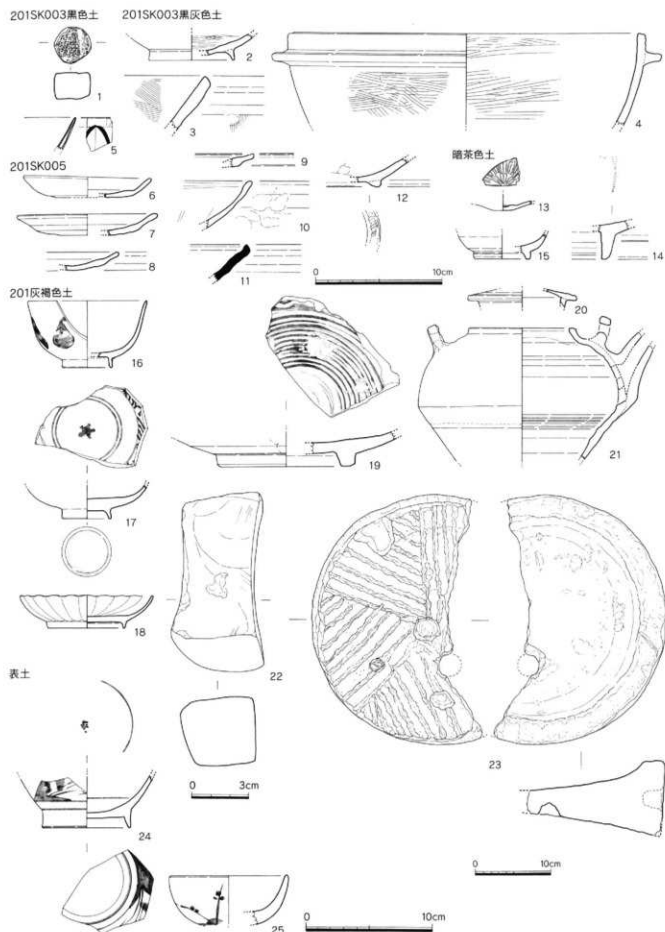


Fig. 27 第201次調査土坑・その他の遺構出土遺物実測図 (1/3、22 は 1/2、23 は 1/5)

小椀 (12) 高台径 4.8cm。胎土は淡い茶灰色で白色砂粒を含む。内外面とも黄褐色釉を施し、全体に細かな貫入がある。高台畳付は釉を拭き取り、僅かに目跡が残る。

播鉢 (13) 口縁部を丸く肥厚させている。内外面回転ナデで、内面には細い播り目を施す。胎土は暗灰色で白色砂粒を含む。内外面とも茶褐色や暗茶褐色の釉がかかり、外面は釉垂れがみられる。

201SE002 灰色粘土出土遺物 (Fig. 26, Pla. 22)

土師質土器

火皿 (14) 七輪の火皿の破片で、径 1.5cm 程の穿孔が開けられている。全面ナデ調整され、被熱で色調は橙褐色を呈する。

肥前系磁器

皿 (15, 16) 15 は復元口径 14.6cm、器高 2.9cm、復元高台径 8.8cm、全体にやや青味がかった釉が施され、高台畳付は釉を拭き取っている。内外面に呉須で文様を描く。16 は復元口径 13.4cm、器高 3.1cm、復元高台径 6.6cm、口縁端部と高台畳付は釉を拭き取っている。見込みには淡灰青色で文様を描く。

小杯 (17) 復元口径 6.2cm、器高 3.9cm、復元高台径 2.8cm。釉は外面体部下半と高台部以外は、若干青味がかった光沢のある透明釉が全面施されている。一部外面が橙色に発色する。

花瓶 (18) 花瓶の胴部とみられる破片で、胎土には白色砂粒や黒色粒が見られる。内外面にやや青味がかった透明釉を施し、全体に貫入がある。肩部は花弁形を造り出し、呉須で彩色している。

国産陶器

皿 (19, 20) 19 は口縁端部を細かく欠いている。釉調は内面が緑青色で、外面は薄い褐色釉を施し、若干貫入がある。内面見込み部分は軸を蛇ノ目状に掻き取っている。外面は体部下半と高台付近が露胎である。高台径 4.9cm。20 は体部中位から見込み部分を回ませ、その部分には浅い沈線を施す。釉調は内面が深い緑色で、外面は青味が若干ある白濁した透明釉と共に貫入がある。見込み部分は蛇ノ目状に軸を掻き取っていて、外面は体部下半以下が露胎である。高台径 6.6cm。

鉢 (21) 口縁部を屈曲外反させ、端部を肥厚させている。胎土は白色砂粒を含み、きめは細かい暗灰色で、体部外面上半から内面は褐色釉を施し、灰緑色や乳白色で文様を描く。

播鉢 (22 ~ 24) 22・23 は共に口縁端部を折り曲げ、玉縁状に肥厚させている。全体は回転ナデで内面に細い播り目を施す。色調は内外面とも暗茶褐色を呈する。24 は内向きの高い高台を貼付し、復元高台径 17.0cm。外面は回転ナデ、内面には細かい播り目が施されている。内面は茶褐色、外面は暗茶褐色を呈する。

瓦類

軒丸瓦 (25) 瓦当は三つ巴文に珠文が巡らされている。白色砂粒を多く含む粗い。焼成は良好である。石製品

砥石 (26, 27) 26 は縦 10.9cm、横 6.0cm、厚さ 4.6cm で、3面が使用されている。27 は縦 9.6cm、横 6.5cm、厚さ 2.3cm で、表裏 2面が使用されている。

201SK003 黒色土出土遺物 (Fig. 27)

瓦類

瓦玉 (1) 大きさは 2.9cm、厚さ 2.1cm で、全体的に磨滅し、布目痕は確認できるが、叩き目は不明瞭。

201SK003 黒灰色土出土遺物 (Fig. 27)

黒色土器

碗 c (2) 内面ミガキ c、外面回転ナデを施す。復元高台径 6.7cm、A 類。

瓦質土器

鉢 (3) 内面は回転ナデ後にハケ目、外面は回転ナデで僅かにハケ目が観察できる。胎土は白色砂粒を多く含む、暗灰色を呈する。

土師質土器

羽釜 (4) 復元口径 28.2cm。胎土は茶灰色で、白色砂粒や雲母粒を多く含む。内外面ともハケ目調整。外面には煤が付着する。跨部分はヨコナデ。

龍泉窯系青磁

碗 × 杯 (5) 碗 III - 2 類もしくは杯 III - 5b 類で、外面に連弁があり、厚く緑青色釉が施軸される。

201SK005 出土遺物 (Fig. 27)

土師器

小皿 a (6 ~ 8) 6 は口径 10.1cm、器高 1.6cm、復元高台径 6.8cm。内面底部は不定方向のナデ、外面底部はヘラ切りで、板状圧痕が残る。7 は口径 11.1cm、器高 1.7cm、復元高台径 8.0cm。外面底部に板状圧痕が残る。8 は小片で、内面は不定方向のナデ、底部切り離しは不明瞭。

小皿 a2 (9) 口縁部の小片で端部内面に僅かに浅い沈線が確認できる。色調は淡い橙褐色を呈する。

丸底杯 (10) 口縁部を若干肥厚させる。内面にミガキ b、外面に押し出しの指頭圧痕が確認できる。色調は淡白褐色を呈する。

須恵質土器

鉢 (11) 胎土は灰色で 0.2cm 以下の白色砂粒や炭化物や茶色粒を含む。内外面とも回転ナデ。

瓦器

碗 c (12) 低い高台を貼付し、その高台畳付に板状圧痕が残る。内面はミガキ、外面は回転ナデ調整で、色調は暗灰色や灰色を呈する。焼成は良好。

暗茶色土出土遺物 (Fig. 27)

国産磁器

皿 (13) 内面には花卉が刻まれ、全面に緑青色の透明釉を施す。釉には微細な気泡を含み、外面に大きな貫入がある。

国産陶器

皿 (14) 皿の高い高台部分である。胎土は褐色で、砂粒を含むが精製されている。釉は若干褐色味があり、高台部分は内外面とも露胎である。内面には目跡が残る。

小碗 (15) 高台は削り出して、復元高台径 4.0cm。胎土は白色や茶色砂粒を少量含む、淡茶褐色を呈する。釉は黄褐色で、外面の体部下半から高台内側までは露胎で、それ以外は施軸されている。

灰褐色土出土遺物 (Fig. 27, Pla. 22)

肥前系磁器

小椀 (16, 17) 16 は復元口径 9.4cm、器高 5.3cm、復元高台径 4.0cm。釉は僅かに青味がかった透明釉で、全面に施軸され、外面には呉須で茄子を描く。内面見込みにも呉須で文様を描くが、全容は不明。高台畳付は釉を拭き取っている。17 は胎土が僅かに灰色味を帯びた白色で、釉調は内面には若干青味がかった透明釉で、外面には緑青色味がかった透明釉を施す。高台畳付は釉を拭き取り、砂粒が付着している。高台径 3.9cm。内面には呉須で文様を描く。

国産磁器

皿 (18) 復元口径 10.5cm、器高 2.6cm、高台径 6.1cm。釉は白濁した透明釉で、全面に施軸する。高台畳付は釉を拭き取る。内外面とも花弁状に作り出している。

国産陶器

皿 (19) 復元高台径 10.8cm。胎土は紫褐色で、0.4cm以下の白色砂粒や黒色粒を含む。内面には黄褐色釉に白色釉で同心円の文様を描く。また、内面には目跡が残る。外面はヘラズリで露胎である。

蓋 (20) 復元口径 8.6cm。胎土は淡茶灰色で白色砂や黒色粒を含む。色調は灰色で、内面には炭化物が付着している。外面は回転ヘラズリで、その他は回転ナデ調整。土版の蓋と考えられる。

土版 (21) 口径 8.4cm。胎土は黄褐色から灰色で、軸調は光沢のある茶色がかかった黒色釉で、体部上半が施釉され、体部外面下は回転ヘラズリで露胎である。内面は回転ナデで口縁端部以外露胎である。口縁端部上面は釉を吹きかけられている。

石製品

砥石 (22) 縦 9.5cm、横 4.8×4.9cmで、側面全てと断面部の 5面が使用され、研磨されている。厚 (23) 半分欠損するが、直径 33.0cm、厚さは 3.0〜10.0cm、中心部よりやや側面側に径 3〜4.5cmの孔が穿たれている。側面にも 2.5cm×2.5cm、奥行 2.7cmの穴が彫り込まれている。表面の凹面部分は若干滑らかになっている。裏面は粗くなっているが掘り目が明瞭に残る。

表土出土遺物 (Fig. 27)

肥前系磁器

筒 (24) いわゆる広束筒で、復元高台径 7.0cm。軸は僅かに青味のある透明釉で、高台皿付は軸が抜き取られている。内外ともに須須で文様を描かれ、内面底部には「壽」のような文字を書いている。

小柄 (25) 丸味のある体部で、復元口径 9.4cm。胎土は淡灰色で、外面に須須で文様を描く。

(5) 小結

今回検出した遺構は、平安時代後期、鎌倉時代、江戸時代末期〜明治期の大きく 3 時期に分かれる。鎌倉時代の遺構は土坑が確認できただけで、それ以上の詳細は不明である。平安時代後期では条坊区画に関係の可能性がある南北溝があり、大宰府政庁中軸線から西へ 379.00m の位置にある。

江戸時代末期から明治にかけての遺構は、大半が掘削せずそのままの状態でも保存するために建物の規模や構造を知ることはできなかったが、現在の道路から約 6m 東側の地点から 17.5m 地点までの約 8.5 m の範囲に整地が認められ、そこで宅地として利用されていたことを窺わせる。この点で他の同時期の遺構をみると、整地の切れ目付近に石組み井戸、その東側に畝状遺構が展開している。西側の道路に面して玄関があると仮定すると、裏庭と宅地の境付近に井戸があり、それより東側 (奥側) は裏庭的な存在であり、そこでは小規模な畑が作られていたと考えられる。現代の土地利用の前身が見とれる。

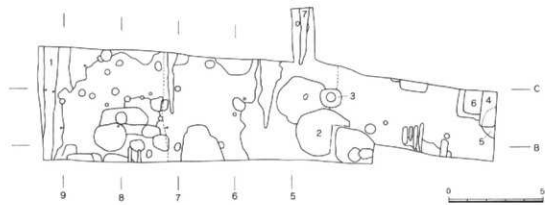


Fig. 28 第 20 次調査遺構略図 (1/200)

表 7 第 20 次調査 条坊間遺構座標値

遺構番号	位置	遺構中点座標値		南門からの距離		方位
		X	Y	X 方向 (m)	Y 方向 (m)	
201SD001	検出北端中心	55967.05	-45187.15	-745.259	-368.981	
	検出北端東端	55967.85	-45186.40	-744.452	-368.239	
	検出南端東端	55962.75	-45186.25	-749.550	-368.038	N-1° 41' 5" -W

表 8 第 20 次調査 遺構一覧表

S-番号	遺構番号	種別	埋土ほか	時期	地区
1	201SD001	溝		平安時代後期頃	9ライン
2	201SE002	井戸	2-3	近世〜	B4
3	201SK003	土坑		13世紀中頃〜14世紀前後	B4
4		土坑	4-6	近世〜	東区
5	201SK005	土坑	4-5	11世紀後半頃	東区
6		土坑	4-6	近世〜	東区
7		溝			東区拡張

表 9 第 20 次調査 出土遺物一覧表

S-1 原色土	
1	筒 赤 陶 器 環, 陶, 磁 片
1	土 師 製 陶 器, 陶, 磁 片, 小 皿, 小 皿 a × 環 a, 蓋
1	陶 器 土 器 入 陶
1	藍色土器入陶片
1	白 磁 陶 (磁片?)
1	瓦 類 平瓦 (筒子母, 横目母), 破片
S-1 明色土	
1	筒 赤 陶 器 環, 陶, 磁 片
1	土 師 製 陶 器, 陶, 磁 片, 小 皿, 小 皿 a, 小 皿 a × 環 a, 蓋
1	陶 器 土 器 入 陶
1	藍色土器入陶片
1	白 磁 陶 (磁片?)
1	瓦 類 平瓦 (筒子母, 横目母), 破片
S-2 原色土	
1	筒 赤 陶 器 環, 陶, 磁 片, 小 皿, 小 皿 a × 環 a, 蓋
1	土 師 製 陶 器, 陶, 磁 片, 小 皿, 小 皿 a, 小 皿 a × 環 a, 蓋
1	陶 器 土 器 入 陶
1	藍色土器入陶片
1	白 磁 陶 (磁片?)
1	瓦 類 平瓦 (筒子母, 横目母), 破片
S-2 原色土	
1	筒 赤 陶 器 環, 陶, 磁 片, 小 皿, 小 皿 a × 環 a, 蓋
1	土 師 製 陶 器, 陶, 磁 片, 小 皿, 小 皿 a, 小 皿 a × 環 a, 蓋
1	陶 器 土 器 入 陶
1	藍色土器入陶片
1	白 磁 陶 (磁片?)
1	瓦 類 平瓦 (筒子母, 横目母), 破片
S-2 原色土	
1	筒 赤 陶 器 環, 陶, 磁 片, 小 皿, 小 皿 a × 環 a, 蓋
1	土 師 製 陶 器, 陶, 磁 片, 小 皿, 小 皿 a, 小 皿 a × 環 a, 蓋
1	陶 器 土 器 入 陶
1	藍色土器入陶片
1	白 磁 陶 (磁片?)
1	瓦 類 平瓦 (筒子母, 横目母), 破片
S-2 原色土	
1	筒 赤 陶 器 環, 陶, 磁 片, 小 皿, 小 皿 a × 環 a, 蓋
1	土 師 製 陶 器, 陶, 磁 片, 小 皿, 小 皿 a, 小 皿 a × 環 a, 蓋
1	陶 器 土 器 入 陶
1	藍色土器入陶片
1	白 磁 陶 (磁片?)
1	瓦 類 平瓦 (筒子母, 横目母), 破片
S-2 原色土	
1	筒 赤 陶 器 環, 陶, 磁 片, 小 皿, 小 皿 a × 環 a, 蓋
1	土 師 製 陶 器, 陶, 磁 片, 小 皿, 小 皿 a, 小 皿 a × 環 a, 蓋
1	陶 器 土 器 入 陶
1	藍色土器入陶片
1	白 磁 陶 (磁片?)
1	瓦 類 平瓦 (筒子母, 横目母), 破片
S-2 原色土	
1	筒 赤 陶 器 環, 陶, 磁 片, 小 皿, 小 皿 a × 環 a, 蓋
1	土 師 製 陶 器, 陶, 磁 片, 小 皿, 小 皿 a, 小 皿 a × 環 a, 蓋
1	陶 器 土 器 入 陶
1	藍色土器入陶片
1	白 磁 陶 (磁片?)
1	瓦 類 平瓦 (筒子母, 横目母), 破片
S-2 原色土	
1	筒 赤 陶 器 環, 陶, 磁 片, 小 皿, 小 皿 a × 環 a, 蓋
1	土 師 製 陶 器, 陶, 磁 片, 小 皿, 小 皿 a, 小 皿 a × 環 a, 蓋
1	陶 器 土 器 入 陶
1	藍色土器入陶片
1	白 磁 陶 (磁片?)
1	瓦 類 平瓦 (筒子母, 横目母), 破片
S-2 原色土	
1	筒 赤 陶 器 環, 陶, 磁 片, 小 皿, 小 皿 a × 環 a, 蓋
1	土 師 製 陶 器, 陶, 磁 片, 小 皿, 小 皿 a, 小 皿 a × 環 a, 蓋
1	陶 器 土 器 入 陶
1	藍色土器入陶片
1	白 磁 陶 (磁片?)
1	瓦 類 平瓦 (筒子母, 横目母), 破片
S-2 原色土	
1	筒 赤 陶 器 環, 陶, 磁 片, 小 皿, 小 皿 a × 環 a, 蓋
1	土 師 製 陶 器, 陶, 磁 片, 小 皿, 小 皿 a, 小 皿 a × 環 a, 蓋
1	陶 器 土 器 入 陶
1	藍色土器入陶片
1	白 磁 陶 (磁片?)
1	瓦 類 平瓦 (筒子母, 横目母), 破片
S-2 原色土	
1	筒 赤 陶 器 環, 陶, 磁 片, 小 皿, 小 皿 a × 環 a, 蓋
1	土 師 製 陶 器, 陶, 磁 片, 小 皿, 小 皿 a, 小 皿 a × 環 a, 蓋
1	陶 器 土 器 入 陶
1	藍色土器入陶片
1	白 磁 陶 (磁片?)
1	瓦 類 平瓦 (筒子母, 横目母), 破片
S-2 原色土	
1	筒 赤 陶 器 環, 陶, 磁 片, 小 皿, 小 皿 a × 環 a, 蓋
1	土 師 製 陶 器, 陶, 磁 片, 小 皿, 小 皿 a, 小 皿 a × 環 a, 蓋
1	陶 器 土 器 入 陶
1	藍色土器入陶片
1	白 磁 陶 (磁片?)
1	瓦 類 平瓦 (筒子母, 横目母), 破片
S-2 原色土	
1	筒 赤 陶 器 環, 陶, 磁 片, 小 皿, 小 皿 a × 環 a, 蓋
1	土 師 製 陶 器, 陶, 磁 片, 小 皿, 小 皿 a, 小 皿 a × 環 a, 蓋
1	陶 器 土 器 入 陶
1	藍色土器入陶片
1	白 磁 陶 (磁片?)
1	瓦 類 平瓦 (筒子母, 横目母), 破片
S-2 原色土	
1	筒 赤 陶 器 環, 陶, 磁 片, 小 皿, 小 皿 a × 環 a, 蓋
1	土 師 製 陶 器, 陶, 磁 片, 小 皿, 小 皿 a, 小 皿 a × 環 a, 蓋
1	陶 器 土 器 入 陶
1	藍色土器入陶片
1	白 磁 陶 (磁片?)
1	瓦 類 平瓦 (筒子母, 横目母), 破片
S-2 原色土	
1	筒 赤 陶 器 環, 陶, 磁 片, 小 皿, 小 皿 a × 環 a, 蓋
1	土 師 製 陶 器, 陶, 磁 片, 小 皿, 小 皿 a, 小 皿 a × 環 a, 蓋
1	陶 器 土 器 入 陶
1	藍色土器入陶片
1	白 磁 陶 (磁片?)
1	瓦 類 平瓦 (筒子母, 横目母), 破片

S-4	
1	筒 赤 陶 器 環, 陶, 磁 片
1	土 師 製 陶 器, 陶, 磁 片, 小 皿, 小 皿 a × 環 a, 蓋
1	陶 器 土 器 入 陶
1	藍色土器入陶片
1	白 磁 陶 (磁片?)
1	瓦 類 平瓦 (筒子母, 横目母), 破片
S-5	
1	筒 赤 陶 器 環, 陶, 磁 片
1	土 師 製 陶 器, 陶, 磁 片, 小 皿, 小 皿 a × 環 a, 蓋
1	陶 器 土 器 入 陶
1	藍色土器入陶片
1	白 磁 陶 (磁片?)
1	瓦 類 平瓦 (筒子母, 横目母), 破片
S-6	
1	筒 赤 陶 器 環, 陶, 磁 片
1	土 師 製 陶 器, 陶, 磁 片, 小 皿, 小 皿 a × 環 a, 蓋
1	陶 器 土 器 入 陶
1	藍色土器入陶片
1	白 磁 陶 (磁片?)
1	瓦 類 平瓦 (筒子母, 横目母), 破片
S-7	
1	筒 赤 陶 器 環, 陶, 磁 片
1	土 師 製 陶 器, 陶, 磁 片, 小 皿, 小 皿 a × 環 a, 蓋
1	陶 器 土 器 入 陶
1	藍色土器入陶片
1	白 磁 陶 (磁片?)
1	瓦 類 平瓦 (筒子母, 横目母), 破片
S-8	
1	筒 赤 陶 器 環, 陶, 磁 片
1	土 師 製 陶 器, 陶, 磁 片, 小 皿, 小 皿 a × 環 a, 蓋
1	陶 器 土 器 入 陶
1	藍色土器入陶片
1	白 磁 陶 (磁片?)
1	瓦 類 平瓦 (筒子母, 横目母), 破片
S-9	
1	筒 赤 陶 器 環, 陶, 磁 片
1	土 師 製 陶 器, 陶, 磁 片, 小 皿, 小 皿 a × 環 a, 蓋
1	陶 器 土 器 入 陶
1	藍色土器入陶片
1	白 磁 陶 (磁片?)
1	瓦 類 平瓦 (筒子母, 横目母), 破片

表土

1	筒 赤 陶 器 環, 陶, 磁 片
1	土 師 製 陶 器, 陶, 磁 片, 小 皿, 小 皿 a × 環 a, 蓋
1	陶 器 土 器 入 陶
1	藍色土器入陶片
1	白 磁 陶 (磁片?)
1	瓦 類 平瓦 (筒子母, 横目母), 破片

4. 第215次調査

(1) 調査に至る経緯

第215次調査地点は太宰府市朱雀6丁目2577にあり、標高30mの御笠川南岸の自然堤防上、条坊右第一に位置する。調査地点は周辺条坊域内でもやや高い地形上に位置する。土地の所有者は太宰府天満宮（太宰府市市府4丁目7番1号、代表西高辻信良）であり、平成12（2000）年8月5日に老朽化した社殿の建て替えと参道石畳の張替、雨水路の新設を内容とする発掘届が出された。遺構に対する直接的な影響は水路溜め橋以外には想定されなかったが、当該地が条坊中央路（推定朱雀大路）に隣接し、菅原道真の居所であった「南館」の想定値であることから、今後の遺構保護に資するため保存を前提とした確認調査を国補助対象事業として発掘調査を実施した。工事に伴って社殿北西にある楠が敷地内で急遽移設されることとなりそれについても調査をおこなった。調査の場所は工事箇所に従って13の地点が設定され、1区は社殿、2区は楠の移設先、3区は楠の抜き取り箇所、4区は参道石畳敷設箇所、5から13区は水路溜め橋や電柱の設置箇所である。調査は施主側との協議により施工に影響しない調査が求められたため、基本的に撤去された施設の上面を清掃して観察する方法が採られたが、楠の移設先であった2区は発掘調査を実施し、5から13区は工事に合わせた立会調査となった（Fig. 29）。

調査期間は平成12（2000）年10月17日から12月5日で、調査面積は451㎡である。調査は山村信榮が担当した。

(2) 基本層位

今回の調査区は南北約200m、東西約100mが対象地のうちの表層部分を剥いだに過ぎないが、楠の移転に伴う2、3区では深いところでは120cmほどの掘削によって複数の遺物包含層が重なった状態で確認された（Fig. 34）。

2区は対象地の南端に当たるが、表土下20cmで平安時代の遺物を主体とする面的に広がる茶褐色土があり、その下に淡茶色、灰茶色の遺物包含層を挟んで地表下約80cmで黄色シルトの地山面がある。

3区は現代の遺物を含む汚れた黒灰色土層（表土）の下にSD050, 060の2条の溝と灰色系の堆積層があり、地表下約1mで白色ないし灰褐色の砂の無遺物層が見つまっている。SD050, 060と無遺物層の間に1面以上の遺構面がある可能性がある。

4区は現代の参道直下の調査で、石畳を剥がす工事の立会の所見では、現在の石畳下には硬化した海砂の層があり、その下に近現代の瓦片を含む黒灰色土、さらにその



Fig. 29 第215次調査区位置図 (1/800)

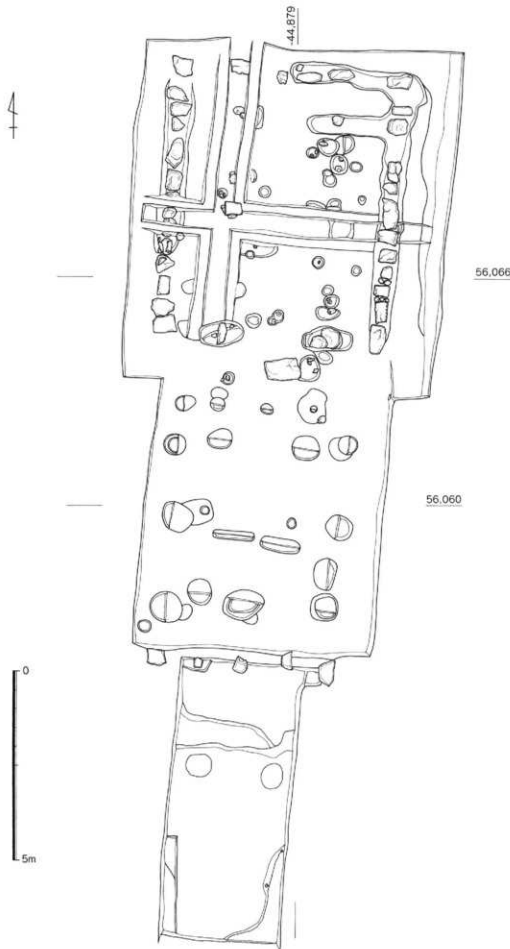


Fig. 30 第215次調査1・4区遺構全体図 (1/100)

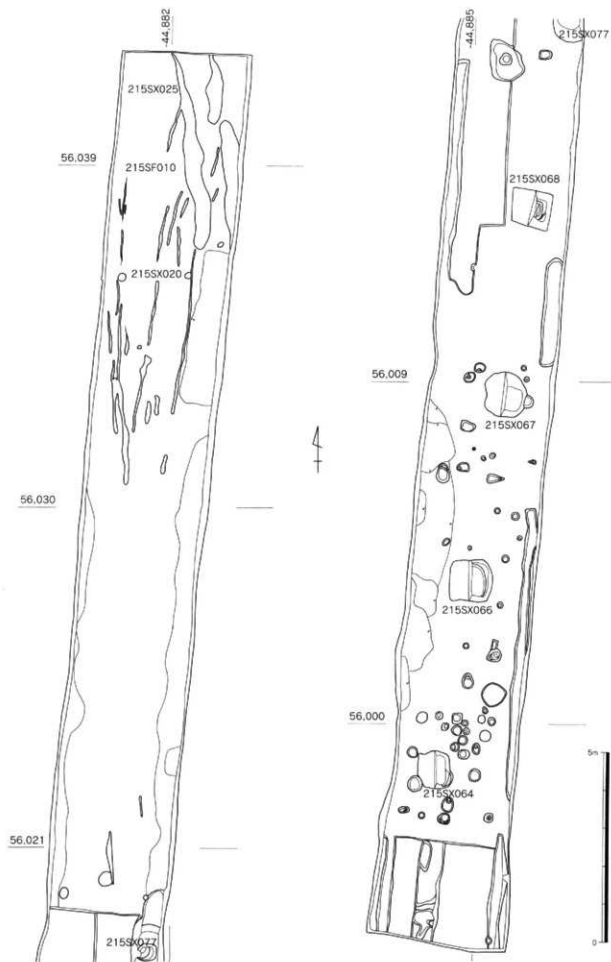


Fig. 31 第215次調査4区遺構全体図 (1/100)

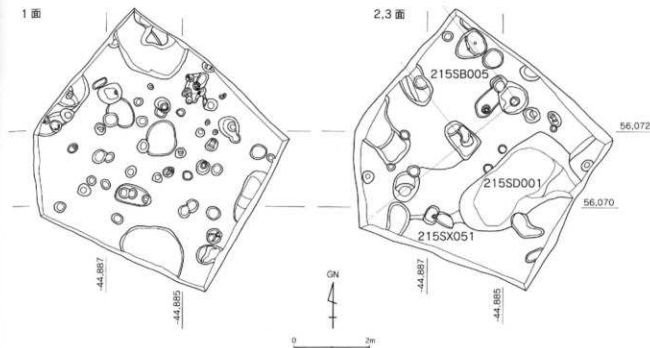


Fig. 32 第215次調査2区遺構全体図 (1/100)

下に近代の陶磁器片を含む赤褐色粘土層があり、石盤面下約20cmで暗黒色を呈する遺物包含層の上面(遺構面)が現れる。1区の社殿はこの黒色土面上に淡茶色土を盛り上げて根石などが置かれている(以下、Fig. 33)。

5区は調査区の南西にあたるが、灰色の表土下15cmで花崗岩の小礫が敷かれた状況が見られた、遺物包含層に覆われたものではなく近現代の所産であることが考えられる。

6区は調査区南側にある石灯籠の根元にあたる部分だが、地表下30cmまでの間は現代の遺物が含まれる灰色系の表土層である。

7区は4区中央西側にあり、地表下10cmのバラス層の下に灰褐色を呈す近現代の整地層があり、その下に厚さ25cmほどの平安時代の遺物を主体に持つ暗黄灰褐色土がある。これは4区で検出された硬化した道路面の基盤層になるが、近世までの時間的な幅を考慮する必要がある。その下には淡灰色の平安時代の遺物包含層がある。

8区は4区を挟みその東側にあたる場所で、地表下20cmまでは近現代のものと思われる灰色系の表土層があり、その下に厚さ15cmの橙色粘土の塊が入る整地層があり、その下に黒灰色、黒色の遺物包含層がある。黒色土中には大宰府編年VII期の土師器がまとめて検出された。

9区は8区のさらに東にあり、地表下30cmまでは現代の花崗岩風化土による整地土であった。

10区は本殿北側の浄妙尼の小祠前にある石台(太宰府天満宮の神幸式で使用する神輿の据え台)を撤去した箇所、中央に一辺が80cm、深さ10cmほどの黄褐色の土壌が入る浅いくぼみが見られた。

11区は10区の西の地点にあり、表土下に2cmほどの炭の堆積層があり、その下は灰褐色の硬化気味の土壌があり、路面である可能性がある。その下は厚さ5cm強の茶色、黄褐色の層が見られる。

12区は調査区北の道路際に位置し、深さ20cmで樹木の根が検出される間は近現代の瓦ほかのごみが出土した。

13区は社務所の北側に位置し、ここでも表土下に2~5cmほどの炭の堆積層があり、その下の灰褐

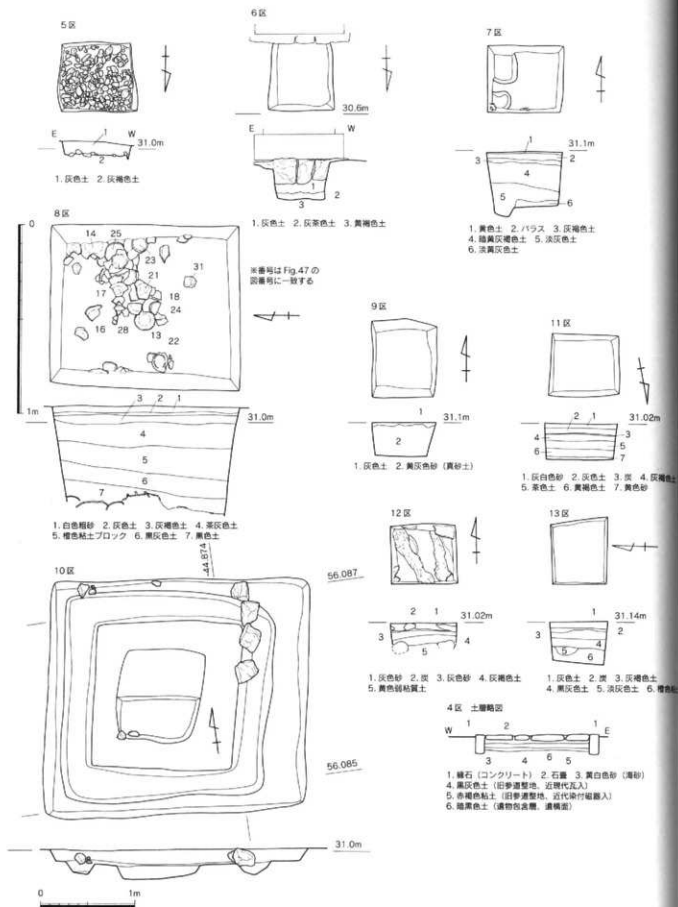


Fig. 33 第215次調査2～13区遺構全体図 (1/20、1/40)

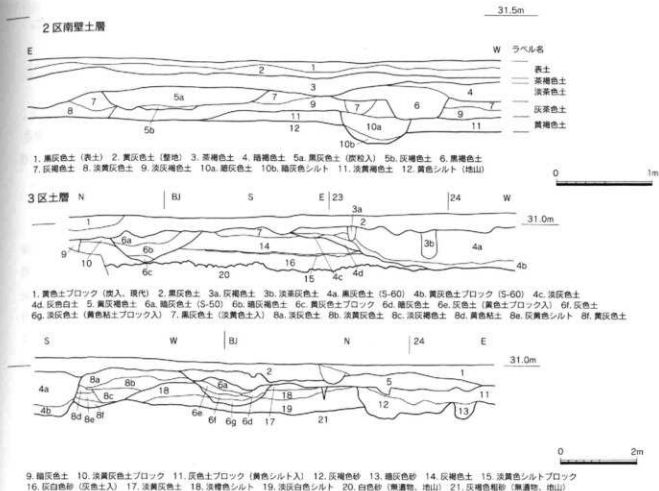


Fig. 34 第215次調査2・3区土層実測図 (1/40、1/80)

色土、黒灰色土までは近現代の遺物が見られる。最下層の橙色粘土には炭と小さな土器片が見られた。

(3) 検出遺構

掘立柱建物

215SB005 (Fig. 35)

2区の黄褐色土を除去した地山面で検出された遺構で、方位はN-52° 26' -Eを採る。東西1間以上、南北2間以上の建物である。柱穴は直径1~0.5mの平面形では不定形なもので、柱径は約15cm。深さは深いもので30cmを測る。柱間は南北の桁方向はa-b間は1.7m、b-c間は2.2m、a-e間は2.0mである。正方位に乗らないもので、層位からSD001(8世紀後半)よりも遡る時期に位置付けられる。

礎石建物

215SB100 (Fig. 36, Pla. 9)

1区にある現在まで使用されていた社殿を解体した直下にある建物の痕跡で、建物は南側の礎石の抜き跡と思われる窪みから構成される南棟と、帯状の矩形に置かれた礎石群からなる北棟、それを繋ぐ間の3つから構成されている。南棟は拝殿、北棟は本殿に相当する。方位はN-4° 54' -Eと若干東に振れた方位を採る。南棟は東西9.28m、南北8.6m、北棟は東西11.6m、南北14.3m、それを繋ぐ間は東西2.6m、南北2.6mを測る。南棟は9つの礎石の据えた痕跡と考えられる窪みがあり、窪みには灰色~茶色のぼさぼさした土壌と小礫が見られた。深さは15cm程度で中央が窪む傾向がある。人為的・計画的に掘削されたようには見えない。北棟は東西の側面には溝SD117、118が掘られ、その上間を詰めて方形の花崗岩が並べられ、北側が東側からSD118がF字に2か所で曲がり、北端は東縁とつながるようになるが、石は飛び石状に置かれている。

溝

215SD001 (Fig. 38)

2区で検出された遺構である。南西から北東に傾斜する幅2.6m、深さ80cmの溝状を呈す。層は遺物が散在する茶褐色土層下に遺物の少ない淡茶色土と地山の黄色土ブロックを含む層があり、その下の地山上に炭を含む黒灰色土層が流れ込むような状態で堆積している。

215SD050、060 (Fig. 34・49, Pla. 10)

3区で検出された東西方向の溝状遺構である。遺構そのものは楠木の掘り取りで調査できなかったが、3区の壁面の観察により壁面の東西で痕跡が確認された。遺構は表土である黒灰色土を除去してすぐに確認できる層位にあり、北側の215SD050は幅1.7m、深さ60cm、215SD060は深さ80cmを測る。2本の溝に挟まれる幅は約2mになる。位置的には井上信正が想定する大宰府条坊案の11坊路想定位置に合致する。

215SD117、118 (Fig. 36)

1区のSB100北棟の東西で検出された溝である。幅は60cmで深さは

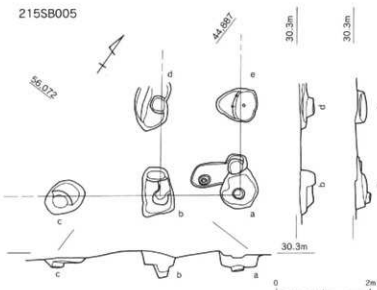


Fig. 35 215SB005 遺構実測図 (1/80)

215SB100

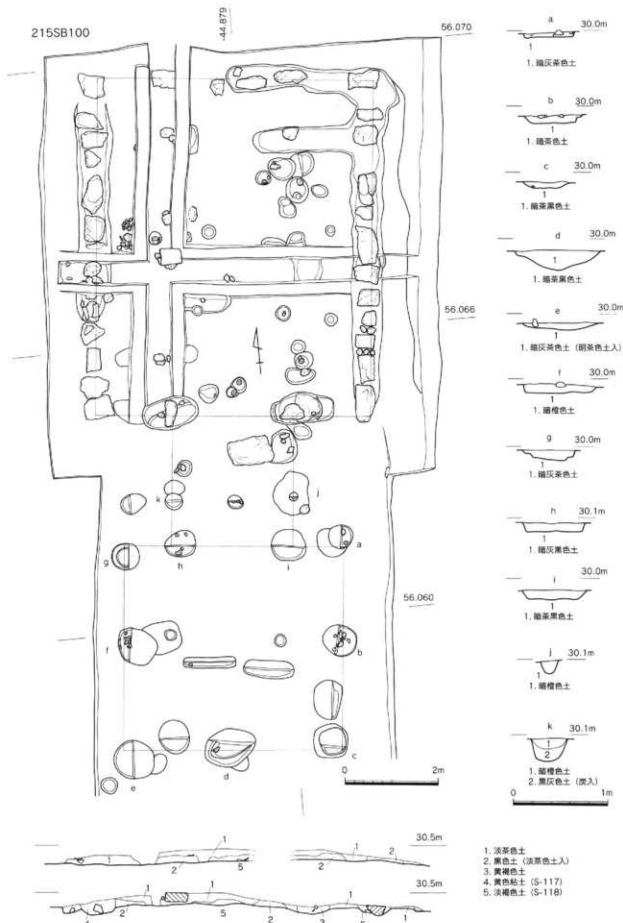


Fig. 36 215SB100 遺構実測図 (1/40, 1/80)

30cmほど。礎石を据えるために掘削された溝である。西側のSD117は南側で自然になくなっている。

道路状遺構ほか

215SF010、SX020、SX025 (Fig. 37、Pl. 3)

4区の北側で検出された帯状の硬化面群であり、幅約10cmの細いものをSX020とし、幅約40cmの幅のあるものをSX025とし、これらが存在する箇所を総括してSF010の道路とした。工事側との協議で掘り下げが叶わなかったことから断面の情報が得られていないが、SX020は暗黒色の遺物包含層上面に灰白色を主体とする粗い砂を含む土壌が面に押し込まれたように残されたもので、1mの間隔で並走する形状が見られる。未報告であるが同様の事例が条坊273次調査における右郭3坊路の路面上で牛の足跡と共に同じ遺構が確認され、数条のものが幅1.2～1.4mの間隔で平行することから車輪の轍痕跡と判断されている。このことから本事例もそれに同じものと考えられる。幅の広いSX025は人による通行痕跡のパターンと合致している(『古代道路の構造』2001山村信榮『古代交通研究』10)。

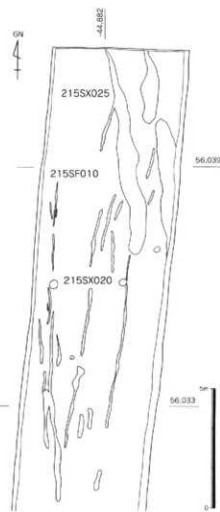


Fig. 37 215SF010・SX020・025 遺構実測図 (1/160)

その他の遺構

215SX051 (Fig. 39)

2区の地山面で検出された遺構で、長さ1.1m以上、幅70cmを測る楕円形を呈している。地山の黄色シルトを主体とする黄色い土壌が、炭層を挟んで流れ込んだように堆積する。

215SX064 (Fig. 39)

4区の南端で検出された幅1mほど、深さ1mの穴で、黄色のブロック土と礫まじりの土壌で埋められた遺構である。

215SX066 (Fig. 39)

4区の南側で検出された幅1mほど、深さ90cmの平面形が隅丸方形を呈す穴で、SX064同様に黄色のブロック土と礫まじりの土壌で埋められた遺構である。

215SX067 (Fig. 39)

4区のSX066の北側で検出された幅1mほど、深さ90cmの平面形が楕円形と隅丸方形の中間的な形状を呈す穴で、SX064、066同様に黄色のブロック土と礫まじりの土壌で埋められた遺構である。

215SX068 (Fig. 39)

215SD001

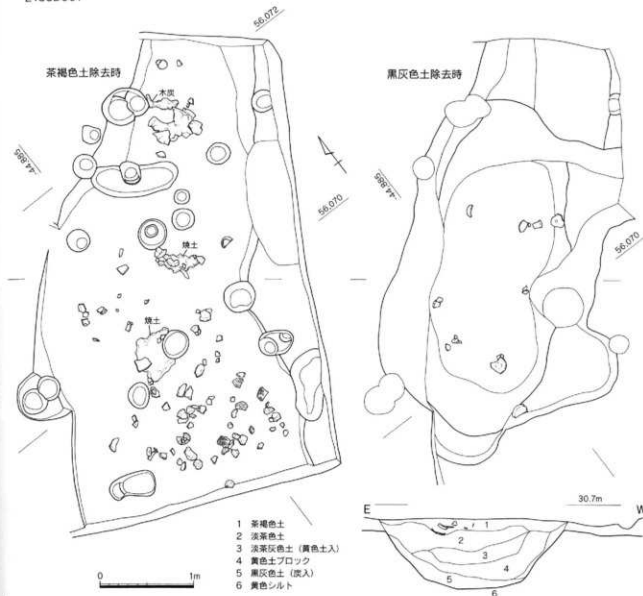


Fig. 38 215SD001 遺構実測図 (1/80)

4区のSX066の北側で検出された幅1mほど、深さ70cmの平面形が隅丸方形を呈す穴で、黄色のブロック土と礫まじりの土壌で埋められた遺構である。底の中央が先すぼまりになってやや窪んでいる。これらSX064、066、067、068は参道中央部に5mごとの一定間隔で列状にあるため、有機的な関係があると考えられる。しかし、その方位は参道に対してやや東に振れており、従って現在の社殿正面の正中のラインには乗らないため性格は類推しにくい。SX064からは近世以降の国産陶器の破片が出ており、江戸期以降の所産と考えられる。

215SX077 (Fig. 39)

4区の中央東側で検出された長さ2.6m、幅1mほど、深さ80cmの平面形が長楕円形を呈すつまり状遺構で、近代までの遺物が出土している。

(4) 出土遺物

溝

215SD001 黒灰色土出土遺物 (Fig. 40、Pl. 22)

須石器

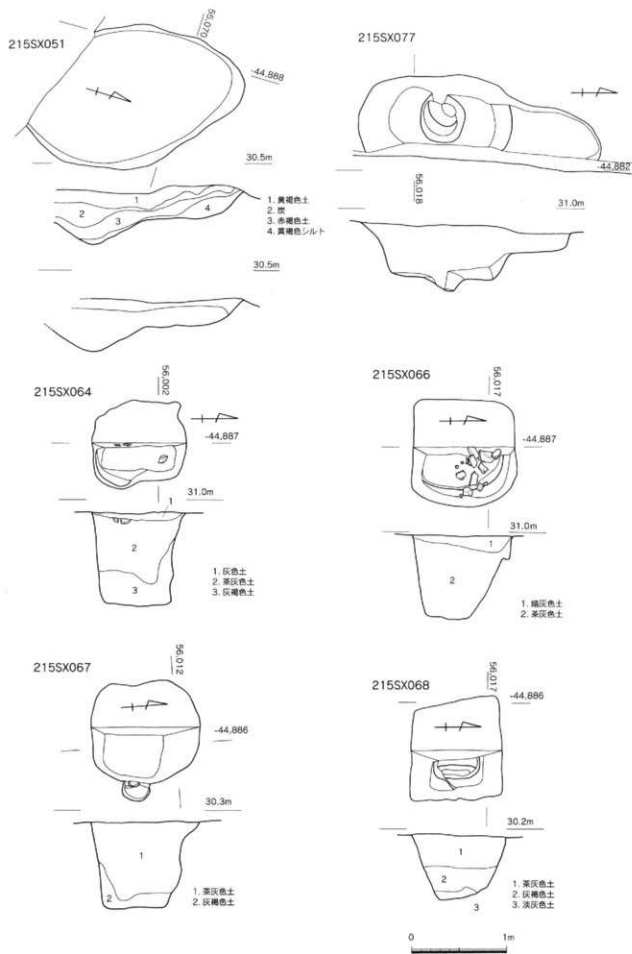


Fig. 39 215SX051・064・066・067・068・077 遺構実測図 (1/40)

- 环 a (1) 淡灰色を呈し硬質な胎土を持ち、口径 14.2cm、器高 3.4cm、底径 9.2cm に復元される。
- 环 c (2, 3) 灰色を呈し硬質な胎土を持ち、方形を呈す高台は体部内側に付けられる。2 は口径 13cm、器高 3.7cm、底径 7.6cm に、3 は底径 9.2cm に復元される。
- 土師器
- 蓋 c (4) 中央が若干窪む丈の高いつまみを有す。明褐色を呈す。蓋でも大型のものか。
- 环 c (5) やや外に張り出す高台を持つ。調整は不明。明褐色を呈す。
- 环 a × 环 d (6) 丸みを持つ体部下位の部分。調整は不明。明褐色を呈す。
- 甕 (7) 内面がきつく屈曲して開く形状を呈す。淡褐色を呈す。
- 石製品
- 丸石 (8) 緑色の楕円形を呈すもので、墓石などの用途の可能性がある。長辺 1.7cm、短辺 1.4cm、厚さ 0.5cm を測る。

215SD001 淡茶灰色土出土遺物 (Fig. 40)

須恵器

- 高环 a (9) 口径が 20.4cm に復元される。焼成はやや軟質。内面に円を描く重ね焼きの痕跡がある。円面硯 (10) 底部の先端が靴先状に短く屈曲する形状で、縦方向の方形の透かしを有す。高さは 5.6cm が残る。灰色を呈し、焼成は硬質。

土師器

- 移動式竈 (11) 内面に粗い削りの跡を残るもので、竈の裾部の小片と思われる。橙色を呈す。

215SD001 淡茶色土出土遺物 (Fig. 40 ~ 42)

須恵器

- 坏蓋 c (12 ~ 14) 12, 13 は上部先端がやや突起し、14 は平坦な形状を呈すつまみを持つ坏蓋である。口縁端部の屈曲は弱く、天井部は回転ヘラ削りを施す。12 は口径が 13.6cm、器高 2.3cm、13 は口径 15.0cm、器高 2.9cm、14 は口径 20.4cm、器高 2.3cm を測る。淡灰色を呈し、焼成は 17 がやや軟質。
- 坏蓋 (15 ~ 18) 口縁端部の屈曲は弱く、天井部は回転ヘラ削りを施す。15 は口径が 11.2cm、器高 1.2cm、16 は口径が 12.7cm、器高 1.7cm、17 は口径が 13.4cm、器高 1.6cm、18 は口径が 19.8cm、器高 1.5cm を測る。焼成は硬質。

- 环 c (19 ~ 24) 平坦な底部から直線的に体部が開く形状を呈す。灰色を呈し焼成は硬質。20 だけは体部にやや丸みを帯び、焼成も極端に硬質で褐色味を帯びる。肥後産の製品か。19 は口径が 14.2cm、器高 3.8cm、底径 10.5cm、20 は底径 11cm、21 は底径 12cm、22 は底径 9cm、23 は底径 8.4cm、24 は底径 7.8cm を測る。

- 环 (25) 丸みを帯びた体部に短く外に屈曲する口縁端部を持つ。口径は 16.6cm に復元される。

- 皿 a (26) 平坦な底部から直線的に体部が開く形状を呈す。灰色を呈し焼成は硬質。

- 鉢 b (27, 28) 底の中央が接地側に突出する形状を持つ。外面は回転ヘラ削りによる調整が施される。焼成は硬質で、27 は底径が 10.7cm、28 は 11.3cm に復元される。小型の部類に属す。

- 壺 a (29) 球形の胴部の肩から口縁部にかけたの破片である。焼成は硬質。

- 壺 b (30) そろばん玉状の体部の上部に当たる。径は 17cm に復元される。焼成は硬質。

- 高环 a (32, 33) 口縁端部が短く上方に開く形状を呈し、32 は坏部の底面に回転ヘラ削りを施す。焼成は硬質。32 は口径 20.8cm、33 は口径 23cm、高さ 7.4cm を測る。

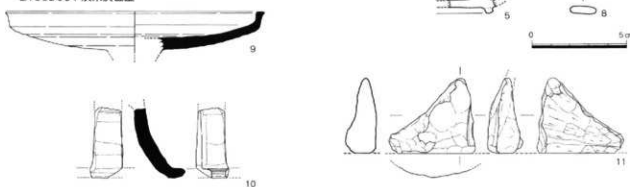
土師器

- 蓋 (34, 35) 体部は緩やかに反り、口縁端部は下方に若干突出する。内外面にミガキ a を施す。焼

215SD001 黒灰色土



215SD001 淡茶灰色土



215SD001 淡茶色土

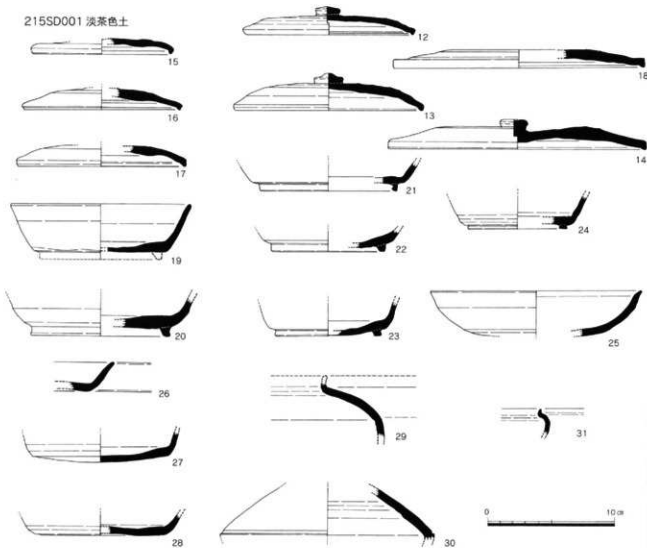


Fig. 40 215SD001 出土遺物実測図① (1/3, 8は1/2)

成は均一で良好、明橙色を呈す。34は口径14.6cm、器高2cm、35は口径15.6cm、器高2cmに復元される。

坏c (36) 体部はやや丸味を以て立ち上がり、高台は楕円がりの形状を成す。底径は9.8cmに復元される。焼成は良好で明橙色を呈す。

坏d (37, 38) 体部は緩やかに内に反りながら立ち上がる形状を成す。37は口径13.8cm、器高3cm、38は底径8cm、器高2.6cm。焼成は良好で明橙色を呈す。

鉢 (39) 体部が朝顔形に開き、口縁端部が上に短く屈曲する形状を呈す。外面にはミガキが見られる。焼成は口縁上方の一部が黒色化しているが、基本は橙色を呈す酸化焼成。

高坏 (40) ラップ状に開く脚の裾部で、端部が下に短く屈曲する。弧を描く手持ちのミガキを施す。焼成は良好で明橙色を呈す。

甕 (40～43) 鋤先状に屈曲する口縁を持ち、胴部内面は横ないし斜位のヘラケズリを施す。41は口径19.7cmで小型の部類に属す。

移動式甕 (44) 端部が幅広になり内面に粗い削りの跡を残るもので、甕の裾部の小片と思われる。橙色を呈す。

製塩土器

壺 (45, 46) カップ状の壺形になるもので、45は底部、46は浅いH型の口縁に近い胴部にあたる。内面に布の圧痕を残す。橙色を呈す。

甕 (47) 体部内面に横方向の太い条線を有す。明橙色を呈す。

瓦類

平瓦 (48) 側面がヘラケズリによって整形されたもので、長辺方向に調目のタタキ痕跡を残す。焼成は須恵質。

無文磚 (49) 立方形の角部分の小片。焼成は柔らかな瓦質を呈す。

土製品

土鏟 (50～52) 胴の中央が太くなる筒状のもので、焼成は52が灰色傾向の還元気味な様相で、他は橙色を呈す酸化焼成。50は長さ4.8cm、幅1.8cm、紐穴の径は0.5cm、51は長さ4.8cm、幅2.1cm、紐穴の径は0.4cm、52は長さ5.8cm、幅1.4cm、紐穴の径は0.3cmを測る。

焼土塊 (53, 54) 橙色を呈す焼けた土の塊で、53は長辺3.9cm、短辺2cm、厚さ1.8cm、54は長辺5.3cm、短辺4.5cm、厚さ3.4cmを測る。

石製品

砥石 (55) 黒色を呈す泥岩製で対馬産の可能性のある素材で、長さ9.1cm、幅4cm、厚さ3cmを測る。手持ちで使用した中砥と思われる。

丸石 (56) 白色の楕円形を呈すもので、碁石などの用途の可能性ある。長辺1.2cm、短辺1cm、厚さ0.5cmを測る。

板状不明製品 (57) 赤褐色と乳白色の色がマーブル状に見える石材を平面形は丸みのある板状に研ぎ出したもので長辺4.5cm、短辺4.4cm、厚さ1.4cmを測る。

215SD001 茶褐色土出土遺物 (Fig. 42, 43)

須恵器

坏蓋c (1) 柱状で丈高の幅を持ち、天井部はヘラ切りのままで口縁端部は短く屈曲する。大宰府編年111期の様相を持つ。口径14.6cm、器高2.9cmに復元される。

坏蓋 (2～6) 2は口縁内側に返りがあり、他は口縁端部が短く内側に屈曲する。5は口径が大きな大型に属す。焼成は硬質で灰色を呈す。5は白色気味でやや軟質である。6以外は天井部に回転ヘラケ

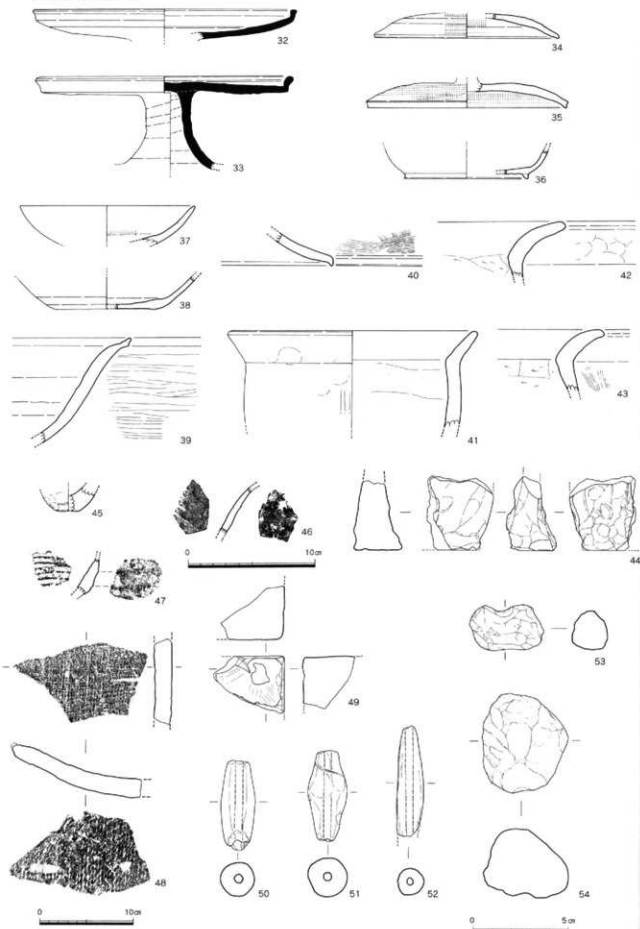


Fig. 41 215SD001 出土遺物実測図② (土製品・石製品は1/2、土器は1/3、瓦は1/4)

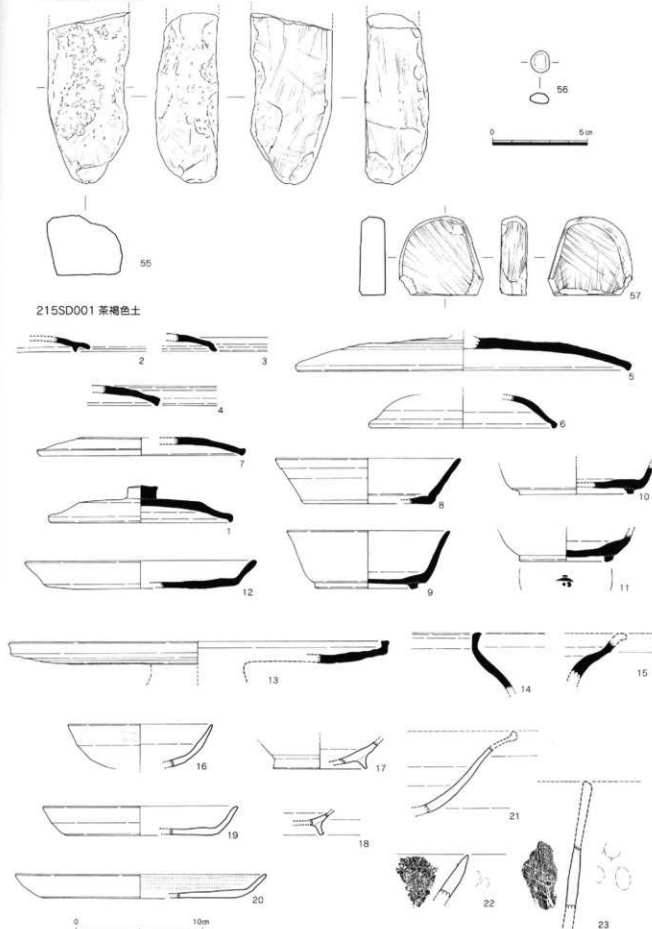


Fig. 42 215SD001 出土遺物実測図③ (石製品は1/2、土器は1/3)

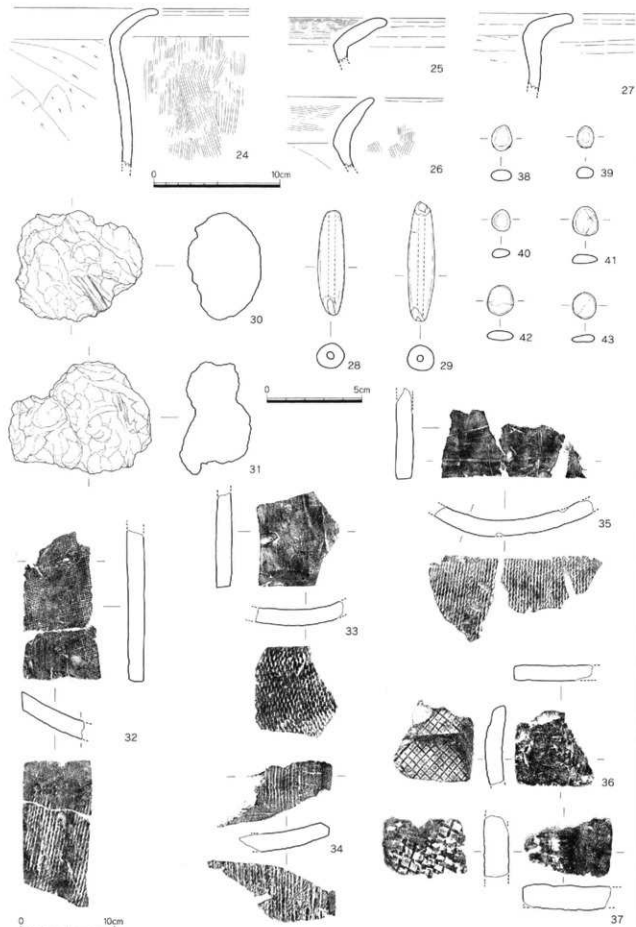


Fig. 43 215SD001 出土遺物実測図④ (土製品・石製品は1/2、土器は1/3、瓦は1/4)

ズリを施す。5の施される部位は天井部中央から外縁の中間付近のみに留まる。5の口径は26.4 cm、器高2.6 cm、6は口径14.8 cm、器高2.6 cm、7は口径16.4 cm、器高1.4 cmを測る。

坏a (8) 平坦な底部から直線的に外に開く体部を持つ。焼成は軟質で灰白色を呈す。口径14.6 cm、器高3.6 cm、底径10.2 cmを測る。体部の形状は牛頭産の通常のものとは異なり、筑後や肥後産の系統の可能性もある。

坏c (9~11) 平坦な底部からやや丸味をもって外に開く体部を持つ。灰色を呈し、焼成は11がやや軟質気味、11には底部外面に「六」と読める墨書が見られる。9は口径12.8 cm、器高4.6 cm、底径8.1 cm、10は底径9 cm、11は7.5 cmに復元される。

皿a (12) やや底部接地面が突出する形状のもので、外面に板状圧痕を残す。焼成はやや軟質で、口径18.2 cm、器高2.3 cm、底径15.4 cmを測る。

高坏a (13) 口縁端部がし字に屈曲する坏部で、焼成は硬質で灰色を呈す。口径は30 cmに復元される。

壺a (14) 撫で肩の胴部から緩やかに短く屈曲する口縁部を持つ。焼成は硬質で灰色を呈す。

壺e (15) 一端屈曲して朝顔形に開く口縁部を持つ。焼成は硬質。

土師器

小碗 (16) 体部下位は丸みを持つボウル状の形状を呈す。体部外面にはミガキが施される。口径11.3 cm、器高3.4 cmを測る。明橙色を呈す。

碗c (17, 18) 底部中央に向かって深くなり、高台は底部外側にあり裾広がり形状を成す。調整は摩耗して不明。17は底径7.4 cmに復元される。

皿a (19, 20) 平坦な底部と丸みのある体部を有す。焼成はやや軟質で19は口径15.4 cm、器高2.3 cm、底径12.2 cm、20は口径19.8 cm、器高1.9 cm、底径15.8 cmに復元される。

甕a (24~27) 口縁がく字に屈曲するもので、24は口縁がやや長い形状を持つ。胴部内面は横ないし斜位のヘラケズリを施す。茶褐色を呈す。

製塩土器

壺 (22, 23) 22は浅いII類の口縁部、23は深いI類の体部に分類される。内面に目の細かな布痕跡があり、茶褐色を呈す。

土製品

土鐘 (28, 29) 胴の中央が太くなる筒状のもので、焼成は29が灰色傾向の還元気味な様相で、28は褐色を呈す酸化焼成。28は長さ5.5 cm、幅1.4 cm、紐穴の径は0.4 cm、29は長さ5.8 cm、幅1.4 cm、紐穴の径は0.3 cmを測る。

焼土塊 (30, 31) 橙色を呈す焼けた土の塊で、藁などの植物繊維が混入されているササと呼ばれるものである。30は長辺6.8 cm、短辺5.9 cm、厚さ3.9 cm、31は長辺7.6 cm、短辺8 cm、厚さ5.9 cmを測る。

瓦類

平瓦 (32~37) 32~35は長辺方向に縄目のタタキを、36、37は格子目のタタキを施す。32、34、36は側辺がヘラにより削られ整形されている。焼成は33が堅い須臾質で他は軟質で37は土師質の酸化焼成。格子のタタキ目は正格子から斜格子に移行する段階の目の細かいもので、9世紀に位置付けられる。

215SD117 出土遺物 (Fig. 44, Pla. 22)

瓦類

平瓦 (1) 表面が幅広いナデで仕上げられたもので、焼成は軟質で黒色の燻しが不均一に及ぶ。厚さ1.6 cm。近世以降の所産。

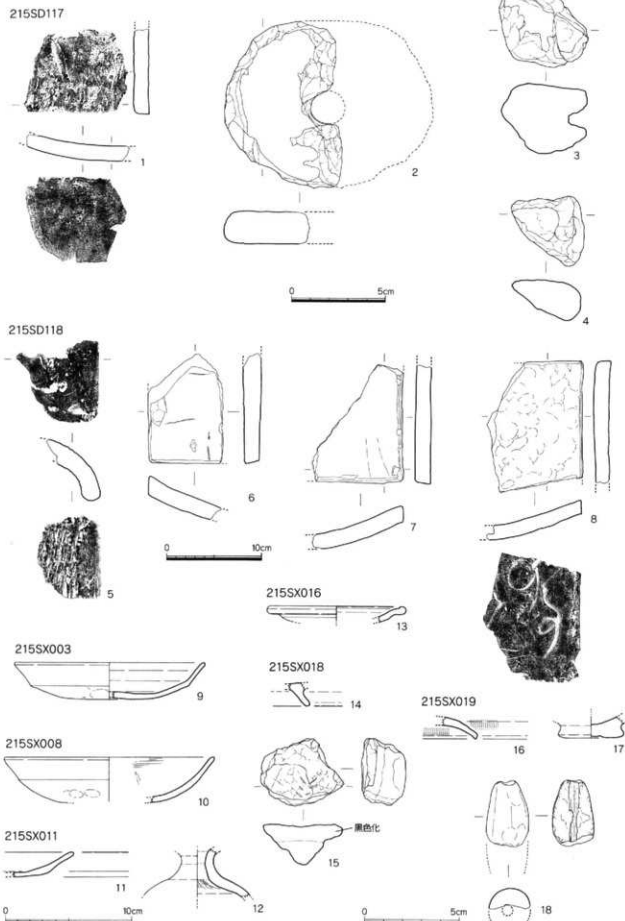


Fig. 44 215SD117・118, SX003・008・011・016・018・019 出土遺物実測図 (土製品・石製品は1/2, 土器は1/3, 瓦は1/4)

土製品

加工瓦製品 (2) ドーナツ状に打ち欠いた形状のもので、長辺は8.8cm、厚さ1.8cmを測る。焼成は良好で焼きにより表面が黒色化している。

漆喰塊 (3, 4) 白色の漆喰の塊で、3は長辺4.2cm、短辺4.5cm、厚さ3.6cm、4は長辺3.9cm、短辺3.7cm、厚さ1.7cmを測る。建物の屋根や壁の装飾材か。

215SD118 出土遺物 (Fig. 44, Pl. 23)

瓦類

丸瓦 (5) 端部を丸く収める形状で、内面には縄の押圧痕跡と「清兵衛」の文字の押印がある。長さ8.1cm、幅5.8cmが残存する。

平瓦 (6~8) 上面に軽い指による押圧痕、下面は幅広い工具によるナデが施される。焼成は軟質で8は黒色の焼きが不均一に及ぶ。厚さ1.6cmほど。8には上面にヘラ描きで「事」と読める草書が施される。

215SX003 出土遺物 (Fig. 44)

土師器

坏 a (9) 底部はヘラ切りが施され丸底気味になるもので、焼成は良好で淡黄褐色を呈し、底部外面は一部黒色化する。口径15cm、器高2.9cm、底径12.4cmに復元される。

215SX008 出土遺物 (Fig. 44)

土師器

丸底坏 a (10) 丸底気味のある体部を持つもので、焼成は良好で淡黄褐色を呈す。口径16.6cm、器高3.6cm以上、底径14.3cmに復元される。

215SX011 出土遺物 (Fig. 44)

土師器

坏 a (11) 器高2cmの底部は平坦な形状のもの。焼成は良好で淡黄褐色を呈す。

小壺 (12) 徳利形の高さ10cm前後の小型の壺で、頸部がロコロ整形によって絞られて細い形状となる。焼成は良好で淡黄褐色を呈す。

215SX016 出土遺物 (Fig. 44)

土師器

小皿 a2 (13) 口縁端部がて字状に屈曲する。淡黄褐色を呈す。口径は11cmに復元される。

215SX018 出土遺物 (Fig. 44)

土師器

椀 c (14) 細身で裾が開く形状の高台部分。白色気味の淡黄褐色を呈す。

土製品

焼土塊 (15) 面を持つ側が黒色に還元化しており炉壁の可能性が高い。長辺4.4cm、短辺3.6cm、厚さ2cmを測る。

215SX019 出土遺物 (Fig. 44)

土師器

坏蓋 (16) ゆるく内側に反る形状を持つ。内外面にミガキ a を施す。焼成は良好で橙色を呈す。

坏 (17) 底部が円柱状になる形状のもので、薩摩地域などからの外来の製品である。淡い橙色を呈す。底径は5.2cmに復元される。

土製品

土鏝 (18) 胴の中央が太くなる筒状のもので、残存する幅は2.8cmを測る。

215SX021 出土遺物 (Fig. 45)

土師器

坏 a (1) 底部接地面の中央がやや膨らむ形状のもので、底径は 6.8cm を測る。V 期以降の所産である。
 碗 c (2, 3) やや裾広がり形状の高台を持つもので、底径は両者とも 7.5cm に復元される。

緑釉陶器

皿 (4) 高台のないタイプの皿の底部片と思われる。胎土はきめが細かくやや黄味を帯びた白色粘土で、内面に淡緑色の釉が残る。洛北系の製品か、底径は 8.2cm に復元される。

瓦類

平瓦 (5, 6) 5 は縦方向の縄目が、6 は斜格子のタタキ目が確認される。焼成は 5 が軟質で 6 が硬い須恵質。

215SX026 出土遺物 (Fig. 45)

須恵器

坏蓋 (7) ゆるく内側に反る形状を持つ。調整は不明。焼成は良好で橙色を呈す。

甕 (8, 9) 格子目のタタキを有すもので、内面の充て具は 8 は同心円、9 は並行の刻みを施す。焼成は硬質で淡い灰色を呈すが、9 は褐色が被り、最終段階で酸化気味の焼成になっている。

土師器

甕 (10) ごく短く屈曲するく字形の口縁を持つ。内面は斜位のケズリを施す。

製塩土器

壺 (11) 筒状に深い I 類の体部で、内面に目の細かな布跡が残る。茶褐色を呈す。

215SX027 出土遺物 (Fig. 45)

石製品

丸石 (12) 黒色の泥岩で楕円形を呈すもので、碁石などの用途の可能性がある。長辺 1.9cm、短辺 1.6cm、厚さ 0.5cm を測る。

215SX029 出土遺物 (Fig. 45)

土師器

坏 (13) 糸切りを残す小さな底部から大きく開く体部を持つ。底径が 5.2cm に復元される。外來系の遺物である。

白磁

皿 (14) 灰白色の胎土にやや黄味を帯びた透明釉を施す。V-2 類に属す。

瓦類

平瓦 (15) 側面にヘラ削りと分割裁線を残すもので、格子に直線を組み合わせたタタキ目を有す。焼成は硬質な須恵質。灰色を呈す。10 世紀以降の所産である。

215SX031 出土遺物 (Fig. 45)

白磁

碗 (16) 小さな玉縁を有す。白色の胎土にやや緑色を帯びた透明釉を施す。II-1 類に属す。

瓦類

丸瓦 (19) 目の大きな格子のタタキ目を有す。焼成は軟質な瓦質。灰色を呈す。平安後期の所産である。

215SX036 出土遺物 (Fig. 45)

白磁

皿 (18) 口縁端部の上面に若干の平坦面がある。白色の胎土にやや緑味を帯びた透明釉を施す。V-2

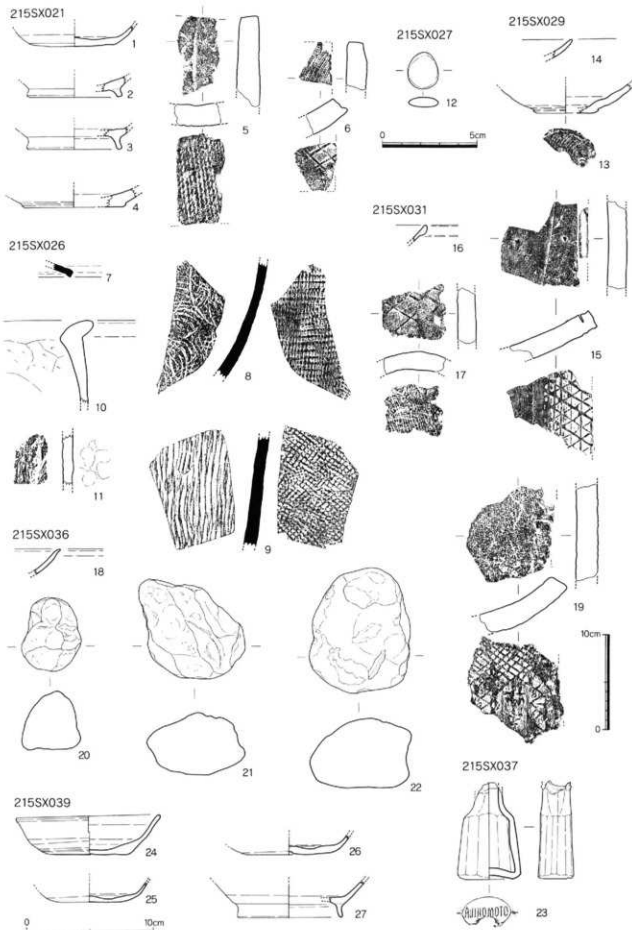


Fig. 45 215SX021・026・027・029・031・036・037・039 出土遺物実測図 (土製品・石製品は 1/2、土器は 1/3、瓦は 1/4)

類に属す。

瓦類

平瓦 (19) 側辺にヘラ削りと分割裁線を残すもので、目の小さな格子に「平井」の文字が彫られる。焼成は土師質。淡褐色を呈す。

土製品

焼土塊 (20～22) 繊維を含むスサと呼ばれるもので、淡い橙色を呈す。20 は長辺 3.9cm、短辺 3.2cm、厚さ 3.1cm、21 は長辺 5.6cm、短辺 5.2cm、厚さ 3.2cm、長辺 6.5cm、短辺 5.2cm、厚さ 3.7cmを測る。

215SX037 出土遺物 (Fig. 45)

ガラス製品

小瓶 (23) ボトル形の頸が細くなる形状で底部は楕円形を呈し「AJINOMOTO」の文字が浮き出る。調味料の小瓶である。

215SX038 出土遺物 (Fig. 46)

須恵器

坏蓋 (1) 口縁端部が短くつまみ出された形状を呈す。天井部はナデ調整。

土師器

坏 (2) 口縁端部が短くS字に屈曲し、大きく開く体部を持つ。明橙色を呈す。外来系の遺物である。

瓦類

平瓦 (3) 長辺に並行する細目のタタキを有すもので、側辺はヘラ削りにより整形されている。焼成は柔らかな瓦質を呈す。厚さは 1.5cm。

215SX039 出土遺物 (Fig. 45)

土師器

坏 a (24～26) 底部は 24 は平坦、他はやや丸みを帯びた形状を呈す。淡い茶褐色を呈す。24 は口径 11.4cm、器高 3cm、底径 6.4cm に復元される。25 は底径 8.2cm、26 は 7.6cm を測る。V 期の所産であろう。

坏 c (27) 平坦な底部に直立気味で細身の高台が延びる。底径は 8.2cm に復元される。

215SX041 出土遺物 (Fig. 46)

土師器

丸底坏 (4) 胴部下位で若干の屈曲があるもので、淡褐色を呈す。

黑色土器

坏 c (5) 緩やかな曲線を持つ体部に若干外に屈曲する口縁部を持つ。内面はナデによる整形である。灰褐色の胎土に内面は糠しによって黒色化する。口径 17cm、器高 6.3cm、底径 8cm に復元される。

215SX046 出土遺物 (Fig. 46)

石製品

丸石 (6) 緑色片岩製で楕円形を呈すもので、碁石などの用途の可能性ある。長辺 1.3cm、短辺 1cm、厚さ 0.5cm を測る。

215SX053 出土遺物 (Fig. 46)

須恵器

坏 c (7) 平坦な底部から直線的に開く体部を持つ。淡灰色を呈し、焼成は硬質。口径 12.6cm、器高 3.9cm、底径 8cm に復元される。

215SX067 出土遺物 (Fig. 46)

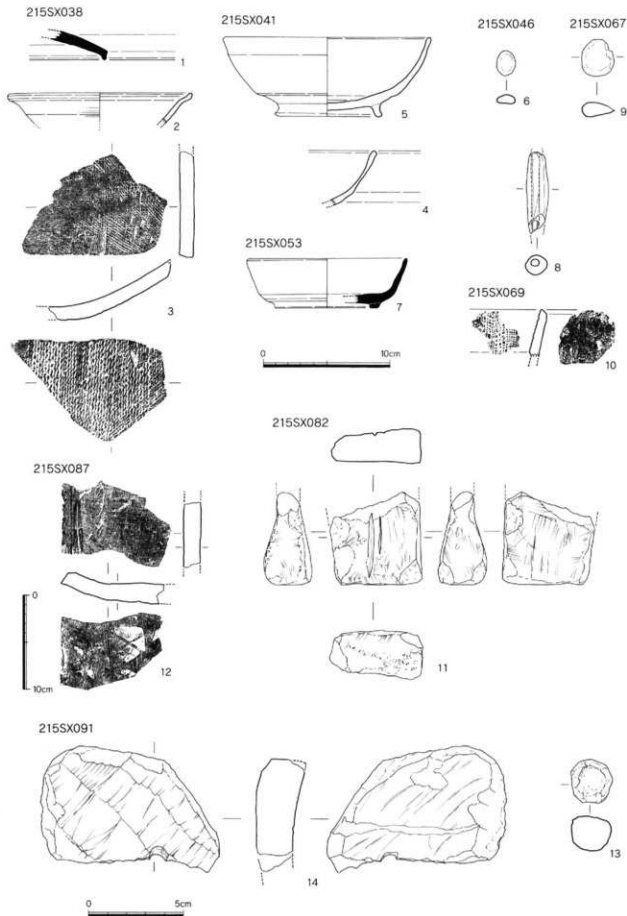


Fig. 46 215SX038・041・046・053・067・069・082・087・091 出土遺物実測図 (土製品・石製品は1/2、土器は1/3、瓦は1/4)

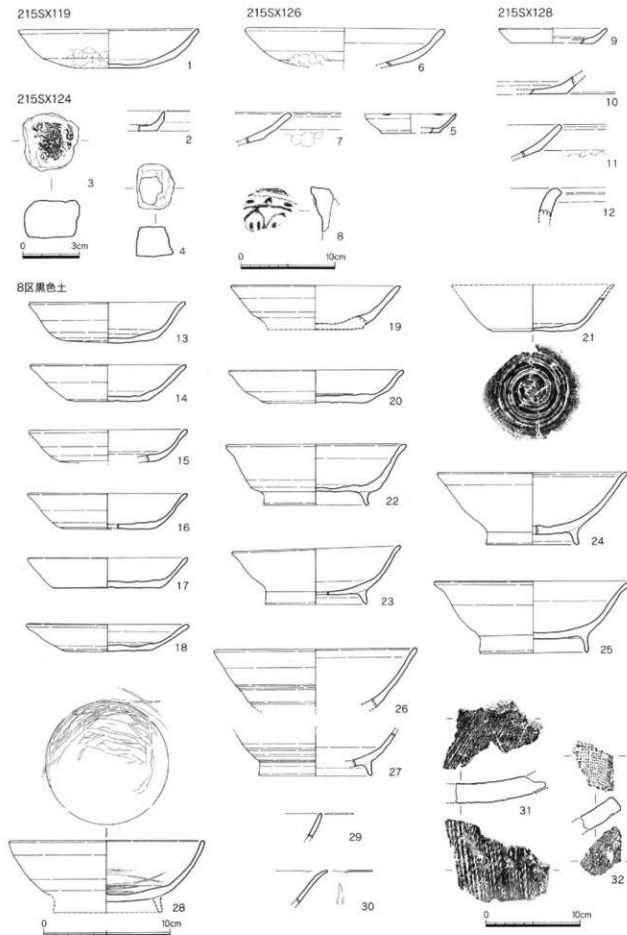


Fig. 47 215SX119・124・126・128・8区黒色土出土遺物実測図(3・4は1/2、瓦は1/4、その他1/3)

土製品

土鉢(8) 中央が膨らむ円筒形で淡茶褐色を呈す。長さ4.4cm以上、幅1.2cm、紐穴径は0.4cmを測る。

石製品

丸石(9) 緑色片岩製で楕円形を呈し、碁石などの用途の可能性がある。長辺1.9cm、短辺1.7cm、厚さ0.7cmを測る。

215SX069 出土遺物(Fig. 46)

製塩土器

壺(10) 筒状を呈すI類と思われ、内面にやや目の粗い布目を残す。

215SX082 出土遺物(Fig. 46)

石製品

砥石(11) 砂岩製の立方形のもので、筋状の切り込みがある面がある。対峙する2面の中央が極端に使い込まれ薄くなっている。手持ちの粗砥である。

215SX087 出土遺物(Fig. 46)

瓦類

平瓦(12) 側辺はへら削りによる丁寧な整形が施される。上面は目の細かな布目があり、下面には目の大きな格子目のタタキが施される。焼成は硬い須恵質を呈す。平安後期の所産か。

215SX091 出土遺物(Fig. 46)

土製品

瓦玉(13) 灰色の瓦質の瓦を打ち欠いたもので、長辺2.8cm、短辺2.3cm、厚さ2.1cmを測る。

石製品

不明滑石製品(14) 石鍋の底部付近の破砕した破片の小口を整形して板状にしたもので、用途は不明。

215SX119 出土遺物(Fig. 47)

土師器

丸底坏a(1) 底部と胴部の境の屈曲を若干残すもので、境付近には指頭痕が連続して残されている。白色気味の褐色を呈す。口径14.2cm、器高3.1cmに復元される。

215SX124 出土遺物(Fig. 47)

土師器

小皿a(1) 口縁が短く上方に引き出される形状を持つ。白色気味の褐色を呈す。器高1.6cmを測る。

土製品

瓦玉(3, 4) 3は灰色の須恵質の瓦を打ち欠いたもので、長辺3cm、短辺3cm、厚さ2cmを測る。4は灰色ないし黒色を呈す瓦質の瓦を打ち欠いたもので、長辺2.5cm、短辺2cm、厚さ1.6cmを測る。

215SX126 出土遺物(Fig. 47)

土師器

小皿a(5) 平坦な底部から横に開く口縁部を有す。口径7.2cm、器高1.5cm、底径4.6cmを測る。白色気味の褐色を呈す。

丸底坏a(6, 7) 底部と胴部の境の屈曲を若干残すもので、境付近には指頭痕が連続して残されている。白色気味の褐色を呈す。口径15.8cm、器高3cmを測る。7は器高2.4cm以上。

瓦類

軒丸瓦(8) 團縁に朱文帯、中房に複子葉の連弁を線で描く。間弁はなく、九州歴史資料館分類の170BCに該当する。10世紀以降の所産か。

215SX128 出土遺物 (Fig. 47)

土師器

小皿 a (9) 平坦な底部から横に開く口縁部を有す。白色気味の褐色を呈す。口径 8.6cm、器高 1.2cm、底径 6.4cm を測る。

坏 a (10) 糸切りの底部を持ち、白色気味の褐色を呈す。

丸底坏 (11) 体部と胴部の境に屈曲を残す。内面はなめらかな成形となる。白色気味の褐色を呈す。

甕 (12) 鋤先状の口縁端部片で淡褐色を呈す。

8区黒色土出土遺物 (Fig. 47, Pla. 23)

土師器

坏 a (13~21) やや接地面に対して膨らみ気味の底部に、若干内に反る体部を有す。底部は回転ヘラ切りの痕跡が残るが、21 には螺旋状の条線が見られる。全体に明るい褐色を呈す。18 のみ灰褐色を呈す。法量は 13 が器高 12.3cm、器高 3.3cm、底径 8cm、14 は器高 12.4cm、器高 2.9cm、底径 6.6cm、15 は器高 12.5cm、器高 2.6cm、底径 7.8cm、16 は器高 12.6cm、器高 2.4cm、底径 7.6cm、17 は器高 12.6cm、器高 2.4cm、底径 8.6cm、18 は器高 12.8cm、器高 2.2cm、底径 7.4cm、19 は器高 13.4cm、器高 3.4cm、20 は器高 13.8cm、器高 2.6cm、底径 8.7cm、21 は器高 12.8cm、器高 2.7cm、底径 7.2cm に復元される。

碗 c (22~27) 坏 a の形状に高台を付けた 22 や 23 と器の高い深い形状の 24~27 の形状の 2 者がある。26 と 27 は体部外面下半にナゲの条線を残す。焼成は酸化雰囲気では淡い肌色を呈す。法量は 22 が器高 14.2cm、器高 4.8cm、底径 8.3cm、23 は器高 13.3cm、器高 3.4cm、底径 8.1cm、24 は器高 15cm、器高 5.7cm、底径 7.3cm、25 は器高 15.5cm、器高 5.7cm、底径 8.6cm、26 は口径 16cm、27 は底径 9cm に復元される。

黒色土器 A 類

碗 c (28) 底も丸く窪底部に高台が付くもので、内面には手持ちのミガキが施される。淡褐色を呈し、内面は横しにより光沢のある黒色を呈す。口径 15.4cm、器高 4.8cm 以上になる。

越州窯系青磁

碗 (29, 30) 29 はやや内反り気味に立ち上がる口縁端部で、精製な 1 類に属す。30 は押圧による縦線が入り I-b 類に属す。淡灰色の硬い胎土にオリーブ色の釉が施される。

瓦類

平瓦 (31, 32) 31 は縄目のタタキを有す。厚さ 2.2cm で薄い傾向にある焼成は黒灰色を呈す瓦質。32 は小格子のタタキを有す。焼成は白灰色を呈す瓦質である。

表土出土遺物 (Fig. 48, Pla. 23)

縄文土器

深鉢 (1) 胴部の上位で屈曲する体部を持つ。外面は二枚貝の腹縁でなでられた条線が横方向に残る。粗製の深鉢で晩期中葉頃のものか。

越州窯系青磁

皿 (2) 裾広がりの高台に大きく開く体部を持つ。内面にはヘラ描きで花卉が描かれる。淡灰色の硬い精緻な胎土に白濁する灰緑色の釉が施される。

碗 (3, 4) 削り出しによる青の低い輪状高台を持ち、口縁端部が短く反る形状を成す。内底部に 2 か所以上の目跡を残す。淡灰色の緻密で硬質な胎土にオリーブ色の釉を施す。3 は釉が高台にまで及ぶ。裝飾のない I-2 類に属す。3 は口径 14.6cm、器高 5.2cm、底径 6.1cm に復元される。

表土

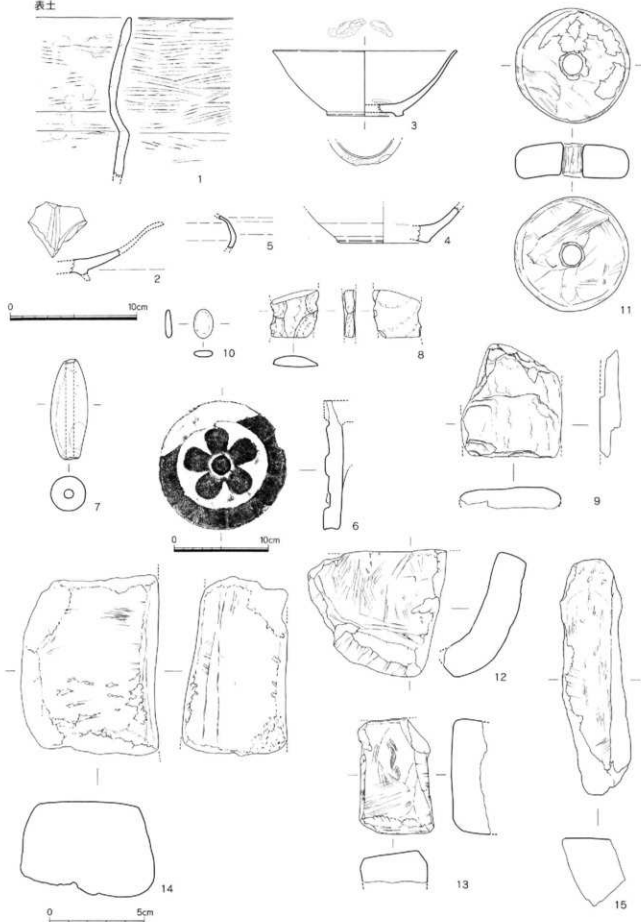


Fig. 48 第215次調査表土出土遺物実測図 (7~15は1/2, 1~5は1/3, 6は1/4)

小壺 (5) 蕪形の膨らんだ体部の小片で、淡灰色の緻密で硬質な胎土にオリーブ色の釉を施す精製品である。

瓦類

軒丸瓦 (6) 幅2cmの平坦な周縁帯の中に5弁の梅鉢文が陽刻される。焼成は良好で焼しによる黒色化が顕著である。径は13.6cmになる。市内では太宰府天満宮周辺と観世音寺境内などで出土し、同范と思われるものが、馬場遺跡6次調査の灰茶色砂層で出土しており、19世紀後半以降の所産のものである。

土製品

土鉢 (7) 中央が膨らむ円筒形で淡褐色を呈す。長さ4.2cm以上、幅2cm、紐穴径は0.4cmを測る。

石製品

二次加工のある剥片 (8) 古銅輝石安山岩の縦長剥片の片面の両側面を剥離して調整を行っている。刃物の可能性もある。縄文時代後期以降のものか。

石鏃 (9) 緑色片岩製で短冊形を呈す。縦方向に欠折している。長さ5.8cm、幅5.3cm、厚さ1.2cmを測る。縄文時代後期以降のものか。

丸石 (10) 緑色片岩製で楕円形を呈すもので、基石などの用途の可能性がある。長辺1.5cm、短辺1cm、厚さ0.3cmを測る。

紡錘車 (11) 断面形状が反ることから、滑石の石鏃を再加工したものと考えられ、直径6cm、中央の穴径1cmのドーナツ状を呈す。

不明滑石製品 (12, 13) 12は石鏃の底部付近の破砕した破片の小口を整形して板状にしたもので、用途は不明。長辺7.7cm、短辺6.6cm、厚さ1.9cmを測る。13も滑石製品で立方形を呈す。長辺5.1cm、短辺3.6cm、厚さ1.2cmを測る。

砥石 (14, 15) 14は黄色みを帯びる白色のざらざらした天草産の砂岩製のもので、方柱状を呈し片方が薄くなっている。長さ9.5cm、幅7.2cm、厚さ5.5cmを測る。15は白灰色の光沢のある片岩製で方柱状を呈し、長さ12.5cm、幅3.3cm、厚さ3.5cmを測る。

(5) 小結

今回の調査は工事に合わせた確認作業が主となったため、個別の遺構の性格や時期の確定には不十分が残るが、条坊城においては広大な複社域内での埋蔵文化財の疎相の片鱗が見えたものと思われる。

現在まで使用されてきた社殿は、直接的には江戸後期以降と考えられる遺物を含む1区SD17、118上に構築されており、建物は当然それ以降のものである。また、太宰府天満宮周辺の瓦建物に多用されている江戸後期タイプの梅鉢文を有す軒瓦が所要されていることから(表土出土)、建物意匠も天満宮と共通するものであったと想像される。建物は暗黒色の平安時代以降の遺物を包含する層の上に構築されており、4区に於いては轆を含む通行痕跡 SX020、025があることから、江戸期の社殿に先行する時期に古い社殿などの施設があった可能性が指摘される。

現在の参道周辺では8区のように複数の人為的な整地層が重なって形成され、8世紀後半(2区SD001)や9世紀前半(8区黒色土)には遺物の多量廃棄も垣間見られることから、奈良時代後半から平安時代にかけては安定した生活空間としての土地利用があったことが判断される。

敷地内北西隅で昭和58(1983)年に行われた条坊跡第43次調査では正方位に制約を受けた7世紀後半から8世紀の掘立柱建物や井戸が検出されており(「大宰府条坊跡X」1998年太宰府市教育委員会)、条坊内の朱雀大路に面した土地での計画的な居宅地としての利用が図られていたことが垣間見られる。3区においては、条坊11条道路の側溝の可能性のある溝SD050とSD060があり、奈良時代以降のある時点で条坊区画が敷設されていた可能性が高まった。この時期には越州窯系青磁の小型品など希少陶

磁器も出土しており、周辺遺跡に対しての優位性を示している。

条坊第43次調査と同様に、今回の調査でも遺物には11世紀後半から12世紀に至るものも多く出土しており、平安後期に再度利用のピークがあったことが知られる。

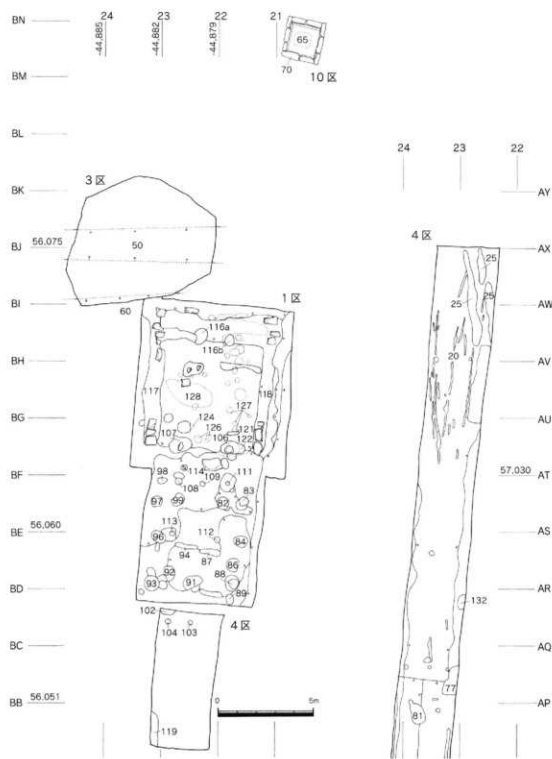


Fig. 49 第215次調査1・3・4・10区遺構略測図 (1/200)

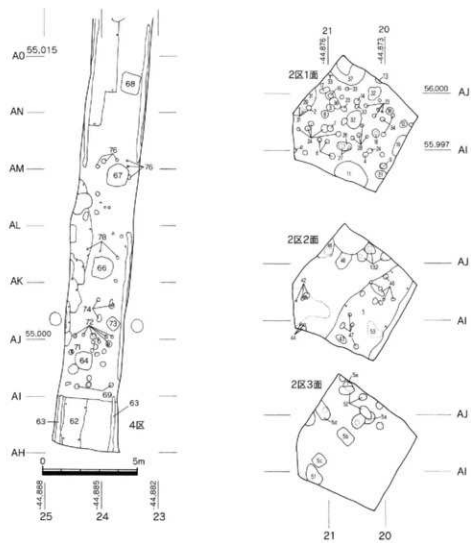


Fig. 50 第215次調査 2・4区遺構略図 (1/200)

表 10-1 第215次調査 遺構一覧表①

S.番号	遺構番号	種別	遺構切り合い等	時期	調査区	地区
1	215SD001	溝	1→43,46,47,53	8世紀後半	2区-2画	A120
2		ピット	2→29		2区-1画	A121
3	215SX003	ピット		11世紀後半~	2区-1画	A120
4		ピット			2区	A120
5	215SB005	掘立柱建物	5→52		2区-3画	A120
6		ピット群			2区-1画	A120
7		ピット			2区-2画	A120
8	215SX008	ピット		11世紀後半~	2区-1画	A121
9		ピット			2区-2画	AH20
10	215SF010	道路状遺構			4区	AW22
11	215SX011	たまり状		12世紀~	2区-1画	AH20
12		ピット			2区-1画	A119
13		ピット			2区-1画	AJ20
14		ピット			2区-1画	A120
16	215SX016	ピット		11世紀後半~	2区-1画	A120
17		たまり状			2区-1画	AJ21
18	215SX018	ピット		9世紀~	2区-2画	A120
19	215SX019	たまり状		9世紀~	2区-1画	A119
20	215SX020	敷板跡			4区	AW22
21	215SX021	ピット		9世紀~	2区-1画	AH20
22		たまり状			2区-1画	A120
23		ピット群			2区-2画	A120
24		ピット群			2区-1画	A120-21
25		帯状硬化面			4区	AW22
26	215SX026	たまり状		8世紀後半~	2区	AH23
27	215SX027	ピット群	27→26	8世紀~	2区	A120
28		ピット群			2区-1画	A120
29	215SX029	たまり状	29→2	12世紀~	2区-1画	A121
31	215SX031	ピット群	31→29	11世紀~	2区	A121
32		たまり状			2区-1画	A120
33		ピット群			2区	A120
34		ピット群			2区-1画	A120
36	215SX036	ピット	36→3	11世紀~	2区-1画	A120
37	215SX037	たまり状		現代	2区	AJ20
38	215SX038	ピット	38→34	8世紀中頃~	2区-1画	A119
39	215SX039	たまり状		8世紀後半~	2区-2画	A121
41	215SX041	ピット		10世紀~	2区-1画	AH21
42		ピット群			2区-2画	A121
43		ピット			2区	AH20
44		ピット群			2区	AH21
46		ピット群			2区	A120
47		ピット群			2区	A120
48		たまり状			2区-2画	AJ20
49		たまり状			2区-2画	AJ20
50		溝			3区	BI23
51	215SX051	土坑		8世紀~	2区-2画	A121
52		ピット群			2区-2画	AJ20
53		たまり状			2区-2画	AH20
54		ピット群			2区-2画	A120
60		溝			3区	BI23
63		縁石欄方			4区	AH24
64	215SX064	ピット			4区	AJ24
65		土坑			10区	BH20
66	215SX066	ピット		12世紀~	4区	AK24
67	215SX067	ピット		近現代	4区	AL23
68	215SX068	ピット			4区	AN23
69	215SX069	ピット群			4区	A124
70		石組		近現代	10区	BM20
71		ピット			4区	A124
72		ピット群			4区	AJ24
73		ピット群			4区	AJ23
74		ピット群			4区	AJ24
76		ピット群	76→67		4区	AH23
77	215SX077	たまり状		12世紀~	4区	AP23
78		ピット群			4区	AK24
79		ピット群			7区	

表 12-2 第 215 次調査 出土遺物一覽表②

S-38(2)(5)	銅 意 銅 蓋3
上 脚 部 銅 片a, Ifa, Ifc3, Ifd (未分類, 別表第)	
瓦 類 平瓦(瓦質, 横目切)	
S-39(2)(5)	銅 意 銅 蓋c, Ifc3, 鏝
上 脚 部 銅 片a, Ifd, Ifc, 鏝	
S-41(2)(5)	土 脚 部 銅 片a, 瓦紋坪×坪
瓦 類 色土 磨入 鏝	
S-42(2)(5)	上 脚 部 銅 片a?
S-43(2)(5)	銅 意 銅 鏝
上 脚 部 銅 片a, 瓦紋坪a, 小皿a	
瓦 類 色土 磨入 鏝c	
白 磁 類 皿(1)	
S-44(2)(5)	銅 意 銅 蓋3, 鏝?
上 脚 部 銅 片a, 鏝?	
S-46(2)(5)	銅 意 銅 蓋3, Ifa, Ifc1, Ifc3, Ifd, 磨子?
上 脚 部 銅 片c3, 小鏝, 磨子	
瓦 類 色土 磨入 鏝(1)	
S-47(2)(5)	銅 意 銅 蓋3, 小坪c3, Ifc3
上 脚 部 銅 蓋3, 蓋c, Ifd(未分類), 皿×鉢	
S-48	銅 意 銅 坪? (未分類), Ifc3, 鏝
上 脚 部 銅 鏝	
S-49(2)(5)	銅 意 銅 蓋c3
上 脚 部 銅 片c3, Ifd, 小皿坪(内磨)	
S-51(2)(5)	銅 意 銅 坪
上 脚 部 銅 片a, 皿, 鏝?	
土 脚 部 銅 土 磨	
S-52(2)(5)	銅 意 銅 蓋3, 鏝, 鉢b
銅 意 銅 鏝	
土 脚 部 銅 土 磨	
S-53(2)(5)	銅 意 銅 蓋3, Ifc3
上 脚 部 銅 鏝a	
S-62(4)(5)	銅 意 銅 鏝, 磨類
瓦 類 色土 磨入 鏝	
瓦 類 瓦瓦(土脚質, 磨子?)	
S-63(4)(5)	土 脚 部 銅 片
瓦 類 瓦瓦(土脚質, 無文)	
その他 磁 コンタリート	
S-64 黒灰土(4)(5)	銅 意 銅 坪c3
土 脚 部 銅 鏝c, 移動式カマ?	
越州系青磁 類-皿(1)	
国産陶器 大甕×土甕×土甕	
瓦 類 平瓦(瓦質, 横目切), (瓦質, 無文), 瓦瓦(土脚質, 無文)	
金属 質 品 鉄塊	
S-64(4)(5)	銅 意 銅 蓋3
上 脚 部 銅 片a	
瓦 類 平瓦(瓦質, 無文?)	
金属 質 品 鉄塊	
S-65(10)(5)	銅 意 銅 鏝
土 脚 部 銅 鏝	
白 磁 類 鉢(1)	
瓦 類 磁 瓦(灰代)	
S-66	銅 意 銅 蓋3, 鏝
上 脚 部 銅 片a(へ?), 瓦紋坪, 鏝c, 鏝	
瓦 類 色土 磨入 破片?	
越州系青磁 類-皿(1)	
国産陶器 甕 破片(1)	
瓦 類 瓦瓦(瓦質, 無文)	
金属 質 品 鐵片(1)	
国産系青磁 破片(1)	
S-65 黒灰土(4)	銅 意 銅 蓋3, 鏝
上 脚 部 銅 片a, Ifc, 鏝	
越州系青磁 類-皿(1)	
国産陶器 大甕×土甕×土甕	
瓦 類 平瓦(瓦質, 横目切), (瓦質, 無文), 瓦瓦(土脚質, 無文)	
金属 質 品 鉄塊	
S-67	銅 意 銅 蓋3, 鏝
上 脚 部 銅 片a, Ifc, 鏝	
瓦 類 瓦瓦(土脚質, 無文), 平瓦(瓦質, 無文?)	
行 器 類 瓦石(磨石)	
土 脚 部 土 磨	
S-68(4)(5)	銅 意 銅 磨類
上 脚 部 銅 鏝, 磨類	
瓦 類 平瓦(瓦質, 無文)	
S-69(4)(5)	土 脚 部 銅 磨類?
瓦 類 瓦瓦(瓦質, 無文)	
越州系青磁 破片 (1)	
白 磁 類 瓦V形-2 (2)	
S-71(4)(5)	上 脚 部 銅 破片
S-72(4)(5)	銅 意 銅 蓋3, 鏝, 磨
上 脚 部 銅 片a, Ifc, 磨	
S-74(4)(5)	銅 意 銅 坪?
上 脚 部 銅 片a, 磨類	
S-76(4)(5)	銅 意 銅 蓋3, 鏝
上 脚 部 銅 片a(へ?), 鏝a	
瓦 類 色土 磨入 鏝c	
S-77(4)(5)	銅 意 銅 蓋3, Ifa, 鏝, 鉢b
上 脚 部 銅 片a(へ?), Ifd, 鏝a	
越州系青磁 類-皿(1)	
白 磁 類 瓦V形-1 (1)	
瓦 類 平瓦(瓦質, 横目切), 瓦瓦(瓦質, 無文), (銅意, 無文)	
S-78(4)(5)	上 脚 部 銅 片a(へ?)
S-79(7)(5)	銅 意 銅 磨類
上 脚 部 銅 鏝, 磨類	
S-81(1)(5)	上 脚 部 銅 鏝
瓦 類 瓦瓦(土脚質, 無文)	
その他 磁 コンタリート	
S-82(1)(5)	上 脚 部 銅 片a(へ?), 瓦紋坪
瓦 類 色土 磨入 磨×坪	
白 磁 類 瓦V形(1)	
国産系青磁 類-皿(1)	
瓦 類 瓦瓦(瓦質, 横目切), (瓦質, 無文), 瓦瓦(土脚質, 無文)	
行 器 類 磨石(磨石, 手持石, 磨石)	
S-83(1)(5)	銅 意 銅 鏝
上 脚 部 銅 片a, 鏝	
瓦 類 色土 磨入 坪×鏝	
S-84(1)(5)	銅 意 銅 坪
上 脚 部 銅 鏝	
瓦 類 瓦瓦(土脚質, 無文)	
瓦 類 瓦瓦(瓦質, 無文)	

表 12-3 第 215 次調査 出土遺物一覽表③

S-86(1)(5)	銅 意 銅 蓋3, 鏝
上 脚 部 銅 片a(へ?), 瓦紋坪, 小皿a(上?)	
越州系青磁 類-皿(1)	
瓦 類 平瓦(瓦質, 無文)	
S-87(1)(5)	銅 意 銅 坪a(へ?)
瓦 類 色土 磨入 破片	
白 磁 類 瓦V形(1), 破片(1)	
越州系青磁 類-皿(1)	
瓦 類 平瓦(瓦質, 磨石, 磨石)	
S-88(1)(5)	銅 意 銅 破片
上 脚 部 銅 磨類	
S-89(1)(5)	上 脚 部 銅 瓦紋坪a, 小皿a(上, へ?)
瓦 類 色土 磨入 破片?	
S-91(1)(5)	銅 意 銅 鏝
上 脚 部 銅 小皿a?	
越州系青磁 類-皿(1)	
国産系青磁 磨類	
行 器 類 磨石(磨石, 二次加工)	
土 脚 部 瓦瓦	
S-92(1)(5)	銅 意 銅 鉢a3
上 脚 部 銅 鏝	
瓦 類 色土 磨入 破片	
瓦 類 瓦瓦	
越州系青磁 類-鉢(1)	
上 脚 部 銅 磨類(11c~)	
瓦 類 平瓦(瓦質, 磨石)	
S-93(1)(5)	銅 意 銅 蓋3, 鏝
白 磁 類 瓦V形-1×V形-2 (1)	
S-94(1)(5)	上 脚 部 銅 瓦紋坪?
瓦 類 色土 磨入 破片?	
S-96(1)(5)	上 脚 部 銅 瓦紋坪c
越州系青磁 類-皿a(1)	
瓦 類 磨 瓦瓦(へ?)	
S-97(1)(5)	銅 意 銅 鏝, 磨a×b
上 脚 部 銅 鏝	
金属 質 品 磁甲(磁物系?)	
S-98(1)(5)	上 脚 部 銅 磨類
S-99(1)(5)	上 脚 部 銅 磨類
瓦 類 瓦瓦(へ?), 瓦瓦	
S-101(1)(5)	銅 意 銅 蓋3
上 脚 部 銅 瓦紋坪	
S-102(4)(5)	上 脚 部 銅 破片
瓦 類 磨 破片	
S-103(4)(5)	上 脚 部 銅 瓦紋坪c
瓦 類 磨 平瓦(土脚質, 磨石), 瓦瓦(へ?), 平瓦?	
S-104(4)(5)	上 脚 部 銅 磨類
S-106(1)(5)	銅 意 銅 蓋c×1, 磨類
上 脚 部 銅 瓦紋坪, 鏝c, 小皿a(へ?)	
越州系青磁 類-破片(1)	
国産系青磁 類-鉢(1)	
瓦 類 磨 瓦瓦(へ?), 平瓦?	
S-107(1)(5)	銅 意 銅 坪
上 脚 部 銅 坪, 鏝	
上 脚 部 銅 磨類	
上 脚 部 土 磨	
瓦 類 瓦瓦(瓦質, 磨石?)	
瓦 類 平瓦(瓦質, 無文)	
S-108(1)(5)	銅 意 銅 磨類
上 脚 部 銅 磨類?	
瓦 類 瓦瓦(瓦質, 横目切)	
S-109(1)(5)	上 脚 部 銅 瓦紋坪
S-111(1)(5)	上 脚 部 銅 磨類
S-112(1)(5)	上 脚 部 銅 瓦紋坪a, 小皿a(へ?)
瓦 類 色土 磨入 磨×坪	
S-113(1)(5)	上 脚 部 銅 磨類
S-114(1)(5)	上 脚 部 銅 瓦紋坪c
瓦 類 色土 磨入 磨×坪	
S-116a(1)(5)	上 脚 部 銅 坪a
瓦 類 瓦瓦(へ?)	
S-116(1)(5)	上 脚 部 磨類
瓦 類 平瓦(瓦質, 磨石, 磨石)	
S-117(1)(5)	銅 意 銅 磨類, 鏝
上 脚 部 銅 瓦紋坪	
越州系青磁 類-鉢(1)	
瓦 類 磨 瓦瓦(へ?)	
上 脚 部 銅 瓦紋坪(1)	
瓦 類 瓦瓦(瓦質, 磨石)	
S-118(1)(5)	銅 意 銅 磨類
上 脚 部 銅 瓦紋坪, 鏝c	
越州系青磁 類-鉢(1)	
越州系青磁 類-皿(1)	
越州系青磁 類-鉢-11-5a(1)	
瓦 類 磨 瓦瓦(1), 瓦瓦(1), 片(4)	
瓦 類 磨 瓦瓦(へ?), 平瓦, 瓦瓦	
S-119(4)(5)	上 脚 部 銅 瓦紋坪a
S-121(1)(5)	銅 意 銅 磨類
上 脚 部 銅 瓦紋坪?	
S-122(1)(5)	銅 意 銅 蓋3, 鏝c, 鏝
上 脚 部 銅 瓦紋坪a, 小皿a(へ?)	
越州系青磁 類-磨 7? (7)	
瓦 類 磨 瓦瓦(瓦質, 磨石, 磨石)	
S-123(1)(5)	銅 意 銅 磨類
上 脚 部 銅 瓦紋坪a	
瓦 類 瓦瓦(瓦質, 磨石)	
瓦 類 磨 瓦瓦(瓦質, 磨石)	
S-124(1)(5)	銅 意 銅 坪a?, 鏝
上 脚 部 銅 瓦紋坪a, 小皿a(上, へ?), 鏝?	
越州系青磁 類-鉢-11(1), 皿(1)	
白 磁 類 瓦V形, 皿(1)	
S-126(1)(5)	銅 意 銅 坪c3, 大甕
上 脚 部 銅 磨類, 瓦紋坪a	
瓦 類 色土 磨入 磨類	
白 磁 類 瓦V形 (1)	
瓦 類 磨 瓦瓦(瓦質)706c, 平瓦(へ?)	
S-127(1)(5)	銅 意 銅 磨2×3, 鏝, 磨?
上 脚 部 銅 瓦紋坪c, 小皿a(へ?)	
瓦 類 色土 磨入 磨類	
白 磁 類 磨, 磨石	
瓦 類 磨 瓦瓦(瓦質, 磨石?)	

表 12-4 第 215 次調査 出土遺物一覧表④

S-128H(15)	
銅 器	銅 鑊
土 器	埴輪(イト、ヘウ)、小皿a(ヘウ)、甕c、及流石、甕
彩色土器	白地
土 器	土 甕
石 器	石 錐
S-129H(15)	
銅 器	銅 鑊
土 器	埴輪(イト、ヘウ)、小皿a(ヘウ)、小皿b(イト)
彩色土器	白地
土 器	土 甕
石 器	石 錐
S-131H(18)	
銅 器	銅 鑊
土 器	埴輪(イト、ヘウ)、小皿a(ヘウ)、小皿b(イト)
彩色土器	白地
土 器	土 甕
石 器	石 錐
1区 表土	
銅 器	銅 鑊
土 器	埴輪(イト、ヘウ)、小皿a(イト)、小皿b(イト)
彩色土器	白地
土 器	土 甕
石 器	石 錐
2区 灰褐色土	
銅 器	銅 鑊
土 器	埴輪(イト、ヘウ)、小皿a(イト)、小皿b(イト)
彩色土器	白地
土 器	土 甕
石 器	石 錐
2区 表土	
銅 器	銅 鑊
土 器	埴輪(イト、ヘウ)、小皿a(イト)、小皿b(イト)
彩色土器	白地
土 器	土 甕
石 器	石 錐
3区 表土	
銅 器	銅 鑊
土 器	埴輪(イト、ヘウ)、小皿a(イト)、小皿b(イト)
彩色土器	白地
土 器	土 甕
石 器	石 錐
4区 表褐色土	
銅 器	銅 鑊
土 器	埴輪(イト、ヘウ)、小皿a(イト)、小皿b(イト)
彩色土器	白地
土 器	土 甕
石 器	石 錐
4区 表褐色土	
銅 器	銅 鑊
土 器	埴輪(イト、ヘウ)、小皿a(イト)、小皿b(イト)
彩色土器	白地
土 器	土 甕
石 器	石 錐

7区 灰褐色土	
銅 器	銅 鑊
土 器	埴輪(イト、ヘウ)、小皿a(イト)、小皿b(イト)
彩色土器	白地
土 器	土 甕
石 器	石 錐
7区 灰褐色土	
銅 器	銅 鑊
土 器	埴輪(イト、ヘウ)、小皿a(イト)、小皿b(イト)
彩色土器	白地
土 器	土 甕
石 器	石 錐
8区 赤色粘土ブロック	
銅 器	銅 鑊
土 器	埴輪(イト、ヘウ)、小皿a(イト)
彩色土器	白地
土 器	土 甕
石 器	石 錐
8区 黒色土	
銅 器	銅 鑊
土 器	埴輪(イト、ヘウ)、小皿a(イト)
彩色土器	白地
土 器	土 甕
石 器	石 錐
8区 黒色土	
銅 器	銅 鑊
土 器	埴輪(イト、ヘウ)、小皿a(イト)
彩色土器	白地
土 器	土 甕
石 器	石 錐
10区 灰褐色土	
銅 器	銅 鑊
土 器	埴輪(イト、ヘウ)、小皿a(イト)
彩色土器	白地
土 器	土 甕
石 器	石 錐
11区 黒色土	
銅 器	銅 鑊
土 器	埴輪(イト、ヘウ)、小皿a(イト)
彩色土器	白地
土 器	土 甕
石 器	石 錐
12区 表土	
銅 器	銅 鑊
土 器	埴輪(イト、ヘウ)、小皿a(イト)
彩色土器	白地
土 器	土 甕
石 器	石 錐
13区 表土	
銅 器	銅 鑊
土 器	埴輪(イト、ヘウ)、小皿a(イト)
彩色土器	白地
土 器	土 甕
石 器	石 錐
黄褐色砂	
銅 器	銅 鑊
土 器	埴輪(イト、ヘウ)、小皿a(イト)
彩色土器	白地
土 器	土 甕
石 器	石 錐
灰褐色土	
銅 器	銅 鑊
土 器	埴輪(イト、ヘウ)、小皿a(イト)
彩色土器	白地
土 器	土 甕
石 器	石 錐
赤色土	
銅 器	銅 鑊
土 器	埴輪(イト、ヘウ)、小皿a(イト)
彩色土器	白地
土 器	土 甕
石 器	石 錐
灰褐色土	
銅 器	銅 鑊
土 器	埴輪(イト、ヘウ)、小皿a(イト)
彩色土器	白地
土 器	土 甕
石 器	石 錐
表土	
銅 器	銅 鑊
土 器	埴輪(イト、ヘウ)、小皿a(イト)
彩色土器	白地
土 器	土 甕
石 器	石 錐

5. 第 243 次調査

(1) 調査に至る経緯

調査地は大宰府市通古賀 5 丁目 1219、1220 番で、大宰府条跡石郭の中心地点に位置し、現在その周辺は住宅街になっている。平成 16 (2004) 年 7 月、共同住宅建築に先立ち、文化財の取り扱いについての照会があり、平成 16 (2004) 年 9 月 14 日に試掘調査を行い、遺構が確認された。その後協議を重ねたものの、保存のための設計変更は不可能となったため、記録保存のための発掘調査をすることとなった。発掘調査は平成 16 (2004) 年 11 月 11 日から 12 月 20 日まで実施した。調査対象面積は 488 m²、調査面積は 151 m²を測る。調査は松浦智が行った。

(2) 基本層位

最上層は黄褐色を呈する真砂土で、調査前には 4 軒の住宅が建っていて、その建築を行う際に厚さ 20 ~ 40cm 前後の地上げを行っている。その下の灰茶色土にはビニール片やガラス片が入っていたことから近現代の整地層と考えられる。この層を除去した後に遺構面を検出した。遺構面は、江戸時代末期以降

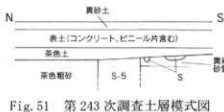


Fig. 51 第 243 次調査土層模式図

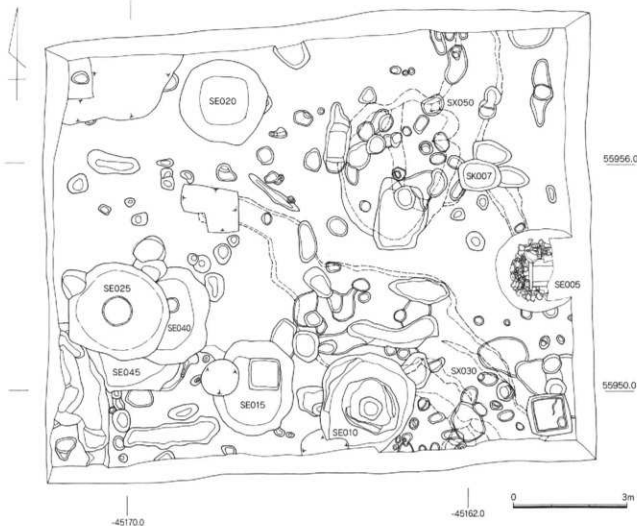


Fig. 52 第 243 次調査遺構全体図 (1/100)

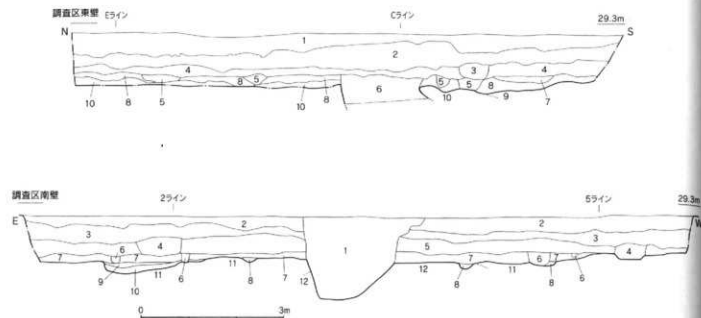


Fig. 53 第243次調査区土層実測図 (1/80)

茶色土と18世紀代の黄褐色砂質土、奈良・平安時代の3つの面が確認されている。地山は明黄褐色砂質土と茶色粗砂の2種類があり、地山が砂質であることから水はけは非常に良い。

(3) 検出遺構

井戸

243SE005 (Fig. 54, Pla. 13)

調査区東端で検出され、一部調査区外にかかっている。検出面での平面形は円形プランを呈し、掘り方の直径2.17～2.34m、深さは2.0m以上を測る。検出面から約1.7mの深さで湧水ようになった地点で、中央に井戸枠材の横桟として使用したと考えられる丸太4本とその西側より縦板2枚確認した。木材の材質の保存状態は比較的良かったが、調査区際であり湧水もあつたため井戸枠材の取上げを行っていない。湧水した地点の標高26.1mである。縦板2枚は長さ35cm前後、厚さ5cm前後を測り、粗雑ではあるが面取りが行われていた。丸太は長さ90cm前後、直径15cm前後を測り、2本がそれぞれ平行するように交互に重ねている。組み合わせに関しては一番上にある丸太の両端の下半分は切られて、またその下にくる丸太の端部には幅15cm前後、深さ3cm程のホヅを設け、この両部分を重ねて組み合わせている。井戸枠の周りからは裏込めに用いられた石積みを検出し、径5～30cm大の石を粗雑ではあるが配石している。井戸北側の裏込め石に関しては明らかに動いて崩落しているものが数個あり、井戸が崩壊した痕跡と認められる。裏込めから遺物は出土しなかった。

243SE010 (Fig. 54, Pla. 13・14)

調査区南側にあり、243SX030を切っている。一部調査区にかかっているが、検出面での平面形は円形プランを呈し、掘り方の直径2.35～2.6m、深さは1.3mで、底面の標高は26.8mを測る。検出面から0.5m掘り下げた地点で井戸枠の痕跡と考えられる一辺0.94mの方形プランを確認した。更にこの方形プランを0.5m掘り下げた地点で浄化用の曲物を設置するために掘り込んだと考えられる径0.4m程の円形プランを確認し、掘り下げた結果、残存状態は良くないが東側より曲物片が残存していた。底面の地山層は灰白色細砂で、底面でも湧水はなかった。掘り込みが2段あり、それぞれ井戸枠と曲物を設置する為に段掘りを行っている。裏込めを完掘した結果、縦杭痕の小穴を3基確認した。3つの小穴は直径0.1m前後、深さは0.15m前後を測る。遺物は各層から出土したが、特に井戸枠内の黒褐色土からの

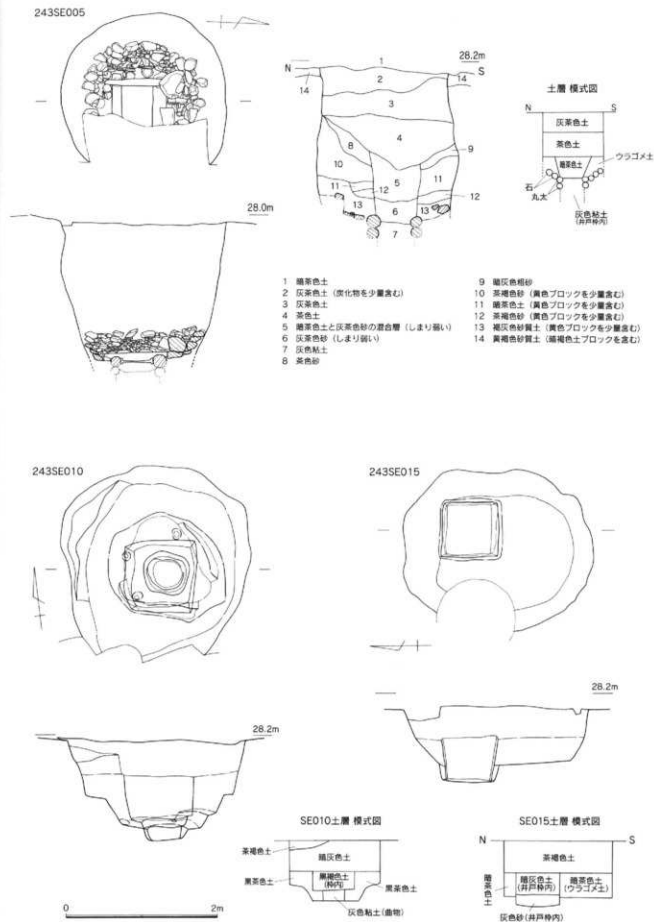


Fig. 54 243SE005・010・015 遺構実測図 (1/50)

遺物が多く、井戸廃絶後廃棄土坑として使用されたようである。

243SE015 (Fig. 54)

調査区南側にあり、現代のコンクリート製の井戸に切られ、243SX030を切っている。検出面での平面形は楕円形を呈し、掘り方の直径2.5～2.15m、深さは1.0m、底面の標高は27.0mを測る。検出面から0.4m掘り下げた地点で井戸枠の痕跡と考えられる一辺0.75mの方形プランを確認した。更にこの方形プランを0.6m掘り下げた地点で灰白色細砂の地山面に達した。底面での湧水はなかった。曲物の掘り込み痕は残存できず、井戸枠材と思われる木片も出土しなかった。

243SE020 (Fig. 55)

調査区北側にあり、検出面での平面形は円形プランを呈し、掘り方の直径2.17～2.34m、深さは1.14m、底面の標高は26.8mを測る。検出面から0.7m掘り下げた地点で中央に井戸枠の痕跡と考えられる一辺0.9mの方形プランを確認した。更にこの方形プランを0.4m掘り下げた地点で灰白色細砂の地山面に到達し、底面での湧水はなかった。曲物の掘り込み痕は確認できず、また井戸枠材などの木片も出土しなかった。

243SE025 (Fig. 55, Pla. 14)

調査区西側にある井戸で、243SE040・045を切っている。検出面での平面形は円形プランを呈し、掘り方の直径2.45～2.7m、深さは2m以上を測る。地山壁が砂地だったことや井戸枠内を検出面から2m掘り下げた地点で湧水したため、これ以上の掘り下げを行っていないが、ピンホールで確認した結果、更に1m以上は掘り下がるようである。井戸枠の残存状態は非常に良好で、遺構プランの検出段階から井戸枠には完形の平瓦を立てて円形に積み上げている状況が確認できた。瓦は平瓦の凹面を内側に、凸面を外側にして、互いに側縁部を重ねて一段に付き11枚の瓦を用いてベルト状に綺麗に積んでいる。内法直径は0.78mを測る。用いられている瓦の大きさは表15のように一様ではなく、最上部の瓦に関しては、長さ27cm、幅21cm、厚み3cm前後の瓦10枚と長さ27cm、幅10cm、厚み3cm前後の瓦1枚が用いられ、後者の瓦は前者の瓦を半分に小割りしている。2段目以下の平瓦に関しては長さ25cm、幅20cm、厚み3cm前後のものが各段で11枚ずつ使用され、1段目のような小割りの瓦は確認できなかった。井戸枠裏込めの暗灰色砂質土からは径5～30cmの花崗岩石が200点ほど確認できたが、配石などを行っている状況は確認できなかった。地権者の話では50年程前まではこの井戸は残っており、現場内にあるコンクリート製の井戸はその後に造られたということである。

243SE040 (Fig. 55)

調査区西側にあり、243SE025に切られ、243SE045を切っている。検出面での平面形は円形プランを呈し、掘り方の直径2.56～2.6m、深さは0.98m、底面の標高は26.9mを測る。遺構検出面から0.2m掘り下げた地点で井戸枠の痕跡と考えられる一辺0.82mの方形プランを確認し、更に0.6m掘り下げた地点で曲物の掘り込みと考えられる径0.4mの円形プランを確認した。底面の地山層は灰白色細砂で、この地点での湧水はなかった。井戸枠や曲物と考えられる木片は確認できなかった。

243SE045 (Fig. 55)

調査区西側にあり、243SE025と243SE040に切られている。2つの井戸に切られ、遺構自体の残存状態は良くないが、検出面での平面形は円形プランを呈し、掘り方の直径2.5m以上、深さは1.35m、底面の標高は26.8mを測る。遺構検出面から0.6m掘り下げた地点で井戸枠の痕跡と考えられる一辺1m前後の方形プランを検出し、さらに0.7m程掘り下げた地点で地山の灰白色細砂の面に達し、底面での湧水はなかった。井戸枠南側の底面から0.1m浮いた地点で長さ35cm、幅5cm、厚み1cm程の井戸枠の横棧と考えられる木製品を確認したが残存状態は良くない。曲物の痕跡は確認できなかった。

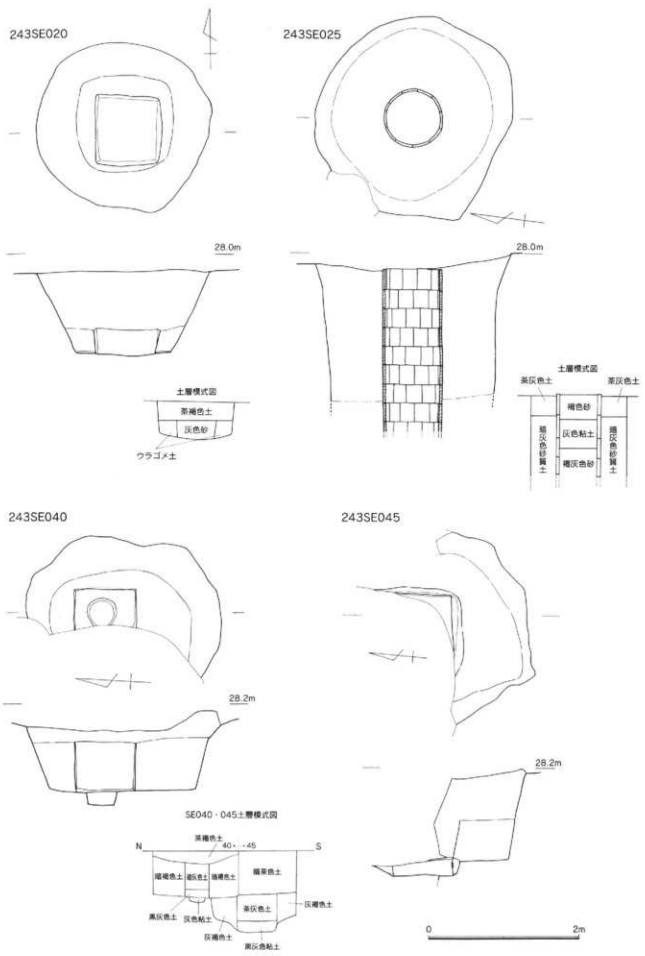


Fig. 55 243SE020・025・040・045 遺構実測図 (1/50)

土坑

243SK007

東西1.1m、南北0.84m、深さ0.45mの楕円形土坑で、埋土は炭化物が混じる灰黄色土である。

流路

243SX030

調査区東側から中央部分にかけて南東から北西方向に走り、243SE010、243SE015に切られている。長さ約10.5m以上、最大幅3m、深さは最大で0.35mを測る。遺物は非常に少ない。埋土は浅茶色細砂が主体で、暗灰色土がブロック状に入る。

243SX050

調査区北側で検出したもので、北東から南西方向に走る。長さ6m以上、最大幅3m、深さは最大で0.37mを測る。243SX030と同様に遺物は非常に少なく、埋土の状態も同じで、浅茶白色砂で暗灰色土がブロック状に入る。このことから2つの流路は一連のものと考えられる。

(4) 出土遺物

井戸

243SE005 灰茶色土出土遺物 (Fig. 56, Pla. 23)

土師質土器

鉢 (1) 口縁端部外面はヨコナデとナデ調整、内面はヨコハケ、内面には僅かに指頭圧痕が残る。胎土は砂粒を多く含む淡橙褐色を呈する。

鍋 (2) 内面ヨコハケ、外面ナメハケで、端部は内面を僅かに面取りし、ナデ調整している。外面には炭化物が付着する。胎土は0.1cm以下の砂粒を含み淡橙褐色を呈する。

瓦質土器

火鉢 (3) 内面はハケ、外面はミガキが施され、底部外面はナデ調整である。内面底部は僅かにミガキ調整される。底部には丸みのある脚が貼付される。胎土は0.4cm以下の砂粒を含み、灰黒色や灰白色を呈する。

肥前系磁器

椀 (4~7) 4は復元口径10.0cm、器高5.3cm、復元高台径4.0cm、高台置付以外全面に青みがかった透明釉を施し、外面に暗青紺色の呉須で文様を描く。5は復元高台径4.4cm、内外面ともやや青みがかった透明釉を施し、外面には呉須で文様を描く。内面底部は輪状に軸を抜き取り、重ね焼き痕がみられる。6は低い高台で復元径4.6cm、黒褐色釉で内外面に文様を描く。7は内外面に透明釉を施し、外面に濃い鉄釉と淡灰色釉で文様を描く。

猪口 (8) 復元口径6.8cm、内外面に青みがかった透明釉を施し、呉須で外面に菊と格子の文様を描き、内面上部に四方棒文を描く。

国産磁器

皿 (9) 復元高台径13.6cmの低い高台がつく。高台の内側は輪状に軸を抜き取っている。そのほか内外面とも淡い緑灰色釉を厚く施している。胎土には黒色粒が含まれる。

国産陶器

火入 (10) 高台は削り出して露胎。外面は黒褐色釉を施し、内面は回転ナデで少々軸垂れがみられる。また重ね焼き痕を残す。

鉢 (11、12) 11は台形状の安定した高台を貼付し、高台径12.3cm。胎土は0.2cm以下の砂粒を含み、赤茶褐色を呈する。軸は外面が薄い褐色釉を施し、軸垂れもある。外面底部は回転ナデで露胎であ

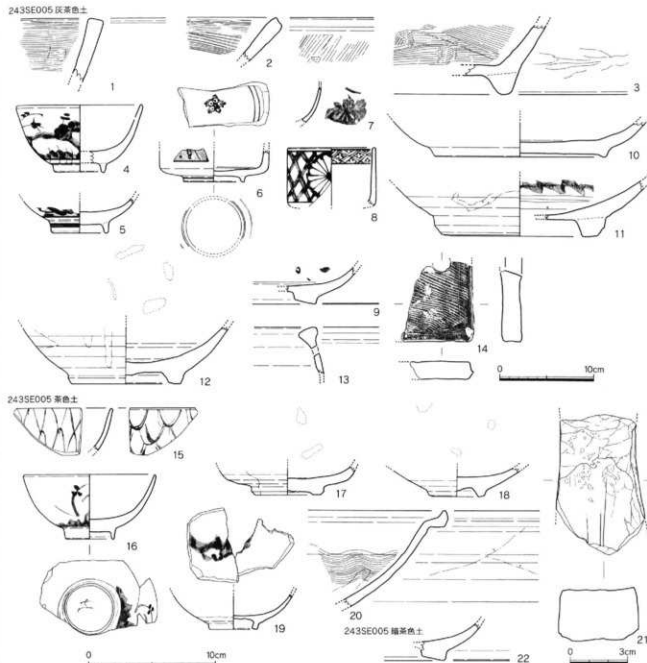


Fig. 56 243SE005 出土遺物実測図 (1/3, 14は1/4, 21は1/2)

る。内面は蛇の目状に軸を抜き取り、その上部に乳白色釉で文様を施す。12は復元高台径8.6cm、胎土は0.2cm以下の砂粒を含み、赤褐色を呈する。体部と底部の外面は回転ハレケズリで、内面は白色釉を施し滑らかで、底部に目跡を残す。外面には白色釉が軸垂れる。

甕 (13) 口縁部を肥厚させ、その下に孔を穿つ。胎土は粗く、内外面とも回転ナデ調整。内外面とも薄く褐色釉を施す。

瓦類

用途不明製品 (14) 胎土は0.2cm以下の砂粒を含み、焼成は良好で橙褐色を呈する。内外面ともハケ調整し、その後周縁部のみナデ調整を施す。一部径2cmほどの円孔を穿つ。厚さは1.95cm。見た目は瓦の状態であるが反りもないため製瓦の可能性が考えられる。

243E005 茶色土出土遺物 (Fig. 56)

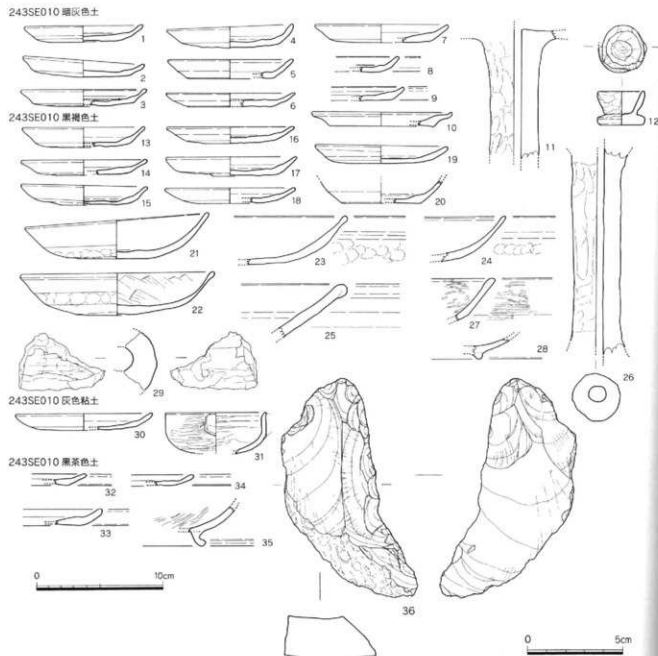


Fig. 57 243SE010 出土遺物実測図 (1/3、12・36は1/2)

肥前系磁器

椀 (15、16) 15は貝須で内外面に網目文を描く。16は復元口径10.5cm、器高5.1cm、復元高台径3.9cm。高台壘付以外はやや青みがかった白色釉を施し、外面に淡い青紺色で草花の文様を描く。内外面とも貫入がみられる。

肥前系陶器

椀 (17) 低い高台で、復元高台径5.4cm。胎土は赤褐色粒や黒色粒を含み、酸化焼成する。外面は回転ヘラケズリで、高台内面は回転ナデ調整する。内面と外面の一部に灰白色釉を施し、内面は僅かに貫入がある。唐津焼。

国産陶器

皿 (18) 復元高台径4.4cm。高台は削り出しで、その後ナデ調整。外面は回転ナデで、内面は灰白色釉を厚めに施軸し、目跡を残す。胎土は褐色色を呈する。

椀 (19) 復元高台径2.7cm。胎土は0.1cm以下の砂粒を含む。回転ナデの後、体部外面上半部が黄白色釉を薄く施軸し、内面は鉄絵とやや暗い緑色釉で文様を描く。

鉢 (20) 口縁端部を外反させる。胎土は0.4cm以下の白色砂粒を含み、赤茶褐色を呈する。外面上半部は回転ナデで藍色釉を施軸し、下半は回転ヘラケズリで露胎である。内面は全面藍色釉を施し、中に波状文を描く。

石製品

砥石 (21) 両端は欠損する。4面使用され、一部敲打痕が残る。砂岩製。

243SE005 暗茶色土出土遺物 (Fig. 56)

火入 (22) 胎土には微細な茶色粒を少量含む。体部外面は褐色や黒褐色釉を薄く施軸する。体部内面は回転ナデで露胎。高台壘付は回転ヘラケズリで露胎。

243SE010 暗灰色土出土遺物 (Fig. 57)

土師器

小皿 a (1~9) 復元口径9.4~10.4cm、器高1.1~1.5cm、底径6.5~8.2cm。底部切り離しは回転ヘラ切りで、板状圧痕を残す。内外面は回転ナデで内面底部は一方のナデを施す。色調は乳茶褐色、淡褐色などを呈する。

小皿 a2 (10) 復元口径11.0cm、器高1.1cm、復元底径8.2cm。口縁端部を内側に曲げている。底部は回転ヘラ切りで板状圧痕を残す。

器台 (11) 脚部径は3.7cm前後で、中央に1.4cm程の円孔がある。外面は手捏ね成形され、指頭圧痕が残る。

石製品

滑石加工品 (12) 高さ1.8cm、横2.5cmで、椀状に削り込んでいる。ミニチュア製品か。

243SE010 黒褐色土出土遺物 (Fig. 57、Pl. 23)

土師器

小皿 a (13~19) 復元口径9.7~10.4cm、器高1.25~1.6cm、底径7.0~8.1cm。底部切り離しは回転ヘラ切り後ナデで、板状圧痕を残す。内外面は回転ナデで内面底部は一方のナデを施す。色調は乳白色、淡褐色、乳黄褐色などを呈する。

坏 a (20) 復元底径6.4cm。底部はヘラ切りで、内外面は回転ナデ。胎土は乳白色や淡灰色などを呈する。

丸底坏 a (21~24) 21は口径14.5cm、器高3.15cm。底部は回転ヘラ切り後ナデで、板状圧痕が残り、外面下半には指頭圧痕が残る。22は口径15.4cm、器高3.3cm、口縁端部が玉縁状に丸く肥厚し、内面にはミガキが明瞭に残る。外面底部は回転ヘラ切り後ナデで板状圧痕を残す。23・24は内面にミガキを施すが、単位は不明瞭。外面中位には指頭圧痕を残す。23の底部には板状圧痕が残る。

鉢 (25) 口縁端部を折り曲げ、若干肥厚させ丸く仕上げる。内外面ともヨコナデ。胎土は粗く乳褐色を呈する。

器台 (26) 脚部径3.7cm前後で、中央に1.3cm程の円孔がある。外面は指頭圧痕が残り、上下端部にはヨコナデがみられる。

黒色土器

椀 (27) 体部中位に僅かに屈曲がある。内外面ともミガキcを施す。B類。

白磁

皿 (28) 胎土には微細な黒色粒を多く含む。内外面とも光沢のある淡緑色釉を薄く施し、高台壘付

は軸を拭き取り、高台内面は回転ナデで磨胎である。

土製品

輪郭口 (29) 胎土は 0.5cm 以下の砂粒を含み粗い。外面は灰色や黒色で、部分的に被熱で融解している。

243SE010 灰色粘土出土遺物 (Fig. 57)

土師器

小皿 a (30) 復元口径 10.8cm、器高 1.35cm、復元底径 8.4cm。内面底部は一方方向のナデ、外面底部はヘラ切りで板状圧痕を残す。

黒色土器

把手付椀 (31) 復元口径 8.0cm、現存高 3.2cm。外面に把手が欠損した痕跡がみられる。内外面に細かいミガキ c を施す。B 類。

243SE010 黒茶色土出土遺物 (Fig. 57)

土師器

小皿 a (32 ~ 34) 3 点とも底部切り難しは回転ヘラ切りで、内外面は回転ナデ、内面底部は不定方向のナデ調整である。色調は乳白色や淡茶褐色である。

黒色土器

椀 c (35) 高台は外反させや丸みを帯びている。内面はミガキ c、外面はナデ。A 類。

石製品

剥片 (36) 縦 11.6cm、横 4.9cm、厚さ 2.1cm。一部自然面を残す。安山岩。

243SE015 茶褐色土出土遺物 (Fig. 58, Pla. 23)

須恵器

蓋 c3 (1 ~ 3) 焼成は良好で灰色や暗灰色を呈する。1 は口径 13.2cm、器高 3.3cm だが、大きく歪んでいる。外面上半部は回転ヘラ切り後未調整。2 は口径 13.4cm、器高 3.2cm だが、大きく歪んでいる。3 は復元口径 13.7cm。外面上半部は回転ヘラケズリ。

蓋 3 (4, 5) 4 は復元口径 15.1cm。焼成良好で暗茶灰色やにぶい橙色を呈する。5 は口縁部が回転ナデ。外面上半部は回転ヘラケズリ後ナデ、内面上半部は回転ナデ後ナデ調整。

小坏 c (6) 復元高台径 7.0cm。焼成良好で青灰色を呈する。

坏 c (7 ~ 9) 7 は復元口径 15.1cm、器高 4.3cm、復元高台径 11.4cm。焼成還元やや不良で淡白灰色を呈する。体部は回転ナデで、内面底部は軽いナデ調整。8 は復元高台径 11.2cm、外面底部は回転ヘラ切り後粗いナデ調整。体部内外面は回転ナデで、内面底部はその後不定方向のナデ。9 は復元高台径 9.8cm。色調は茶褐色や暗茶褐色を呈する。

皿 (10) 復元口径 20.2cm。内外面とも回転ナデ。還元がやや不良で白灰色を呈する。

短頸壺 (11) 復元口径 12.8cm。焼成良好で内外面とも回転ナデで、黒灰色を呈する。

鉢 (12) 口縁部を僅かに内湾させ、端部だけ僅かに外反させる。焼成は良好で褐色を呈す。

土師器

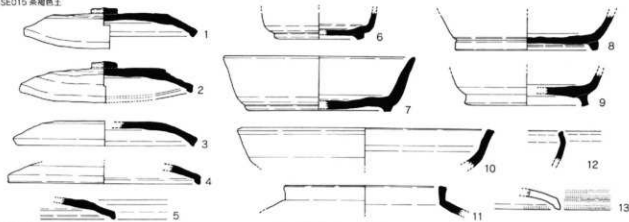
蓋 3 (13) 口縁部を僅かに屈曲させる。内外面ともミガキ a を施す。暗茶褐色や橙色を呈す。

243SE015 暗灰色土出土遺物 (Fig. 58)

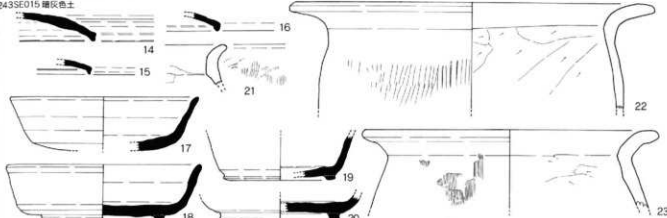
須恵器

蓋 3 (14 ~ 16) 14 は外面上半部が回転ヘラ切り未調整。15 は外面に自然軸が付着する。全て焼成は良好で色調は暗灰色や青灰色を呈する。

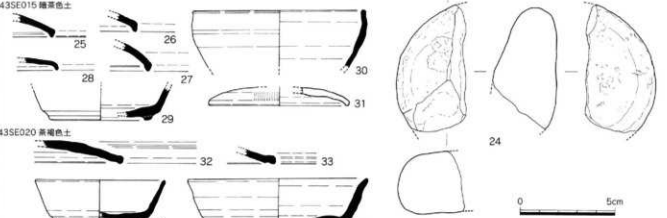
243SE015 黒褐色土



243SE015 暗灰色土



243SE015 暗褐色土



243SE020 黒褐色土

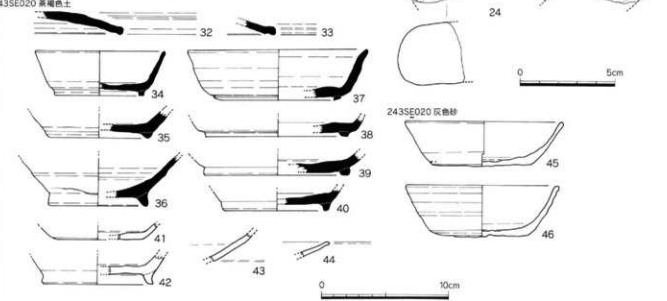


Fig. 58 243SE015・020 出土遺物実測図 (1/3、24 は 1/2)

坏 a (17) 復元口径 14.8cm。底部は回転ヘラ切り後や丸く仕上げ。その他は回転ナデ。

坏 c (18 ~ 20) 外面底部は回転ヘラ切り後粗いナデ、内面底部は不定方向のナデ、その他は回転ナデ。18は復元口径 15.3cm、器高 4.4cm、高台径 9.6cm。色調は淡灰色を呈する。19は復元高台径 8.7cm。焼成良好で青灰色を呈する。20は復元高台径 9.3cm。色調はやや暗い茶灰色。

土師器

甕 (21 ~ 23) 21は外面に細かい刷毛目、体部内面は横方向のケズリ。22は復元口径 28.7cm。胎土は白色砂粒を多く含む。口縁部がやや長い。口縁部はヨコナデで、体部外面はタテハケ、体部内面は斜め方向のケズリ。砂粒を多く含む橙色を呈する。23は復元口径 23.3cm。胎土は白色砂粒を多く含む淡橙色を呈する。口縁部はヨコナデ、体部外面は細かいタテハケ、内面はヘラケズリ。

石製品

叩き石 (24) 欠損している。現存する大きさは 6.7×3.7cm、厚さ 3.2cm。側面に叩き痕あり。

243SE015 暗茶色土出土遺物 (Fig. 58)

須恵器

蓋 3 (25 ~ 28) 焼成は良好で、色調は灰色を呈する。内外面とも回転ナデ調整。25 ~ 27は端部を三角形に仕上げ、28は端部をやや長めに折り曲げている。

坏 c (29) 復元高台径 8.0cm。内外面とも回転ナデ。焼成は良好で青灰色を呈する。

鉢 × 椀 (30) 復元口径 13.4cm。口縁端部を僅かに内湾させる。内外面とも回転ナデ。胎土は 0.3cm 以下の砂粒を含み、焼成良好で灰色や暗灰色を呈する。外面は自然釉がかかる。

土師器

蓋 3 (31 ~ 33) 復元口径 10.9cm。口縁端部を僅かに曲げる。外面はミガキの痕跡が薄く確認できる。内面は回転ナデ。焼成は良好で橙褐色を呈する。32は口縁端部が僅かに肥厚する。外面上半部は切り離し後未調整。その他は回転ナデ。色調は灰色で、端部は重ね焼きによって暗灰色を呈する。33は口縁端部内面に僅かに段を有する。

243SE020 茶褐色土出土遺物 (Fig. 58)

須恵器

小坏 c (34) 復元口径 10.2cm、器高 3.5cm、復元底径 7.0cm。底部外面は回転ヘラ切り、内面は不定方向のナデ、その他は回転ナデ。暗灰色を呈する。

坏 c (35 ~ 40) 35は断面三角形の丸みのある高台を貼付し、復元高台径 7.6cm。内面底部はやや滑らかである。36は深い坏部にやや高い高台を外開きに貼付する。復元高台径 7.9cm。内面底部はナデで、滑らかになっている。色調は暗灰色や灰色を呈する。37は復元口径 14.0cm、器高 4.0cm、復元高台径 9.8cm。低く貧弱な高台を貼付する。内外面とも回転ナデ。色調は灰色を呈する。38は復元高台径 11.0cm。胎土は白色砂粒や黒色粒を多く含む、青灰色を呈する。39は復元高台径 11.3cm。方形の低い高台を貼付する。内面底部はやや滑らかになっている。

土師器

坏 a (41) 復元底径 7.2cm。底部は回転ヘラ切り後ナデ調整。色調は灰茶褐色を呈する。
椀 c (42) 高く外開きの高台を貼付し、復元高台径 8.7cm。外面底部は回転ヘラ切り後ナデで板状圧痕のような痕跡が残る。

緑釉陶器

椀 × 皿 (43) 胎土は乳白色で 0.15cm 以下の砂粒を少量含む。内外面には光沢のある薄緑色釉を施し、内面に一部濃緑色釉を施す。

灰釉陶器

皿 (44) 口縁端部で若干外反する。胎土は淡灰色で微細な黒色粒を含む。外面は回転ナデ、内面に薄く釉がかかる。

243SE020 灰色砂出土遺物 (Fig. 58, Pla. 23)

土師器

坏 a (45、46) 45は口径 12.5cm、器高 3.45cm、復元底径 7.8cm。底部は回転ヘラ切りで板状圧痕が残る。内面は回転ナデ後ナデ。焼成は良好で淡白橙色を呈する。46は復元口径 12.1cm、器高 4.1cm、復元底径 8.4cm。底部は回転ヘラ切りが明瞭に残り、板状圧痕も残る。内面は回転ナデ後軽いナデ。焼成は良好で淡白橙色を呈する。

243SE025 井戸枠出土遺物 (Fig. 59)

瓦類

平瓦 (1 ~ 4) 井戸に使用された瓦の作りはほぼ同じで、内面はヘラケズリの後丁寧なナデ調整。凸面はヨコナデ。胎土は僅かに砂粒を含み精製されている。焼成は良好で灰色や黒灰色を呈する。1・2は1段目に使用されたもので、1は縦 27.25cm、横 22.7cm、厚さ 3.0cm、2は縦 27.3cm、横 22.5cm、厚さ 2.9cm。3・4は2 ~ 5段目に使用されたもので、3は縦 25.1cm、横 21.1cm、厚さ 2.4cm、4は縦 25.4cm、横 21.3cm、厚さ 2.4cm。その他の瓦は表 15 のとおりである。

243SE025 褐色砂出土遺物 (Fig. 59)

国産陶器

土瓶 (5) 土瓶の把手部で、暗茶色釉を施す。

煉瓦 (6) 胎土は微細な白色粒を多く含む、色調は赤褐色を呈する。全面ナデ調整。

243SE025 茶灰色土出土遺物 (Fig. 59)

土師質土器

鍋 (7) 口縁部を肥厚させる。胎土は白色砂粒や茶色粒をやや多く含む、微細なガラス質も少量混じる。内外面とも斜め方向の刷毛目を施すが、剥落が著しい。

肥前系磁器

小坏 (8) 外面に呉須で文様を施す。

椀 (9) 外面に呉須で文様を施すが、端部の呉須は若干にじんんでいる。

皿 (10) 復元口径 10.3cm、器高 2.8cm、復元高台径 6.0cm。内外面には灰色っぽい暗紺色で文様を描き、青味がかった透明釉を施す。

国産陶器

土瓶 (11) 注ぎ口部分で、体部の穿孔は3つ施されているが、1つは土が詰まった状態で焼成されている。胎土は淡橙褐色を呈し、透明度の低い暗茶褐色釉を施す。

鉢 (12) 肥厚した口縁部で内外面とも回転ナデ。胎土は 0.3cm 以下の白色砂粒を含み、橙灰色を呈する。

土製品

輪羽口 (13) 先端部の破片で、被熱で端部は融解し黒褐色のガラス質になっている。その他も被熱で赤茶褐色や赤茶褐色を呈する。

瓦類

軒丸瓦 (14) 巴文の瓦当。胎土は白色砂や雲母を多く含む、黒灰色を呈する。

243SE025 暗灰色砂質土出土遺物 (Fig. 60・61, Pla. 24)

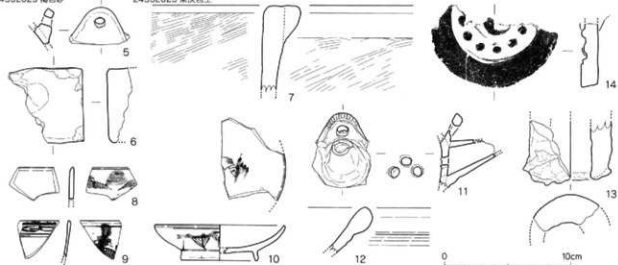
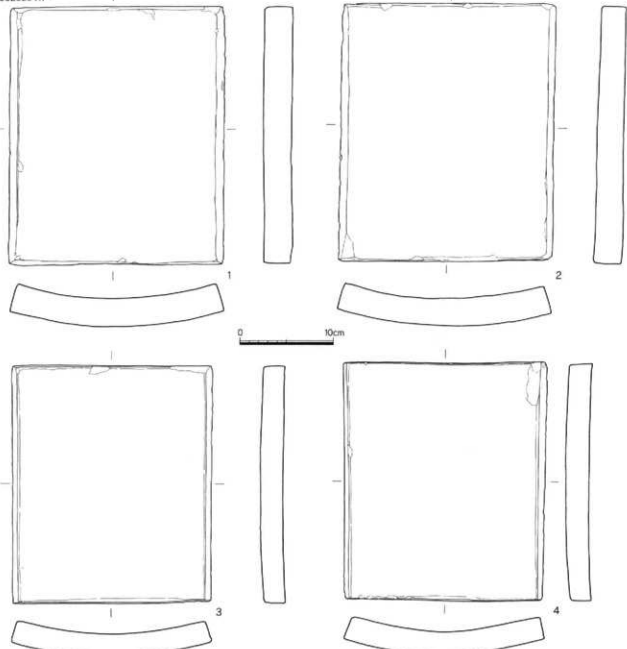


Fig. 59 2435E025 出土遺物実測図① (1/3、瓦は1/4)

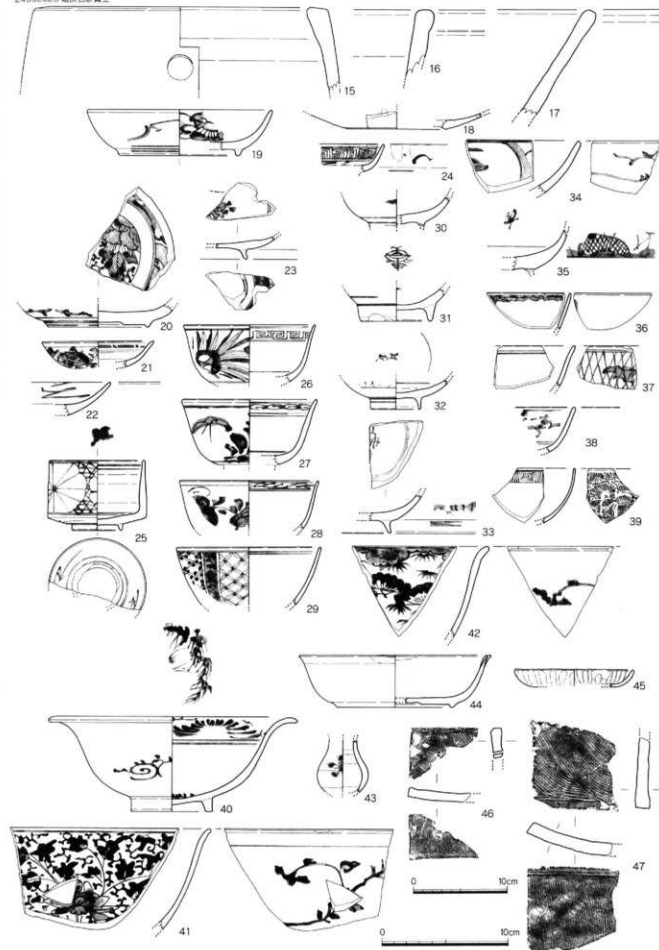


Fig. 60 2435E025 出土遺物実測図② (1/3、46・47は1/4)

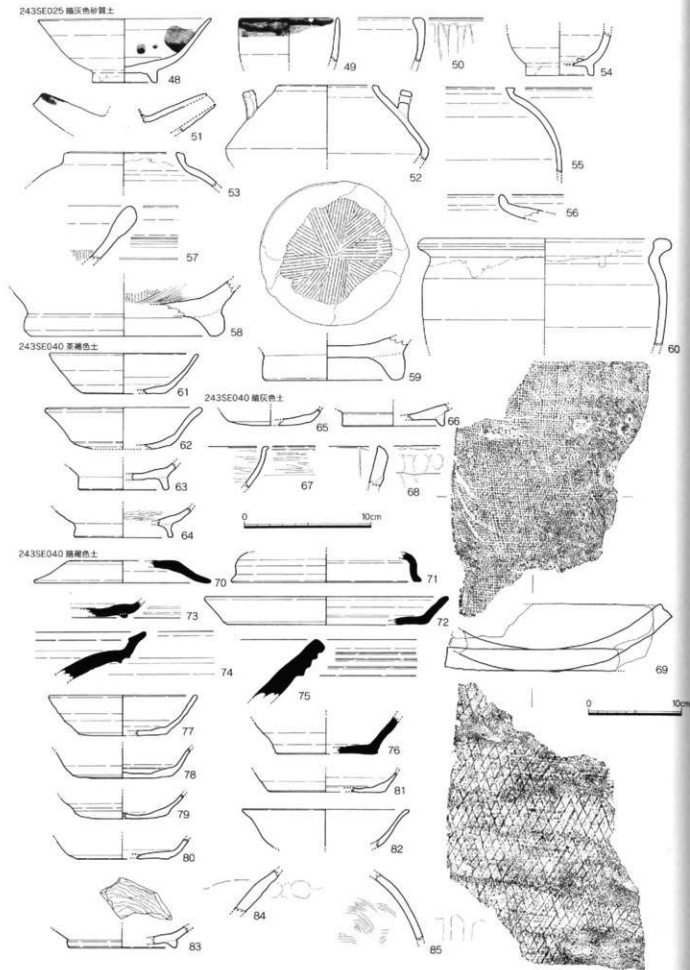


Fig. 61 243SE025 ㊸・SE040 出土遺物実測図 (1/3, 69は1/4)

瓦質土器

火鉢 (15) 復元口径 23.2cm。胎土は雲母を多く含み、色調は暗茶褐色や黒色を呈する。外面は雲母が光っている。口縁部を肥厚させ、体部中位に 2cm 程の円孔を穿つ。内面には煤が若干付着する。

鉢 (16) 若干口縁部を肥厚させる。胎土は 0.4cm 以下の砂粒を含み、淡茶灰色を呈する。内外面ともヨコナデだが、外面は剥落が著しい。

土師質土器

鉢 (17) 口縁部に直線的な体部で、内外面ともヨコナデを施す。胎土は 0.5cm 以下の砂粒を含み、淡茶褐色を呈する。

緑釉陶器

皿 (18) 土師質で、内外面に淡い黄色味があった緑色釉が薄く施され、外面には薄緑色釉が点在する。底部には高台はなく、上げ底風になっている。体部と底部の境目には沈線が巡る。体部中位に 0.5cm 前後の孔が穿たれている。

肥前系磁器

皿 (19～23) 19は復元口径 14.6cm、器高 3.65cm、復元高台径 9.4cm、高台臺付は露胎で砂粒が付着する。内外面には呉須の濃淡で文様を描く。20は蛇の目高台で、復元高台径 7.8cm、高台はケズリ出しで内面は露胎で、窪み部分は施釉する。内外面には呉須の濃淡で文様を描く。21は復元口径 8.8cm、22は内外面に青味があった透明釉を施す。内面底部が釉を掻き取り、重ね焼き痕を残す。外面下部が露胎。内面に呉須で文様を描く。

角皿 (24) 内外面に光沢のある透明釉を施す。体部には輪花が施され、内面には呉須で文様を描く。胎土は黒色粒を含み灰色を呈する。

碗 (25～39) 全体として内外面に紺色の呉須で文様を描き、内外面に青味があった透明釉を施す。高台臺付は露胎。25は復元口径 7.6cm、器高 4.5cm、復元高台径 5.9cm、内面底部にはコンニャク印を施す。26は復元口径 10.4cm、27は復元口径 10.7cm、28は復元口径 10.8cm、29は復元口径 11.4cm、30は内面底部の釉を輪状に掻き取る。31は復元高台径 5.5cm、32は復元高台径 4.0cm、38は内面に呉須の濃淡を使い分け文様を描く。

鉢 (40～42) 口縁部を外反させ、内外面に紺色の呉須で草花文や唐草文などの文様を描き、青味があった透明釉を薄く施す。胎土は微細な黒色粒を僅かに含み、白色を呈する。40は復元口径 19.6cm、器高 7.5cm、復元高台径 6.4cm、高台臺付は露胎。内面にはハリの跡が残る。

草瓶 (43) 体部最大径 4.0cm、内外面灰色があった透明釉を薄く施し、外面に梅鉢文を描く。小型の草瓶で仏具と考えられる。

国産磁器

皿 (44, 45) 44は復元口径 15.2cm、器高 4.15cm、復元高台径 9.1cm、口縁部には輪花を施す。高台内面は輪状に釉を掻き取り、中央が窪み蛇の目状になっている。45は復元口径 9.2cm、体部は型打ちの菊形文。内外面には光沢のある茶色釉を施す。

国産陶器

碗 (48～50) 48は復元口径 13.6cm、器高 5.1cm、復元高台径 5.0cm、内外面に緑があった灰色釉を施し、内面には部分的に褐色釉や白色釉で文様を描く。内面見込みは輪状に釉を掻き取っている。高台と外面底部は露胎である。49は復元口径 7.8cm、内外面に透明釉を薄く施し、口縁部のみ黒褐色釉を厚く施す。50は口縁部が肥厚し、外面はヘラで花卉を施す。内外面に黄色味を帯びた透明釉を施す。

土瓶 (51～53) 51は注ぎ口部分で、乳白色釉を施し、先端部分だけ鉄釉で文様が施されている。

52は復元口径8.1cmで体部中位が屈曲させ、最大径16cmとする。胎土は精製され、外面には光沢のある灰褐色釉を厚く施す。釉には細かい貫入がみられる。内面は露胎。53は復元口径9.6cm、内外面に茶褐色釉を施し、口縁端部上面は釉をふき取る。

壺 (54~56) 54は復元高台径5.4cm。胎土は赤褐色で、外面に黒茶褐色釉を厚めに施す。内面は回転ナデで露胎。内面には釉垂れや胎土目が見られる。高台置付には重ね焼き痕を残す。55は胎土が赤褐色で、0.1cm以下の白色砂粒を含む。内外面は回転ナデの後褐色釉を施すが、口縁端部が露胎。56は口縁端部を短く曲げている。胎土は赤紫色で内外面に茶褐色釉を施し、乳白色の斑点が見られる。

罎鉢 (57~59) 57は端部でやや肥厚させている。58は復元高台径15.7cm。胎土は白色砂粒を多く含む橙色を呈する。59は高台径11.0cm。胎土は白色砂粒を多く含む淡い橙色を呈する。外面は黒褐色釉を施す。内面の襍り目は明瞭である。

甕 (60) 復元口径10.0cm。口縁部が僅かに反し肥厚する。胎土は0.5cm以下の砂粒を多く含む、淡赤茶色を呈する。外面に褐色釉を施し、口縁部内外面に黄色味がかった灰褐色釉を厚めに施す。内面は露胎。

瓦類

平瓦 (46, 47) 46は胎土が淡茶褐色で内外面に刷毛目があり、端部はナデ調整する。0.2cmと1cmほどの円孔を穿つ。47は焼成良好だが、還元不良で土師質で、色調は淡橙茶褐色を呈する。内外面とも刷毛目が施され、端部はヨコナデ調整。断面はヘラ切り。

243SE040 茶褐色土出土遺物 (Fig. 61)

土師器

坏 a (61, 62) 底部切り離しは回転ヘラ切りでその後ナデ調整、内面底部はナデ、その他は回転ナデ。61は復元口径11.8cm、器高3.2cm、復元底径6.6cm。淡白橙色を呈する。62は体部がやや反する。復元口径12.4cm、器高3.3cm、復元底径8.0cm。淡黄橙色を呈する。

碗 c (63) 復元高台径7.2cm。色調は白黄橙色を呈する。

黒色土器

碗 c (64) 復元高台径7.8cm。内面ミガキc、外面は磨減するが回転ナデ。胎土には0.15cm以下の砂粒や微細なガラス質粒を少量含む。A類。

243SE040 暗灰色土出土遺物 (Fig. 61)

土師器

坏 a (65) やや丸味のある底部で、底部切り離しは回転ヘラ切りで、板状圧痕が残る。内面は不定方向のナデ。色調は白灰褐色を呈する。

碗 c (66) 断面台形の高台を底部端に貼付する。復元高台8.1cm。胎土には僅かに角閃石が含まれる。色調は淡褐灰色を呈する。

碗 (67) 口縁端部を曲げる。内外面にミガキcを施す。胎土は精製され、色調は淡灰色や淡橙褐色を呈する。

製塩土器

焼塩壺 (68) 焼塩壺の口縁部で、内面ヨコナデ、外面は手握ねの指頭圧痕が残る。胎土は精製され、黄褐色釉を呈する。II-b類。

瓦類

平瓦 (69) 胎土は0.3cm以下の白色砂粒を多く含む、灰色や暗灰色を呈する。外面の叩きは斜格子である。

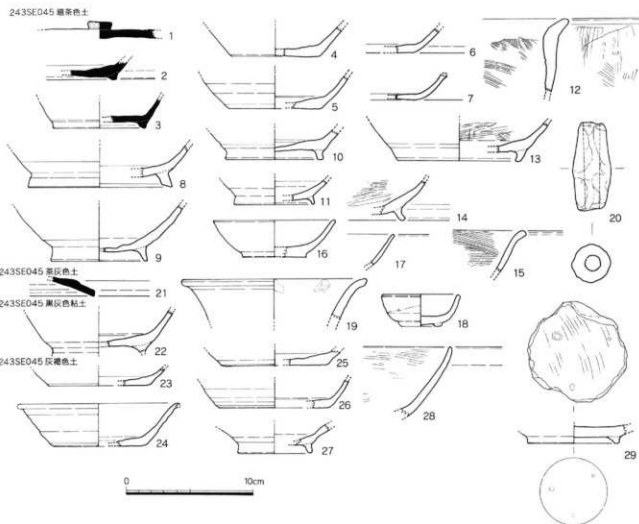


Fig. 62 243SE045 出土遺物実測図 (1/3)

243SE040 暗褐色土出土遺物 (Fig. 61)

須恵器

蓋 4 (70) 外面上半部は切り離し後未調整。その他は回転ナデ。内面天井部はやや滑らかになっている。色調は暗灰色を呈する。

壺蓋 (71) 復元口径15.0cm。内外面とも回転ナデ調整。胎土は白色砂粒や黒色粒を少量含む、淡灰色を呈する。

皿 a (72) 復元口径19.2cm、器高2.2cm、復元底径16.2cm。底部は回転ヘラ切り後ナデ。内面底部は回転ナデ後ナデ調整。色調は暗灰色や白灰色を呈する。

坏 c (73) 底部切り離し後ナデで、低い高台を貼付する。色調は灰色を呈する。

甕 (74, 75) 74は二重口縁の甕の口縁部で、頸部に波状文を施す。75は口縁端部の破片で、沈線を通らす。灰色や暗灰色を呈する。

壺×鉢 (76) 復元底径8.1cm。底部は回転転切りで、その他は回転ナデ調整。胎土は精製され、色調は灰色を呈する。篠窯。

土師器

坏 a (77~81) 底部切り離しは回転ヘラ切りで、その後ナデ調整。80以外内面底部は不定方向のナデ。胎土は白色砂粒や微細な雲母を僅かに含む。色調は淡褐褐色や暗茶灰色を呈する。77は復元口径11.7cm、器高3.2cm、復元底径7.2cm、78は復元底径8.0cm、79は丸味のある底部で復元底径7.6cm。

80は復元底径8.5cm, 81は復元底径9.4cm。

坏(82) 復元口径13.2cm, 体部はやや反し、内外面とも回転ナデ。茶褐色を呈する。

黒色土器

椀c(83) 復元高台径8.6cm, やや低い三角形の高台を貼付する。体部下半は回転ヘラケズリ、内面はミガキcを施す。胎土は淡橙色を呈する。

製塩土器

焼塩壺(84) 胎土は0.2cm以下の砂粒を多く含み、淡茶褐色を呈する。内面ナデ、外面には指頭圧痕が残る。II-b類。

灰軸陶器

甕(85) 甕の胴部とみられる。胎土は0.1cm以下の白色砂粒や微細な黒色粒を含み、外面は回転ナデ後緑色味のある透明釉を施す。内面は当て具痕の痕跡が薄く残る。

243SE045 暗灰色土出土遺物 (Fig. 62, Pla. 24)

須恵器

蓋c3(1) 内面天井部はナデ、外面も高台貼付の回転ナデの周りはナデ調整。その他は回転ナデ。

坏c(2, 3) 2は台形の低い高台貼付する。胎土はきめ細かく、暗灰色や灰黒色などを呈する。内面底部は不定方向のナデ。3は外面底部の端に若干貧弱な高台を貼付する。復元高台径7.2cm, 内面底部は一方方向のナデで、それ以外は回転ナデ。

土師器

坏a(4~7) 底部は回転ヘラ切り後ナデ、その他は回転ナデ。胎土が0.2cm以下の砂粒を含み、色調は淡褐色を呈する。4は復元底径6.8cm, 5は復元底径7.2cm, 7は内面底部が一方方向のナデ調整。

大椀c(8) 復元高台径11.4cm, 高台は安定感のある方形の高台を貼付し、内側をやや浮かすように成形する。外面は回転ヘラケズリで、内面は回転ナデ、内面底部は一方方向のナデ調整。内外面とも褐色を呈する。

椀c(9~11) 9は復元高台径7.6cm, 体部は丸みがあって深い。内外面とも回転ナデ。胎土は0.4cm以下の砂粒を多く含み粗い。色調は乳茶褐色を呈する。10は復元高台径7.8cm, 内面底部には板状圧痕が残る。淡褐色がかかった乳白色を呈する。11は細くやや内側に向く高台を貼付する。復元高台径6.3cm, 内外面回転ナデ。色調は暗茶灰色を呈する。

甕(12) 胎土は砂粒を多く含み、暗茶褐色を呈する。内外面とも刷毛目で口縁部はヨコナデ。

黒色土器

椀c(13, 14) 胎土は砂粒を含み淡乳茶褐色を呈する。内面ミガキ、外面回転ナデ。A類。13は高台を内向きに貼付する。復元高台径9.6cm, 14は丸味のある底部に外開きの高台を貼付する。

鉢(15) 口縁部を若干外反させる、胎土は0.1cm以下の砂粒を含み、色調は橙茶褐色を呈する。内面はミガキ、外面はナデ調整。A類。

緑軸陶器

椀(16) 復元口径9.6cm, 器高2.9cm, 復元底径5.0cm, 胎土は暗灰褐色で須恵質。内外面ともやや暗い緑灰色釉を施軸、底部は回転糸切りで露胎。篠窯。

灰軸陶器

椀(17) 胎土は0.1cm以下の白色粒や黒色粒を含み、淡灰色を呈する。内外面に緑灰色釉を薄く施軸する。

越州窯系青磁

小椀(18) 復元口径6.3cm, 器高2.55cm, 復元高台径3.2cm, 胎土は黒色粒を含み淡黄灰色を呈する。内面と外面上半部に茶黄色釉を施す。高台と底部は露胎。I類系とみられる。

水注(19) 復元口径14.5cm, 胎土は0.1cm以下の黒色粒を多く含み、やや黄色味を帯びた淡灰色を呈する。内外面に淡緑灰色釉を厚めに施し、貫入がみられる。内面には目跡が残されている。I類系とみられる。

土製品

土鏝(20) 縦7.0cm, 径3.0cm前後で、中央に径1.1cmの孔を通す。色調は淡黄土色を呈し、外面には指頭圧痕を残す。

243SE045 茶灰色土出土遺物 (Fig. 62)

須恵器

蓋4(21) 外面上半部は切り離し後ナデ調整、内面上半部は回転ナデ後ナデ調整。内外面とも灰色だが、重ね焼きのため口縁端部が黒灰色を呈する。

243SE045 黒灰色粘土出土遺物 (Fig. 62) 土師器

椀c(22) やや底部が丸味のある坏の端部に高台を貼付する。磨減が目立つが、体部は回転ナデ調整。色調は橙灰色や淡黄褐色を呈する。

243SE045 灰褐色土出土遺物 (Fig. 62)

土師器

小皿a(23) 復元底径8.2cm, 底部は回転ヘラ切り後ナデ、板状圧痕が残る。白黄橙色を呈する。

坏a(24~26) 胎土は白色砂粒を少量含み、色調は白橙色を呈する。底部は回転ヘラ切り後ナデ調整し、板状圧痕を残す。24は口縁端部を曲げる。復元口径12.8cm, 器高3.4cm, 復元底径7.8cm, 25は復元底径8.5cm, 26は復元底径9.2cm。

椀c(27) 復元高台径5.8cm, 色調は白茶褐色を呈する。

黒色土器

椀(28) 内面はミガキc、外面は回転ナデ調整。胎土は0.2cm以下の砂粒を多く含み、淡茶褐色を呈する。A類。

緑軸陶器

椀c(29) 高台径7.2cm, 胎土は精製され、淡い白橙色を呈する。焼成は良好で土師質である。内外面に白緑色釉を薄く施す。底部の内外面にそれぞれ3点づつ目跡を残す。

土坑

243SK007 出土遺物 (Fig. 63, Pla. 24)

国産陶器

土瓶蓋(1~3) 1は口径8.5cm, 器高3.5cm, 外面は白色釉を施し、褐色釉や緑色釉で文様を描く。内面は回転ナデで露胎。2は口径6.0cm, 器高2.8cm, 外面は黄色味がかかった透明釉を薄く施軸し、鉄軸や赤褐色釉や淡黄褐色釉で文様を描く。内面は回転ナデで露胎。3は口径9.5cm, 器高1.85cm, 淡黄色釉を薄く施し、つまみと内面は露胎。外面に鉄軸で文様を描く。

小皿(4) 復元口径11.6cm, 器高1.85cm, 底径7.8cm, 外面は回転ヘラケズリで、上半部はその後回転ナデ。内面と口縁部外面は黄色味がかかった淡灰色釉を斑状にやや厚めに施軸する。胎土は淡灰褐色を呈する。

灯明皿(5, 6) 5は口径7.1cm, 器高3.25cm, 底径6.9cm, 内面下半と受け部の下半のみ暗緑灰色釉を施す。口縁部は軸を拭き取っている。外面は回転ヘラケズリ、その他は回転ナデ。6は灯明皿のよう

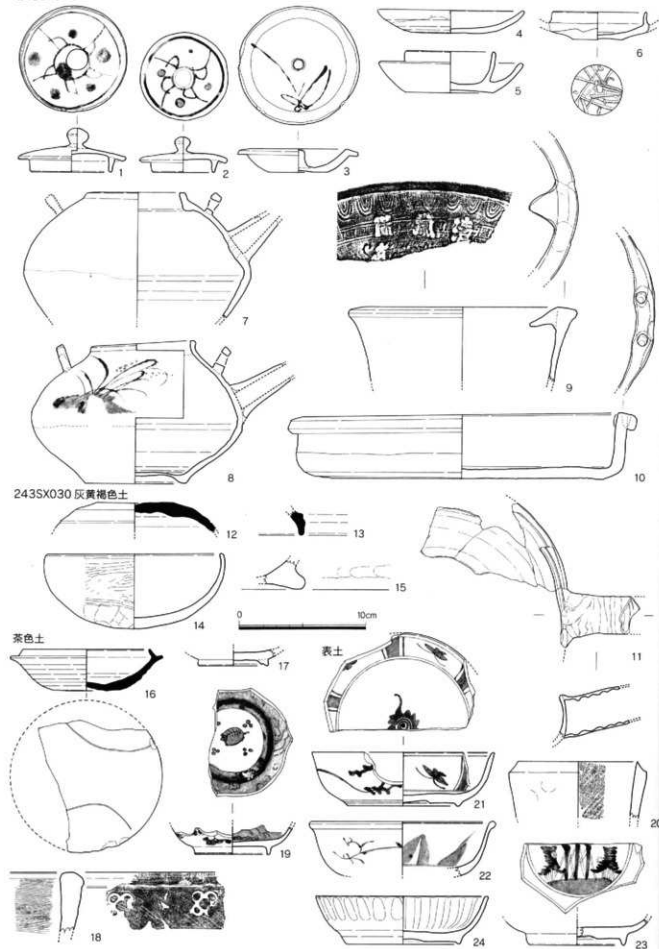


Fig. 63 243SK007・SX030・茶色土・表土出土遺物実測図(1/3)

な皿だが、周囲を意図的に挿している。胎土は橙茶褐色で内面と口縁部外面は淡緑灰色釉を施釉し、内面底部は淡赤灰褐色である。外面は回転ヘラケズリで露胎である。

土瓶(7, 8) 7は注ぎ口端部や底部を欠損する。口径は7.9cm。胎土は金雲母を多く含む茶色を呈する。外面には光沢ある透明釉が施されるが、下半は煤が付着する。内面は回転ナデで露胎である。8は口径8.3cm、器高11.0cm、底径8.0cm、胎土は混入物が多く淡明灰色を呈する。外面上半部は黄色味を帯びた透明釉を薄く施釉し、鉄釉や明るい緑色釉で草花文などを描く。体部下半は煤が付着する。内面は回転ナデで露胎。

土師質土器

涼炉(9) 口径18.0cm。胎土はきめ細かく淡橙茶褐色を呈する。内面上部に突帯を3ヶ所設ける。外面にはスタンプで文様を付ける。

焙烙(10, 11) 10は口径26.4cm、器高5.05cm、底径20.2cm。口縁部突帯を貼付する。内面は回転ナデ、底部外面は粗いナデ。胎土は橙褐色を呈する。11は把手付き焙烙。胎土は精製され橙茶褐色を呈する。把手は手握ね成形され、回転ナデ調整される。把手の内面は空洞である。焙烙部分はヨコナデ調整され、外面底部にやや煤が付着する。

その他の遺物

243SX030 灰黄褐色土出土遺物 (Fig. 63)

須恵器

坏蓋(12) 外面上半部は回転ヘラケズリ。外面中位には沈線が巡る。内面は当て具の後回転ナデ調整。焼成良好で淡灰色を呈する。

高坏(13) 脚部の端部。内外面とも回転ナデ調整される。色調は青灰色を呈する。

古式土師器

坏(14) 復元口径13.7cm、器高5.9cm。外面上半部は横方向のミガキ、下半はヘラケズリ。内面はナデ。胎土は砂粒を含み、赤褐色や黄褐色を呈する。

縄文土器

甕(15) 甕の底部で、若干上げ底になる。磨滅しているが、外面に指頭圧痕が残る。胎土には0.2cm以下の滑石を含み、色調は赤褐色や灰褐色を呈する。

茶色土出土遺物 (Fig. 63)

須恵器

坏身(16) 復元口径12.0cm、器高3.3cm、外面下半は回転ヘラケズリの後粗いナデ。その他は回転ナデで、内面底部はその後不定方向のナデ調整。外面にはヘラ記号を残す。

緑釉陶器

皿(17) 復元高台径5.6cm。高台は二段で作られる。内外面には回転ナデの後、明緑色釉を施すが、外面は剥落が目立つ。焼成は若干甘く、淡灰色を呈する。近江産。

瓦質土器

火鉢(18) 肥厚した口縁端部で内面は細かいヨコハケで、外面は低い突帯を貼付しその間に花形文をスタンプする。

肥前系磁器

碗(19) 復元高台径6.0cm。内外面に貝須で文様を描くが、使用によるためか、内面は絵柄が擦れている。内面中央には亀の絵を描いている。

表土出土遺物 (Fig. 63)

製塩土器

焼塩壺 (20) 復元口径 10.8cm。胎土は暗褐色を呈し、内面には細かい布目が明瞭に残る。外面は指頭圧痕が残る。I類。

肥前系磁器

皿 (21) 復元口径 14.4cm、器高 4.25cm、復元高台径 9.0cm。高台は蛇の目高台で、底部中央は窪み、高台内面は軸を掻き取る。内外面には具須で文様を描く。

碗 (22, 23) 22は復元口径 14.7cm。内外面に具須で文様を描く。23は復元高台径 7.6cm。高台ケズリ出して、内面は軸を掻き取る。蛇の目高台である。内面には具須で文様を描き、その中に目跡がみられる。

国産磁器

皿 (24) 口径 13.6cm、器高 3.8cm、高台径 9.1cm。体部は型打ちの菊花文に成形され、内外面には淡く青味がかった透明釉をやや厚く施す。高台は蛇の目高台で高台内面は軸を掻き取っている。

(5) 小結

調査地は狭いながらも奈良時代から現代までの井戸が7基検出された。古代の井戸の底面レベルは 26.8 ~ 27.0m ほどで、江戸時代以降の井戸2基に関しては、底面まで確認できなかったが、両者とも標高 26.1m 地点で湧水し、ピンボールで確認した結果さらに 1m 以上は掘り下がるようである。現在の水位から考えても古代の水位の方が江戸時代以降の井戸よりも 2m ほど高かったようである。

また、調査地は長沼賢海氏が推定した筑前国衙跡付近にあり、「扇屋敷」と呼ばれていたところである。しかし、奈良・平安時代の井戸や小穴群は確認できたが、大型の掘立柱建物など官衙的な性格を持つ遺構は確認できず、出土遺物も他の条坊跡と目立った違いはなく、この調査では国衙などの官衙跡

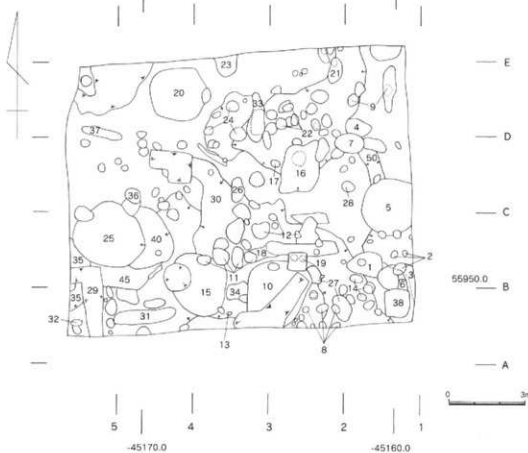


Fig. 64 第243次調査遺構略測図 (1/150)

を認めることはできなかった。

そして、僅かではあるが、古墳時代の遺構は散在しており、古墳時代から生活が営まれていたことが窺うことができる。

参考文献

長沼賢海 1968 「邪馬台と大宰府」太宰府天満宮文化研究所

表 13 第243次調査 遺構一覧表

S-番号	遺構番号	種別	埋主ほか	時期	地区
1		たまり	灰褐色土		B1
2		ビット群			B1
3		溝	暗茶色土	古代	B1
4		ビット	暗灰色土		D1
5	243SE005	井戸	灰茶色土	18世紀後半	C1
6		ビット	茶灰色土		B1
7	243SK007	廃棄土坑	灰黄色土(炭化物混入)	19世紀~近現代	C1
8		ビット群	暗灰色土		A2
9		ビット群	茶灰色土		D1
10	243SE010	井戸	暗灰色土	XII期	A2
11		ビット群	暗灰色土	13世紀~	B3
12		ビット群	暗灰色土	平安時代	B2
13		ビット	暗灰色土		A3
14		ビット群	暗灰色土		B1
15	243SE015	井戸	暗灰色土	8世紀中頃前後	B3
16		たまり	茶灰色砂		C2
17		ビット	暗灰色土		C2
18		溝	茶灰色土	古墳時代	B2
19		ビット	暗灰色土		B2
20	243SE020	井戸	灰色砂	VI期	D4
21		ビット	暗灰色土		D2
22		ビット群	暗灰色土		D2
23		ビット	灰色砂		D3
24		ビット群	暗灰色土		D3
25	243SE025	井戸	暗灰色砂質土	19世紀~近現代	B5
26		ビット	暗灰色土		C3
27		ビット群	茶灰色土		A2
28		ビット	茶褐色土		C1
29		溝	暗灰色土	近現代?	A5
30	243SX030	流路	灰黄褐色土	6世紀代	B2ほか
31		溝	茶褐色土	古墳時代	A4
32		ビット	暗灰色土	古代	A5
33		土坑	灰黄色土		D3
34		ビット	茶灰色土		B3
35		土坑	灰茶色土	平安前期	A5
36		ビット	灰黄色土	近世~	C4
37		ビット	灰黄色土		D5
38		水槽?		近代~	A1
40	243SE040	井戸	暗褐色土	VII期前後	B4
45	243SE045	井戸	灰褐色土	9世紀前半	B4
50	243SX050	流路	灰黄褐色土	古墳時代?	CD2他

表 14-3 第 243 次調査 出土遺物一覽表③

S-45 褐色土上	
頂 部	赤土、灰、灰、灰、灰、灰
上 部	赤土、灰、灰、灰、灰、灰
中 部	赤土、灰、灰、灰、灰、灰
底 部	赤土、灰、灰、灰、灰、灰
瓦	瓦(横子印、無文)

S-40 黒色土上	
頂 部	赤土、灰、灰、灰、灰、灰
上 部	赤土、灰、灰、灰、灰、灰
中 部	赤土、灰、灰、灰、灰、灰
底 部	赤土、灰、灰、灰、灰、灰
瓦	瓦(横子印、無文)

S-40 褐色土上	
頂 部	赤土、灰、灰、灰、灰、灰
上 部	赤土、灰、灰、灰、灰、灰
中 部	赤土、灰、灰、灰、灰、灰
底 部	赤土、灰、灰、灰、灰、灰
瓦	瓦(横子印、無文)

S-40 褐色土上	
頂 部	赤土、灰、灰、灰、灰、灰
上 部	赤土、灰、灰、灰、灰、灰
中 部	赤土、灰、灰、灰、灰、灰
底 部	赤土、灰、灰、灰、灰、灰
瓦	瓦(横子印、無文)

S-45 褐色土上	
頂 部	赤土、灰、灰、灰、灰、灰
上 部	赤土、灰、灰、灰、灰、灰
中 部	赤土、灰、灰、灰、灰、灰
底 部	赤土、灰、灰、灰、灰、灰
瓦	瓦(横子印、無文)

S-45 褐色土上	
頂 部	赤土、灰、灰、灰、灰、灰
上 部	赤土、灰、灰、灰、灰、灰
中 部	赤土、灰、灰、灰、灰、灰
底 部	赤土、灰、灰、灰、灰、灰
瓦	瓦(横子印、無文)

S-45 褐色土上	
頂 部	赤土、灰、灰、灰、灰、灰
上 部	赤土、灰、灰、灰、灰、灰
中 部	赤土、灰、灰、灰、灰、灰
底 部	赤土、灰、灰、灰、灰、灰
瓦	瓦(横子印、無文)

S-50 灰褐色土上	
頂 部	赤土、灰、灰、灰、灰、灰
上 部	赤土、灰、灰、灰、灰、灰
中 部	赤土、灰、灰、灰、灰、灰
底 部	赤土、灰、灰、灰、灰、灰
瓦	瓦(横子印、無文)

赤土上	
頂 部	赤土、灰、灰、灰、灰、灰
上 部	赤土、灰、灰、灰、灰、灰
中 部	赤土、灰、灰、灰、灰、灰
底 部	赤土、灰、灰、灰、灰、灰
瓦	瓦(横子印、無文)

赤土上	
頂 部	赤土、灰、灰、灰、灰、灰
上 部	赤土、灰、灰、灰、灰、灰
中 部	赤土、灰、灰、灰、灰、灰
底 部	赤土、灰、灰、灰、灰、灰
瓦	瓦(横子印、無文)

表 15 243SE025 井戸枠使用瓦計測表

ラベル	長さ	最大幅	最小幅	厚さ
S-25井戸瓦 1段目	27.0	22.7	22.5	2.8
S-25井戸瓦 1段目	27.3	22.8	22.7	2.7~3.0
S-25井戸瓦 1段目	27.1	22.7	22.7	2.5~2.7
S-25井戸瓦 1段目	27.2	22.7	22.6	2.5~2.6
S-25井戸瓦 1段目	27.2	22.8	22.6	2.5~2.6
S-25井戸瓦 1段目	27.2	22.8	22.6	2.7~2.9
S-25井戸瓦 1段目	27.3	22.6	22.5	2.6~2.8
S-25井戸瓦 1段目	27.3	23.0	22.8	2.7~2.9
S-25井戸瓦 1段目	27.2	22.9	22.6	2.6~3.0
S-25井戸瓦 1段目	27.1	10.3	10.0	2.4~2.6(半割)
S-25井戸瓦 1段目	27.0	22.8	22.6	2.9~3.0
S-25井戸瓦	27.2	22.8	22.7	2.7~2.8
S-25井戸瓦 2-5段目	25.0	21.6	21.2	2.3~2.4
S-25井戸瓦 2-5段目	25.0	21.5	21.1	2.3~2.4
S-25井戸瓦 2-5段目	25.0	21.5	21.2	2.2~2.4
S-25井戸瓦 2-5段目	24.7	21.5	21.1	2.2~2.4
S-25井戸瓦 2-5段目	25.2	21.3	21.2	2.3~2.5
S-25井戸瓦 2-5段目	24.9	21.2	21.1	2.3~2.7
S-25井戸瓦 2-5段目	25.2	21.6	21.2	2.3~2.4
S-25井戸瓦 2-5段目	24.9	21.2	21.0	2.2~2.4
S-25井戸瓦 2-5段目	25.1	21.3	21.1	2.1~3.0
S-25井戸瓦 2-5段目	25.7	21.4	21.0	2.1~2.3
S-25井戸瓦 2-5段目	25.0	21.6	21.4	2.3~2.5
S-25井戸瓦 2-5段目	25.3	21.6	21.2	2.2~2.3
S-25井戸瓦 2-5段目	25.4	21.4	21.2	2.2
S-25井戸瓦 2-5段目	25.0	21.4	21.2	2.0~2.3
S-25井戸瓦 2-5段目	25.0	21.6	21.1	2.3~2.4
S-25井戸瓦 2-5段目	25.2	21.4	21.3	2.4~2.5
S-25井戸瓦 2-5段目	24.9	21.3	20.9	2.3~2.4
S-25井戸瓦 2-5段目	25.6	22.4	22.3	2.3
S-25井戸瓦 2-5段目	25.3	21.4	21.1	2.2~2.3
S-25井戸瓦 2-5段目	24.6	21.5	21.2	2.4
S-25井戸瓦 2-5段目	25.2	21.6	21.3	2.1~2.2
S-25井戸瓦 2-5段目	25.1	21.4	21.2	2.3~2.4
S-25井戸瓦 2-5段目	25.1	21.4	21.2	2.3
S-25井戸瓦 2-5段目	24.9	21.2	21.0	2.3~2.4
S-25井戸瓦 2-5段目	25.4	21.6	21.3	2.3~2.4
S-25井戸瓦 2-5段目	25.1	21.5	21.3	2.4~2.6
S-25井戸瓦 2-5段目	25.0	21.4	21.1	2.3~2.4
S-25井戸瓦 2-5段目	25.0	21.4	21.2	2.2~2.5
S-25井戸瓦 2-5段目	25.3	21.6	21.3	2.3
S-25井戸瓦 2-5段目	25.1	21.3	21.1	2.3~2.4
S-25井戸瓦 2-5段目	25.2	21.5	21.3	2.3~2.4
S-25井戸瓦 2-5段目	25.5	21.5	21.5	2.2~2.3
S-25井戸瓦 2-5段目	25.2	21.4	21.3	2.3~2.4
S-25井戸瓦 2-5段目	25.2	21.5	21.4	2.2~2.4
S-25井戸瓦 2-5段目	25.4	21.3	21.2	2.3
S-25井戸瓦 2-5段目	24.9	21.4	21.2	2.3~2.5
S-25井戸瓦 2-5段目	24.9	21.2	21.0	2.1~2.3
S-25井戸瓦 2-5段目	25.2	21.2	21.1	2.2~2.4
S-25井戸瓦 2-5段目	25.1	21.4	21.0	2.2
S-25井戸瓦 2-5段目	25.3	21.2	21.0	2.2~2.3
S-25井戸瓦 2-5段目	25.1	21.4	21.2	2.3~2.4
S-25井戸瓦 2-5段目	25.3	21.3	21.3	2.4
S-25井戸瓦 2-5段目	25.0	21.3	21.3	2.3~2.4
S-25井戸瓦 2-5段目	25.0	21.4	21.3	2.3~2.4

ラベル	長さ	最大幅	最小幅	厚さ
S-25井戸瓦 6段目①	25.0	21.3	21.3	2.2~2.4
S-25井戸瓦 6段目②	25.3	21.5	21.3	2.1~2.3
S-25井戸瓦 6段目③	24.9	21.3	21.2	2.4~2.5
S-25井戸瓦 6段目④	25.3	21.7	21.5	2.2~2.5
S-25井戸瓦 6段目⑤	24.9	21.1	21.1	2.4~2.8
S-25井戸瓦 6段目⑥	25.0	21.2	21.0	2.3
S-25井戸瓦 6段目⑦	25.2	21.5	21.4	2.1~2.3
S-25井戸瓦 6段目⑧	25.3	21.3	21.2	2.2~2.8
S-25井戸瓦 6段目⑨	25.3	21.3	21.3	2.3~2.5
S-25井戸瓦 6段目⑩	25.1	21.5	21.2	2.4
S-25井戸瓦 6段目⑪	25.1	21.6	21.4	2.3
S-25井戸瓦 7段目①	24.9	21.3	21.3	2.2~2.4
S-25井戸瓦 7段目②	25.0	21.3	21.2	2.5~2.6
S-25井戸瓦 7段目③	25.0	21.4	21.3	2.3~2.4
S-25井戸瓦 7段目④	25.2	21.2	21.1	2.2~2.4
S-25井戸瓦 7段目⑤	25.2	21.5	21.3	2.4
S-25井戸瓦 7段目⑥	25.1	21.4	21.3	2.3~2.4
S-25井戸瓦 7段目⑦	25.0	21.2	21.2	2.2
S-25井戸瓦 7段目⑧	25.3	21.6	21.4	2.3~2.4
S-25井戸瓦 7段目⑨	25.0	21.2	21.0	2.3
S-25井戸瓦 7段目⑩	25.3	21.5	21.4	2.3
S-25井戸瓦 7段目⑪	25.1	21.4	21.1	2.3~2.4
S-25井戸瓦 8段目①	25.2	21.6	21.3	2.4~2.6
S-25井戸瓦 8段目②	24.9	21.1	20.8	2.3~2.5
S-25井戸瓦 8段目③	24.8	21.1	20.9	2.3
S-25井戸瓦 8段目④	24.8	21.2	20.8	2.3~2.5
S-25井戸瓦 8段目⑤	25.1	21.5	21.2	2.4~2.5
S-25井戸瓦 8段目⑥	24.7	21.2	21.1	2.2
S-25井戸瓦 8段目⑦	25.3	21.6	21.2	2.3~2.4
S-25井戸瓦 8段目⑧	25.1	21.5	21.4	2.1~2.4
S-25井戸瓦 8段目⑨	25.1	21.3	21.2	2.2~2.5
S-25井戸瓦 8段目⑩	25.1	21.5	21.5	2.4~2.5
S-25井戸瓦 8段目⑪	25.0	21.5	21.2	2.2~2.4

(単位 cm)

6、第262次調査

(1) 調査に至る経緯

調査区は、太宰府市通古賀五丁目1229-4に位置する。ここは王城神社の南西約100mの地点にあり、江戸時代に庄屋を勤めた竹森家が生まれ、昭和初期（昭和8年頃）に建築された住宅が建っていた。

平成17年をはじめから、この土地の埋蔵文化財に関する問い合わせがあったが、4月19日に戸建分譲住宅建築を行うにあたって問い合わせがあった。同年6月14日に試掘調査を行ったところ、地下45cmにて遺構が検出され、平安・近世の遺物が確認された。計画では、敷地中央に道路が設けられ、その周りに個人住宅が建設されるということであった。このため、恒久構造物である道路の範囲とその周囲2m程度の記録保存が必要ということで、原因者負担による埋蔵文化財緊急発掘調査実施に向けての調整を行った。その後契約が整い、平成18（2006）年6月16日から同年8月23日にかけて発掘調査を実施し、井上信正が担当した。調査区は上記の内容で設定したが、調査で条坊区画に関する道路側溝とみられる遺構（262SD005）が検出されたため、対象地北西の一面に拡張区トレンチを入れることを申し入れ、了承されたため調査を行った。調査面積は総計143㎡である。調査時の出土遺物はコンテナ8箱で、その後整理を行い太宰府市文化ふれあい館収蔵庫に保管している。なお、条坊区画遺構および旧竹森邸の建物基礎等を検出したため、8月17日に地元通古賀地区の住民を対象に現地説明会を行った。

発掘調査を行った道路を除く宅地部分については、西側市道を基準にすると約25cmの深さに遺構は保存されている。

(2) 基本層位 (Fig.65)

調査区内は、近世以降の堆積層が約50cm堆積している。それを除去すると基盤層（地山）の灰褐色粗砂が現れる。周辺では、この粗砂層の上に淡黄色シルト層が堆積しているのが確認されているため、かなり削平を受けていることがわかる。これを示すように、平安期以前の遺構はいずれも削平を受け、深さは浅かった。

調査では、遺構面直上に人工層位として黄茶色土層を設定し、遺構検出を行った。

(3) 検出遺構

建物

262SB015 (Fig.67, Pla.17・18)

調査区東半で検出した。径60～90cm程度の小穴に小石・礫・瓦を詰めたものを柱の基礎とする。調査区内では15基の小穴が確認されており、その規模は6.72×4.8m程度となる。調査直前まで建っていた建物が昭和8年頃の建築ということであり、柱基礎からは近代の陶磁器が出土していること、また1/2,500の都市計画図に図示されているこの建物と本遺構のプランもほぼ合致することから、この建物の柱基礎とみられる。

溝

262SD001

調査区南側で検出した。検出長8.98m、深さ0.2～0.3m程度を測る。埋土は黄褐色粘土塊を含む淡灰土である。出土遺物から近世～明治期の遺構とみられる。

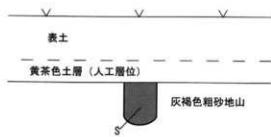


Fig.65 第262次調査土層模式図

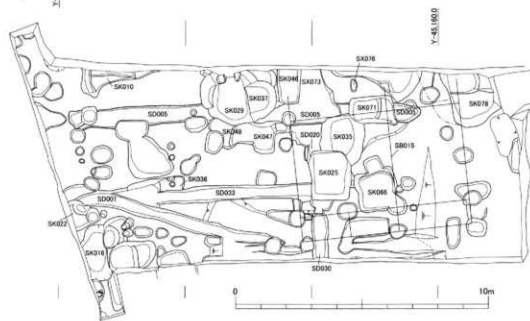
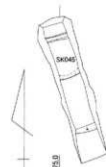


Fig.66 第262次調査遺構全体図 (1/150)

262SD005 (Fig.68, Pla.18)

調査区北側に沿って検出した。検出長13.9m、深さ0.1～0.2m程度を測る。埋土は灰茶色土と砂で、東側（D3～D4区）では黒茶色土となる。出土遺物は太宰府編年XI～XII期（概ね11世紀代）であり、それ以前に機能していたことが窺われる。なお、本遺構は90cm方復元家の13条路推定ライン上にあり、条坊区画に伴う遺構である。おそらく道路側溝であろう。

262SD020・030 (Fig.68)

調査区中央で検出した。SD020の検出長は3.6m、深さは0.05～0.1mを測る。SK035と接する付近の東側には礫等が並んだように検出された。埋土は茶色土と黄色粘土塊で構成されるが、その割合は後者が大半を占める。なお本遺構の埋土はSK025の埋土とほぼ同じであり、掘り下げに伴い土坑状となったためSK025とした。出土遺物は19世紀前半のものが含まれる。なお埋土等の切り合いはあるが、SD030と位置・形態とも類似しており、両者は同一遺構の可能性が高い。SD030は検出長2.02m、深さはSD020より深く、最大0.3mある。埋土は淡黄白色粘土である。

262SD033

調査区中央～西側で検出した。検出長は約9.4m、深さは0.25mを測る。埋土は茶色土の中に淡黄色粘土塊が多く含まれた状態で、東端ではSK025付近の埋土と重なるが、両者の違いは黄色粘土塊の量の差で決めたところもあり、実際には埋土の切り合いは無かった可能性もある。ここからセメント瓦とみ

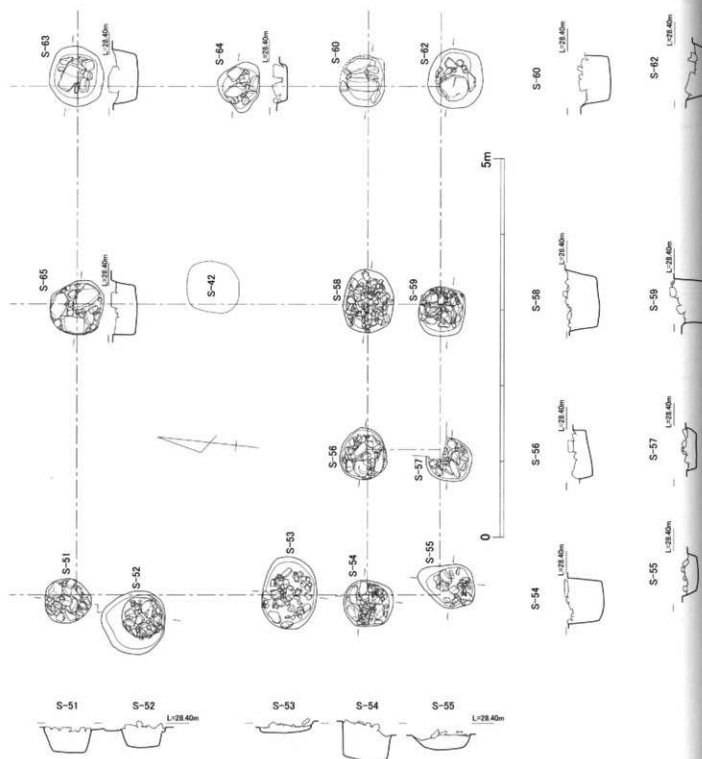


Fig. 67 262SB015 遺構実測図 (1/50)

られる遺物も出土している。

土坑

262SK010 (Fig. 68)

調査区北側で検出した。検出長3.1m、検出幅1.1m、深さ最大0.43mを測る。ここから8世紀の遺物が出土している。

262SK016

調査区西端で検出した。長軸2.23m、検出幅約1mを測る。埋土は灰茶色土混じりの砂である。ここから大宰府福年VII期(9c中～後期)の遺物が出土している。

262SK022

調査区西端で検出した。検出規模は1.2×0.6m。埋土は暗灰茶色土で、平安期以降の遺物が出土している。

262SK025 (Fig. 68)

調査区中央で検出した。長軸1.93m、短軸1.68m、深さ0.67mを測る。埋土は茶色土を主体としつつも、淡黄色粘土塊(直径10～20cm)が多く含まれる。SD020・030・033の埋土と類似しており、これらと関連して機能した遺構の可能性がある。ここからは19世紀前半の遺物が出土している。

262SK029

調査区中央北端で検出した。規模は1.4×2.03m、深さ1.04mを測る。底に数個の石を組んでいる様子が伺え、石組みの中に炭が堆積している。地山はかなりの火力で被熱し赤変している。埋土は上から灰黄色土(灰色土塊と細かな黄色土塊)、赤色粘土の順に堆積している。埋土中には瓦が多く、最終的にごみ穴として埋没したとみられる。出土遺物から近世以降の遺構とみられる。

262SK035

調査区中央で検出した。規模は2.07×1.72m、深さ0.35mを測る。埋土は黄褐色粘土塊をやや含む茶色粗砂である。

262SK036

調査区西側で検出した。規模は1.8×0.56m、深さ0.18mを測る。

262SK037 (遺物無し) (Fig. 68)

調査区中央北端で検出した。規模は1.5×1.12m、深さ0.67mを測る。底および壁面に石組みを施している。周囲の地山はかなりの火力で被熱し赤変している。埋土は上から灰黄色土(灰色土塊と細かな黄色土塊)、赤色粘土の順に堆積している。最終的にはゴミ穴として埋没したとみられる。出土遺物から近世・近代以降の遺構とみられる。

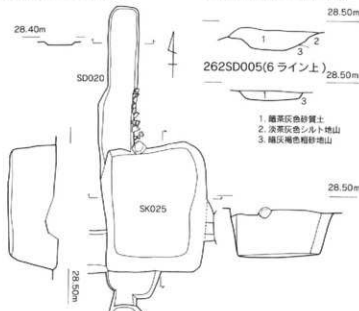
262SK045 (Fig. 68)

調査区北側の拡張区トレンチで検出したものである。トレンチ北半部に茶黒色土系の埋土が円形に検出されたため土坑とみて掘り下げを行ったが、判然とせず、かつ深い遺構と予想されたため、途中で掘削を止めている。ここから平安時代前～中期までの遺物が出土している。

262SK046

調査区中央北端で検出した。検出長1.38m、幅0.93m、深さ0.21mを測る。埋土は上から黒茶色土、黄色粘土、茶色土の順に堆積している。黄色粘土は薄くかつ直立しており、三和土のようでもあるため、何かの構造物だった可能性があるが、判然としなかったため、土坑として取り扱っている。ここからは近世の遺物が出土している。

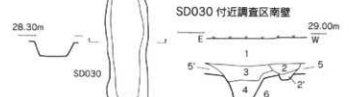
262SK047



262SD005(6ラン上)



28.50m



SD030 付近調査区南壁

29.00m



SD030土層名

1. 赤土

2. 褐色粘土

3. やや暗い淡灰褐色土

4. 淡黄白シルト質土

5. 暗黄褐色土

6. 淡灰赤中砂質土 (わずかに黄褐色粘土)

7. 赤土

8. 褐色粘土

9. やや暗い淡灰褐色土

10. 淡黄白シルト質土

11. 暗黄褐色土

12. 淡灰赤中砂質土 (わずかに黄褐色粘土)

13. 赤土

14. 褐色粘土

15. やや暗い淡灰褐色土

16. 淡黄白シルト質土

17. 暗黄褐色土

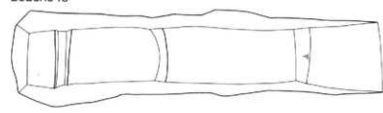
18. 淡灰赤中砂質土 (わずかに黄褐色粘土)

19. 赤土

20. 褐色粘土

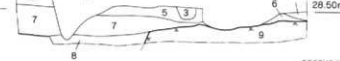
21. やや暗い淡灰褐色土

262SK045

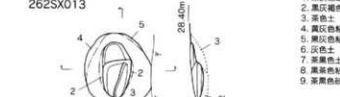


SK045 付近調査区東壁

28.50m



262SK013



262SK013土層名

1. 褐色粘土 (灰赤シルト)

2. 淡灰赤粘土 (硬質ではない)

3. 褐色粘土 (腐成による酸化層)

4. 淡灰赤粘土

5. 淡灰赤粘土 (わずかに2層)

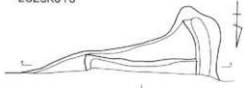
6. 淡灰赤シルト (わずかに2層)

7. 赤土

8. 褐色粘土

9. やや暗い淡灰褐色土

Fig. 68 第262次調査各遺構実測図 (SD005は1/40、SK013は1/20、その他は1/60)



28.40m

Y-45, 174.0

Y-45, 171.0

W E

28.40m

1. 赤土

2. 褐色粘土

3. 褐色暗色粘質土 (褐色粘土)

4. 淡黄白シルト質土

5. 暗黄褐色土

6. 淡灰赤中砂質土 (わずかに黄褐色粘土)

7. 赤土

8. 褐色粘土

9. やや暗い淡灰褐色土

10. 淡黄白シルト質土

11. 暗黄褐色土

12. 淡灰赤中砂質土 (わずかに黄褐色粘土)

13. 赤土

14. 褐色粘土

15. やや暗い淡灰褐色土

16. 淡黄白シルト質土

17. 暗黄褐色土

18. 淡灰赤中砂質土 (わずかに黄褐色粘土)

19. 赤土

20. 褐色粘土

21. やや暗い淡灰褐色土

22. 淡黄白シルト質土

23. 暗黄褐色土

24. 淡灰赤中砂質土 (わずかに黄褐色粘土)

25. 赤土

26. 褐色粘土

27. やや暗い淡灰褐色土

28. 淡黄白シルト質土

29. 暗黄褐色土

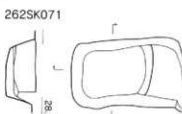
30. 淡灰赤中砂質土 (わずかに黄褐色粘土)

262SK037



28.60m

262SK071



28.50m

28.50m

28.50m

28.50m

28.50m

28.50m

28.50m

28.50m

28.50m

28.50m

28.50m

28.50m

28.50m

28.50m

28.50m

28.50m

28.50m

調査区中央で検出した。規模は1.24×0.9m、深さ0.32mを測る。ここから近世の遺物が出土している。

262SK048

調査区中央で検出した。規模は1.9×0.9m程度、深さ0.35mを測る。ここから近世の遺物が出土している。

262SK066

調査区東側で検出した。SK068の北側を覆うように切り込んでいる。深さ約0.1m。埋土は黒色土。

262SK071 (Fig. 68)

調査区東側で検出した。規模は1.75×1.1m、深さ0.46mを測る。SB015を構成する柱基礎 SX065が埋土に切り込んでいる。埋土は茶色粘土で、ここから19世紀の遺物が出土している。

262SK078

調査区北東隅で検出した。検出規模は2.08×1.8m程度、深さは1.0mを測る。埋土は上から黄茶色土、茶色土の順に堆積しており、ここから近現代の遺物が出土している。

その他の遺構

262SX003

調査区西端で検出した小穴群で、埋土は暗茶色土である。

262SX013 (Fig. 68)

調査区西側で検出した小穴で、焼けた明灰赤色を呈した層がある。規模は0.35×0.4m、深さは0.1mを測る。

262SX023

調査区西側で検出した小穴群である。いずれもSD005に切り込み、古代の遺物を多く含む。

262SX073

調査区中央北側で検出したたまり状遺構である。大宰府編年IX~X期(10世紀~11世紀はじめ)頃の遺物を上限とするが、これに覆われたSD005埋没時期が大宰府編年XI~XII期(概ね11c代)を示すため、これより後に堆積したことが窺える。

262SK076

調査区中央西寄りで検出した小穴である。規模は0.5×0.25m、深さ0.27mを測る。

(4) 出土遺物

建物

262SB015 出土遺物 (Fig. 69)

肥前系陶磁器

小鉢 (1) 口縁部付近の破片である。残存高1.7cm。素地は精良で白色を呈す。軸は透明釉で、内外とも藍色の呉須によりプリントされる。S-59出土。

国産陶器

猪口 (2, 3) 共に底部の破片である。2は残存高1.0cm、高台径3.0cm、高台には透かし状の切り込みが3ヶ所みられる。素地は乳白色を呈す。内外面とも透明釉がかかるが、高台及び外底は露胎となる。S-61出土。3は、残存高2.3cm、高台径3.1cm、素地は乳白色を呈す。内外面とも若干褐色味のある透明釉が薄く施されるが、墨付は釉が拭き取られている。S-65出土。

石製品

石臼か (4) 残存長13.1cm、残存幅9.5cm、厚さ6.5cmを測る。図上面は中心部に向かって傾斜し、図下面は摺り目がある。茶褐色~暗茶褐色を呈す。S-53出土。

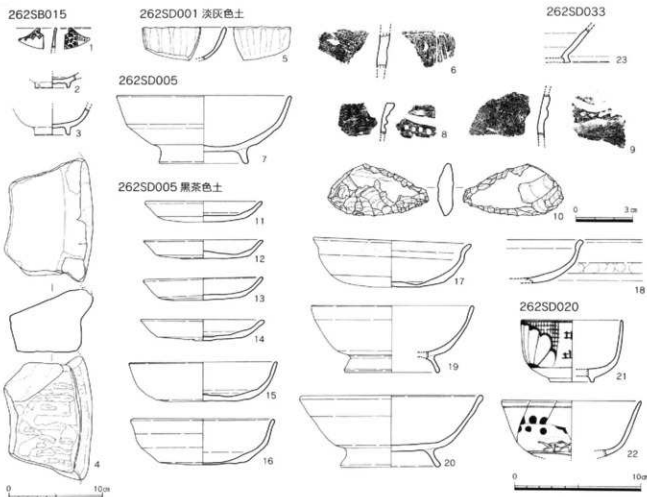


Fig. 69 第262次調査建物・溝出土遺物実測図 (4は1/4、10は1/2、その他1/3)

溝

262SD001 淡灰色土出土遺物 (Fig. 69)

肥前系陶磁器

皿 (5) 口縁部の破片である。残存高2.65cm。型押しにより蓮弁ないしは菊花風に仕上げる。素地は白色で、内外面とも青みがかった透明釉をやや厚めに施す。

縄文土器

深鉢 (6) 図の天地高で2.9cmを測る。内面は斜横位のナデ調整、外面はナデおよび押しによる文様が窺える。胎土は4mm以下の滑石粒、1mm以下の黒色粒、また砂粒を含む。焼成は良好。外面は黒茶色～暗茶色。内面・断面は茶色～暗茶色を呈す。

262SD005 出土遺物 (Fig. 69, Pl. 24)

土師器

碗 (7) 口径14.8cm、器高5.8cm、高台径7.4cm。胎土は良好で1mm以下の砂粒・金雲母を含む。焼成は良好で、内外面とも橙褐色～淡橙褐色、断面は灰黒色を呈す。

縄文土器

深鉢 (8, 9) 8は口縁部の破片である。残存高2.7cm。内面はナデ、外面はナデ後にための沈線・刺突文を施す。胎土はやや粗く、2mm以下の砂粒および滑石粒を含む。焼成は良好で、内外面とも暗灰色、断面は暗灰茶色を呈す。9は残存高3.7cm。内面はナデ、外面はナデ後にための沈線・刺突文を施す。

胎土はやや粗く、4mm以下の砂粒および滑石粒を含む。焼成は良好で、内外面とも暗灰色、断面は暗黒灰茶色を呈す。阿高系。

石製品

石匙 (10) 幅5.3cm、高さ2.7cm、厚さ0.8cm、重量12.7g。安山岩製。

262SD005 黒茶色土出土遺物 (Fig. 69, Pl. 25)

土師器

小皿 a (11～14) 口径10.0～10.5cm、器高1.6～1.9cm、底径7.1～7.85cmを測る。いずれも底部切り離しは回転ヘラ切り。

杯 a (15) 口径12.6cm、器高3.3cm、底径9.6cm。底部切り離しは回転ヘラ切り。胎土は2mm以下の砂粒を含み、焼成は良好。淡褐色～淡灰白色を呈す。

碗 a (16) 口径12.3cm、器高3.95cm、底径7.4cm。底部切り離しは回転ヘラ切り。胎土は1mm以下の砂粒を含み、焼成は良好。淡橙褐色～淡灰茶褐色を呈す。

丸碗 a (17) 口径13.4cm、器高4.0cm、底径9.8cm。口縁部に煤が付着する。底部切り離しは回転ヘラ切り。胎土は3mm以下の白色砂粒を多く含み、焼成は良好。にぶい橙色を呈す。

中碗 a (18) 残存高3.95cm、口径は13cm前後に復元される。内面はミガキbを施し、外面は押し出しによる指押さえが観察される。胎土は2mm以下の砂粒を含み、焼成は良好。乳茶褐色～乳白色を呈す。

碗 c (19, 20) 19は口径13.8cm、器高5.7cm、高台径8.1cm。胎土は2mm以下の砂粒を含み、焼成は良好。淡橙褐色を呈す。20は口径15.6cm、器高6.1cm、高台径8.5cm。底部切り離しは回転ヘラ切り。胎土は2mm以下の砂粒を含み、焼成は良好。淡乳茶褐色～淡茶色を呈す。

262SD020 出土遺物 (Fig. 69)

肥前系陶磁器

小碗 (21) 口径8.6cm、器高5.3cm、高台径3.8cm。素地は淡灰白色で精良。内外面に灰青色の呉須で絵付けされ、やや青味を帯びた透明釉が薄く施される。高台皿付けのみ露胎。

碗 (22) 口径12.8cm、残存高4.8cm。素地は白色で精良。内外面に明るい青色の呉須で濃淡のある絵付けがなされ、少し青味がかつた透明釉が薄く施される。

262SD033 出土遺物 (Fig. 69)

須恵器

杯 (23) 残存高3.0cm。内底は一段凹むようである。胎土は0.5mm未満の白色砂粒をごく少量含むが、混入物も少なくきめも細かい。底部切り離しは糸切りとみられ、その他は内外とも回転ナデを施す。焼成・還元とも良好。瀬戸内辺りからの搬入品とみられる。

土坑

262SK010 出土遺物 (Fig. 70)

須恵器

蓋 (1) 残存高1.3cm。外面天井部は回転ヘラ削りを施す。胎土は1mm以下の砂粒を含む。焼成は良好だが、還元は不良。灰色～暗灰色を呈す。

杯 c (2) 底部の破片である。残存高1.5cm。胎土は1mm以下の砂粒を含む。焼成・還元ともに良好。淡灰色を呈す。

土師器

杯 c (3) 底部の破片である。残存高1.0cm。胎土は3mm以下の砂粒及び、1mm以下の赤橙色粒・黒色粒等を含む。焼成は不良で、橙色を呈す。

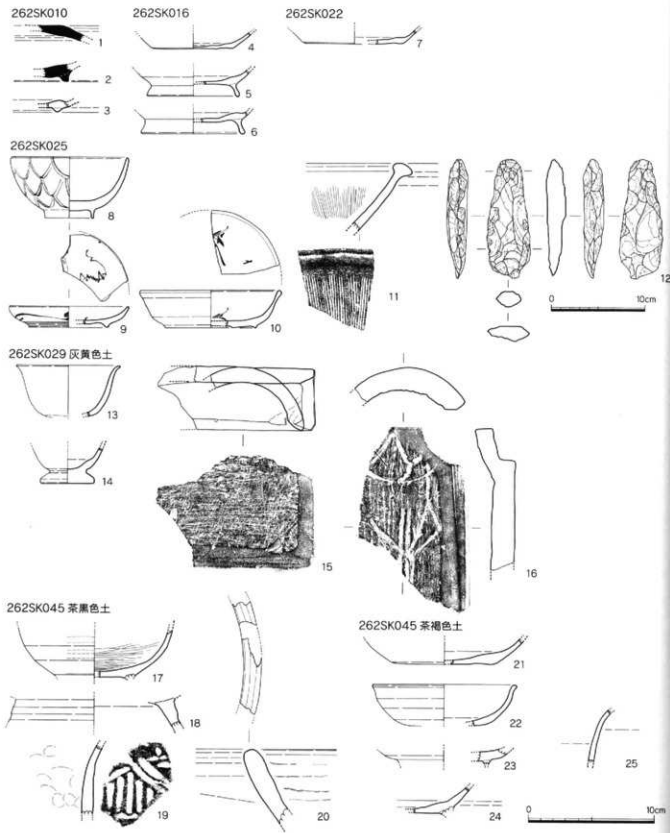


Fig. 70 第262次調査土坑出土遺物実測図 (12・15・16は1/4, その他1/3)

262SK016 出土遺物 (Fig. 70)

土師器

坏 a (4) 底部の破片である。残存高1.4cm、底径6.8cm。底部切り離しは回転ヘラ切り。胎土は0.5~1mmの砂粒を含む。焼成は良好で、淡灰橙白色を呈す。

碗 c (5, 6) 5は底部の破片である。残存高2.2cm、高台径7.8cm。底部切り離しは回転ヘラ切り。胎土は0.5~1mmの砂粒を含む。焼成は良好で、淡灰色~淡灰黄褐色を呈す。6も底部の破片である。残存高1.85cm、高台径8.8cm。胎土は0.5~2mmの砂粒を含む。焼成は良好で、淡灰色~淡褐灰色を呈す。

262SK022 出土遺物 (Fig. 70)

土師器

坏 a (7) 底部の破片である。残存高1.15cm、底径8.6cm。底部切り離しは回転ヘラ切り。胎土は0.5~2mmの砂粒をごく少量含む。焼成はやや不良で、淡灰橙白色~淡灰白色を呈す。

262SK025 出土遺物 (Fig. 70)

肥前系陶磁器

くらわん小碗 (8) 口径10.0cm、器高5.2cm、高台径4.2cm。素地は淡灰白色で緻密。外面に淡灰青色の呉須で絵付けされ、透明釉が薄く施される。高台皿付けのみ露胎。

皿 (9, 10) 9は、口径10.2cm、器高1.8cm、高台径6.7cm。素地は白色で緻密。内外面に淡灰青色の呉須で絵付けし、淡青色がかった透明釉を施す。高台皿付けのみ露胎。10は口径12.0cm、器高3.2cm、高台径7.7cm。素地は白色で緻密。内面に淡灰青色の呉須で絵付けし、少し青味がかかった透明釉を薄く施す。高台は蛇ノ目凹形高台で、輪状に軸を拭き取る。

国産陶器

播鉢 (11) 口縁部の破片である。残存高3.8cm。内外面ともナデを施し、内面には播り目を施す。胎土は0.5~3.0mmの砂粒を多く含み、暗赤褐色を呈す。内外面とも暗灰褐色の釉がかかる。

石製品

石斧 (12) 長さ12.6cm、幅4.45cm、厚さ2.1cm。淡灰色~淡褐灰白色を呈す。安山岩製。

262SK029 灰黄色土出土遺物 (Fig. 70)

肥前系陶磁器

小碗 (13) 口径8.8cm、残存高4.4cm。素地は乳白色で緻密。内外面とも淡黄灰色の透明釉をやや厚めに施す。軸は細かい貫入がみられる。なお外面底部は露胎している。

国産陶器

花入 (14) 残存高3.0cm、底径4.6cm。胎土は0.5mm~2mmの白色砂粒を少量含む。内面及び体部外面に光沢のある暗茶色~黒色・黒茶色の釉が施される。焼成は良好。なお底部切り離しは糸切り。

瓦類

丸瓦 (15) 16.8×10.0cmが残存する。厚さは1.6cm。外面は平滑で、内面は粗い布目痕が観察される。端部は面取りのためヘラ切りを施す。胎土は0.5~1mm程度を主体とする砂粒を微量含む。焼成還元とも良好。瓦質に仕上がりが、灰色~暗灰色~淡褐灰色を呈す。

製斗瓦 (16) 製品の高さが4.4cmと薄いため、製斗瓦とした。19.8×11.7cmが残存する。厚さは2.45cm。外面は平滑で、内面は布目痕が観察される。端部は面取りのためヘラ切りを施す。胎土は0.5~1mm程度の白色砂粒を微量含む。焼成は良好。還元は不良で瓦質に仕上がる。暗褐色~暗橙灰色~淡灰橙褐色を呈す。

262SK045 茶黒色土出土遺物 (Fig. 70, Pla. 25)

黒色土器 A 類

椀 c (17) 残存高 4.3cm、高台径 6.8cm、内面に細かなミガキ c を施す。胎土は 1mm 以下の白色砂粒を含み、きめ細かく緻密である。焼成は良好で、内面は黒色、外面は鈍い橙色から淡灰色を呈す。

土師器

鉢 (18) 高台の破片である。残存高 2.5cm、体部接合箇所の高台径 13.4cm、内外面とも回転ナデを施す。胎土は 2mm 以下の白色～茶色砂粒および微細な雲母を含む。焼成は良好で、淡橙褐色～茶褐色を呈す。

甕? (20) 甕とすると体部上端とみられる。残存高 6.5cm、内外面ともヨコナデを施し、外面に粘土紐の痕跡がみられる。胎土は 4mm 以下の白色砂粒および微細な雲母粒子等を混入する。焼成は良好で、白橙色～淡黄褐色～黄褐色～灰褐色を呈す。

縄文土器

鉢 (19) 残存高 6.0cm。内面はナデおよび指頭痕がみられ、外面は条痕を施す。胎土は 1mm 以下の白色砂粒、角閃石等を含む。きめは粗くはない。焼成は良好で、茶褐色～暗茶褐色～茶黒色を呈す。

262SK045 茶褐色土出土遺物 (Fig. 70)

土師器

坏 a (21) 底部の破片である。残存高 2.0cm、底径 9.0cm、外面は回転ナデを施し、内面は回転ナデ後ナデを施す。底部切り離しは回転へラ切り。胎土は 1.5mm 以下の白色砂粒・茶色粒及び微細な雲母を含む。焼成は良好で、にぶい橙色を呈す。

丸椀 a (22) 口径 12.3cm、残存高 3.5cm、底径 6.4cm。内外面とも回転ナデを施す。底部切り離しはへら切りとみられる。胎土は 1mm 以下の白色砂粒及び細かな雲母を含むが精良。焼成は良好で、褐灰色を呈す。口縁部外面は淡い橙褐色を呈す。

椀 c (23、24) 23 は、底部の破片である。残存高 1.1cm、体部接合箇所の高台径 8.0cm、胎土は 1mm 以下の白色砂粒を含みきめ細かい、焼成は良好で、淡褐灰色を呈す。24 は、底部の破片である。残存高 2.3cm。胎土は 1mm 以下の白色砂粒を含みきめ細かい、焼成は良好で、淡橙褐色を呈す。

灰釉陶器

瓶 (25) 頸部の破片である。残存高 4.5cm。胎土は 0.5mm 以下の黒色粒を多く含み、白色砂粒を少量含む。釉はうすく緑味のある透明釉で、外面に薄く施され、内面にも口縁部側に自然釉的に若干釉が付着している。内外面とも回転ナデ後施釉する。焼成は良好。

262SK046 黒茶色土出土遺物 (Fig. 71)

肥前系陶磁器

皿 (26) 口径 14.3cm、器高 4.0cm、高台径 4.8cm。素地は精良で灰白色を呈し、薄く青味がかった光沢のある透明釉が内外面とも 0.1～0.5mm の厚さで施され、その後、底部内面は重ね焼した部分の釉を輪状に掻き取り、また高台畳付けは釉を拭き取る、いわゆる蛇ノ目軸剥ぎを行う。

262SK047 出土遺物 (Fig. 71)

国産陶器

播鉢 (27) よく使用され磨耗している播鉢である。残存高 7.2cm、高台径 12.8cm。素地は 0.1～0.5mm の白色砂粒を多く含み、細かな空隙と 3mm 以下の黒色粒子も見られる。また褐釉が内外面に施され、高台畳付けは釉が拭き取られている。

262SK048 出土遺物 (Fig. 71)

国産陶器

播鉢 (28) 残存高 4.9cm、底径 12.2cm。素地は 2mm 以下の白色砂粒を多く含む。また褐釉が内外面

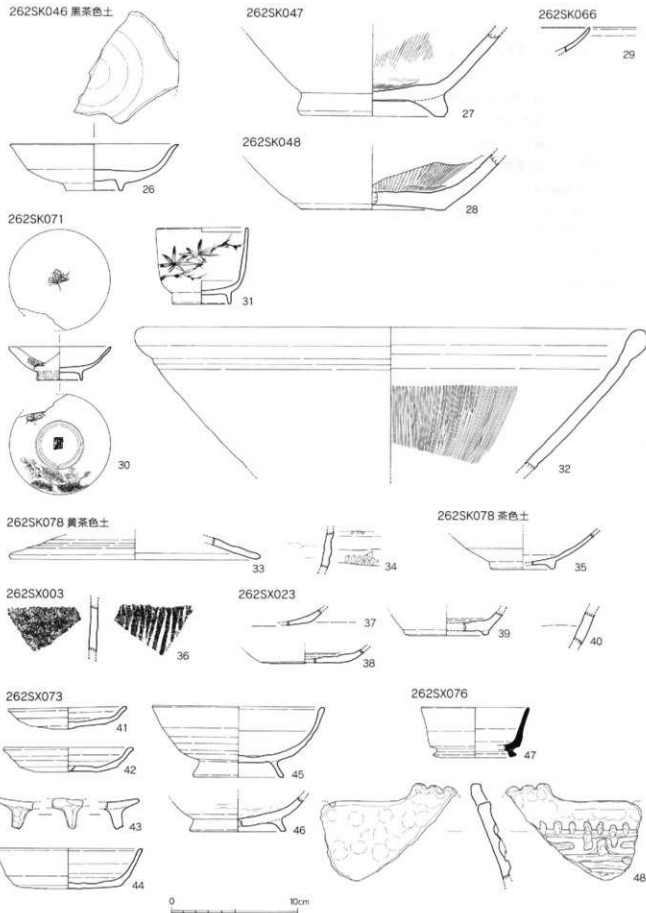


Fig. 71 第 262 次調査土坑・その他の遺構出土遺物実測図 (1/3)

に施される。底部は露胎で、回転ナデ後ナデを施す。

262SX066 出土遺物 (Fig. 71)

国産陶器

皿 (29) 残存高 2.1cm。素地は 0.3mm 以下の白色砂粒を少量含むものの精良である。内面～外面口縁部にかけて透明度が低いもの光沢のある灰青色～緑色の釉が施され、その他の外面には光沢のある薄緑味のある釉がごく薄く施されている。

262SX071 出土遺物 (Fig. 71)

肥前系陶磁器

蓋 (30) 口径 8.7cm、器高 2.9cm、高台径 4.0cm。素地は白色で精緻。内外面に染付けによる絵付けを行い、若干青味がかった光沢のある透明釉を内外面に施す。高台畳付けのみ軸を試き取る。最後に底部外面に印判状に朱色の絵付けが施される。

湯呑椀 (31) 口径 7.8cm、器高 6.5cm、高台径 5.0cm。素地は白色で精緻。外面に藍色の須帯で絵付けを行い、若干青味がかった光沢のある透明釉を内外面に施す。高台畳付けのみ軸を試き取る。

国産陶器

播鉢 (32) 復元口径 44.0cm、残存高 11.1cm。内外面ともナデを施し、内面には播り目を施す。素地は 2.0mm 以下の白色砂粒を含み、内外面に光沢のある茶褐色の釉が薄くかかる。

262SX078 黄茶色土出土遺物 (Fig. 71)

土師器

蓋か (33) 円盤状の遺物の破片で、蓋としているが別の器種の可能性もある。口径 19.8cm、残存高 1.7cm。内面端部および外面は回転ナデ、端部以外の内面はナデを施す。胎土は 1mm 以下の白色砂粒を含み、また雲母・茶色粒も少量含むが精良である。焼成は良好で、淡白橙色を呈す。

縄文土器

深鉢 (34) 残存高 3.0cm。内面は指頭痕がみられるが、調整ははっきりしない。外面には刻み目の文様を施す。胎土は 1mm 以下の白色砂粒、また滑石粉を大量に含む。焼成は良好で、暗茶色～茶黒色を呈す。

262SX078 茶色土出土遺物 (Fig. 71)

白磁

皿 (35) 残存高 3.1cm、高台径 5.6cm。柔らかな白色の素地に、わずかに青味のありかつ光沢のある透明釉が内外面に施される。高台は削り出しで仕上げ、露胎している。XI-3b 類。

その他の遺構

262SX003 出土遺物 (Fig. 71)

縄文土器

深鉢 (36) 残存高 3.8cm。内面はナデ調整、外面はアナダラ類の貝の腹縁による貝殻条痕文を施す。胎土は 3mm 以下の砂粒を含む。焼成は良好で、黒茶色～淡黒茶色～淡茶灰褐色を呈す。

262SX023 出土遺物 (Fig. 71)

土師器

坏 a (37, 38) 37 は、底部の破片である。残存高 1.4cm。磨耗しているが、底部切り離しは回転ヘラ切りである。胎土は 1mm 以下の白色砂粒を少量含む。焼成はやや不良で、淡灰白色から淡灰白黄褐色を呈す。38 は、底部の破片である。残存高 1.2cm、底径 7.7cm。底部切り離しは回転ヘラ切り。胎土はきめ細かく、焼成は良好。淡灰橙褐乳白色を呈す。

坏 c (39) 底部の破片である。残存高 2.0cm、高台径 7.1cm。胎土は 3mm 以下の砂粒を少量含む。焼成は良好で、暗灰褐色～褐灰色を呈す。

縄文土器

深鉢 (40) 残存高 3.0cm。内外面ともナデ調整を施す。胎土は 3mm 以下の滑石粒子を非常に多く含む。焼成はやや良好で、淡灰褐色～淡灰茶色～暗茶灰褐色を呈す。阿高系。

262SX073 出土遺物 (Fig. 71)

土師器

小皿 a1 (41, 42) 41 は、口径 10.0cm、器高 1.9cm、底径 8.6cm。底部切り離しは回転ヘラ切り。胎土は 1mm 以下の白色砂粒及び 0.5mm 以下の雲母粒子を含む。焼成は良好で、淡橙褐色～淡褐色を呈す。42 は、口径 11.0cm、器高 2.1cm、底径 8.4cm。底部切り離しは回転ヘラ切り。胎土は 1.5mm 以下の白色砂粒等を含む。焼成は良好で、淡黄褐色を呈す。

脚付小皿 (43) 0.9cm 程度の小皿に脚を接合する。残存高 2.6cm。胎土は 1mm 以下の白色砂粒を含み、精良。焼成は良好で、白橙褐色を呈す。

坏 a (44) 口径 12.5cm、器高 3.5cm、底径 9.0cm。底部切り離しは回転ヘラ切り。胎土は 2mm 以下の砂粒を含み、焼成は良好。淡橙褐色を呈す。

坏 c (45) 口径 14.6cm、器高 6.0cm、高台径 7.7cm。底部切り離しは回転ヘラ切り。胎土は 3mm 以下の砂粒を含み、焼成は良好。淡橙褐色～淡黄褐色を呈す。

黒色土器 B 類

坏 c (46) 残存高 2.9cm、高台径 8.2cm。底部切り離しは回転ヘラ切り。胎土は 0.5mm 以下の砂粒を含み、焼成は良好。灰色～灰黒色を呈す。

262SX076 または SX014 出土遺物 (Fig. 71, Pla. 25)

これは、整理時に両遺構出土遺物が混ざったもので、いずれに帰属するか不明であるが、特筆すべき遺物として掲載する。

須恵器

小坏 c (47) 口径 9.2cm、器高 4.25cm、高台径 7.1cm。胎土は 0.5mm 以下の砂粒を含み、焼成・還元ともに良好。暗灰色を呈す。

縄文土器

深鉢 (48) 口縁部の一部とみられる。外面の文様に合わせて傾きを導き出して図化している。図上残存高 8.2cm。口縁部は大きめの刻み目が入り、また一段下がるように抉りが入った一部にも刻み目が見られる。内外面はナデ等による調整を施し指頭痕が観察される。外面には横方向の沈線と縦方向の沈線および刻み目で文様を構成している。胎土は 3mm 以下の滑石粉を多量含み、1mm 以下の砂粒もみられる。焼成は良好で、淡褐灰色を呈す。阿高式、もしくは坂の下式。

各層出土遺物

黄茶色土層出土遺物 (Fig. 72, Pla. 25)

土師器

小皿 a1 (1) 口径 7.2cm、器高 1.0cm、底径 5.1cm。底部切り離しは回転系切り。胎土は精良で、0.5mm 以下の雲母を少量含む。焼成は良好で、淡橙灰乳白色を呈す。

脚 (4) 鼎の脚とみられる。残存高 8.55cm、幅 3.2×2.5cm。胎土は 1mm 以下の白色砂粒を微量含む。焼成は良好で、淡橙乳灰白色を呈す。

土製品

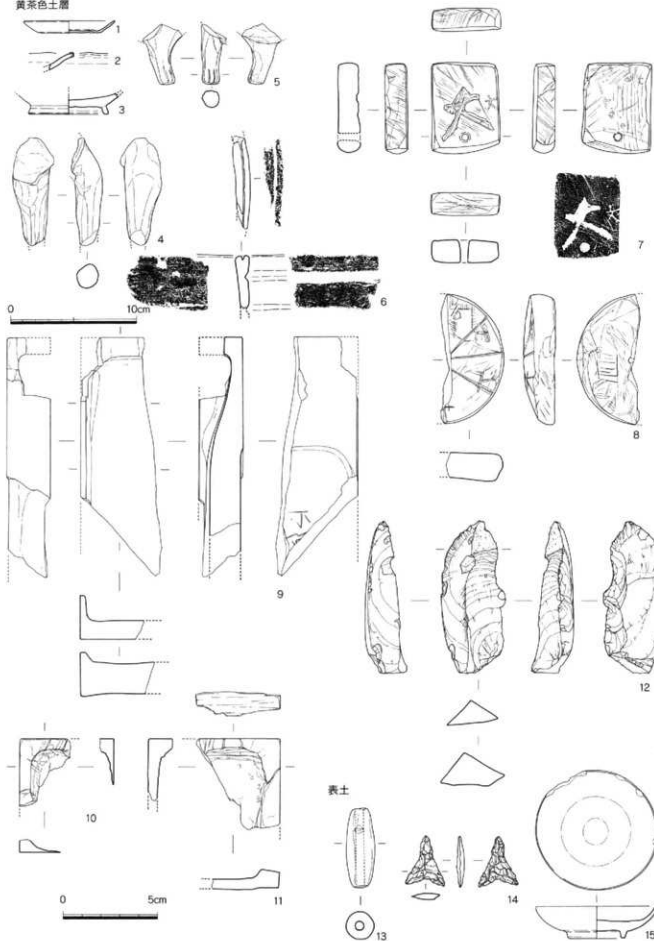


Fig. 72 第262次調査黄茶色土層・表土出土遺物実測図(7~14は1/2、その他1/3)

靴脚(5) 手捏ねで整形し、条痕で足指を表現している。残存高4.8cm、幅2.0×3.1cm、胎土は2mm以下の茶色粒を多く含む。焼成は良好で、淡褐色～淡灰色を呈す。

緑釉陶器

皿(2) 口縁部の破片で、輪花をつくる。残存高1.4cm。胎土は0.3mm以下の白色砂粒を含み、きめ細かく緻密である。釉は深緑色に発色し、内外面に薄く施される。焼成は良好で、硬く焼きしまる。

皿×碗(3) 底部の破片である。残存高1.7cm、高台径6.4cm。貼り付け高台で、内面にトチンによる目跡がある。胎土は淡灰乳白色を呈す。釉は淡い明緑色に発色し、内外面に薄く施されるが、底部及び高台底～内面は露胎である。

縄文土器

深鉢(6) 口縁部の一部とみられる。残存高4.4cm。口縁部上端および外面に凹み状の条痕が施される。胎土は0.5～2mmの滑石を多量含む。焼成は良好で暗茶色～黒茶色～茶色を呈す。阿高系。

石製品

権(7) 滑石製の権で、完形品とみられる。長さ4.8cm、幅3.6cm、厚さ1.2cm。全体は平坦に削り・擦痕が観察され、一部に穴を開けたような凹みもみられる。なお、一面において2ヶ所に「大」字を削って記し、大きい「大」文字の下に穿孔される。

円盤状製品(8) 円盤状製品の半分が残存しているものとみられる。直径6.9cm、厚さは1.0～1.1cm程度で、凸状となっているため全体としては厚さ1.4～1.5cm程度となる。内外面とも削り・擦痕が観察され、表面には線刻で放射状の条線が刻まれ、その間には「J」字状の線刻等が施される。裏面中央には穿孔の痕跡がみられるが、貫通していたかどうかは定かでない。

硯(9～11) 9は、頁岩製で、暗赤黒色を呈す。残存長12.8cm、残存幅4.35cm、全体の厚さは2.3cm。裏面は一段抉りが入り、文字もしくは製造社マークのような線刻がみられる。10は、粘板岩製で、灰白色を呈す。残存長3.6cm、残存幅2.7cm、残存厚0.7cmを測る。11も粘板岩製で、灰白色を呈す。残存長4.8cm、残存幅4.4cm、残存厚1.3cmを測る。

石核か(12) 長さ8.0cm、幅3.4cm、厚さ1.75cmを測る。横裂き剥片から端部2ヶ所で剥片を剥いたものか。安山岩製。

表土出土遺物 (Fig. 72)

土製品

土鉢(13) 長さ4.2cm、幅1.5×1.4cm。胎土は1mm以下の茶色粒および0.5mm以下の砂粒等を含む。焼成は良好で、にぶい橙色を呈す。全体的にやや磨耗している。

石製品

石鏃(14) 長さ2.7cm、幅2.1cm、厚さ0.4cm。安山岩製。

国産陶器

小皿(15) 口径9.6cm、器高2.55cm、高台径4.45cm。素地は白色を呈し、精良。内外面にわずかに青味のある光沢度の高い透明釉が薄く施される。なお、内面は蛇ノ目状に釉が極きとられ、高台畳付け

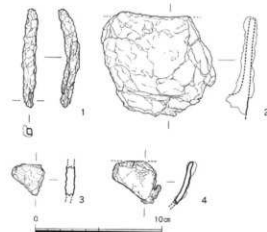


Fig. 73 第262次調査出土鉄製品実測図(1/3)

は軸が拭き取られている。

第262次調査出土金属製品 (Fig. 73)

鉄釘 (1) 断面四角形の釘である。長さ7.9cm、幅1.0×0.7cm、SX023出土。

用途不明鉄製品 (2~4) 2は、容器の体部と底部の可能性がある。図上で8.3×9.1cm、本体の厚さは0.5cm程度とみられる。SK035出土。3は、図上で2.5×2.55cm、本体の厚さは0.7cm程度である。2と厚さが似ていることから、同様の製品の可能性が窺える。SK036出土。4は容器口縁部の可能性もある。残存高3.35cm。黄茶色土層出土。

(5) 小結

調査区は近世～近代の削平を受けており、この頃の遺構が主体であった。

SB005は、調査前まで建っていた昭和8年頃に建築の住宅の柱基礎とみているが、今後聞き取り等で明らかになることもあると考える。それ以前には、溝・土坑が縦横に走っていたことが明らかとなった。SK025およびSD020・030・033などは埋土が類似しており、一体的に機能した可能性も窺える。またSK029・037等は石組みがなされた遺構でかなりの火力を利用したものということは判ったが、具体的に何かはわからなかった。類例増加が待たれる。

近世～近代の遺構と全面的な削平を縫うように、わずかに平安時代の遺構が残存していた。遺物には奈良時代のものも多く、遺構が展開していたことを窺うことができる。

こうした中、条坊道路側溝とみられる溝 (262SD005) が検出されたことは特筆すべきである。この約200m東には、第81次調査で検出された東西溝81SD245 (大宰府編年X期埋没) があり、いずれも90m条坊復元案の13条路推定ライン上に位置する (井上信正2009他)。両溝の間は、政府中軸線 (日本座標系Ⅱ系の座標北より34分24秒東に振れる) に基づくと、溝芯々距離は約7.7mである (数値は、『大宰府条坊跡Ⅶ』 (太宰府市の文化財第28集) P121掲載の81SD245の東西両端2点に関する政庁南門中点からの南北距離の平均値と、本報告の262SD005の同平均値の差である。)。やや広めとの印象も受けるが、この規模の道路遺構は、西鉄操車場跡の調査等でも確認されており、81SD245を道路北側溝、本遺構 (262SD005) を道路南側溝の一部とみることは可能であろう。

その他、縄文時代中～後期頃の土器片が複数出土していることは特筆すべきであろう。冒頭で述べたように近隣では本調査区の基盤層の粗砂層の上に淡黄色シルト等による層 (これも基盤層) が検出されるが、この中に縄文時代の石器が含まれている可能性があるものの土器出土例はあまり知られていない。太宰府市内をみても当該時期の遺構・遺物検出例は少ない。貴重な事例であり、類例の追加に期待したい。

参考文献

井上信正2009「大宰府条坊区画の成立」『考古学ジャーナル』588号



Fig. 74 262005と条坊復元図 (中央南北大道路は、最大幅で図示)

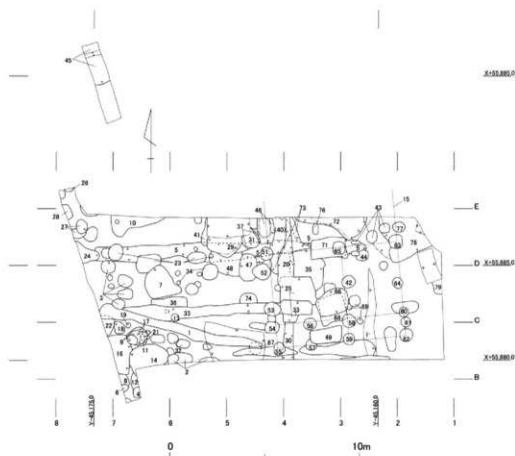


Fig. 75 第262次調査遺構略測図 (1/200)

表 16-1 第 262 次調査 遺構一覧表①

S-番号	遺構番号	種 別	備 考	埋土状況 (古一新)	遺構埋切合 (古一新)	時期	地区番号
1	262SD001	溝		淡灰色土 (黄褐色粘土層含む)		近世～明治	Cライン
2		カクラン				近現代	B5
3	262SK003	小穴群		暗茶色土		現代	C6
4		小穴		灰茶色土。シルト質。硬く締まる。		奈良～	A6
5	262SD005	溝		灰茶色土+砂 黒茶土 (D3～4区)		～XI-XII期	Dライン
6		小穴		暗茶褐色土		平安～	A6
7		たまり		白色砂及び暗茶褐色土		近現代	C6
8		小穴		淡黄灰色土	8-16	平安～	AB6
9		小穴群		白色粘土層上の小穴と暗茶褐色土層上の小穴	21-17-11-9	近代～	B6
10	262SK010	土坑	煎茶釜遺、灰c	灰茶色粘土		奈良～	D6
11		小穴		灰茶色土 (?)	17-11-9	平安～	B6
12		小穴		淡黄灰色土		平安～	A6
13	262SK013	小穴	焼成跡			平安～	C5
14		カクラン				-	B6
15	262SH015	建物					
16	262SK016	土坑		灰茶色土凝り砂	16-9	Ⅷ期～	B6
17		土坑		灰茶色土凝り砂	21-17-11	Ⅷ期～	B6
18		小穴		緑褐色土、土跡露出		平安?	B6
19		小穴		暗灰茶色土		Ⅷ期～	B6
20	262SD020	溝		黄色粘土層がほとんど占める。赤色土層上		～19c前	4ライン
21		小穴			21-17	-	B6
22	262SK022	土坑		暗灰茶色土	22-18	平安～	BC7
23	262SK023	小穴群			5-23	近世～	D5～6
24		たまり			5-24	平安～	D7
25	262SK025	土坑		黄茶色土 (茶色土の中に、淡黄褐色土塊 (径10～20cm) が多く含まれる。)		近世	C3～4
26		小穴		黒茶色土		近世～	E7
27		小穴群				近世～近代	D7
28		小穴	煎茶釜、土跡露出	灰褐色土		奈良～平安	D7
29	262SK029	土坑		赤色粘土→灰黄色土 (灰色土塊と細かな黄色土塊)	37-29	近世～	D4～5
30		溝		淡黄白色粘土		-	R3
31		小穴		灰色土		近代～	D4
32		小穴群					B5
33	262SD033	溝		黄茶色土 (茶色土の中に、淡黄褐色土塊が多く含まれる。)		現代	Cライン
34		小穴群			35-20-21、35-71	近世～	C5

表 16-2 第 262 次調査 遺構一覧表②

S-番号	遺構番号	種 別	備 考	埋土状況 (古一新)	遺構埋切合 (古一新)	時期	地区番号
35		土坑		黄褐色粘土層を穿ち含む赤色砂		35-25	CD3
36		土坑				36-33	不明 (近代～?) C5～6
37	262SK037	土坑		底および壁面に石組みを施している。堆山はかなりの火力で焼成し赤化している。最終的にはごみ穴として埋没したとみられる。		37-29	近世～近代
38		小穴				-	B4
39		溝					近現代
40		たまり		40と5との切り合いは明確ではなく、自信がない。		40-5	-
41		土坑		黒っぽい茶色土		41-29	近世～近代
42		小穴		少し石含む			近現代
43		小穴群					現代
44		小穴					近代～
45	262SK045	土坑×井戸		茶褐色土→茶褐色土			平安朝～中
46	262SK046	土坑		茶色土→黄褐色土 (上3層) →黒茶色土			近世 (17c前)
47	262SK047	土坑				48-47-15(S2)	CD4
48	262SK048	土坑				48-47	近世～
49		土坑		コンクリートによる基状構造物			CD4～5
50		瓦溝					昭和
51	262SH015	小穴		SB015の柱状。石が詰まっている。			近世～
52	262SH015	小穴		SB015の柱状。石が詰まっている。床多く含む。			近代～
53	262SH015	小穴		SB015の柱状。石が詰まっている。瓦多い。			C4
54	262SH015	小穴		SB015の柱状。石が詰まっている。			B4
55	262SH015	小穴		SB015の柱状。石が詰まっている。			B4
56	262SH015	小穴		SB015の柱状。石が詰まっている。			BC3
57	262SH015	小穴		SB015の柱状。石が詰まっている。			B3
58	262SH015	小穴		SB015の柱状。石が詰まっている。			近世～
59	262SH015	小穴		SB015の柱状。石が詰まっている。			B2
60	262SH015	小穴		SB015の柱状。石が詰まっている。			C1
61	262SH015	小穴		SB015の柱状。石が詰まっている。			BC1
62	262SH015	小穴		SB015の柱状。石が詰まっている。			B2
63	262SH015	小穴		SB015の柱状。石が詰まっている。			D1～2
64	262SH015	小穴		SB015の柱状。石が詰まっている。			C1～2
65	262SH015	小穴		SB015の柱状。石が詰まっている。			D2～3
66	262SK066	土坑		埋土は46測茶色土より黒い。		71-65	幕末 CD2～3
67		小穴		石詰まる。			B4
68		土坑		正方形		68-66	近世～
69		小穴群					C2
70		小穴群				70-66	-
71	262SK071	土坑		長方形。南東隅は別遺構とみられる。			19c～
72		土坑		茶色粘土			D2～3
73	262SK073	なまり状遺構		茶色粘土→黄褐色土		40-5-73	IX～X期 CD3～4
74		小穴					近世～近代
75		瓦溝					C4
76	262SK076	小穴		調査後、遺物がS-14出土。遺物と混ざってしまった。			D3
77		小穴		石多く含む			D1
78	262SK078	土坑		茶色土→黄褐色土			近現代
79		小穴		黄褐色土塊 (灰黄色砂りむかを含む)			近世～
黄茶土層	黄茶土層	人工層状					調査区域外
表土	表土	表土					

7. 第279次調査

(1) 調査に至る経緯

調査地は太宰府市朱雀6丁目168他で、大宰府政庁跡から南西に500m、御笠川の旧川道から南に約150mに位置する。

調査原因は共同住宅建設に伴うものであった。平成15(2003)年4月10日に共同住宅建設に先立ち、埋蔵文化財の取り扱いはについての問い合わせがあった。平成19(2007)年3月2日に試掘調査を行い、遺構は確認されたが、開発対象地全体には及んでいなかった。その後、計画の変更等があったが、最終的に共同住宅建設を行うことに決定し、発掘調査を行うこととなった。

発掘調査は平成21(2009)年8月4日から8月31日にかけて実施した。試掘調査は高橋学が行い、調査は宮崎亮一が担当した。開発対象面積は1962 m^2 であるが、建物の建築範囲で、試掘調査で遺構が確認された部分のみ調査を行った。よって、調査範囲以外の遺構は保存されている。調査面積は458 m^2 である。

(2) 基本層位

調査開始時点では、荒地であったがその直前は畑地であった。その最上層の耕作土とその下の真砂土があり、その下には同様に耕作土と床土があり、耕地の底上げを行ったことがわかる。その直下は砂粒が目立つ灰茶色土と淡灰色土であるが、これは包含層でもあり、昔の耕作土の可能性もあるが不明瞭である。

遺構面は茶褐色色砂や淡灰色砂がベースで、それに黄灰色土が混ざっている状態である。砂層の一部を掘削した限りでは遺物が含まれていないため、最低でも古代より前に堆積し安定した地盤と推測される。

(3) 検出遺構

溝

279SD002

検出長14.1m、最大幅0.87m、深さは最深で0.3mで、およそ0.2m前後の南北溝で、方位はN-2°40'-Eである。灰褐色土の堆積層の下から検出された。埋土はやや砂質の暗灰色土で流水があった過程で堆積した埋土であると推測される。調査地中央付近にある段があって、その下にこの溝があり、段と関係のある可能性も考えられる。

279SD007

検出長15m、幅1.45m、深さ0.4mの東西溝で若干蛇行している。溝は白磁碗IV類の遺物を含む堆積

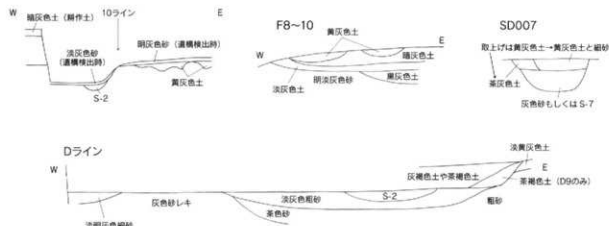


Fig. 76 第279次調査地・SD007土層模式図

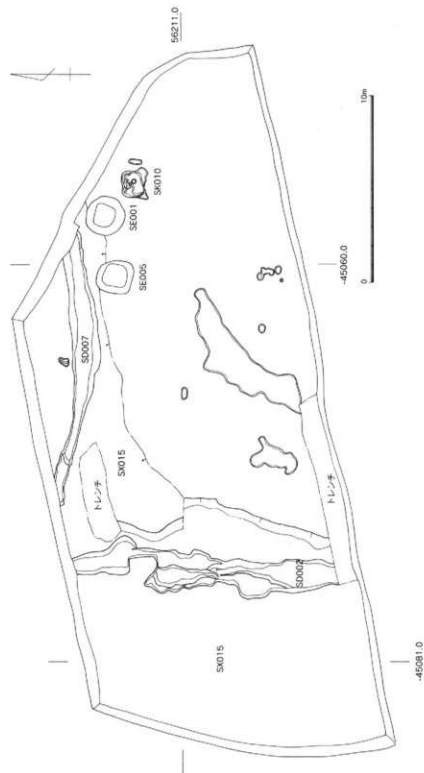


Fig. 77 第279次調査遺構全体図 (1/200)

層（黒褐色土）に切りこんでいる。溝は遺構面の高低差の関係で残りがいい東側ほど深い。底面レベルは西側に向かって若干下がっている。埋土は検出範囲の東側半分が2層あって、上層が黄灰色の細かい土で、下層が砂礫層で今回の調査地で遺物が最も多い遺構である。

井戸

279SE001 (Fig. 78, Pla.19)

掘り方が東西2.05m、南北2.02m、深さ0.98mの円形の井戸である。掘り方中央には0.92m×1.0mの方形の井戸枠痕跡が検出された。埋土は暗灰色土であるが、遺構検出時より遺構が若干広がっている。つまり、掘り方の壁際が地山と似た埋土であった。暗灰色土から井戸枠などの部材は殆ど検出されなかった。

遺構面から0.6m前後掘り下がったレベルで、方形の井戸枠痕跡と隅柱や小ピットが検出された。これらの上部には暗灰色土が覆っていたが、ピット内は空洞状態で検出された。隅柱は径0.09m、深さは掘り方底で止まっている。小ピットはウラゴメ土で検出され、径0.02～0.03mで、深さは掘り方底で止まっている。ピットの向きが若干斜めだったり方向にバラつきがあり、ウラゴメ土安定のために打ち込んだと推測される。井戸枠の部材片は全く残ってなく、井戸枠内から僅かに木質が検出されただけである。また、井戸枠痕跡の最下部には、瓦や礫が敷いてあったが、全面では確認されなかった。

279SE005 (Fig. 78)

掘り方が東西1.75m、南北1.86m、深さ1.08mの円形の井戸である。埋土は暗灰色土で、遺構面から0.25m下がった付近で方形の井戸枠痕跡が検出された。方形の井戸枠痕跡は0.64m×0.74mの大きさで、井戸枠関連の木材は残存していなかった。井戸枠内の埋土はやや砂質の暗灰色土で、礫を少し含んでいた。掘り方の底部の西側の方に礫が4個並んで検出されたが、周囲からは礫すら検出されなかったため、何を意図して置かれたものかは明確でない。

土坑

279SK010 (Fig. 78)

東西1.4m、南北1.15m、深さ0.32mで南側に若干広がる部分があるが、方形の土坑である。埋土は暗灰色土や黄灰色土の混合層を中心とし、乾燥した状態では硬い埋土であった。埋土の状態からすると、自然堆積というより、人為的に埋められたものと推測される。土坑の底面は凸凹しており、その中央付近に径0.22m、深さ0.1m程の円形ピットが検出された。

氾濫原

279SX015

調査地北側には区画整理される前の昭和55年に試掘調査を行い、遺構は確認されず、薬師山周囲は御笠川の氾濫原であったことが確認されている。

今回の調査でも西側から北西にかけて一段下がって、砂礫層が広がっていて、いわゆる御笠川の氾濫原の一部の様相を示している。トレンチを設定し掘削を行ったところ、氾濫原を調査した第70次調査のような大量の遺物は出土しなかった。御笠川の河川方向や川道の変化、その他諸条件によって、遺物の堆積量は異なるのかもしれない。また、東側との高低差を埋めている埋土（灰褐色土や茶褐色土）は砂層ではなかったが、この堆積層が氾濫によるものかどうかは不明である。

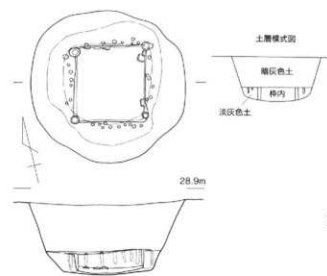
出土遺物からこの氾濫原の最終埋没は11世紀後半～12世紀前半と推測される。

(4) 出土遺物

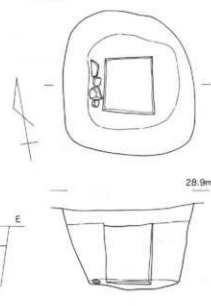
溝

279SD002 出土遺物 (Fig. 80)

279SE001



279SE005



279SK010

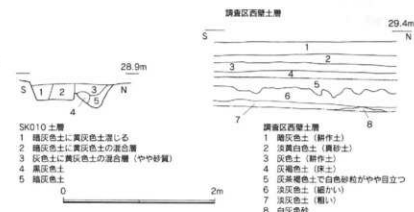
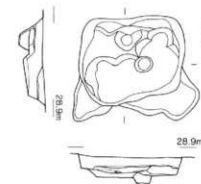


Fig. 78 第279次調査井戸・土坑・調査区土層実測図 (1/50)

土師器

- 小皿 a (1) 全体的に磨減し調整不明。色調は淡い灰白色を呈する。器高約1.25cm。
 椀 c (2) 低い高台を貼付し、外面底部には板状圧痕が残る。色調は淡褐色灰白色を呈する。復元高台径6.0cm。
 丸底坏 a (3) 体部中位の破片で、内面にはミガキがあり、外面には僅かに指頭圧痕が確認できる。
 高麗青磁
 椀 (4) 初期高麗青磁 III 類。胎土は灰色や淡い橙灰色で、白色粒を多く含み粗い。内外面に若干緑色がかった灰白色釉を施し、鬚付は釉を削り取っている。内面には白色の目跡が残る。

279SD007 出土遺物 (Fig. 80, Pla.25)

須臾器

- 円面硯 (6) 小片で、脚部は欠損しているが、透かし窓が施されている。胎土には僅かに白色砂粒がみられ、色調は淡灰色を呈する。全面回転ナデ調整で、上面に使用痕は認められない。
 鉢 (6, 7) 6は、僅かに外反させ、口縁部に向かって僅かに内湾しながら薄く仕上げている。内外面とも回転ナデで、内面屈曲部付近にハケ目が残る。胎土は精製され暗灰色から灰色を呈する。7は口縁部で、やや丸く肥厚させている。胎土は精製され、色調は淡灰白色を呈する。篠葉産。

須恵質土器

鉢 (8) 口縁端部で僅かに肥厚する。端部は回転ナデ。胎土には0.1cm前後の黒灰色斑点が多くみられる。色調は淡灰色で、焼成はやや不良。東播系。

土師器

小皿 a (9) 磨滅の目立つ小片だが、復元口径9.0cm、器高0.8cm、底径7.0cm、色調は淡い橙白色を呈する。

小皿 a × 坏 a (10) 復元底径7.8cm。胎土は微細な砂粒を含む。色調は黄灰白色を呈する。

椀 c (11) 丸みのある体部に、低く丸みのある高台を貼付する。復元高台径6.0cm、調整は磨滅し不明。外面は淡い橙褐色、内面は灰色を呈する。

丸底坏 a (12) 体部は押し出しているが、器面は磨滅し調整等は不明瞭。色調は淡い黄白色を呈する。

緑釉陶器

皿 (13) 胎土は灰色の須恵質で精製されている。高台部や内面に薄く緑色釉が残る。内面底部には浅く細い沈線が巡らされている。復元高台径は7.8cm、京都産。

椀 (14) 胎土は須恵質で精製されている。内面には光沢のない淡い暗緑色釉が薄く残る。底部外面には糸切り痕が残る。篠産産。

灰釉陶器

椀 (15) 僅かに肥厚した口縁部で、外面は回転ナデ、内面は淡い緑灰色の釉がまばらに点在している。胎土は淡い灰白色で精製されている。

甕 (16) 甕の肩部分で、外面には突帯が付く。胎土は淡い灰白色で、暗灰色粒が少量混じる。外面には半透明の淡い灰緑釉が薄くかかる。内面は回転ナデで、僅かに釉が付着する。

瓦類

軒平瓦 (17) 瓦当部分の破片で、瓦当面の上部も欠落している。側面は磨滅するがへら切りしている。均等唐草文が確認でき、その下に鋸歯文が明瞭に残る。還元不良で暗橙色を呈する。

縄文土器

甕 (18) 甕の体部中位部分と考えられる。く字形に屈曲させ、その部分に刻目突帯を貼付する。外面は磨滅して調整は不明だが、内面はヨコハクを施す。胎土は大小の白色砂粒を多く含む、雲母粒も少量含む。色調は暗灰色や灰色を呈する。

井戸

279SE001 暗灰色土出土遺物 (Fig. 79)

土師器

椀 c (1~3) 復元高台径は1は8.1cm、2は8.3cm、やや低い高台を貼付する。

黒色土器

椀 (4) 口縁端部がやや外反する。内面には単位は不明だがミガキが施されている。A類。

緑釉陶器

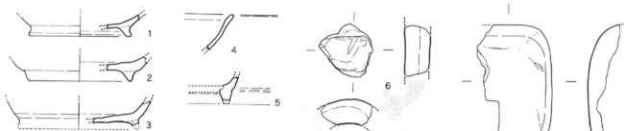
椀 (5) 高台部分で、回転ナデの後明緑色釉を薄く施輪するが、かなり剥落している。胎土は淡い灰白色で混入物は少なく、土師質である。

土製品

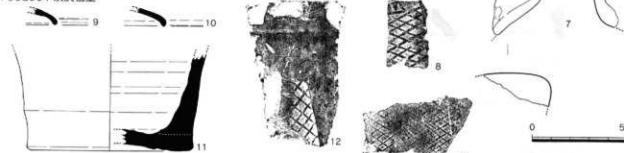
輪羽口 (6) 外面は淡い茶褐色や褐灰白色などに変色している。胎土には大小の白色砂粒を多く含む。石製品

砥石 (7) 砥石の一部で多くは欠損している。欠損部以外の面は研磨され、滑らかになっている。現

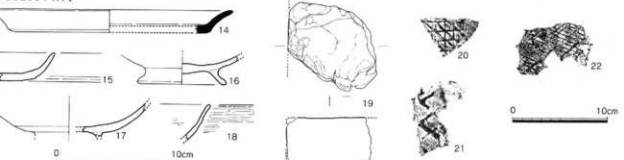
279SE001 暗灰色土



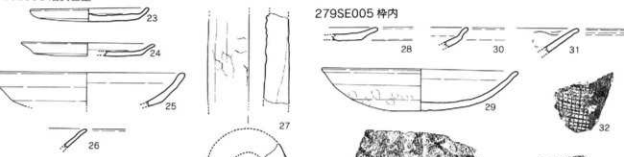
279SE001 淡灰色土



279SE001 特内



279SE005 暗灰色土



279SE005 灰褐色土

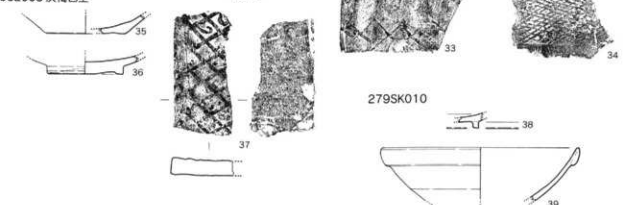


Fig. 79 279SE001・005、SK010 出土遺物実測図 (1/3、7は1/2、瓦は1/4)

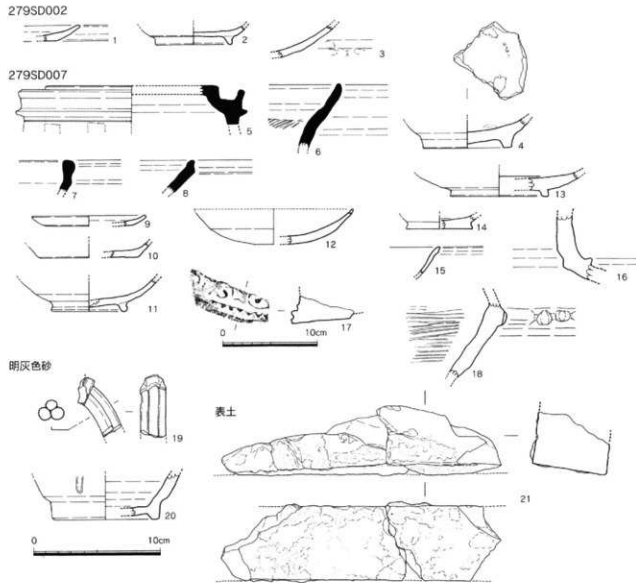


Fig. 80 第279次調査溝・その他の遺構出土遺物実測図 (1/3, 17は1/4)

存長8.3cm、幅4.0cmである。

瓦類

平瓦 (8) 外面には若干大きめの格子叩きを残す。焼成は良好で硬質に仕上がる。

279SE001 淡灰色土出土遺物 (Fig. 79)

須恵器

蓋3 (9, 10) 2点とも口縁端部を僅かに折り曲げている。9は還元良好で黒灰色を呈する。10は還元不良で淡灰白色を呈する。

蓋 (11) 内面は回転ナデで、内面底部は粗いナデ。外面はヨコナデである。胎土に微細な白色砂粒を含むが、混入物は少ない。焼成は良好で、色調は黒灰色から灰色である。復元底径13.0cm。

瓦類

平瓦 (12) 格子叩きで、叩きが行われていない部分はナデ調整である。

丸瓦 (13) 格子叩き。

279SE001 枠内出土遺物 (Fig. 79)

須恵器

皿a (14) 小片だが、復元口径19.4cm、器高1.8cm、復元底径16.0cmを測る。内外面は回転ナデ、底部は切り離した後ナデ。

土師器

坏a (15) 全体的に磨滅しているが、底部切り離しはヘラ切り。体部と底部の境は丸味を帯びている。胎土には茶褐色粒を少量含み、色調は淡橙色を呈する。

椀c (16) やや高い高台がハ字形に貼付される。復元高台径7.0cm、外面底部には板状圧痕が僅かに残る。

黒色土器

椀c (17) 体部外面の下半は回転ヘラケズリの後ナデ調整。その他は磨滅している。A類。

椀 (18) 磨滅が目立つがミガキcが口縁端部外面を中心に残る。B類。

瓦類

埴 (19) 欠損著しいが、表面が残る部分はナデ調整が観察できる。胎土は砂粒を多く含み、灰色や暗灰色を呈する。厚さは5.4cm。

平瓦 (20, 21) 20は正方形の格子目内に斜め線を入れている。21は大きな格子目の叩きを施す。

丸瓦 (22) 横長でやや不定形な格子目叩きを施す。

279SE005 暗灰色土出土遺物 (Fig. 79)

土師器

小皿a (23, 24) 23は口径8.4cm、器高1.05cm、底径7.9cm、底部切り離しは回転ヘラ切り。内面底部は不定方向のナデ。24は復元口径10.5cm、器高1.05cm、復元底径8.6cm、底部切り離しは回転ヘラ切りで、板状圧痕が残る。内面底部は不定方向のナデ。

丸底坏a (25) 復元口径15.4cm。内面にはミガキbを施す。外面は磨滅し調整不明。

緑釉陶器

椀×皿 (26) 口縁端部の破片で、回転ナデの後、淡緑色釉を薄く施す。胎土は淡灰色で焼成は良く須恵質である。

土製品

幅羽口 (27) 復元径6.4cm、胎土は淡灰色で、白色砂粒を少量含む。外面はナデ調整。

279SE005 枠内出土遺物 (Fig. 79)

土師器

小皿a (28) 底部切り離しは回転ヘラ切りで、内面底部は不定方向のナデ、外面底部には板状圧痕が残る。その他は回転ナデ。器高1.05cm。

丸底坏a (29) 口径15.4cm、器高3.3cm。内面はミガキbか。外面中位には指頭圧痕が残る、底部には板状圧痕が僅かに残っている。

緑釉陶器

皿 (30, 31) 30は、胎土はやや須恵質で淡灰色を呈し、内外面には磨滅が剥落が目立つものの淡緑黄色釉を施す。端部は屈曲後外反する。31は胎土が淡灰色の須恵質で、微細な白色粒を僅かに含む。内外面には光沢のある淡い暗緑黄色釉をきれいに掛けている。口縁端部内面にはヘラによる文様が施されている。東海産とみられる。

瓦類

平瓦 (32, 33) 32 は小さな正方形の格子叩きで、33 はやや大きめの格子叩きを施す。

丸瓦 (34) 若干不定形な菱形の格子叩きを施す。

279SE005 灰褐色土出土遺物 (Fig. 79)

土師器

杯 a (35) 復元底径 6.4cm, 内外面とも磨滅し調整不明。色調は淡い橙白色を呈する。

緑釉陶器

椀 × 皿 (36) 胎土は精製された須恵質で、灰色を呈する。高台は削り出しで、復元高台径 6.0cm。高台内面と皿付は露胎で、内面は磨滅しているが、淡緑色釉が僅かに薄く残る。京都産とみられる。

瓦類

平瓦 (37) 内面に大きめの格子叩きを施す。外面は細かい布目で、側面はヘラ切り。

土坑

279SK010 出土遺物 (Fig. 79)

緑釉陶器

椀 × 皿 (38) 胎土は淡灰色で精製されている。須恵質。内外面に光沢のある淡い黄緑灰色釉をきれいに施す。高台皿付は使用により釉がやや磨滅している。内面にはとても浅い沈線が施されている。

白磁

椀 (39) IV 類。

その他の遺構

明灰色砂出土遺物 (Fig. 80)

白磁

水注 (19) 把手部分で、断面径 0.9cm 前後の粘土を 3 本合わせ、幅 0.7cm の粘土帯で束ねている。全面に僅かに青みがかった灰白色釉を施している。

水注 × 壺 (20) 高台は削り出し高台で、復元高台径 8.5cm を測る。内面は強い回転ナデで、外面は磨滅しているが、僅かに乳白色釉が残っている。高台部分は露胎だったとみられる。体部外面には堆積物が施されている。

表土出土遺物 (Fig. 80)

瓦類

埴 (21) 厚さ 6.4cm、大きさは 22cm 以上を測る。焼成は良好で、外面の色調は黒灰色で、断面は淡灰白色を呈する。胎土には細かな空洞が散在している。表面には堆積中の砂粒が付着している。

(5) 小結

今回の調査では、御笠川の氾濫原がこの地まで広がっていたことが確認でき、ちょうどこの調査地から南側に遺構が残存することが確認できた。しかし、遺構密度は極めて希薄であった。井戸の深さは他の条坊内の井戸より若干浅いもの大きな差ではなかったが、ビット類が殆ど検出されなかったことを考えると当時の地表面は遺構面より高かった可能性が十分考えられる。また、東隣の榎寺公民館建て替えに伴う試掘調査では、条坊の南北道路と推測される遺構が GL-0.65m で確認されている。この榎寺公民館がある一帯の地盤は、調査地の表土面より 1m 程高い土地であるため、この調査地の高さも最大これと同じ高さまであった可能性が考えられる。氾濫原の状況からは、この削平が氾濫によるものかどうかは明確でない。このような遺構状態であったため、遺構の全体像は不明である。

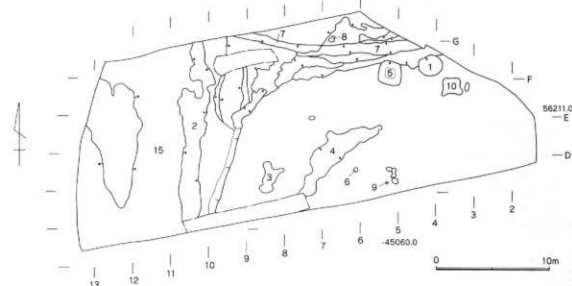


Fig. 81 第 279 次調査遺構略測図 (1/300)

表 20 第 279 次調査 遺構一覧表

S-番号	遺構番号	種別	埋土ほか	時期	地区
1	279SE001	井戸		平安時代前期	F4
2	279SD002	溝	サクサクの暗灰色土	11世紀後半～	10ライン
3		窪み	暗褐色土	8世紀後半	C8
4		窪み	暗褐色土と茶褐色土	平安時代後期	CD5・6・7
5	279SE005	井戸		11世紀後半～	F5
6		ビット			C6
7	279SD007	溝	白灰色粗砂	11世紀後半～	Fライン
8		ビット			G6
9		ビット			C5
10	279SK010	土坑		11世紀後半～	E3
15	279SX015	氾濫原		11世紀後半～12世紀前半	北～西側

表 21-1 第 279 次調査 出土遺物一覽表①

S-1 褐色土	
須 恵 部	蓋3, 蓋c, 环, 环a, 环c, 甕
土 師 部	环, 环a, 环c, 环d, 甕c, 甕, 甕, 甕, つまみ, 破片
須 恵 土 器 A	甕, 甕c, 破片
須 恵 土 器 B	破片
藤 岡 系青磁	甕-1(1), 甕1(1) 破片(1)
白 磁	甕1(1)
緑 釉 陶 器	甕(1)
金 属 製 品	平瓦(楕円形), 丸瓦(無文)
石 製 品	丸石, 砥石, 磨石破片
土 製 品	須石
S-1 褐色土	
須 恵 部	蓋3, 环, 环c, 甕, 甕
土 師 部	环, 环a, 环c, 甕, 甕, 甕, 甕
須 恵 土 器 A	甕, 甕c, 破片
須 恵 土 器 B	甕
瓦	平瓦(楕円形), 平瓦(楕円形), 碓子形
S-1 埴内	
須 恵 部	蓋c, 环, 环a, 甕
土 師 部	环, 环a, 甕c
須 恵 土 器 A	甕, 甕c
須 恵 土 器 B	甕
瓦	平瓦(楕円形), 碓子形, 丸瓦(楕円形), 埴
S-2	
須 恵 部	蓋3, 蓋c, 环, 环a, 环c
土 師 部	环, 环a, 环c, 环d, 甕c, 甕, 甕, 甕, 甕
須 恵 土 器 A	甕c?
須 恵 土 器 B	甕c, 破片
藤 岡 系青磁	甕-1(1)
白 磁	甕1(1)
高 麗 内 産 陶	甕-1(1)
瓦	平瓦(楕円形)
金 属 製 品	砥石
S-3	
須 恵 部	蓋3, 埴a
土 師 部	甕c, 大甕, 甕
S-4	
須 恵 部	蓋3, 环, 环c, 甕
土 師 部	环a, 甕, 破片
白 磁	甕1(1)
瓦	平瓦(楕円形), 丸瓦(無文)
石 製 品	丸石
S-5 褐色土	
須 恵 部	蓋3, 蓋c, 环, 环a, 环c, 甕, 破片
土 師 部	环, 环a, 环c, 环d, 甕c, 甕, 甕, 甕, 甕, 甕
須 恵 土 器 A	甕c, 破片
須 恵 土 器 B	破片
藤 岡 系青磁	甕-1-1(1)
白 磁	甕1(1)
緑 釉 陶 器	甕×甕, 破片
瓦	平瓦(楕円形), 碓子形, 丸瓦(楕円形)
金 属 製 品	砥石
石 製 品	平瓦(楕円形), 碓子形
土 製 品	須石
S-5 褐色土	
須 恵 部	蓋3, 蓋c, 环, 环a, 环c, 小甕, 破片
土 師 部	环, 环a, 环c, 及脱环, 甕c, 甕, カマド
須 恵 土 器 A	甕
須 恵 土 器 B	甕×甕
藤 岡 系青磁	甕1(1)
白 磁	甕1(1)
緑 釉 陶 器	甕×甕
金 属 製 品	砥石
石 製 品	平瓦(碓子形), 碓子形
土 製 品	須石
S-5 埴内	
須 恵 部	蓋3, 环, 环c, 甕
土 師 部	盖, 环, 瓦脱环, 甕c, 小甕a, 甕?
須 恵 土 器 A	甕c, 破片
須 恵 土 器 B	甕c, 破片
藤 岡 系青磁	甕1(1)
白 磁	甕1(1)
緑 釉 陶 器	甕×甕
金 属 製 品	平瓦(楕円形), 碓子形, 丸瓦(楕円形)
石 製 品	平瓦石
土 製 品	須石
S-6	
須 恵 部	破片
土 師 部	破片
金 属 製 品	砥石

S-7	
須 恵 部	蓋1, 蓋3, 蓋c, 环, 环c, 环a, 环, 甕, ツマミ
土 師 部	环, 破片
土 師 部	环, 环a, 瓦脱环, 甕c, 小甕, 甕, 甕
須 恵 土 器 A	甕c, 破片
須 恵 土 器 B	破片
藤 岡 系青磁	甕-1(1), 1-5(1), 11-1b(1) 破片(1)
白 磁	甕1(1), IV(3), VII(2), XII-1a(1), 破片(2)
白 磁	甕VI-1b(1)
瓦	平瓦(楕円形), 碓子形, 丸瓦(無文), 碓子系(1)
石 製 品	砥石
S-7 褐色土	
須 恵 部	蓋3, 环, 环c, 甕
土 師 部	环, 环a, 甕c, 小甕a, 甕, 甕, 甕, 甕
白 磁	甕-1(1)
瓦	平瓦(楕円形)
石 製 品	丸石
S-7 褐色土	
須 恵 部	蓋3, 盖2, 盖3, 盖c, 环, 环c, 环a, 甕, 甕, 甕
土 師 部	环, 环a, 环c, 环d, 甕c, 甕, 甕, 甕, 甕
須 恵 土 器 A	甕c, 破片
須 恵 土 器 B	甕?
藤 岡 系青磁	甕1(1)
白 磁	甕1(1)
高 麗 内 産 陶	甕-1(1), 甕1(1)
瓦	平瓦(楕円形), 碓子形, 丸瓦(楕円形), 碓子系(1)
石 製 品	砥石
S-8	
須 恵 部	甕
土 師 部	破片
白 磁	甕1(碓子系)
S-9	
須 恵 部	破片
土 師 部	破片
S-10	
須 恵 部	环, 破片
土 師 部	环, 甕, 破片
須 恵 土 器 A	破片
須 恵 土 器 B	甕×甕, 破片
白 磁	甕IV(2)
瓦	平瓦(碓子形)
石 製 品	碓子(須石)
土 製 品	碓子塊
黄灰色土	
須 恵 部	蓋3, 破片
土 師 部	环, 瓦脱环, 甕c, 甕, 破片
茶褐色土	
須 恵 部	蓋3, 甕c, 环, 甕
土 師 部	环, 环a, 瓦脱环, 甕c, 小甕a
須 恵 土 器 A	甕c
藤 岡 系青磁	甕1(1)
白 磁	甕IV(1)
瓦	平瓦(楕円形)
石 製 品	碓子
黒褐色土	
須 恵 部	蓋3, 环, 环c, 甕
土 師 部	破片
須 恵 土 器 B	破片
藤 岡 系青磁	甕-1(1), IV(1), V-2a(1) 甕-XI-7(1)
白 磁	甕IV(2)
瓦	平瓦(楕円形)
石 製 品	碓子(須石)
土 製 品	碓子塊
淡灰色砂	
須 恵 部	蓋3, 甕
土 師 部	环, 甕, 破片
白 磁	甕VI(1) 破片(1)

表 21-2 第 279 次調査 出土遺物一覽表②

褐色土	
須 恵 部	蓋3, 盖c, 环c, 甕
土 師 部	环, 甕c, 小甕
須 恵 土 器 A	破片
瓦	甕片(楕円形), 碓子形
淡灰色土	
須 恵 部	蓋3, 环c, 甕
土 師 部	环, 环a, 瓦脱环, 甕c, 小甕a, 甕, 破片
須 恵 土 器 B	破片
白 磁	甕IV(2)
瓦	平瓦(無文), 平瓦(楕円形)
淡色砂	
須 恵 部	环a, 环, 甕c, 破片
土 師 部	环, 小甕a, 甕
須 恵 土 器 B	甕
藤 岡 系青磁	破片(1)
白 磁	甕
瓦	平瓦(楕円形), 無文, 丸瓦(無文)
金 属 製 品	砥石
淡灰色砂	
須 恵 部	环c, 甕c, 破片
土 師 部	环, 甕, 破片
須 恵 土 器 B	甕
藤 岡 系青磁	破片(1)
白 磁	甕
瓦	平瓦(楕円形), 無文, 丸瓦(無文)
金 属 製 品	砥石
褐色土	
須 恵 部	环c, 甕c, 破片
土 師 部	环, 环a, 甕c, 小甕a, 甕, 破片
須 恵 土 器 A	破片
須 恵 土 器 B	甕
白 磁	甕IV(2), VII(1), VIII(1), 破片(1) 白磁破片(3)
瓦	平瓦(楕円形), 碓子形, 無文, 丸瓦(無文), 埴
石 製 品	碓子(須石)

明灰色砂	
須 恵 部	蓋1, 蓋3, 蓋c, 环c, 环a, 环c, 甕
土 師 部	甕c, 环, 环a, 环c, 甕c, 小甕a, 甕
須 恵 土 器 A	破片
須 恵 土 器 B	甕c
緑 釉 陶 器	破片
藤 岡 系青磁	甕-1-1(1) 破片(1)
同安系青磁	破片(1)
白 磁	甕1-1(1), 甕1(1), V-1×VII-2(1)
青 白 磁	甕1(1)
赤 生 土 器	甕? 甕? 甕? 甕? 甕? 甕? 甕? 甕? 甕? 甕?
瓦	甕 丸瓦(楕円形), 無文, 平瓦(楕円形), 碓子形, 破片
石 製 品	平瓦石
金 属 製 品	砥石
土 製 品	碓子塊
表上	
須 恵 部	蓋1, 蓋2, 盖3, 盖c, 环, 环a, 环c, 甕, 破片
土 師 部	环, 环a, 环c, 甕, 甕, 甕, 甕
須 恵 土 器 B	甕c
輸入系青磁	甕群系無物陶器
緑 釉 陶 器	甕×甕
藤 岡 系青磁	甕-1-2(1), 甕-2c(1), 甕-2(1)
同安系青磁	甕-1-1b(1)
白 磁	甕IV(2), VII(1), VIII(1), 破片(1) 白磁破片(3)
瓦	甕 平瓦(楕円形), 碓子形, 無文, 丸瓦(無文), 埴
石 製 品	碓子(須石)

V、調査まとめ

特筆すべき所見を列挙すると以下のとおりである。

- ・縄文中期～晩期の縄文土器が計17点出土（第153・215・243・262・279次調査）
- ・8世紀前半の掘立柱建物の検出（第195次調査）
- ・条坊関連遺構（道路、溝）の検出（第195・201・215・262次調査）
- ・近世の通古賀集落の遺構・遺物の確認。（第153・201・243・262次調査）
- ・榎社社殿の基礎構造の確認（第215次調査）

通古賀はその名称のほかにも扇屋敷（王城屋敷、長者屋敷）など地区に残る小字名などから国衛の推定地となっていた。従来言われていた主な根拠は以下のとおりである。

- 1、「扇屋敷」という地名を中心に「北ノ橋」「東ノ後」「西ノ後」「垣添」などの小字名が存在すること。
- 2、地元でこの地を「コッカ」と呼ばれていること。
- 3、王城神社横の植え込みの石組みに円形柱座を遺り出している礎石が使用されていること。
- 4、通古賀集落を囲むように木々が茂る高まりがあり、明治の27年頃の古地図に官藪（かんそう）と記されている。

これらは長沼賢海氏や木原武雄氏の説によるものである。長沼賢海氏は通古賀に在住していた時に、この地が「コッカ」と呼ばれていることに注目・研究され、通古賀に国衛があったという説を唱えたことから、地元でも通古賀に国衛が存在したと浸透するに至った。

しかし、3については、王城神社境内整備（事務所の下？）の際に見つかったという話もあれば、いつの時代か大宰府政庁跡から運んで来たのではないかとという古老もいるなど現在ではよくわからない礎石になっている。確かに、大宰府政庁をはじめ筑前国分寺や観世音寺など多くの礎石が散逸し、遠くは甘木や福岡市などに政庁の礎石が持ち去られている現状もあり、発見状況が不明で、現位置を保っていない礎石を国衛と結びつけることは困難と言わざるを得ない。また、4の官藪と呼ばれていた高まりについては、第195次調査地点と一部重なっており、土塁や築地などの人工的な構築物でないことが判明し、発掘調査による裏付けは現在のところ得られていない。

しかし、その後大宰府条坊を復元する中で、この通古賀について論じられるようになった。宮本雅明氏は大尺で250尺四方の条坊プランを復元をした上で、長沼氏が国衛と国庁の推定地と指摘した「扇屋敷」が、条坊復元案と整合性が高く国衛が置かれた可能性が高いことを指摘している。井上信正氏は、政庁や観世音寺などの設計基準である中軸線と条坊プランにズレがあることに注目し、第11期政庁の基準尺と条坊施工の基準尺が異なるものと考え、大尺を用いて7世紀後半頃に政庁1期の条坊が施工され、8世紀前半になって、既に一部存在していた条坊城を残しつつ、小尺を用いて第11期政庁が施工されたと推測した。また、大宰府政庁1期併行期の藤原京が条坊の中央に宮殿が配されていること、通古賀地区にある薬師山や田中の森、般若寺丘陵、鷲田川との関係が大和三山や飛鳥川のある藤原京の配置に似ていること、通古賀が基肄城の真北に位置するなどから、右郭の中心に位置し「扇屋敷」と呼称される通古賀が重要な地区だったのではないかと指摘している。しかし、井上氏はそれが国衛なのかについては言及していない。

また、地元で伝わる地名や伝説のうち、扇屋敷（長者屋敷）や田中長者伝説がある。その伝説については、太宰府市史等を参照頂くとして、近隣で長者にまつわる伝説地のうち、小郡市の長者が池の隣で小郡官衙遺跡（御原郡衙）が見つかり、大分県の長者屋敷遺跡では下毛郡の正倉跡が見つかっている。このよ

うに、長者にまつわる伝説地で古代官衙関連遺跡が発見される例も少なくない。これは官衙のような大きな施設や多くの倉がそのような伝説を生んだ要因と推測され、この田中長者伝説は通古賀に官衙施設の存在を窺わせるものである。今回の調査結果のように近世以降の土地利用によって遺構の削平が著しい中で、第153次調査のような7世紀末の土坑も残されているように、今後通古賀集落内で官衙施設が発見される可能性は十分あると考える。

参考文献

- 長沼賢海『邪馬台と大宰府』1968
- 木原武雄『筑前国府についての一考察』1976
- 太宰府市『わがまち散策—太宰府への招待—』第1巻 1990
- 宮本雅明「太宰府の都市」『太宰府市史 建築美術工芸資料編』1998
- 井上信正「大宰府条坊について」『都府楼4号』2008
- 「大宰府条坊区画の成立」『考古学ジャーナル588』2009
- 通古賀区『通古賀風土記』2003
- 太宰府市『太宰府市史 民俗資料編』1993

写真図版

写真図版については、主な遺構・遺物の写真を掲載している。その他の遺構・遺物写真については、付録のCDにカラー情報で収録している。



第153次調査区東半部全景（南から）



第153次調査区西半部全景（上が北）



第195次調査東側全景
(上が北)



第195次調査西側全景
(上が北)



195SB040 全景 (南から)



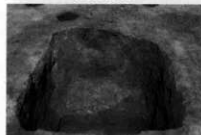
195SB040a



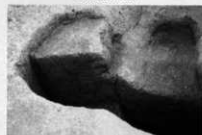
195SB040b



195SB040c



195SB040d



195SB040e と SA050a



195SB040f



195SB040g



195SA050b

第195次調査SB040・SA050土層状況 (南から)



195SE060 完掘状況 (西から)



第195次調査より北側を望む
(中央の森は官敷で、現在は殆ど伐採される)



第201次調査 東区全景 (西から)



第201次調査区全景 (東から)



第215次調査全景（右が北、空中写真）



第215次調査全景（南から、空中写真）



第215次調査2区1面全景（北から）



第215次調査2区2面全景（北から）



第215次調査3区全景(東から)



第215次調査8区南壁土層状況(西から)



215SB100 全景(南から)



215SF010・SX020・SX025 検出状況(北から)



215SD050・060 土層状況 (東から)



第215次調査1・3区工事状況 (南東から)



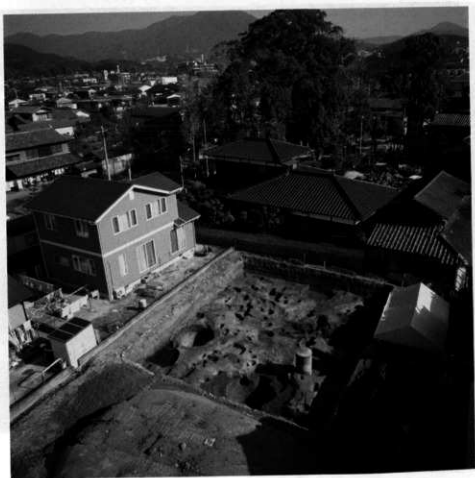
榎社旧観 (昭和初期、南から)



榎社旧社殿 (2000年8月、南から)



第 243 次調査区全景
(上が北、空中写真)



第 243 次調査区と王城神社
(南西から、空中写真)



243SE005 井戸枠ウラゴメ石検出状況 (東から)



243SE010 井戸枠内 完掘状況 (南から)



243SE010 完掘状況 (南から)



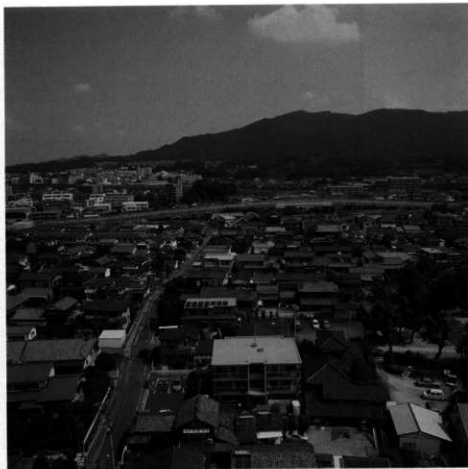
243SE025 1.5m 掘下げ状況 近景 (東から)



第262次調査
全景 (上が北)



第262次調査地から
西を望む
(右が北)



第262次調査上空
から通古賀集落を
望む（南から）



第262次調査上空
から基肄城を望む
（北から）



262SB015 検出状況（東から）



262SB015 南半部状況（東から）



262SB015 検出状況 (西から)



262SD005 完掘状況 (西から)



第 279 次調査区全景 (上が北、空中写真)



279SE001 井戸枠内完掘状況 (北西から)



通古賀地区全景（上が北、2004年）



王城神社（西から、2011年）



おうぎ館（王城神社社務所）前にある礎石



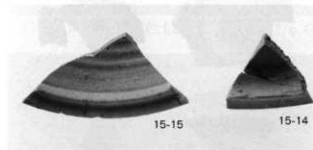
153SE015 黒茶色土出土 土師器皿 c (Fig. 6-20)



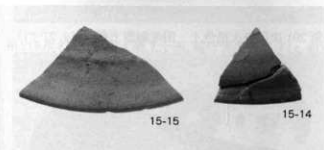
195SD020 暗灰色土 土師器杯 a・黒色土器碗 (Fig. 16)



195SD020 暗灰色土 土師器杯 a・碗 c (Fig. 16)



195SB040 須恵器蓋 1 (内面) (Fig. 15)



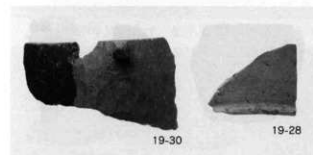
195SB040 須恵器蓋 1 (外面) (Fig. 15)



195SD020 明灰色土 土師器碗 c (Fig. 16-20)



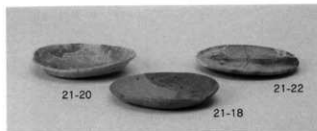
195SD025 土師器杯 a (Fig. 17-1)



195SE010 黒茶色土 灰軸壺・石鍋 (外面) (Fig. 19)



195SE010 灰茶色砂 土師器碗 c (横から) (Fig. 20)



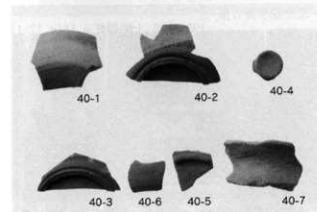
195SE060 暗灰色土 土師器小皿 a (Fig. 21)



第 201 次調査灰褐色土 国産陶器土瓶 (Fig. 27-21)



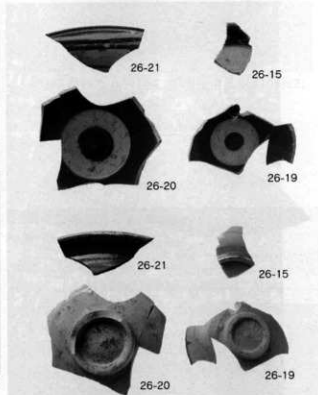
第 201 次調査灰褐色土 石臼 (Fig. 27-23)



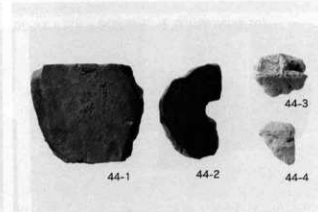
215SD001 黒灰色土出土須恵器・土師器 (Fig. 40)



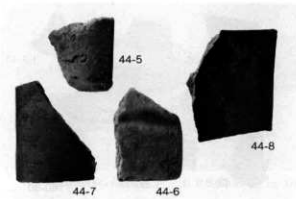
195SE060 灰茶色砂 丸瓦 (凸面) (Fig. 21-41)



201SE002 灰色粘土 肥前系・国産陶磁器 (Fig. 26)



215SD117 出土遺物 (Fig. 44)



215SD118 出土瓦 (Fig. 44)



第 215 次 8 区黒色土出土土師器碗 c (Fig. 47)



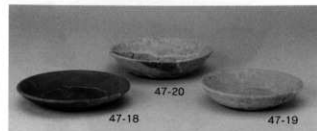
第 215 次 8 区黒色土出土土師器碗 c (Fig. 47)



243SE005 灰茶色土 肥前系磁器碗 (Fig. 56-4)



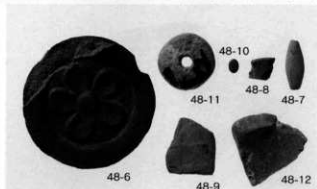
243SE010 黒褐色土 土師器 (Fig. 57)



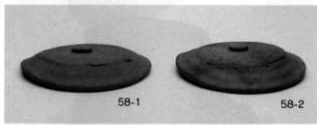
第 215 次 8 区黒色土出土土師器碗 a (Fig. 47)



第 215 次 8 区表土出土縄文土器、越州窯系青磁 (Fig. 48)



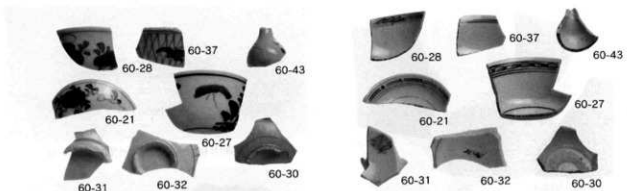
第 215 次 8 区表土出土瓦、土製品、石製品 (Fig. 48)



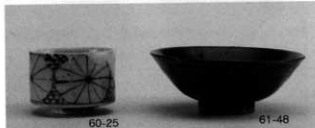
243SE015 茶褐色土 須恵器蓋 c3 (Fig. 58)



243SE020 灰色砂 土師器碗 a (Fig. 58)



243SE025 暗灰色砂質土 肥前系磁器 (Fig. 60)



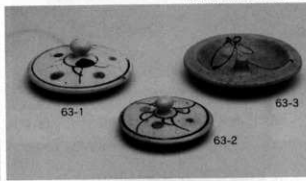
243SE025 暗灰色砂質土 肥前系陶磁器 (Fig. 60・61)



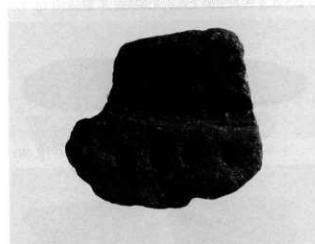
243SK007 肥前系陶器土瓶 (Fig. 63-8)



243SE045 暗茶色土 越州窯系青磁小椀
緑釉陶器椀 (Fig. 62)



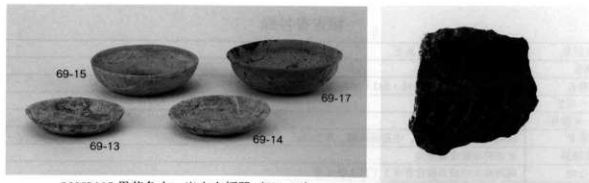
243SK007 国産陶器土瓶蓋 (Fig. 63)



262SD005 縄文土器 深鉢 (外面) (Fig. 69-8)



262SD005 縄文土器 深鉢 (外面) (Fig. 69-9)



262SD005 黒茶色土 出土土師器 (Fig. 69)

262SK078 黄茶色土
縄文土器深鉢 (外面) (Fig. 71-34)



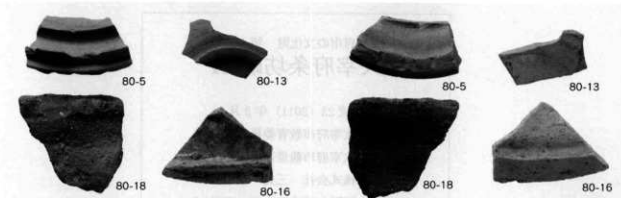
262SK045 茶黒色土 縄文土器鉢
(外面) (Fig. 70-19)

条 262 黄茶色土層
石製品 権 (表) (Fig. 72-7)

条 262 黄茶色土層
滑石製円盤状製品 (Fig. 72-8)



262SK076 または 262SK014 縄文土器 深鉢 (内面) (Fig. 71-48)



279SD007 出土土器 (Fig. 80)

報告書抄録

ふりがな	だざいふじょうぼうあと									
書名	大宰府条坊跡 41									
副書名	第153・195・201・215・243・262・279次調査									
シリーズ名	太宰府市の文化財									
シリーズ番号	113集									
編著者	宮崎亮一、山村信榮、中島恒次郎、井上信正									
編集機関	太宰府市教育委員会									
所在地	福岡県太宰府市観世音寺1丁目1番1号									
発行年月日	2011(平成23)年3月31日									
ふりがな 所収遺跡名	条坊 【観山推定案】	ふりがな 所在地	コード		座標		調査期間		調査面積 ㎡	調査原因
			市町村	遺跡番号	X	Y	開始	終了		
だざいふじょうぼうあと 大宰府条坊跡 第153次	右郭11条3・4坊	太宰府市 通古賀5丁目	402214	210050-153	55980.2	-45158.78	19940603	19940704	300	専用住宅建築
だざいふじょうぼうあと 大宰府条坊跡 第195次	右郭11条4坊	太宰府市 通古賀5丁目	402214	210050-195	55954.0	-45275.0	19970730	19970929	176	共同住宅建築
だざいふじょうぼうあと 大宰府条坊跡 第201次	右郭11条4坊	太宰府市 通古賀5丁目	402214	210050-201	55965.0	-45175.0	19980513	19980520	120	専用住宅建築
だざいふじょうぼうあと 大宰府条坊跡 第215次	右郭10条1坊	太宰府市 朱雀6丁目	402214	210050-215	56067.0	-44878.0	20001017	20001205	451	社殿建替え
だざいふじょうぼうあと 大宰府条坊跡 第243次	右郭11条4坊	太宰府市 通古賀5丁目	402214	210050-243	55952.0	-45165.0	20041111	20041220	151	共同住宅建築
だざいふじょうぼうあと 大宰府条坊跡 第262次	右郭12条4坊	太宰府市 通古賀5丁目	402214	210050-262	55882.0	-45165.0	20060616	20060823	143	宅地造成
だざいふじょうぼうあと 大宰府条坊跡 第279次	右郭9条3坊	太宰府市 朱雀6丁目	402214	210050-279	56211.0	-45091.9	20090804	20090831	1705	共同住宅建築
所収遺跡名	遺跡種別	時代	主要遺構		主要遺物		特記事項			
大宰府条坊跡 第153次	都城跡	飛鳥～平安 江戸～現代	井戸、土坑		土師器、須恵器、黒色土器 緑釉陶器、越州窯系青磁					
大宰府条坊跡 第195次	都城跡	奈良・平安	掘立柱建物、 南北道路、井戸		土師器、須恵器、黒色土器 製塩土器、緑釉陶器、灰釉陶器					
大宰府条坊跡 第201次	都城跡	平安・近世	井戸、土坑		肥前系陶磁器、瓦質土器 土師質土器、土師器					
大宰府条坊跡 第215次	都城跡	奈良・平安 近世	掘立柱建物、南北 道路、条坊側溝?		須恵器、土師器、越州窯系青磁 縄文土器、石器		保存を前提とした調査			
大宰府条坊跡 第243次	都城跡	平安・近世	井戸		肥前系陶磁器、瓦質土器 製塩土器、緑釉陶器、灰釉陶器					
大宰府条坊跡 第262次	都城跡	平安・近世	溝、建物		須恵器、土師器、縄文土器		溝のひとつは条坊の東西道路側溝 とみられる。			
大宰府条坊跡 第279次	都城跡	平安	井戸、土坑、 氈倉原		土師器、須恵器、縄文土器 緑釉陶器					

太宰府市の文化財 第113集 大宰府条坊跡 41

平成23(2011)年3月

編集 太宰府市教育委員会

発行 太宰府市観世音寺1-1-1

印刷 株式会社 三光

福岡市博多区山王1丁目14-4